

Veronica II

つな\*

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Veronicaの続編です。

ザンザスの娘であるヴェロニカは28歳にしてヴァリアーボスの座に就き、忙しい日々を送っていた。

そんなヴェロニカに理不尽な波乱が襲うだけ。

「プリンチペッサがまた飛ばされたぞおお”お”お!”

そして全ての原因である入江正一に襲い狂う数々の死亡フラグ、果たして彼は生き延びれるのか。

ザンザコ？知らない言葉ですね。

※絵面を想像するほど読者がダメージを喰らいます。

※ある意味キャラ崩壊……か？

毎週月曜日17:00投稿。

投稿の無い場合は活動報告を確認下さい。

目次

Veronicaの昏倒	296
Veronicaの憤怒	284
Veronicaの懐古	271
Veronicaの虚像	255
Veronicaの驚愕	240
Veronicaの哀愁	228
Veronicaの安堵	214
Veronicaの戦闘	201
Veronicaの思惑	188
Veronicaの指導	174
Veronicaの提案	161
Veronicaの不意	147
Veronicaの潔白	132
Veronicaの懸念	120
Veronicaの傍観	105
Veronicaの強襲	94
Veronicaの覚醒	78
Veronicaの凍結	68
Veronicaの謀反	58
Veronicaの心配	48
Veronicaの不和	39
Veronicaの憂鬱	23
Veronicaの焦燥	13
Veronicaの序章	1

V  
e  
r  
o  
n  
i  
c  
a  
の  
帰  
還

V  
e  
r  
o  
n  
i  
c  
a  
の  
訣  
別

V  
e  
r  
o  
n  
i  
c  
a  
の  
意  
識

337 323 309

## Veronicaの序章

現在ヴェロニカ28歳です。

父が去年ヴァリアーのボスを引退し、私はその跡を継いだ日から一年経った。

今頃我が別荘で優雅に高級肉を頬張っているであろう父に健康食を勧める日々を送っている。

若い頃は別にいいんだけど、パパもう年じゃん？

だって63だよ？外見はまだ40前半にしか見えない謎に私は心底本人問い詰めたくなることがある。

8歳サバ読んだとしてもあの若さはおかしい。

にしてもその年齢で、何であんなステーキばっか食べて胃が凭れないのか最近の疑問である。

「ボス、報告書です」

部下が執務室に入ってきて、書類を持ってきた。

私は無言でそれを受け取り、部下はそのまま部屋を出る。

因みにパパの代の幹部はベルとマーモン以外皆引退した。

レヴィとスクアード、ルツスーリアはパパに忠誠を誓っていて、それを今でも貫くとかなんとか。

それでも結構な頻度でヴァリアー本部に来る辺り、暇人なのだろうか。

スクアードに至っては仕事の書類を奪って勝手に殺しに行つて戻ってくるほどだ。

ベルは未だ仕事以外で私のことをプリンチペツサ呼びするし、マーモンも部下というよりお目付け役に近い形だった。

私の守護者は、パパがボスであった頃、私が時間をかけて選んだ人材で固められている。

霧の守護者は未だマーモンである。

私はパパと違い、部下に対して暴力を行っているわけではないが、何故か皆私を怖がっている節があるのだが、何故だろうか。

マーモンに聞いてみたところ、私は酒が入った時にパパに似るらし

く、恐らくその為だろうと言われた。

何それ怖い。

パパの代と違うところをあげるとなると、それは個々の戦力差だ。これには思い切り力を入れている。

まず訓練を週に2回、短期任務も週3、長期任務は月1、他諸々と取り組んでいたお陰で下っ端の人達も基礎ステータスがぐんと上がった。

そしてそれが死亡率を下げ、入隊希望者が増加し、今では総人数61名というパパの時代の倍ほどの人数で構成されている。

それに伴い入隊試験の難易度が上がり、入ってくる人材の実力が底上げされる結果になった。

お陰で元々ボンゴレ最強独立暗殺部隊だったが、その名に拍車がかかっていく。

多分今クーデター起こしたらこれ絶対成功すると思う。

だって沢田綱吉も高齢だし…。

まあ面倒だし私はパパのような思考回路ではないのでやらないけどね。

概ね順調にヴァリアーは発展していた。

沢田綱吉はボンゴレを自警団に戻そうと今も尚奮闘している様子だが、未だ暗殺部隊であるヴァリアーが存在しているようでは彼の目標が達成できるか怪しいところである。

だがパパと違い私がボスになったことに少なからず常識のあるボスということで安堵したのか、ヴァリアー本部に訪れるときの足取りが少しだけ軽くなったように思える。

だが沢田綱吉、それは間違いだ。

私は一応パパより穏やかではあるが、一度キレたら收拾が着かない。

常時暴力によってストレス発散しているパパと違って私の場合、一度火が付いたら鎮火するまで長くかかるのだ。

まあ過去にキレたことなど一度しかないし、それも親子喧嘩だったので最終的にパパにぶつけることで事なきを得た。

本部の半壊、炎の引火が原因の山火事、それから喧嘩を仲裁しようとして病院に送り込まれた者は数百人に上る事態に、被害総額は数億円に至った。

その現場を見ていた者は結構いて、それから私の機嫌を伺う様子がいざいざ見られた。

あれは自分でもあまり覚えていないが、パパと共に数日もの間、体の至る所に包帯を巻いていたような気がする。

まあその親子喧嘩のお陰で、私の実力が改めて再確認され、私の次期ボスへの着任に反対する者がいなくなつたほどだ。

私の話はここまでにして、そろそろ現実に戻ろうか。

目の前の提出された書類を見る。

ボンゴレを敵視している勢力は年々減つてはいるが、未だ無くならない。

ヴェロニカはこの現象に疑問を抱くが、ここがリボーンの世界であることを思い出し、考えることを放棄する。

多分これはいつまでもマフィアが存在するために世界の抑止が動いてるんじゃないだろうか。

じゃなきゃこの世界の意義が無くなるわけだし。

ヴェロニカは長時間椅子に座り続けていたため肩が凝つてきて、一度外に出ることにした。

子供の頃からよく歩いていた庭を眺め、白いベンチを見つめる。

「懐かしいなあ……」

昔、ここで沢山炎の練習をしていた。

思い出の場所であるベンチにヴェロニカは腰掛け空を見渡す。

ああ、私がこの世界に生まれ落ちた事実疑問を抱いていた時も空を見上げていたな……

ザンザスが父親である事実不安を抱いていた自分が今ではこんなにも彼が好きという事実におかしさが胸に込みあがる。

「あー、パパの顔見に行こ……」

思い立ったが吉日、ヴェロニカはすぐさま車を出させ別荘に向かう。

数分走っていると、やっと別荘の屋根が視界に入った。

玄関まで送ってもらい、部下には中の広間のソファで待た、ヴェロニカはザンザスの部屋に向かう。

「パパー」

ノック無しに部屋の扉を開けると、中ではザンザスが足をテーブルの上に乗せながらテレビを見ていた。

「あ?」

「顔見に来たよ」

「仕事しろドカス」

「嬉しいくせに」

「ほぎけ」

「ていうか昼から酒って」

「俺の勝手だろうが」

「老体に優しくないわね」

「あ? 誰が老体だ?」

「パパって昔から不健康すぎる食生活だったから、寿命の長さがとても心配だわ」

「いつ死んでもおめーに関係ねーだろ」

「ってなわけで、野菜ジュースとビタミン剤、血圧抑制剤持ってきたよ」

「聞け」

「パパっていつでもイライラしてるしいつか血管プツリ切れそうだから、最低限血圧だけは気を付けてね」

「おい、カッ消すぞ」

「そういえば、この前スクアーロがまた勝手に部下の任務奪って行っちゃったんだけど」

「……」

「パパから一度怒ってよ」

「お前がやれ」

ザンザスは不貞腐れたような顔で酒を煽り、テレビを見出す。

ヴェロニカは持ってきたものをテーブルの上に置く。



偶にゴミ箱に空になった野菜ジュースのパックを見るので、一応飲んではいるようだ。

「ヴァリアーの入隊定員枠増やしたのか？」

いきなりザンザスがヴェロニカに聞いてきた。

ヴェロニカは休日や暇になると別荘でザンザスに現状を喋るため、ザンザスもヴァリアーの内部状況を把握しているのだ。

「増やしたって言っても2つだけね…それに去年より難易度2倍以上も高くなってるし…入隊者は半分いればいい方だと思う」

「けっ、少数精鋭の意味がねーだろ」

「本部と支部に分けたから、本部では35名しかいないわよ…それに強いから問題ないんじゃない？」

「組織がでかけりやどこかで腐敗が出んぞ」

「まあそうね、私は70前後で人数は抑える予定よ…それにいくら死亡率が低くなったと言ってもボンゴレで比べれば高いわよ」

「弱え人間なんぞ要らねえ」

「だから強化訓練してるんでしょ」

ヴェロニカはザンザスの隣に座り、リモコンでテレビのチャンネルを変える。

ザンザスの咎める視線を無視しながら、チャンネルを変えていると、とある番組のチャンネルで止める。

その番組では日本での温泉旅行の番組が流されていて、その番組を数十分見ていたら、ヴェロニカは携帯に何かを打ち出す。

「ねえパパ、今度休み出来たら日本行って温泉行こうよ」

「一人で行ってろ」

「パパ最近ずっと籠ってるじゃない、少しくらい外出しよう」

「興味ねえ」

「ちよつとスケジュール確認してくるからまた明日来るね」

「聞け」

ザンザスの言葉を無視して、ヴェロニカはソファを立ち上がり、扉に手を掛ける。

「ちちゃんと薬とジュース飲んでね」

「黙れ」

ヴェロニカはそのまま部屋を出ると、広間で待っていた部下に声をかけ、車に乗り出した。

「あ、ヴァリアー本部に帰る前にボンゴレ本部に寄って」

「分かりました、何か御用時で？」

「少しね」

そのままボンゴレ本部に着き、ヴェロニカは本部の廊下を堂々と歩き進み、研究所と書かれている部屋の扉を開け、奥の方にいる茶髪の高齡に片足突っ込んでいる男性に声を掛けた。

「入江」

「あ、ヴェロニカちゃん」

「久しぶりだな、この前の論文を見た」

「え、あれをかい？嬉しいなあ」

「少しそれで聞きたいことがあってな」

最近の出来事だが、入江正一が死ぬ気の炎の解析に関しての実験及び推測をまとめた論文が出され、ヴェルデに次ぐ天才科学者として名を広めた。

今はまだ解析途中であるが、彼の研究結果は研究陣に多大な影響をもたらした。

私もその論文を読み、興味を持ったので入江に聞きに会いに来たのだ。

入江の他にも研究室にはジャンニーニ、スパナがいて、二人は何やら真剣に何かを話していた。

「入江：あの二人は真剣に何を話しているんだ」

「ああ、さっき偶発的に出来た発明品があつて…」

「なんだそれは」

ヴェロニカの問いに今度はスパナがヴェロニカの元に寄ってきて答える。

「多分パラレルワールド装置だ」

「パラレル？また大層なものを発明したな、行先は分かっているのか？」

「いやどこに行くかは分かっているんだ…だが同一世界ではないどころか…加えて他の不安要素もまだある」

「けれど今までは時間軸の移動のみしか出来なかったので、パラレルワールドとなると大発見ですよ」

ジャンニーニの言葉にヴェロニカは苦い顔をする。

「まあ、そうだが…危険じゃないか？また白蘭のような者が出てくるぞ」

「そうなんだよね…大きな発明だけど危険だからこれはそのまま壊してしまおうか」

「そうですね」

ジャンニーニの落ち込んだ声と共に、入江正一は装置を持って廃棄室に向かおうとする。

途中で入江正一が足を滑らせ、装置の下敷きになろうとし、ヴェロニカがそれを助けようと入江の方に手を伸ばす。

その時、眩い光と白い煙を出した機械が目に残った。

そしてヴェロニカは懐かしい感覚に悟った。

あ、これ飛ばされる。

「勘弁してよ…」

ヴェロニカの小さな嘆きは誰の耳にも届くことなく、意識が霞んでいった。

「う……………」

意識が戻り、ヴェロニカは目を薄く開ける。

自身がベッドの上で横になっていることに気づき、辺りを見回すとヴァリアー本部のボスの執務室であった。

あれ？今回はただ気を失っただけかな？

ヴェロニカはベッドから起き上がると、下半身に違和感が生じた。

「ん？」

徐に手を伸ばし、違和感のある場所を触る。

「っ!？」

あ、アカン…これアカンやつだ。

ないものが付いてる。  
理解しつつある現実に涙目になりながら自身の胸に手を伸ばす。  
そこには硬い、逞しいであろう胸板があった。

「っ！」

いやあああああああああああああ！

ここで叫ばなかったのは称賛ものだろう。

ヴェロニカは違和感に抗いながら洗面台の方に向かう。

洗面台に行くと、鏡を覗き込む。

「うつわ…完全に男顔……………」

てか私の男顔って凄くパパの若い頃に似てる。

ん？にしても若すぎないか？

これ15、16な気がするが……

「つていうかこれ…パパじゃね？」

ヴェロニカはすぐさま洗面台から離れ、部屋に置いてある机の上の書類を見る。

書類の日付を見て驚愕した。

「……………46……………いや47年前？」

思いつきりパパですわコレ。

え、私過去に来た上にパパの体乗っ取ってんの？

嘘だろ、今度はこれかよ。

ていうか今頃未来では大混乱じゃねえか、ヴァリアーとボンゴレ本部が険悪になってなきやいいんだけどな。

ダメだ、スクアーロ達が乗り込んでいく凶しか思い浮かばない……

ヴェロニカは16歳であろうザンザスの発達途中の体と、その手のひらを見る。

流石に40年後みたく手のひらは硬くないか……

机の上に二挺拳銃があり、ヴェロニカはザンザスの手のひらから憤怒の炎を出してみた。

一応出るけど、何か火力が低いような……？

まあまだ十代だから、これから強くなっていくのかな……

にしてもパパの体ってことは、炎の調節とかどうなってんだろ。

ヴェロニカは憤怒の炎を手のひらに薄く纏ってみると、それは薄く綺麗に纏えた。

よかった、これ一応私の戦術の一部だし、火力ブツパのみとか不安すぎる。

あと剣がない。

九代目に早急に作ってもらおう。

あ！ていうかこれそろそろクーデター起こす時期だったんじゃない？

私冷凍なんてされたくねーよ！

アカンって、これパパがスクアアロにクーデター起こすことを言うてなければいいんだけど。

っーかいくらパパの口調似せたとしてスクアアロに絶対バレるんじゃない？

ヴェロニカは取り合えず、着替えを済ませ部屋を出る。

それは40年以上も前とあって、少しだけ構造が違い、どこにだれがいるのかすら分からなかったので本部を歩き回ることにする。

スクアアロに会うために、周りを見るが知らない顔をした隊員がいるだけで、銀髪は見当たらなかった。

あるえ？そろそろ出てきてもいいんじゃないかなあ？

この頃のパパって普段何してたのさ、学校絶対行っていないだろうし。

家庭教師……ダメだ、思いつかない。

何だっけ、パパの小さい頃から仕えてた奴……いた気が……

ヴェロニカはもはや果てしなく昔の原作知識を掘り起こす。

またこの知識を使う日が来るとは思っていなかったのだ。

「ザンザス様」

後ろから初めて聞く声に振り向き、その男の顔を見た時にヴェロニカは思い出した。

こいつは裏切り者だ。

今のうちに殺しておこうか？

ヴァリアアのボスとしての覚悟を持っているヴェロニカに躊躇するような思考など持ち合わせてはいなかった。

一瞬銃に手を掛けようとしたが、それは早計と捉え、取り合えず話を合わせようとした。

「何…だ」

「先ほどから誰かをお探しのようでしたが…」

「カス鯨はどこだ…」

「ああ、スクアアロのことですか、彼ならまだ寝ているのでは？起こして来ましようか？」

「俺の部屋に連れてこい」

「了解しました」

金髪眼鏡の男は一礼し、ヴェロニカに背を向け歩き出した。

危なかったあ…パパの口調で話しかけなきゃいけないのかあ

一瞬口調が女になりそうだった…

取り合えずあいつの裏切った時期って曖昧だけどあれだよね、解凍後だからもつとあとだよね？

ダメだ、これほど頼りない記憶よりは自分の、っていうかパパの直感を信じよう。

つーかあいつの名前なんだっけ…

全く思い出せない…何だっけ、確か——…

「ピスタチオ…」

「あら、ボスったらピスタチオ食べたいのかしら？」

うおおおい！後ろから出るな！

ビックリしたわ！

「ルッスーリアか…」

「おはよくボス！スクちゃん探してたのお？あの子ならまだ寝てるわよ」

「……フン」

「あたし任務いってくるわねえ、早くボスの元に帰ってくるわよん！」  
ルッスーリアは嵐のように去っていった。

にしてもあいつ若いなー

流石48年前…

未来でも一応皺とか気にかけていて洗顔とか美白溶液でケアして



お互いソファーに向き合いながら座り、状況を冷静に考え出す。そして数分後、二人して頭を抱えた。

「どうしてこうなった」



## Veronicaの焦燥

「まずその喋り方をやめろ」

「いででででで」

ヴェロニカです。

現在パパの体で入江正一：いやスクアードにアイアンクロウをしている。

えー、今回もこのカス研究者のせいでパラレルワールドの過去の時間軸に飛ばされてしまった。

入江は目を覚ますと、若返ってて、しかも顔が変わっていると分かり混乱していたところ、金髪眼鏡のお兄さんに連れてこられたそう  
だ。

挙動不審な様子にヴェロニカは直ぐに彼が何者であるか気づき、二人きりになったところで現状の把握に努める。

入江の話では、私たちが飛ばした装置は偶発的に発見できたものらしく、構造も解読できないし、今この時代では技術力に差がありすぎるとのことで戻れる方法は絶望的のようだ。

取り合えず蹴りを入れた。

こいつが転びさえしなければ飛ばされずに済んだのは事実である。

土下座までして許しを乞うていたので、仕方なく許した。

正直スクアードの土下座姿は見たくなかった。

姿がザンザスだけあって威圧感で白目をむきそうな彼にヴェロニカは溜め息を吐く。

「で、当面どうするかなんだけど…」

「そ、そうだね……歴史通りに進めればそれに越したことは…」

「おい、私は冷凍される趣味はないぞ」

「れ、冷凍!? あ! そうか、ザンザスは確かクーデターをつ」

「そう、そこで8年ずつと凍らされてたんだけど…私クーデター起こす気ないわ」

「まあ、そうだけど……」

「何よその目…」

「ごめん、不謹慎なんだけど……ザンザスの顔でその口調って一種の暴力だよね」

「カツ消すぞ」

「ぐぐぐぐめんなさい！」

「クーデターは起こさないし、未来で沢田綱吉を襲う予定もないよ……完全に歴史から逸れてるじゃない」

「うう、でもそのまま行かなければ未来で白蘭さんを倒すという事実が変わってしまうかもしれない」

「……別にあんなカス、私が殺すわ」

「ヴェ、ヴェロニカちゃんも見ていただろう!?あの人の恐ろしさを！それにボンゴレリングを持たないと彼に勝てない！」

「……確かに父にボンゴレの血は流れていないからリングを嵌めることは出来ない……でもそれ以外に対策の立てようはあるでしょ……なんせ19年もあるんだから」

「だ、だけどー！」

「問題はG O H S Tのみ……あいつを早々に殺せば白蘭が強くなることもないだろう」

「た、確かに……もしかしてヴェロニカちゃんはボンゴレのボスの座を狙っているのかい？」

「あ？んなわけないでしょ、そんなのに興味はない」

「そ、そんなのって……」

「パパは最強のボンゴレが欲しかったようだけど、私は別に……それよりも……」

「？」

「ヴァリアーという完全に独立した一つの組織としての最強が欲しいの」

「ええええ!？」

「マフィアはボンゴレが一番、一番って煩わしい……ならばボンゴレ以上の組織を作ればいい」

「でもそれって……」

「別に、敵対するわけじゃないんだからデメリットはないわ……という



「まずはその義手に剣を付けて」

「ど、どうやって」

入江はもたつきながらスクアーロの剣を義手に括り付ける。

ヴェロニカは入江の腕を掴み、先ほどの金髪眼鏡の男を探す。

「そ、そういえばさっきの眼鏡の男性は誰だい？ヴェロニカちゃん知ってるかい？」

「知らない、あと部屋の外ではその名前を呼ぶな」

「え、ああ、分かったよ……えーと……」

「ボス、クソボス、ボスさん、ザンザス……これがスクアーロのパパへの呼び方よ」

「え、ええ……じゃあボス……」

「黙れカス鮫」

「カ、カス!?!」

「通常運転で、暴言吐きまくる人だからしつかりしなさいよ」

「胃が……」

「いたぞ」

ヴェロニカの視界に、先ほどの金髪の男性が見えて声を掛けた。

「おい」

「どうされましたか？ザンザス様」

「人気のねえ広場はあるか、それか広さのある訓練所……それと九代目に俺の炎に耐えられる両手剣を作らせろ」

「剣とは……ザンザス様、剣を嗜むつもりですか？」

「それよりあんのかねえのか」

「ありますよ、案内しましょう」

金髪眼鏡の男性について行き、広さのある誰もいない訓練室があった。

シエルター付きで炎を使っても大丈夫なように加工されており、防音機能もあった。

「ここの監視カメラとマイク全部切れ、それと夕方までここに来んじやねえ……人避けもしておけ」

「分かりました、昨晚探しておられた書物はどういたしましょうか」

「俺の机の上に置いておけ、他の書類は急ぎでない限り持ってくるな」「了解しました、失礼します」

その男は頭を下げると、そのまま訓練室を出ていく。

数秒後、部屋の四角にあった監視カメラとマイクの電源が落ちる音を聞き、ヴェロニカは入江の腕を離す。

「声出してもいいぞ」

「え、ヴェ、ヴェロニカちゃんだよな?」

「そうだ」

「ザンザスにしか見えなくて……戻っちゃったのかと……」

「それよりもあなたに剣を教える」

「え、ヴェロニカちゃん剣も扱えてたっけ?」

「私の銃の師は父、剣の師はスクアーロよ……そのまま技術をあなたに教える」

「えええ!? そうだったの?」

「それよりも、あなた中身が入江だけど体力とか反射神経はスクアーロなの?」

「え、あ、多分スクアーロだよ。だって体が若返ってる時点で僕の体を引き摺っている要素はないからね」

「そう、じゃあ取り合えずこの部屋100週して」

「ひやつ、100!?!」

「まずはあなたはその体に慣れないと何も始まらないわ……剣の振り方はそれからね」

「そんなあ……」

「足を止めれば背中に炎を一発ずつぶち当てるから」

「お、鬼iiiiiiii!」

「何とでも」

ヴェロニカによる入江正一強化スパルタ特訓教室が始まった。

数時間後、入江はふらふらになりながら走っていた。

「99………100」

「ぶはー! もう無理、足の感覚がないっ」

「こんなことでへばるな、これからが本番だぞ」



命のやり取りの日常、人の命を奪う日々：

目の前のヴェロニカはその日常の真つただ中にいたのだ。

ヴァリアーのボスという立場の重さをその肩に担ぎ、皆の先頭を歩いていくのだ。

27歳という若さでヴァリアーのボスに立った彼女の強さを、覚悟を、僕は理解できていなかったんだ。

自分の状況よりも入江の状況を心配してくれている彼女を見ていて、入江は自身がとても情けなく思えてきた。

「ヴェロニカちゃん、ごめん……僕頑張るよ」

「ああ…生きて元の世界に戻るぞ」

「ああー」

入江は自身の体を叱責して立ち上がる。

「まずは私の攻撃を避ける、反射神経がどれくらいあるか確認したい」  
「分かったー！」

入江のスパルタ訓練教室は、入江の意識がなくなるまで続けられた。

オツタビオside

今朝、ザンザス様のお部屋に伺ったところ、本人は居らず本部の中を探していた。

すると、辺りを見回すザンザス様が少し離れたところで見つかり、声を掛けた。

「ザンザス様」

「何…だ」

「先ほどから誰かをお探しのようでしたが…」

「カス鯨はどこだ…」

「ああ、スクアアロのことですか、彼ならまだ寝ているのでは？起こして来ましょうか？」

「俺の部屋に連れてこい」

「了解しました」

ザンザス様自らスクアアロを探すことは稀だとも、私はスク

アークの部屋へ向かう。

スクアークの部屋の手前で、ドアを開いた瞬間大きな音が聞こえ、私はそのままドアを開けて中を見た。

そこにはベッドから落ちていている彼が呆然としている姿が視界に入る。

「スクアーク：ザンザス様が及びですよ」

「え…」

「？」

「あ、え…：？」

「強く頭打つたんですか？なんだか様子がおかしいですが」

何も返さない彼に本格的におかしいと思い、私はスクアークの腕を取り、ザンザス様の部屋に向かいザンザス様に断りを入れて彼を医務室に連れて行こうとした。

「ザンザス様、スクアークが何やら頭を打ったようで…先ほどから態度がおかしいようですが…」

「なに？」

ザンザス様はスクアークを凝視し、それに彼は怯えたように挙動不審になる。

「おいカス鯨」

「な、何…」

ダメだ、これは医務室で頭を検査せねば、私はザンザス様に進言しようとする、ザンザス様は二人にしろと私を部屋から追い出した。

面白がつて甚振つていなければいいのですが…

少し時間が経つと、またもやスクアークの腕を取りながらザンザス様が私に声を掛けてきた。

「おい」

「どうされましたか？ザンザス様」

「人気のねえ広場はあるか、それか広さのある訓練所…それと九代目に俺の炎に耐えられる両手剣を作らせろ」

私は少なからず驚いた。

ボンゴレに来た頃に剣を教えはしたが直ぐにやめてしまい、銃のみ



で戦ってきた彼が再び剣を所望するのだから。

「剣とは：ザンザス様、剣を嗜むつもりですか？」

「それよりあんのかねえのか」

「ありますよ、案内しましょう」

少し機嫌の悪そうなザンザス様をそのまま訓練所へ案内した。

人気がないといえ、奥の誰も使わないシエルター付きの場所があつたような。

ザンザス様をそこまで案内し、鍵を開け中へ入れる。

「この監視カメラとマイク全部切れ、それと夕方までここに来んじゃねえ：人避けもしておけ」

「分かりました、昨晚探しておられた書物はどういたしましょうか」

「俺の机の上に置いておけ、他の書類は急ぎでない限り持ってくるな」  
「了解しました、失礼します」

一体何をされるおつもりで、と聞こうと思ったがザンザス様が先ほどこから何やら急いでいるようだったので、聞かずに私はその場を退出する。

コントロールルームに入り、監視カメラとマイクを全て切り、再び仕事へ戻った。

今日のザンザス様は少し機嫌が悪そうであつたし、どこか焦っているようにも思えた。

そして先ほどの異様な態度のスクアードと何か関係しているのだろうか。

後ほど、他の幹部の者にも聞いてみよう：

夕方になり、仕事も一段落したところルツスーリアが声をかけてきた。

「あらオツタビオじゃない、お疲れ様ね」

「そちらこそ：ああ、そういえば少しお聞きしたいことが」

「あら？何かしら？」

「今日、ザンザス様が機嫌が悪い様に見えたのですが、何か知っていますか？」

「知らないわよん、あ、でも今朝ピスタチオを食べたそうにしてたわ

よ」

「ピスタチオ…ですか？」

「ええ、独り言いってたし…あたしがピスタチオケーキでも作ってあげようかしら〜」

「そうですか…」

そして夕食後の席では…

「何故にピスタチオケーキ…」

あ、アカンあの金髪眼鏡の名前がピスタチオになってきた…。

## Veronicaの憂鬱

「ザンザス様、九代目が訪問しておられます」

「っ、ジジイが？」

「はい」

オツタビオの言葉に内心動揺しまくるヴェロニカ。

取り合えず、部屋まで通せとだけ言うとおツタビオは部屋を出ていく。

この世界に飛ばされて早一週間が経った。

入江は一応最低限に鍛えて、一番楽な単独任務を与えた。

あいつ絶対敵見て情けない声出しながらやってるに違いない。

ヴェロニカは今から来るであろう九代目に関して考え出した。

超直感が働いても、ザンザスの中身が別の人間であることまでは分からないだろう。

何年パパの隣でパパ見たと思ってんだよ、多分中身が違うこと見破れるとしたらスクアアロくらいだ。

まあ当のスクアアロは入江に憑依されてしまったわけだが。

にしてもこの時代のパパって九代目にどんな態度だったのかなあ

だってまだ真実知らないわけでしょ？

元々性格がいいとは言えないパパが本格的に性格ねじ曲がったのって九代目の嘘が原因なわけで。

グレる以前の性格がいまいち分からない上に、九代目に対しての口調なんてもつと分からない。

一応それとなく話してはみるが、マジでほんと超直感働くな。

ヴェロニカの考えを他所に、執務室の扉が開く。

「久しぶりだねザンザス」

「…ああ」

「どうだい最近の調子は…」

「別に…それより何の用で来たんだ」

穏やかに入ってくる九代目の言葉をバツサリ切っていくヴェロニカに、九代目は苦笑いをして、ソファに座る。

「剣を作るよう聞いたが、何故だい？」

「あ？」

「お前には七代目の二挺拳銃があるだろう…あの剣の使い道が気になってね」

「…ただの気まぐれだ」

「なるほど、では本題へ入ろうか」

九代目は仕事の話を出すと、真剣な目になり敵対組織について喋り出す。

そして、今回の相手は少しばかり手強いらしくヴァリアーに回されてきたとのことだった。

「何故これほど被害が出ていたにも関わらず今までこつちに回さなかった？」

「その被害に気付くまでに時間がかかった…恐らくそれも相手の実力ということだろう」

「請け負った、他に要件がないなら俺はもう戻る」

「ふむ、ではそうしようかな」

九代目は腰を上げ、部屋の扉に手を掛ける。

「ザンザス」

「…」

「今度の式典には参加しなさい」

九代目はそれだけ言うとは出て行った。

式典？ああ、そういえば書類にそれらしい奴が入ってたような？

いつも式典は後回しにして、ルツスーリアから言われないと覚えていなかったな。

もう一度確認するか…

ザンザスが机の上に置かれている書類に目を通していると、オツタビオが入ってくる。

「ザンザス様」

「何だ」

「明後日の式典の付き添いはどうなされますか？」

「…お前がいい」

「分かりました」

「要件はそれだけか？」

「いえ、先ほどスクアアローが任務から帰ってきたのですが…その報告書を持ってきました」

「置いておけ、それとカス鯨を呼べ」

「分かりました、失礼します」

あーあー式典やだなー

仕方ないか、一応参加だけはしておこう。

ヴェロニカは一通り急用の書類や報告書だけ目を通し、背伸びをしていた。

すると、部屋の外から足音が聞こえ扉が勢いよく開かれた。

「ボス！任務終わったぜえ！」

「扉は閉めろ、あと鍵も掛ける」

ヴェロニカの言葉にスクアアローは扉を閉めると、鍵を掛ける。

そして鍵を掛けた瞬間、足から崩れ落ちた。

「ああああ足が、震えて……立てない…」

「……はあ…」

お前のような剣帝がいるものか…。

ヴェロニカは溜め息を吐き、スクアアロー…の姿をした入江に手を差し出し、どうにか立たせる。

ソファに座らせると、入江は涙目で初任務を語った。

「ああ、もう怖かったああああ」

「ちゃんと渡せたか？」

「う、うん……相手がとつても厳つい奴で腰が抜けそうだったよ」

「まあなんだ…初任務お疲れ」

「何だろう、胸に沁みる言葉なのにザンザスの声だと違和感しかない」

「んじやあ本人のように蹴ってやろうか？」

「ごめんなさい」

今回入江に課した任務は、武器と金の取引である。

一応任務内容中で一番簡単なものを選んできたので、出来るのは分かっていたが、ヴェロニカが気にしていたのはマフィア相手への態度

だった。

「怯えたりはしなかったか？」

「し、してないよ！出来るだけスクアアローをイメージして動いたし……」

「まあさつきの部屋への入り方スクアアローだったな」

「はあ、ほんと肩凝るな……」

「一週間前より断然スクアアローに似てきているが、油断はするな……幹部の中でもマーモンは勘がいいぞ」

「分かってる、明日も僕は任務かい？」

「ああ、一応な……だが戦闘経験はもう少し基礎を固めてからだ」

「そうしてもらえると助かるよ……」

入江は水を飲みながら思い出したようにヴェロニカに聞く。

「そういえば……」

「何だ」

「あの金髪眼鏡の人の名前何だったんだい？」

「知らん」

「ええ!?もう一週間経ってるよ!？」

「あいつが名前を呼ばれているところを見ていないんだ」

「ええ……書類にもないの？」

「探したが見当たらなかった……くそあのピスタチオめ」

「ごめん今何て？」

「何でもない、それよりも私は明後日式典に出る予定があるから本部にはいないぞ」

「そうなの？じゃあ明後日は訓練無しかい？」

「んなわけあるか、自主練だ」

「う、だよね……」

「死ぬ気の炎は出せたか？」

「い、一応……でもなんか雨の炎だから慣れないなあ」

「確かお前は晴だったな」

「そうだよ……それに左手の感覚がないってのもまだ慣れないよ……」

「別に弱音ってわけじゃないよ…あと少しでコツを掴めそうなんだ」  
「そうか、頑張れよ」

入江はスクアアロの顔で、困ったように笑い部屋を出ていった。  
基本無表情なヴェロニカはザンザスの真似というのは容易く、口調と態度を少し変えるだけだった。

元々憤怒の炎を使い、ザンザスに習って二挺拳銃をメインとしてただけあって、未だ誰にも不審がられていない。

ザンザスの仕事も、未来ではヴァリアアのボスの座にいるヴェロニカには容易いことだった。

だがそんなヴェロニカにも一つだけ悩みがあった。

それは、性別の違いである。

ぶつちやけトイレとか目を逸らさねばやっていけないと思った。

ヴァリアアのボスであるヴェロニカ、それでいて男女の交際は一切なかった。

というのは、仕事が忙しすぎて惚れる暇など全くなかったし、元々公私はきちんとしていたため仕事場で恋愛という甘酸っぱいものは何もなく、プライベートは父ザンザスと過ごす日々である。

前世含め、初めて男の裸を見たヴェロニカはげんなりしていた。

初めて見た男性の裸が父親って悲しくないですかね。

ツライ。

涙目のヴェロニカは朝と風呂上がりの着替えが一日の一番気が滅入る時間帯である。

まだ火傷の跡がないザンザスの顔は新鮮でよく鏡で眺めているが、傍から見れば完全にナルシストである。

早く気付けヴェロニカ。

因みに、髪はよく下ろすようにしている。

未来のザンザスのハゲ予防だ。

二日後、ヴェロニカは式典用の正装を着ていて、前髪をワックスで少しだけ固めて準備を終わらせた。

パパってこういった場所ではどう対応してんだ？

普通に…あれ？パパの普通って何だろう。

ヴェロニカが首を捻っていると金髪眼鏡の声が聞こえ、ヴェロニカはそのまま部屋を出る。

それと金髪眼鏡の名前がようやく分かった。ルッスーリアと話しているところを入江が聞いたらしい。

オッタビオか……全くピスタチオじゃねえじゃん。逆に何でピスタチオ？

あ、入江にこいつが裏切ること教えてない。っていうか何で裏切ったんだ？こいつ

ダメだ、そこんとこ全く知らん。取り合えず使える時まで使いまくって捨てるか。

ヴェロニカの考えを知らないオッタビオは運転席のバックミラーでザンザスを見る。

「ザンザス様、今日の式典では同盟ファミリーの方々が例年よりも多く来るはずです」

「フン」

「閉会は10時となりますが——」

「オッタビオ……黙れ」

「……申し訳ありません」

考え事をしているヴェロニカは気が付かなかった。

ハンドルを握るオッタビオの手が僅かに震えていることを。

式典に着くと、人で溢れていた。

ザンザスと同じであり人混みを好まないヴェロニカは眉を顰めるも、冷静に対応していく。

ザンザスに声を掛ける多くは、同盟ファミリーのボスとその令嬢だった。

令嬢の女性達は皆頬を染め、ザンザスに声を掛けてくる。

だがザンザスの中身は女のヴェロニカである。

ヴェロニカは父の顔が整っていることを自覚しているので、女性から寄せられる好意を理解するが、納得はしない。

何が悲しくて女性に欲情されなきゃならないんだ……

こちらら男性器に触れるだけでも精一杯だったのに。



それも父親の、と付け加えるならばヴェロニカの心的ショックは計り知れない。

どこのセクハラだよくっそ。

香水の匂いと寄せられる好意、そして極めつけはこの体を狙う彼女の目がヴェロニカのストレスを大きく積み上げていく。

パパ助けて……

ヴェロニカ28歳、転生してから初めて父親に助けを求めた瞬間である。

ヴェロニカの機嫌が下がっていくのが分かったのかオツタビオが偶に女性たちとの距離を遠ざけてくれる。

オツタビオ！お前初対面で殺そうとしてごめん！

途中で九代目に会い、そのまま九代目は他の者にザンザスを紹介する。

愚息、愚息行ってるけど、それじゃない？パパと拗れた原因。

息子カツコいいでしょーしたいのは分かるけどさ、血繋がってないじゃん！

つーか最初にそういうのは言っとけよお！

パパの（強化）ガラスのハートにクリティカルヒットだよ。

ザンザスの対面だけでも守ろうと、飽き飽きしてくるこの場で無理やり表情を作る。

何人かに紹介を終え、これで役目は終わっただろうと思い人混みから少し外れる。

すると直ぐにオツタビオがこちらに向かって来て、カクテルを渡してくる。

「ザンザス様、喉が御乾きだと思つて……」

ヴェロニカは一瞬それを受取ろうとしたが、元の世界での出来事を思い出す。

本来のヴェロニカは酒がとても弱く、直ぐに酔っぱらっては部下に暴力を振るいまくるのだ。

それは二代目ザンザスと呼ばれるほどだが本人は知らない。

この体はパパの体だから酔わないとは思うけど、少し怖いな……

「いい」

「ザンザス様？」

「帰るぞ」

オツタビオの静止を無視し、ヴェロニカは会場を出る。

駐車場に行くとき、オツタビオが慌てて車のドアを開ける。

ヴェロニカは車に乗り込むと、足を組み出す。

オツタビオは少し九代目に連絡をしますと言つて、車から離れていった。

少しすると戻ってきて、車を出す。

「ご気分でも優れませんでしたか？」

無視。

多分パパは7割がた無視すると思うんだよね。

まあ機嫌悪いとでも勘違いしてもらいたい。

オツタビオは何も言わなくなり、ヴァリアー本部に着くとヴェロニカは自室に直行した。

途中でルツスーリアやベルに会うが、それも無視する。

自室についたヴェロニカは部屋の鍵をかけるとネクタイを脱いで、ベッドにダイブする。

疲れた……

未だシャツに付着する香水の匂いに顔を顰める。

ダメだ、眠る前に書類に目を通してそれから……それから……

コンコン

「う」おい、ボス……鍵あけろお」

ヴェロニカは脱ぎかけのシャツを再び着て、鍵を開ける。

スクアーロはゆっくりと扉を開け、中に入ると鍵を閉めた。

「ツハ、ようやくカス鮫みたいになってきたじゃねーか」

「二人きりの時くらいザンザスの真似はやめてくれ、心臓に悪いよ……」  
「……そう」

ヴェロニカと入江はソファに座り、元々あった酒を開ける。

「何で来た」

「君が……機嫌が悪そうだと、オツタビオから聞いて……」

「それで？」

「もしかして、女性の人達に言い寄られたからかなって思って…」

「ご名答、ま、お前じやなかったら分からないだろうな」

「ヴェロニカちゃん、ザンザスの姿してるけど女の子だからね…」

「父はいつもあんな香水臭いところにいたのか…」

「ヴェロニカちゃんからしたら気が滅入る場所だね」

「父も人混みは嫌いだ」

「そっか、ところでザンザスって酒豪だったのかい？」

「ウワバミよ…私と違って酔ってるどころ見たことないし…」

「え、ヴェロニカちゃん酒弱いのか？」

「直ぐに記憶が飛んじやって、その間父のように暴君になるらしいけど…」

「え」

「この体だと、多分酔いはしないとと思うけど、確認したいから飲むの」  
「待って、僕避難していいかい？」

「何言ってるの？私を一人で飲ませる気？」

「すみません、付き合います」

涙目の入江と、酒を煽るヴェロニカ。

一時間が経過するが、ヴェロニカの思考はハッキリとあった。

「ふーん、酒が水みたいね」

「もうのめまひえん」

「ちよつと、ここで寝ないで自室に帰れ」

「たてまひえん」

「ツチ」

ヴェロニカは舌打ちをして、オツタビオを呼ぼうと思ったが、今のスクアードを見る。

「ぼくだってえ…たたかえるんだぞお！ひつく」

入江正一全開である。

仕方なく入江をソファーに横にして、ヴェロニカは部屋を出る。

誰かと同じ部屋で寝ると、気が散って眠れないので仕方なく入江が寝てから誰かに運ばせようと考えた。

「あ、ボスじゃん…先輩は？」

「潰れた」

「は？飲んでたの？」

いつもの癖でキッチンへ寄ってしまい、そこでベルと鉢合わせた。

「つーかボスがここに来るとか珍しいね、最近は何か機嫌悪そうだったからさー」

「別になんともねえが」

「え？そうなの？すごくピリピリしてる感じで近寄れなかったんだよね」

マジですか。

やっぱりこの時期のパパってもう少しソフトな感じでしたか。

もう少しオツタビオを無視する回数減らそう。

「別に怒ってねえ」

「そうだったんだ、あとさー最近先輩と一緒に何してんの？」

「あ？」

「や、何かよく先輩ってボスの部屋行くなーと思って」

「前からそうだっただろ」

「まあ確かに…あれ？俺の気のせいかな…あ、マーモン。お前も何で来てんの？」

「眠れないからホットミルクを飲もうと思ってね、やあボス」

マーモンがキッチンへ入ってくる。

ホットミルクって…子供か。いや子供だった。

ヴェロニカは椅子に座ろうとするが、一瞬足を止める。

奥に上質な大きい椅子が見えたので、その椅子に座った。

「マーモン、ボス怒ってないらしいよ？」

「そうだったのかい？僕はてっきりスクアーロの奇行に苛ついてると思ってたよ」

「奇行？」

「ほら、最近すっごいうるさいって思わないでしょ」

「あ、確かに、何か叫んでること少なくなっただよね先輩」

「同時期にボスがピリピリしてたからね」

「だつてきボス」

これは無視してもいいやつだよな？

ていうか怒つてように見えたのか…

やつぱマーモンは観察力あるなあ…未来でも重要な任務を任せただけあるや。

これは入江に言っておかないとな…にしてもスクアア口つて常時シャウト状態だったっけ？

若いからかな？

「ねえボス、ポーカーしようぜ」

ベルが無邪気な笑顔でカードを持つてくる。

この時のベルつていくつだ、8歳か。

うつわ、この年でもう人殺してるのか、何か壮絶だなあ  
まあ本人が楽しんでるなら何も言うまい…

「付き合つてやる」

「え？マジ!？」

ベルはザンザスが遊んでくれるのがとても意外だったようで、驚いている。

だが直ぐにカードを切り始めた。

というかもう遅いけど子供は寝なくていいのかな？

あ、パパもまだ子供か。

ベルはカードを切り終えて、ヴェロニカに渡してきた。

数分後…

「フルハウス」

「もっかい！」

数十分後…

「フォア・カード」

「うつそ、もっかい！」

一時間後…

「ストレート・フラッシュ」

「待つて、ボス…ラスト！今度でラストだから！」

数時間後…

「…………ロイヤルストレートフラッシュ」  
「……………」

ベルは驚愕通り越して、机に突っ伏している。  
いやこれは私も驚いている。

パパの幸運って最高値なのかな？

これは元の世界に戻った時にパパに福引やらせよう。  
気付けば日の出が窓から見えた。

ベルフェゴールside

ボスが最近とてもイライラしてる。

そんな雰囲気皆気付いてて誰もボスに率先して近寄ってはいなかった。

俺はそのうちもとに戻るだろうと思ってた。

ある日、ボスが何かの式典に出る為本部の中は少しだけ空気が軽くなっていた。

だが夜の10時頃、最高に機嫌が悪そうなボスが帰ってきた。

ボスは自室に直行すると、俺たちの集まっていた部屋にオツタビオが入ってきた。

「あらお疲れさま、っていうかボスどうしちゃたのよん」

「分かりませんが、式典の途中で様子が優れないように見えましたね」

「あら、風邪かしらあ？」

「ボスはこの頃ずっと機嫌悪いじゃないか」

「うむ、一体何がボスを煩わせているんだ」

「お前の顔じゃね？」

「なにをお！」

「ほらあんた達喧嘩しないの！ボスは？」

「部屋に籠って鍵をお掛けになって……………今日はもうそのまま何もしない方がいいと思いますよ」

「そう……んもうスクちゃん、あなた最近ボスが機嫌悪いの何でか知ってるかしら？」

「あ？」

ルツスーリアが先輩に声を掛けるまで、俺は先輩がこの部屋にいることに気付かなかった。

あれ？いつもなら存在感丸出しでうるさい先輩なのに……

「あいつ機嫌悪いのかあ？」

「あら、あなた分からないの？最近ボスずっとぴりぴりしてるじゃないの」

「そうかあ……？」

先輩は数秒考え込むと、椅子から立ち上がり部屋の扉に手を掛ける。

「おめーらは近寄んじやねーぞお」

それだけ言うと先輩はそのままボスの部屋に向かっていった。

数十分しても帰ってこない先輩を心配する者はいなくて、一時間経つ頃には部屋には俺だけになっていた。

俺はキッチンの方に移り、ただ眠気が来ないのでお菓子を食べながらナイフで遊んでいた。

そしたら足音が部屋の入口で聞こえ、そちらに顔を向けた。

そこにはボスがいて俺は一瞬固まるが、直ぐに声を掛けた。

「あ、ボスじゃん……先輩は？」

「潰れた」

「は？飲んだの？」

何それ、ずるい。

何に対してそう思ったのか、あまり覚えていないけれど、漠然と先輩が嫌いになった。

俺はボスと久々に会話をしたので、さっきの話をボスに聞いてみることにした。

「つーかボスがここに来るとか珍しいね、最近は何か機嫌悪そうだったからさー」

「別になんともねえが」

「え？そうなの？すごくピリピリしてる感じで近寄れなかったんだよね」

え、怒ってないの？あんなにピリピリしてたのに…

ボスも何言ってるんだコイツみたいない顔しないでよ。

「別に怒ってねえ」

「そうだったんだ、あとさー最近先輩と一緒に何してんの？」

「あ？」

「や、何かよく先輩ってボスの部屋行くなーと思って」

「前からそうだっただろ」

「まあ確かに…あれ？俺の気のせいかな…あ、マーモン。お前も何で来てんの？」

「眠れないからホットミルクを飲もうと思ってるね、やあボス」

なんだかボスにはぐらかされたような気もしないではないけど、マーモンがキッチンに入ってきて意識がそちらに逸れた。

そしてマーモンに先ほどのボスの言葉を教える。

「マーモン、ボス怒ってないらしいよ？」

「そうだったのかい？僕はつきりスクアアロの奇行に苛ついてると思ってたよ」

「奇行？」

「ほら、最近すつごいうるさいって思わないでしょ」

「あ、確かに、何か叫んでること少なくなったよね先輩」

「同時期にボスがピリピリしてたからね」

「だってさボス」

ボスは無言で俺たちの視線を一蹴し、奥にある大きな椅子に座り出した。

あれ？水飲みに来たんじゃないんだ？

マーモンはホットミルクを作ると、キッチンを出て行った。

俺は久々に会話をしたボスにカードを持っていき声を掛けた。

「ねえボス、ポーカークしようぜ」

まあ断るだろうけど、会話のきっかけさえ作ればあとはお喋り出来るじゃん、俺天才シシツ



「付き合ってやる」

「え？マジで!？」

だからボスの返事に心底吃驚した。

ボスとカードゲームなんて今まで一度もやったことなんてない。

さつき先輩と酒飲んでたって言ってたし、酔ってたのかな？

最近会話すらしなかったボスの言葉に俺の機嫌は良くなっていた。

だがカードゲームを始めると、それが地獄の始まりだった。

数分後…

「フルハウス」

「もっかい！」

数十分後…

「フォア・カード」

「うっそ、もっかい！」

一時間後…

「ストレート・フラッシュ」

「待って、ボス…ラスト！今度でラストだから！」

数時間後…

「……………ロイヤルストレートフラッシュ」

「……………」

あ、ありえねえ…

ボスなんなの？マジなんなの？運強すぎ…

イカサマするような人じゃないことくらい知っているから余計ボスの運の良さに恐怖する。

俺は机に突っ伏しながら、自身の敗北に耐える。

つく、まあ相手はボスだし…俺より強いのは当たり前か…

周りに誰か一人でもいたならば、その考えは否定されただろう。

だが誰も指摘する者はおらず、幼いベルの中にはボスは何において最も強なのだという定義が出来上がった瞬間である。

朝日が顔に差し掛かり、ベルは机に突っ伏していたこともあってそ

のまま眠ってしまった。

眠る直前、一瞬だけ視界に入ったボスの口が少しだけ笑ってたような気がした。

その頃のヴェロニカは…

子供の頃のベルってこんなに可愛かったんだな…

YES！シヨタNOタッチだな、うん

## Veronicaの不和

ヴェロニカです。

この世界に飛ばされて早一か月とちよつと経った。少し前にベルとカードゲームで遊んでやったのを機に、ベルが懐いてきた。

どれだけ人殺してようが、中身は子供なんですわ分かります。ようやく入江正一が普通の単独任務を成功させた。

まあ初めて人を殺したとあつて、落ち込みようは半端なかった。ヴァリアーのボスであるこの私に、慰められるくらいである。

多分あれアフターケアしなかったら自殺してた気がする。

だってさ、頬に返り血付けて、無言で私の部屋の前で呆然と立ってたんだよ？

あの時叫ばなかった私はえらいと思う。

あの後3日ほど引き籠つたが、昨日ようやく持ち直したようだ。

誰にも気付かれずに彼を慰めるのに一苦労したが、これでようやく入江正一の不信感が拭えればと思う。

それと二週間前によく両手剣が送られてきた。

待ってましたあああああ！

心の中で叫びましたとも。

そして私が両手剣を持つている姿に幹部の者は皆驚愕していた。

銃はどうするって？メインは銃です。

両手剣が来て入江正一と打ち合いが出来るので、ようやく入江正一の経験値を上げれると思った。

それと、ルツスーリアとレヴィが前にも増して馴れ馴れしい…というか近づいてくる。

取り合えず定期的にぶつ飛ばしているにも関わらず、レヴィに至っては笑っているので本気で気持ち悪いと思った。

オツタビオは今もずっと私の補佐をしている。

なんとなくこいつは他の幹部よりも距離が遠い気がして、裏切った理由も分かったような気がした。

現在、入江と一緒に訓練所に籠って入江と剣を交わしていた。

「足」

「うおっ」

「脇もつと閉めて、ほらまた足！」

「うぎゃあー！」

ヴェロニカが入江の足を引っかけると、入江は派手に転び出す。

「目を瞑らなくなったのはいいけど、今度は足が注意散漫だ」

「う……ごめん」

「最初は皆そうだ……だがこのままだと難易度の高い任務じゃ死ぬ確率の方が高いな」

「そっか……もう一回お願いしますー！」

最初の頃に比べれば入江は間違いなく成長している。

まず攻撃を前に目を瞑らなくなった。

逃げ腰にならなくなった。

あげればキリがないが、これならヴァリアー隊員でも不思議じゃないくらいの実力だろう。

この前人を殺す覚悟を身に付け、一皮むけた彼は必死に私に喰らい付こうとする。

その意気やよし、私も厳しく彼を指導する。

数時間後、疲れ果てて倒れた入江を横目に剣を腰に差す。

「今日はもう終わり」

「え、まだ出来るよ……」

「無理をすれば体が壊れる」

「う、分かった」

まあスクアアローの体だから多少の無茶は大丈夫だと思うが、それでも彼の体はまだ子供だ。

必要以上に酷使すればどこかでガタがくる。

「ヴェロニカちゃんはまたあの訓練でもするのかい？」

「ああ」

あの訓練というのは、私の炎のコントロール力の訓練だ。

今までも自由自在に扱うことの出来たが、それはあくまで体外に放

出した炎のみであった。

そして今から私が鍛えるのは、体内でのコントロールである。

これを入江に話すと非常に危険な訓練であり、無謀なことだと言われ激しく止められた。

当たり前だ、一歩間違えれば内臓を焼いてしまうのだから彼が止めるのも無理はない。

体外コントロールとは違い、一つ一つずつが命の危険性があり、私も思いついた当初はこの考えは捨てようと思っていた。

だが、未来を思えばこれは結構有力なのでは？と思えてきた。

だって白蘭のGHOSTもそうだけど沢田綱吉も炎を吸収してきたり凍らせてくるし、それに関して対策が何もないままだとハッキリ言って詰む。

いや沢田綱吉と戦うことはないと思いたいが…。

吸収されたり凍結させるから炎は使えない、となると素の力で対峙しなければならぬことになる。

どれだけ体を鍛えても死ぬ気の炎を使う相手に生身の体が勝てるわけがない。

であれば体外に炎を出さずに、体内に循環させて身体能力を強化することで、それらのデメリットは軽減できるのではないだろうか。

幸い私には剣術もあるので、問題は身体能力の差だけである。

入江は最後まで反対していたが、私が押し通した。

まあ炎のコントロールだけなら私はトップクラスだろう。

「っ…」

少しだけ思考がズレて、指の中の神経に通していた炎の加減を間違え、一瞬焼けるような痛みに襲われる。

指を見ると、少しだけ皮膚の下が赤くなっていた。

外面を触ってもただの皮膚だが、内面は火傷を負っていると一目で分かる。

内面で火傷をすると少なくとも一日は痛みが引かない。

一番酷いときは、肺の端っこを焼いてしまい一週間ほど激しい痛みに襲われた。

流石の私もひやひやしたので、今の段階で臓器付近に炎を通すのはやめた。

入江の体力が回復し、歩けるようになるのとヴェロニカと入江はその日の特訓を終了した。

「もうお腹が空きすぎて…」

「おい、口調を直せ」

ヴェロニカと入江がヴェリアー本部の廊下を歩いていった。

いつもならば、自室の方に食事が用意されるが、一人で食べる気分でもなかったので徐々に食堂のような広間に向かう。

基本、そこはヴェリアー隊員のみが使いボスであるザンザスは滅多なことがない限り入らない。

ので、入った瞬間食堂に静けさが広がるのは無理のないことで。

一緒に食堂に入った入江：いやここはスクアアロにしておこう。

スクアアロの顔も若干引き攣っている。

何か別の場所に行こうぜ的な視線をヴェロニカに送るスクアアロ。だが断る。

私は食堂のご飯を食べたことがないのだ。

いつもどっかのシェフカルツスーリアが作ったものしか食べたことなかったし：

前世で食べた食べ物の味なんて覚えてるわけもない。

何だろうこの安物の味というのを食べてみたくなったのだ。

ヴェロニカは周りの視線を無視して、食券を売られている場所に向かおうとして足を止める。

「おいカス鯨」

「な、なんだあ…」

「てめーが注文してこい」

「っ!?!…あ”あ”何で俺がつ…おい！」

一瞬入江が出てきたが、持ち直しスクアアロの言いそうなセリフを出す。ヴェロニカは無視して奥の席に座る。

正直言って財布持ってきてなかった、ハイ、スミマセン。

まあ我ここのボスぞ？払わなくても大丈夫な気もするが。

数分すると、スクアーロが御膳を二つ持ち、顔を顰めながらこちらに歩いてきた。

「このクソボス、飯くらい自分で頼めよお」  
「るせえ」

にしても入江、お前スクアーロの真似上手くなつたな…

あ、でも若干額に汗が垂れてる。

スクアーロが持ってきたのは、パスタだった。

……いや別にパスタはいいんだけどね。

周りの奴等が凄いいい形でパスタを見ている。

「スクアーロ隊長が、ボスにパスタ出してる」

「肉じゃない…だど？」

「嘘だろおい…」

つてなことを言ってますがそれは。

スクアーロの顔を見るが、何で私がパスタに手を付けてないのか全く分からない様子である。

これは部屋に戻つたら言わねば。

一応持つてきてくれたので食べはするが、これパパだったらスクアーロの顔にぶっかけてた気がする。

つーか高級肉じゃない時点でパパならキレてるな。

フォークを持ち、パスタを食べ始めると周りが困惑で騒めき立つた。

そんな周りに疑問符を浮かべるスクアーロ。

カオスだなあ…

カオスの原因であるヴェロニカはパスタを美味しく頂いていた。

パスタが残り僅かというところで、後ろからレヴィの声が聞こえてきた。

「ボ、ボス!? 何故ボスがこのようなところにっ!」  
腹減ってるからだよ。

レヴィは持っていたピザとサラダの乗ったトレイを綺麗に落とし  
た。

よほど私がこの場にいることが衝撃的のようだ。

うん、私もパパが食堂なんかに行ったら驚くわ。

パスタを食べ終わると、スクアーロが食べ終わるのを待たずに席を立ち、そのまま食堂を出る。

背後からレヴィの声が聞こえるが多分幻聴だ。

少しすると後ろからスクアーロがついてきて、執務室に入る。

「おい」

「な、なんだい」

「言い忘れていた、父の好物は高級肉だ」

「え」

「さつき周りが騒いでいただろ？お前がパスタを出したからだ」

「そうだったの!?でもヴェロニカちゃんもガッツリ食べる人だったっけ?」

「いや正直ステーキとかは偶に食べるくらいでいいんだが…如何せん父が高級肉ばかり食べるからこっちも食べざるを得ないというか…」

「何だか食事まで考えて食べるのって辛そうだね」

「だがサラダばかりを積極的に食べてるザンザスなんて気持ち悪いだけだろ」

「確かに」

入江は神妙な顔で私の方を見ていたが、スクアーロの顔でそんな表情しないで欲しかった。

「誰か来る」

「え、あ」

入江が振り向くと同時に、ノックと共にドアが開いた。

「ザンザス様、報告書を持ってきました」

入ってきたのはオツタビオだった。

オツタビオは報告書を机の上に置くと、こちらに振り向く。

「ザンザス様、昨日の書類には目を通されましたか?」

「ああ」

「あの第一部隊の中にスクアーロを入れてもよろしいですか?」

「何故だ」

「欠員が出てしましまして…スクアーロは非番ですし、実力も申し分



ないかと…」

「そうか」

え？みたいな顔をしている入江を他所にヴェロニカとオツタビオで会話を進める。

オツタビオが執務室を出た瞬間に、入江の目から涙が滝のように出る。

「まままま待つて、僕まだ誰かと任務なんて出来ないよ…」

「大丈夫だ、今度の任務はそこまで難しいものじゃない…それもチームで動く分楽になるはずだ」

「任務内容って？」

「敵対マフィアの制圧…と暗殺」

「ほらあああああやっぱ殺すんじゃないかああああ」

「うるさい」

ヴェロニカは入江の頭を叩く。

めそめそしている入江にヴェロニカは溜め息をつく。

「この任務でお前の実力を他の者にも見せてこい」

「僕まだ弱いじゃないかあ」

「それでもヴェアリアー隊員としておかしくない実力だ、私が保証する」

「ううう、こんな時に褒められても…」

「入江、任務は4日後だ…それまでに少しでも鍛えるぞ」

「うううう」

「情けない声を出すな」

「胃があ…」

目の前の入江はめそめそしながら胃を摩っている。

剣の師であるスクアアロのこんな情けない表情は見たくなかったと本気で思うヴェロニカである。

オツタビオ side

近頃ザンザス様はお変わりになられた。

まずヴァリアーの内情を違和感のない程度に少しづつ変えていつている。

ほとんどの者は気が付いていないが、私はずっとザンザス様のお傍でザンザス様に仕えてきたので少しの違和感にも気付くことが出来た。

ヴェリアーはこのまま進めば着実に強大となるでしょう。

今まで自分のこと以外に興味も示さなかったあなた様に一体どのような変化があったのだろうか。

そしてあなたは力に貪欲になられた。

スクアードを引き摺っては訓練所で修行紛いなことをしていることは知っていた。

直ぐに飽きると思っていたが、かれこれ一か月も続いていた。

それに比例するかのように、彼の周りの雰囲気も以前よりも少しだけ柔らかくなった。

その証拠がベルフェゴールだろう。

ザンザス様に気安く声を掛けることが多くなり、ザンザス様も偶にベルフェゴールの遊びに付き合うことがあった。

ルツスーリア達もザンザス様の変化に気付いているのだろう。

証拠にレヴィとルツスーリアは書きしたためた手紙をザンザス様の机の上に何十枚も置いていたり、クツキーやケーキを作って持って行ったりするようになっていたのだから。

まあ手紙の方は毎度燃やされていたし、定期的に二人はザンザス様に吹き飛ばされているが、二人に懲りた様子はない。

マーモンも以前より、ザンザス様に声を掛けることが多くなったような気がした。

だけれど、私とザンザス様の距離は一向に縮まりはしなかった。

少し前に、心臓を摩るあなた様を見た時に直ぐに病院にと進言したが、受け入れてはくれなかった。

ザンザス様が私の元から離れていくのを感じ、私は幹部の者たちに一種の妬みすら覚えた。

幼い頃からあなた様にお仕えしていた私は、不要になったのですか

？

あなた様は私を離れ、どこへ行くおつもりなのか。ザンザス様が変わったのはこれだけではなかった。

いきなり両手剣を求め、銃をメインとしての戦法は変わらなかったが、腰には常に剣を差していた。

未だ銃で事足りているので、ザンザス様の剣術を見たことはないけれども、たまにスクアアローが訓練所から傷だらけで出てくるので、剣帝レベルではないのかと推測はしていた。

これ以上力をお求めになるザンザス様を九代目はどう思っているのだろうか。

今のままでも十分強く、次期ボンゴレボス候補として賛同の声が非常に多い。

だが私は知っている。

少し前に、偶然的にも耳にしてしまったのだ。

ザンザス様が九代目と血が繋がっておられないことを。

ああ、ザンザス様がこの真実に気付く日はいつだろうか。

今ならばまだ間に合いますよ、九代目。

ザンザス様はこれからも益々強くなっていくでしょう…九代目、あなたよりも……。

少し前に催された式典への行きの車の中で、あなた様から向けられた殺気を思い出すと今でも震えだすのです。

？オツタビオ…黙れ？

私は不要になりましたか、ザンザス様…

あなた様への忠誠は届くことはないのですか。

あなた様の隣はどうしてスクアアローなのですか。

幼かったあなた様の手を握ったのは私だと言うのに——…

## Veronicaの心配

ヴェロニカに泣きながら任務イヤイヤをしていたが一蹴された入江は今敵の古城にいた。

途中何度トイレに行こうかと思うほど胃が軋んでく。

それも初の隊で動く任務であり、内臓を吐きそうなほど緊張していた。

あーもう嫌だ、帰りた。

内心涙目の入江を他所にオツタビオが指示を出していく。

「次の階で一班は迂回して敵の逃げ道を塞ぎ、私と二班は下の階へ残党の処理をして下さい」

「二班了解しました」

「うー」 おおい、俺はどこへ行きやいいんだあ」

「スクアアローは単独で地下へ、待ち伏せしてる者達の制圧をして下さい」

「あ？？殺さねーのか？」

「情報を引き出さねばなりませんから」

「了解」

内心ガッツポーズな入江は口元に笑みを浮かべる。

三手に分かれ、それぞれが任された場所へ向かう。

入江は一階へ降り、地下の通路を通り過ぎ、少し歩いた場所で床を軽く叩く。

音、空気の流れ、建物の構造からしてこの下が地下の広場になって  
いるはず…

でもおかしいな…心配がない？

オツタビオの言うことからして、敵はここの下にいるはずなんだけ  
どな

入江は首を傾げ、建物の構造を思い出す。

じゃあこっちは…

脳内にある地下の構造を思い出し、一階の奥へと進む。

人気のいない場所を伝っていくと、ようやく地下の方に心配を感じ

取る。

「ここか……あー胃が痛い……けどまだ殺しはしないからマシか

入江は爆弾を床に設置し、少し離れたところに行く。

数秒後、爆弾が爆発するともう一つの爆弾を床に開いた穴へと放り投げる。

これがスクアアロであれば正面から突進していきそうだが、生憎そんな度胸は入江にないので爆弾で取り合えず先制攻撃をしかける。

下の階から悲鳴や叫びが聞こえ、入江は下の階に降りる。

爆発の煙で入江が下に降りたことに気付かない者達を、背後から頭を思いきり剣のフラーの部分で殴る。

最後の一人を気絶させると、入江は周りを見渡し人がいないことを確認する。

「8名か……思ってたより人数多くて焦った。」

入江は無線機を嵌めている耳に指を置き、他の班がどうなっているか確認した。

「音声聞いてる限りじゃ既に終わっているようだ。」

「こちらスクアアロ、地下制圧完了」

『分かりました、そこに何名いましたか？』

「8」

『そうですか、なら5名は殺してください、連れ帰るのは3名で十分です』

「……………了解」

通信を切った入江は頭を抱えた。

「やっぱ殺すんじゃないかああああああああ」

心臓が重くなる感覚を覚えながら、気絶している者に近寄り剣の切っ先を喉元に持っていく。

「すまない……」

足元に血だまりが出来た。

「この前人を一人初めて殺した。」

「いや違う、僕は以前にも沢山の人を殺していた。」

ミルファイオーレに潜伏していた間、間接的に殺した人の数なんて今更数えることなんて出来ない。

だがスクアードになるまで、現場を見たことなどなかった。

そして、こんなことをやっていたんだと改めて突き付けられる。

人の喉元に剣を刺し込んだ感触を今でも覚えている。

その時は気持ち悪くてその場で吐いてしまい、帰っても感覚が手に残っていてベッドの中でずっと悪夢に魘されていた。

ヴェロニカちゃんがいなければ僕はあのまま自殺していたかもしれないほど、追い込まれた。

いつかこの重たい気持ちも麻痺してしまうのだろうか…

ヴェロニカちゃんはずっとこの感覚を背負っているのだろうか

いつも何事もなかったように振る舞う彼女が今は少しだけ怖かった。

機材を握る自身の手はなく、硬質な義手の感覚と生柔らかいものに刃先を埋め込む感覚が存在するだけ。

こんな苦しい思いをするならいつそ…そう思ったことは何回もあった。

でも死ぬのも怖いし、ヴェロニカちゃんを一人だけ置いていくことも出来ずただひたすら重い足取りで前を進んでいた。

これで本当に元の世界に帰れるのだろうか。

過去にいきなり飛ばされたヴェロニカちゃんもこんな気持ちだったのかな…

怖ろしくて恐ろしくて目を瞑りたくなる現実には、彼女は一人で歩いていたのだろうか…

自分を偽ることは、慣れていると思ってたんだけどな。

人を殺した事実には悲しむ暇すら許されないのは、予想以上に辛かった。

5人目の男の首に刃先を滑らせると、入江の元に足音が聞こえてきた。

入江は足音を警戒して腰を落とす。

「私です、スクアール」

「オツタビオか」

「二班の者は生きている者を拘束して本部へ運んでください」

オツタビオの声に数名が返事をし、他は撤収の準備をしていた。

数分もしないうちに、地下にいるのは入江とオツタビオだけになる。

何か他の人帰ったけど、何でこの人この場にいるんだろう…

これは帰っていいのかな…？

入江がオツタビオを見てみると、オツタビオが歩き出す。

「撤収しますよ」

「ああ」

入江はオツタビオの後をついて行った。

本部に着くと、オツタビオはザンザスの執務室へ行き、入江は自室へ向かった。

自室に着くと、義手を外しシャワー浴びた。

そして疲労を感じた体はベッドに吸い込まれ、瞼が重くなる。

あ、ヴェロニカちゃんとの訓練がこの後入った気が…

大事なことを思い出すも、閉じた瞼は上がらず入江は意識を手放した。

オツタビオ side

任務が開始された。

敵の古城へ着くと、地図を開き最終確認を終える。

スクアールの実力を考え、一番面倒なポイントを指示する。

殲滅ではなく、制圧。

加減をしながら戦うことは難易度が数段跳ね上がるが、目の前のスクアールは口角を上げるだけだった。

私は二班の者と共に、一階で敵を殲滅していた。

最後の一人を殺すと、通信機にスクアールから制圧完了の報告がありそちらへ向かう。

地下へ向かう通路には幾重にもトラップが仕掛けられており、先に

行く部下を止める。

作動すれば連動して爆発するタイプのものであり、一つずつ潜り抜けるしかなく、手間がかかっていた。

スクアーロの制圧時間を考えた限りじゃ、このトラップを一瞬で見切り、潜り抜けないと無理だと分かる。

あの男にはこの複雑なトラップを一瞬で抜けることが出来るだけの力量があるというのか。

無意識に奥歯を噛み締める。

二代目剣帝の名は伊達ではないということか。

後ろの方で部下が一人、トラップに引つ掛かり腕を少しだけ怪我するが、そのまま進み終えると奥の広場の方に銀髪が見えた。

私たちの足音を察知したのか、腰を落としこちらを見据えている。

逆光で私たちの顔が見えなくて判断が付かないのか探るようはこちらを見ていた。

「私です、スクアーロ」

「オツタビオか」

「二班の者は生きている者を拘束して本部へ運んでください」

私の指示に部下は返事をして、気絶しているであろう者たちを抱えてその場を離れる。

私は戦闘があつたであろうその場を一通り見まわす。

天井には大きな穴が開いていることから、余程激しい戦闘を繰り広げていたことが伺える。

だがスクアーロの服には返り血一つ付いておらず、容易に制圧できたと分かる。

目の前には未だ動かないスクアーロがこちらを見ていた。

ああ、その目だ：

その目が気に喰わないんだ……

ザンザス様の隣に蔓延る銀色の瞳が。

そこは私の場所であつたのに

ザンザス様、ザンザス様

このような野蛮な者をあなたのお傍に置いておくのはあなたに



とって有益なのですか？

ああ、いつそこで死んでくれればよかったのに  
事故を装って殺せれば良かったのに  
気に入らない。

私は黒い感情を抑え、スクアア口を通り過ぎ帰路へ着く。  
本部へ着くと、報告書の作成をするため自室へ向かう。

数十分ほどで報告書を書き上げると、ザンザス様の執務室へ向かった。

「オツタビオです」

「入れ」

「報告書をお持ちいたしました」

「そこに置いておけ」

執務室の椅子に座りながら他の報告書に目を通していているザンザス様の迷惑にならぬよう、出来るだけ静かに行動する。

報告書を置くと、空になったグラスが視界に入った。

「ザンザス様、何かお飲み物をお持ちいたしましょうか」

「コーヒー」

「了解しました」

ザンザス様にしては珍しい飲み物ではあるが、私は頭を下げ執務室を出る

コーヒーを淹れにキッチンへ入ると、そこにはルツスーリアが何かを作っていた。

「何を作っているんです？」

「あらオツタビオじゃない、任務お疲れ様ね。今クッキー作ってるのよん」

「またどうしてですか？」

「ボスにあげるためよん！」

「あなた懲りませんね…」

「たまに食べてくれるのよん」

「へえ」

胸の奥から何かが這い寄ってくる感覚がした。

直ぐにそれを振り払い、コーヒーを淹れると再び執務室へ足を運んだ。

「ザンザス様、コーヒーをお持ちしました」

執務室の扉を開けるも、中に彼はいなかった。

「ザンザス様？」

トイレだろうか、思い机の上にコーヒーだけ置き周りを見るが気配はなく外に出られたと分かった。

用事でも思い出したか？

私は執務室を出て、自室に戻ろうとした。

自室に戻る途中、廊下を歩いていると通り過ぎた部屋のドアが開く音がした。

何気に後ろを振り向くと、そこにはザンザス様が廊下を曲がるのが見えた。

何故ここにザンザス様が？

それにさきほどの部屋は…スクアーロの……

私はザンザス様が出て行ったばかりのスクアーロの部屋のドアを少しだけ開け中を覗く。

中には寝息を立てるスクアーロがいた。

私はそのままドアを閉め、廊下を早足で歩いて行った。

早くその場を離れなければ、スクアーロを絞め殺してしまいそうだった。

何故ですか、何故ですかザンザス様

あなた様自ら彼の部屋に赴くようなことなどあつてはならない

あなた様は孤高であらねばならない

ああ、この胸に広がる黒い感情が理性を侵食していく

私から段々と離れていくザンザス様への焦燥感と、彼の近くに佇むあの銀色への嫉妬感に、ただ目を背けることしか出来なかった

私が理想としていたヴァリアーはこれではないのだ

ヴェロニカ side

何気なく、視界に入る書類を手にしていた。

今頃入江はちゃんと任務こなしているだろうか

隊で動くの初めてだろうし、怪しまれなきやいいけど。

多分精神的に疲労しまくってるから、今日の訓練はやめようかな  
だがここで甘やかしてはダメな気もする。

ここ数日で入江はとて成長した。

まあ体は元々スクアードだから基礎ステータスは悪くなかったか  
らでもあるけれど。

それでも気配を読めるようになったのは努力の賜物だろう。

今までの書類を見てる限りじゃ、パパはまだスクアードを部隊長に  
して任務へ行かせたことはなさそうだ。

これなら兵法とか今から教えても違和感ないだろう。

入江は元々頭脳派だし過去にミルフィオーレで指揮官を務めてい  
たから、そこら辺は直ぐに身に付きそうだ。

ヴェロニカが思考していると、ノック音が耳に入る。

「オッタビオです」

「入れ」

「報告書をお持ちしました」

「置いておけ」

思考を切り替え、オッタビオに接する。

昨日の夕方に出ていき、今日の昼頃に帰ってきた彼既に報告書を作  
成し提出してきた。

うっ、こいつぐらいじゃないかな…こんな事務処理が早いのもって。

バカではないが、事務処理を得意とするものがあり集まらない  
ヴァリアーでは、提出期限ギリギリにしか出さない者は少なくない。

それを考えれば彼はとても有能だったのだろうか…

実力のほどは知らないが。

「ザンザス様、何かお飲み物をお持ちいたしましょうか？」

「コーヒー」

「了解しました」

ああ、癖でコーヒーと言ってしまった。

もういいや、珍しいと思うだけだろ多分。

パパならなんだろ：酒だな。

オツタビオが部屋を出ていき、ヴェロニカは提出された報告書を読む。

ん？入江の奴5人も殺してるけど……大丈夫かな……

また目が死んでるとか嫌なんだけど。

目が死んでるスクアールとか本当に心臓に悪いんだけど。

悩んだ末、誰にも見つからないようにスクアールの部屋に向かう。

「おいカス鯨」

スクアールの部屋の前で声をかけても返事がなく、仕方なく勝手に部屋の中に入る。

ベッドを見ると、入江は眠っていた。

目の下には若干隈のようなものがあるがストレスの証拠だろうか。

ミルフィオーレに潜伏していた時より遥かにここは命の危険に晒されているから、精神的疲労は計り知れないだろうな。

しかも、私のように慣れた環境でそれも身近な人に憑依するならまだしも、彼は全く接点がないと言つてもいい人物に憑依してしまったから疲労は隠せないか。

今日は人を殺しているからショックも大きかっただろうし、仕方なく今日の特訓は取りやめた。

私だって初めて人を殺した時は少なからずショックであった。

だけれど、殺される覚悟があつたからか、意外と早く受け入れられた。

まあ皆のフォローもあつたけれど。

それ以上に、パパに弱いところを見せたくなかつたのが大きかつた。

パパの跡を継ぎたいとばかり強く思っていたから、こんな初歩で躓いている暇なんてなかつた。

前世で培った倫理観なんて十数年で変わるものだと素直に驚いた。

だけどそれは変えるだけの年数が、環境があった。

入江は純粹に日本に生まれ、ひよんなことからマフィアに関わって、マフィアの一員になってしまった男。

冷酷な部分もあるが、入江から安全な国である日本で培った倫理観が抜けることはなかった。

それを今まさに変えようとしているのだ。

必死に現実に対応しようとしているのだ。

ヘタレな男ではあるが、いざというときには勇気のある男だと知っている。

世界の為に立ち向かった男なのだから。

「お疲れ様」

それだけ言っただけでヴェロニカは部屋を出て自室に戻る。

オツタビオの視線には気付かずに。

## Veronicaの謀反

この世界に飛ばされ、5か月が経とうとした頃

「ザンザス様」

「何だ」

「最近、ヴァリアーの内情を変えておられるようですが、何をお考えなのですか」

「お前には関係ねえ」

「ですが」

単にヴァリアーという組織を強化したいだけである。

元の世界のヴァリアーに近づけようと、情勢を少しずつ変えていく。

この半年で、格段に内情が良くなっていることは誰の目にも明らかだった。

そしてそれを違和感の抱かぬように持つていくことが難しかったが、誰も首を傾げていなかったので安心していった矢先だった。

オツタビオがザンザスという人物に違和感を持っていないが、探っているようにも思える。

暫くオツタビオと距離を取り、スクアーロとよく一緒にいたせいか、思うところがあつたのだろう。

「ザンザス様、九代目との食事会が7時に入ってますが、いつ頃本部をお出になりますか」

「…………断れ」

「ですが」

「あ?」

「分かりました」

それだけ言うとオツタビオは失礼しますと頭を下げ、部屋を出ていく。

すまんオツタビオ、少しきつく当たり過ぎた。

だが今度の大規模な殲滅任務で入江が第二部隊の部隊長だから、今

のうちに出来るだけ鍛えなきゃいけないんだ。

九代目にも、この大規模任務が終わったら会いに行こう。

一応親子だからね、表面上は。

そろそろ入江が戻ってくるはずだけどな…

「う”お” い、ボス！任務終わったぜえ」

「黙れカス鮫」

いつものようにスクアアロを貶すと、スクアアロは扉を閉めて報告書を片手にザンザスの元に歩いてくる。

机に報告書を置くなり、深いため息を吐き入江が出てくる。

「はあ…今回も遠出で疲れたよ」

「明後日の任務までお前は休みだ」

「え？あ！明後日って言ったら僕が部隊長の任務じゃないか！」

「そろそろ大きな任務の経験が必要な時期だろう」

「今でも胃が痛いのに…：ヴェロニカちゃんが僕の胃を狙って来てる…」

「胃薬は経費で落としてやる、それより行くぞ」

「ええ、僕帰っていたばっかだよ？」

「体力は有り余ってるだろ」

唸る入江を無視して、椅子から立ち上がり剣を片手に部屋を出る。

入江もヴェロニカに付いていく。

訓練所は今もなお使用している。

隊員にはちらほらこの存在を知る者もいるが、人払いをしているので早々誰かが来ることはないだろう。

幹部の者達も、ザンザスが剣を慣らす為にスクアアロと打ち合っていると思っ込んでいるようなので放置している。

訓練所に入りいつものように、監視カメラ、音量マイクを切る。

目の前の入江も準備運動を始めている。

「始めるぞ」

「分かったー」

顔を何回か叩き、入江は剣を構え、ヴェロニカに突進してくる。

何度か剣が交差し、服のあちこちが破れるが二人の足が休まること

はない。

高く響く金属音が数回、数十回と重なるごとに口からは息が漏れ出す。

入江の攻撃を流し、胴体を蹴ってくるヴェロニカに入江も避けようとする。

だが避けきれず数発入り、壁に激突するが再び立ち上がりヴェロニカに向かってくる。

数時間ほど経つと、やがて金属音は聞こえなくなり、そこには荒い呼吸を繰り返す入江が床に寝転んでいた。

「はあ…はあ…もう無理……」

ヴェロニカは寝転ぶ入江を眺めながら剣を仕舞い込んだ。

そして、いつものように体内に炎を通す練習に移行した。

ヴェロニカが目を瞑り、集中し出す。

入江もそれを感じ取り、荒い呼吸を落ち着かせ、あるものを取り出しヴェロニカを見ていた。

目を開けたヴェロニカがいきなり壁に向かって走りだし、足で壁を垂直に走り始めた。

10mといったところで天井に手が付き、重力に従って落ち始め、地面になんなく着地する。

「ふう…」

「おおお、すごいよヴェロニカちゃん！本当に体内での炎をコントロールするだなんて」

「だがまだ集中力を乱すと自身に火傷を負うな」

「だけどこれは凄いことだよ…だって体内での炎はレーダーにも感知出来ないんだよ！」

隣で科学者としての顔が出ている入江の取り出したものは、炎を感じ知るレーダーだった。

体内で炎を流し身体能力を上げているヴェロニカが壁を垂直に走っている間、レーダーには何の反応もなかった。

つまり、他人から見るとヴェロニカは素の筋肉だけで壁を垂直に走ったようにしか見えないのだ。



だが体内で炎を循環させるにあたってデメリットはある。

まず一つめに、一歩間違えれば自身にダメージを負うということ。二つ目に、体内を強化させるだけであって体外、つまりは皮膚などはそのままである。

なので、体内に炎を循環させたまま壁を思い切り殴ると、壁にクレーターが出来ると同時に皮膚まで裂けて血まみれになるのだ。

この二つがあまりにもデメリット過ぎる上に、普通に体外に炎を纏ってやり合った方がいいので死に技と化した。

この技はハッキリ言つて、九代目や沢田綱吉の零地点突破の相手ではか発揮されない。

いつ沢田綱吉や九代目が敵に回るか分かったものじゃないし。

いや敵に回すつもりはないんだけど。

長期間の訓練をした結果、一応実践で使えるくらいにはなったが、別に急いで身に付ける必要はなかったような気がした。

でもまあ早く身に付けて損はないか、と無理やり納得することにする。

入江もようやく実力がスクアアロに及ばないまでも、レヴィよりは強くなっていた。

これならあと半年以内でスクアアロに追いつくだろう。

あくまでこの時代の、と付け加えるが。

任務自体にはまだ拒否感はあるも、難なくこなすことが出来るようになっていた。

そしてヴェロニカは執務室に隠し部屋を作らせ、そこに研究室を作った。

勿論入江の為で。

ここで入江は偶に籠って、元の世界に戻れるような装置を研究をしている。

ここは幹部の誰にも教えてないので、入江とヴェロニカが気を休める場所にもなっていた。

パソコンやら機材やらを真剣に見つめるスクアアロは不気味であつたが、女口調のザンザスの方が気持ち悪いと思つた。

そして最近気になることがある。  
オツタビオの存在である。

彼の行動を見れば何故ザンザスを裏切ったのかが分からなかった。  
ならば、どこかで彼が裏切ろうと考えた事柄があるはずだ。

心当たりは、クーデターしかない。

だが中身がヴェロニカである以上クーデターは起こす気はない。  
じゃあオツタビオは信用していいのではないか。

そう言われればNだ。

オツタビオは信じてはならない気がした。

何故かは分からないが、ザンザスの勘がそう告げているのだ。

誰も信じるな、と。

まあスクアール口っていうか入江は信頼している、何せ同じ世界の  
人だから。

だけどヴァリアーの面々は一応信用はするが、信頼するかは迷うと  
ころである。

容易に裏切り、人の不幸を笑い、人の死を願う人たちだ。

ザンザスを裏切ることはないと思っているが、人間性を考えれば完  
全に信頼するのはダメな気がする。

それにこの時間軸じゃそれほど長い間一緒にいたわけじゃないか  
ら、安易に信頼するのは愚策だ。

だが私も世界は違えど一応ヴァリアーのボスである。  
見る目くらいはあると思いたい。

こいつらは時間経過で様子を見るのが最適だろう。

「入江」

「何だい」

「最近、オツタビオとよく話しているが、何か感じたことはあるか？」

「え？」

「思ったことを言えばいい」

「え……えーと……ないかな……マフィアにしては丁寧な口調をしてい  
ると思うよ」

「そうか」

「どうしたんだい…いきなり」

「いや、杞憂であればいいんだが…」

オツタビオ、その名前を聞くだけで何故か心がざわつくのだ。

オツタビオ side

「ザンザス様」

「何だ」

「最近、ヴァリアーの内情を変えておられるようですが、何をお考えなのですか」

「お前には関係ねえ」

「ですが」

「ただ、またあなた様は何も教えては下さらないのですね。」

何故ですか…

心のうちに抱える不満を押し殺して、私は今日のザンザス様のスケジュールを伝える。

「ザンザス様、九代目との食事会が7時に入ってますが、いつ頃本部をお出になりますか」

「…………断れ」

「ですが」

「あ？」

「…………分かりました」

最近、よく九代目との食事会をキャンセルなされることが多くなつた。

また後程九代目にもお知らせしなければ…

私はザンザス様の執務室を出ると、九代目の側近であるコヨーテに電話を掛けようとした時、後ろからスクアーロの声が聞こえてきた。

「う”お”い、ボス！任務終わったぜえ」

「黙れカス鯨」

そのあとに扉の閉まる音が聞こえた。

ギシツ…ミシ…

手にしていた携帯が不穏な音を立てていた。

手を開くと、少しだけ罅の入った携帯が現れる。

ザンザス様はお変わりになられた。

あの銀色が入ってきてから。

ザンザス様、ザンザス様…

九代目のように私からも離れていくおつもりですか

何故ですか

幼い頃からお傍で仕えていたのは私ではありませんか

ザンザス様…

あなたというお方はなんと罪深い

私の求めた理想とは裏腹に、私から離れて行った…

もう…私には…

あなたに仕えていたいと

思えないのです。

p r r r r …

『オツタビオか、何だ』

ザンザス様

「至急お知らせしなければいけないことが——…」

今のあなたは私の理想とするヴァリアーには要らない

九代目 s i d e

私の息子ザンザスは血の繋がった息子ではない。

だが事実を教えるにはあの子とは距離が離れすぎてしまった。

いつかは教えなければいけないことは分かっている…

ある日、あの子が剣を作るよう頼んできた。

私は意外に思うが、ザンザスの頼み事を無下にも出来ず、その道の

職人に作らせた。

何か心変わりでもあつたのだろうか、ザンザスの顔を見に行くことにした。

久々に見る息子の顔は少しだけ言葉遣いが悪いも変わったところはなかった。

世話をしようかと思うが、直ぐに仕事の話を持ってきて、結局ザンザスとの普通の会話すらまともにできずに本部に帰ることになった。

その後も何回か食事を設けたが、あの子が来たことはなかった。ヴァリアアのボスになったばかりで多忙を極めていることは分かっていた。

だがたまに流れてくる噂を聞いていると、顔を見たくなくなった。銃を持ちながらも最近では剣をも学び始めたオツタビオの報告にはあり、その腕前を見たくなくなった。

あの子は半年ほど前に急に力に貪欲になったのが気がかりでオツタビオにも気にかけてくれと頼んだ。

ああ、じわじわと離れるこの距離に、私は何も出来ずにいた。

私はいつあの子に真実を教えるのだろうか。

先延ばしにすることで、あの子の苦しむ思いが増やすだけだと言うのに

今夜の食事会でザンザスに真実を教えようと心に決めた。

そんな矢先だった。

部屋に急いだ様子でコヨーテが入ってきた。

「九代目」

「どうした」

「オツタビオからの密告です……ザンザスが———」

ヴェロニカside

翌日、朝起きて着替えを済まし、部屋を出ると人の気配が全くな

かった。

「……」

どこに言っても人の気配はなく、おかしいと思つたヴェロニカはスクアアロの部屋に急ぐ。

「おいカス鮫！」

声を出しながら部屋のドアを蹴り飛ばすと、スクアアロが驚きながら起きてきた。

「なっ、どうし……」

「屋敷に人の気配がない」

「は……？」

「誰もいない……おかしいだろ、全員が任務で出払っているはずがない」  
ヴェロニカの言葉に入江も真剣な面持ちになり、直ぐに義手を付け剣を括りつける。

入江と一緒に部屋を出ると、ヴェロニカは周りを警戒しながら屋敷を回る。

誰もいない屋敷の異変に、ヴェロニカは直感する。

すると携帯を取り出し、オツタビオに電話を掛けた。

『はい、どうされましたかザンザス様』

『おいてめえ今どこにいる』

『本部におられますが、何か御用でもありましたか？』

『どこのだ』

『どこの、とは……』

『どこの本部だつて聞いてんだよ』

数秒の静寂がそこにはあつた。

『ボンゴレ本部ですよ、ザンザス様』

『何故そこにいる』

『やはりあなた様は敏いお人だ』

その言葉と同時に、四方から数十の足音がした。

横にいたスクアアロに切り替えた入江も音に気付き、腰を落とし周りを警戒している。

「オツタビオ……てめえ……」

『どうして私の元を離れたのですか……………』

黒いスーツを着た男たちが何人も視界に入ってきた。

「ヴァリアー現ボスであるザンザス、ボンゴレ9代目へのクーデター画策により貴様に拘束命令が下された」

「抵抗すれば発砲も許可されている、大人しく連行されろ！」

『さようなら、ザンザス様』

## Veronicaの凍結

「ヴァリアー現ボスであるザンザス、ボンゴレ9代目へのクーデター画策により貴様に拘束命令が下された」

「抵抗すれば発砲も許可されている、大人しく連行される！」

『さようなら…ザンザス様』

オッタビオの通話が切れると共に、ボンゴレの精鋭が取り押さえようとしてくる。

ヴェロニカはさかさず銃で広範囲に渡り炎を出し、目くらましする。

「おいカス鮫、お前は他の奴等と連絡を取れ」

「り、了解！」

入江も混乱しているが、ヴェロニカの声で我に振り返り走りだす。

屋敷の中で広場が一番戦闘に向いていると考え、直ぐにそこへ向かいだす。

追手を振り切り、広場へ着くとスクアアロに切り替えた入江が携帯を取り出す。

「レヴィは任務中だ、ベルトとマーモン、ルツスーリアにかけろ！」

「分かった」

急いで、電話を掛けると数秒でルツスーリアが電話に出た。

『はくい、どうしたのスクちゃん』

「今すぐ本部に戻れ！」

『え？』

「オッタビオに嵌められ——」

スクアアロの言葉は途中で爆発音によって掻き消された。

「くっそ、取り合えず本部に——」

瞬間、入江の携帯に銃弾が当たる。

機械の壊れる音と共に剣を構える。

前方にはボンゴレ本部の精鋭が突入してきて、ヴェロニカがそれを



捌いていた。

殺せばそれこそクーデターのそれと変わらないと思っているのか、全員気絶させている。

数十分に渡り、ようやく鎮圧させたヴェロニカに入江は汗を拭う。

「どうすんだ、これ」

「どうするもこうするも……上手く嵌めやがってくれたな……オツタビオ」

ヴェロニカの言葉に驚く入江は建物の入り口の影から出てくる人物に警戒を表す。

「流石ですザンザス様……いつからお気づきに？」

「御託はいらねえ……てめーをカツ消す」

「それはさせないよ、ザンザス」

オツタビオの後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

ヴェロニカも入江も目を見開く。

「九……代目……」

写真でしか見たことがなかった九代目を直で見た入江は身震いする。

ヴェロニカも目を細め、銃を構えオツタビオと九代目の足元に撃ち込む。

すると、爆発とともに煙が立ち上がり目くらましになっている隙にヴェロニカは入江の襟を掴み窓の外に投げ飛ばした。

急な行動に驚いた入江は何も出来ず、そのまま窓の外に投げ飛ばされる。

重力に従い落ちる直前、ヴェロニカの方を見た。

「生きろ」

その言葉と共に入江はそのまま森の方へ落ちていく。

そして煙が消え、九代目とオツタビオがようやく視界に入る。

オツタビオはスクアーロがいないことと、窓が割れていることから外へ連絡させるために逃がしたと気付き、援軍を呼ばれては面倒だと

思いスクアーロを追いかけようと窓へ寄ろうとした瞬間銃弾が飛んできた。

鼻先スレスレを銃弾が通り抜け、オツタビオの頬に冷や汗が伝う。「行かせねえよ」

オツタビオは自身と九代目の二人を相手にする気かと正気を疑った。

「ザンザス……一体いつ真実を知ったんだ……」

九代目が悲しそうに問いかけてくる。

ヴェロニカは内心首を傾げる。

真実……真実……？何のことだ。

ん？これは誤解が解けるのでは？

「ザンザス様、あなたが半年前にご自身の出生をお知りになったことは分かっているのです……」

真実って素性のことか。

「そして、いきなり力に貧欲になり、私を遠ざけ、九代目を避け……ずっとこの機を狙っていたのですね……」

色々私のやってきたことが裏目になって出ているような……

やっぱりオツタビオ殺してから弁解しよ。

コイツいるだけで調子狂うわ。

ヴェロニカが銃でオツタビオを狙い撃とうとすると、目の前に炎が現れる。

なんなくそれを避け、オツタビオに向かって数発撃ち込む。

が、やはり九代目が邪魔をして、オツタビオは窓からスクアーロを追って行ってしまう。

舌打ちをして、九代目に向き合う。

一応、弁解しよう。

ヴェロニカが口を開こうとすると、九代目が杖をこちらに向けてきた。

「言葉で語り合うつもりもないか……ならば……致し方ない……」

おいおいおい、今！弁解しよう、口開いてただろ！

九代目の炎が襲い掛かってきた。

「ふざけんじゃねえ！」

本心からの声だった。

オツタビオなんぞの言葉を信じやがって。

これは誰の気持ちだろうか……………

なんだろう…この怒りは……………

ああ、これは憤怒の……………パパの怒りだ

ダメだ、抑えきれない

怒りがどんどんと溢れてくる

止められない

パパの中の怒りが暴れ出して……………

目の前の九代目は攻撃を緩めることはなく、ザンザスに放つてくる。

九代目の攻撃を躲したり調和しては怒りに任せて撃ち込んでいった。

怒りに飲まれ、ただ目の前の男を殺そうと体が動く。

どうして どうして どうして

止まらない……………

どんどん戦場は苛烈を極め、九代目の杖に灯る炎が変化した。

ヴェロニカはそれを見て直感的に零地点突破だと分かった。

瞬時に炎を放つのを止め、剣を腰から引き抜く。

九代目もいきなり武器を変えたザンザスを警戒するも零地点突破・

初代エディションを行使した。

氷がヴェロニカに襲ってくるが、それを体内に炎を纏い身体能力を強化したヴェロニカは避けだす。

理性が少しばかり欠けていたため、炎のコントロールが出来ず腕の数か所に火傷を負う。

痛みを無視して、剣を振り下ろして氷を砕く。

冷却された死ぬ気の炎の強度を知っている九代目はそれを見て驚愕する。

炎を使わず生身で戦っているように見えるので、生身で強固な氷を砕いたようにしか思えないのだ。

ヴェロニカは痛みで集中力が切れ始め、体内コントロールに支障が  
出始める。

足元に散らばる氷の破片を九代目に蹴り飛ばす。

九代目もそれを避けきれずに、腕と腹部を負傷する。

コントロールが鈍ったことで肺の近くを火傷し、吐血するヴェロニ  
カに九代目が眉を顰める。

「ザンザス…私はお前を本当の息子だと思っている……」

ああ 聞きたくない

私の中の怒りが 憤りが

「あ…」

今まで固く閉められていた蓋が抜けたような感覚がした。

瞬間、体の奥底から怒りの感情が湧いてくる。

ダメだ ダメだ ダメだ ダメだ

脳内で最大限の警報が鳴り響く

ごぼり ごぼり

嫌だ 嫌だ 嫌だ 嫌だ

「ああああああああああああ」

ヴェロニカの感情が炎となって大量に溢れ出す。

手に握る剣先から溢れる膨大な光球に九代目が目を見開く。

「ザンザス！」

私は 私は 私は …

?ヴェロニカ?

ヴェロニカの意識はそこで途切れた。

入江 s i d e

『生きろ』

僕には一瞬だけ、ヴェロニカちゃんの本当の姿が重なったように見えた。

窓から投げ出された僕はそのまま地面に着地し、その場を離れた。森を駆けていると、後ろから足音がして直ぐに警戒する。

「オツタビオ…」

「あなたはここで殺されてもらいます」

「黙れこの裏切り者が」

今この場で戦うのはいいが、ハッキリ言っただけで今の僕でオツタビオに敵うかが分からなかった。

今まで散々ヴェロニカちゃんに鍛えられてきただろう、信じる。

自分を信じるんだ。

「てめえ何で嵌めやがった…」

「何で……ですか……」

オツタビオの雰囲気が変わり、オツタビオが銃口を入江に向ける。

「あなたが彼に出会いさえしなければ……こうはなりませんでしたよ」

「あ？」

「あなたも彼も、ここで葬り去って…私が理想のヴァリアーにしてみせますよ」

「何だと？」

「彼が幼い頃から仕えていたというのに…その恩を忘れて薄汚い銀色なんぞに…私の理想はこうではないんだ、何の為にザンザスに仕えてやったと思ってるんだ！」

「ふぎけんじゃねえ！」

「っ」

「ザンザスはてめえの玩具じゃねえんだぞ！オツタビオ！」

「黙れ！」

オツタビオが銃の引き金を引き、銃弾が入江に放たれるが、剣で弾き入江も切りかかる。

一体どれほど時間が経ったのか分からないが、入江にとって一秒が

一分に感じられた。

強い相手と一対一で戦うのは初めてだった。

今まではヴェロニカちゃんと考えて、自分がちゃんと倒せるであろう相手を選んで任務を与えていたから。

だがここにはヴェロニカちゃんはいない。

継ることも出来ない。

今、ここには、僕しかないんだ

一人で、こいつを倒さなきゃいけないんだ

倒してヴェロニカちゃんのところに行かないと

スクアーロの踏み込みに間に合わずオツタビオの頬に剣先がめり込むが一重で躲される。

そしてオツタビオの狙撃が入江の肩に当たり、血が飛び散った。

「その程度か、二代目剣帝…」

額に汗が伝う入江は、汗を拭うこともせずオツタビオから視線を外さず剣を振る。

痛い 戦え 痛い 戦え 戦え

「消えろ！スペルビ・スクアーロ！」

オツタビオの声と共に、走りだした。

銃声が二つ聞こえるが、入江はそのまま走りオツタビオの腕目掛けて剣を振るった。

オツタビオの腕が宙に飛び、持っていた銃が草むらに落ちる。

同時に入江の腹部、足に一発ずつ銃弾が入った。

「があああああああああ」

オツタビオの悲鳴をあげたその時、入江は無意識に足を動かし、血が出るのも構わずに左手の剣をオツタビオの首目掛けて突き刺した。

悲鳴は止み、オツタビオは糸が切れたように重力に従って崩れ落ちる。

入江は本部の屋敷に振り向き、歩き出す。

だが数歩歩き出すだけで、直ぐに倒れ込む。

そしてやっとな痛覚が戻ってきたかのように、銃弾が当たった場所が痛みます。

「うう……痛い……」

痛みで口調が入江になるが、この場には誰もおらずそのままゆっくり仰向けになる。

痛みに耐えながらシャツを破り、撃たれた箇所を止血する。

途中、遠くで爆音が聞こえた。

「ヴェロニカちゃん……」

一瞬意識が遠のいたが、なんとか堪えて立ち上がる。すると茂みから足音がし、そこに視線を向ける。

まずい、今ボンゴレの者に見つかれば……

「スクちゃん!？」

その声に一瞬体の力が抜けそうになった。

視界に入ってきたルツスーリアがオツタビオの死体と血まみれのスクアードを見て駆けつける。

「ルツスーリアか……」

「ちよ、何があったのよん!」

「オツタビオがヴァリアーを嵌めやがった……ボスが……クーデターを画策してることになって……ごほっ」

「なっ」

「今九代目と戦ってるハズだあ……向かわねえと……」

「分かったわ……スクちゃんはここで休んでなさい」

「あ”あ?」

「今の貴方が言っても足手まといよん」

ルツスーリアの言葉に詰まり、そのまま木に背中を預け座らされる。

「今、ベルもマーモンもレヴィも向かって来てるわ」

「そうかあ……」

「あたしは先にボスの元へ行くわ、あなたは動けるようになってから来なさい」

「お”う」

ルツスーリアが本部の方へ走っていくのを見て、入江は気が抜けたように息を吐く。

幹部が来てくれれば間に合う、と思っってしまった。  
一度弛緩してしまった緊張感に、意識が遠のく。  
ああ、ダメだ…血を失い過ぎた……  
意識を失う寸前、入江の目には太陽が見えた。

大きい 大きい

橙色の 禍々しい

太陽が

目が覚めると、そこは病室だった。

状況が分からず、ぼーっとしていると扉が開いた。

そこには看護師が入ってきて、目が合うと誰かに連絡を取り出した。

数分後に沢田家光が入ってきた。

綱吉君の父親……

ミルフィオーレに潜伏中、ボンゴレ狩りをしていた時に優先順位が高かった人物だと記憶していた。

「ようやく目が覚めたか…スクアアロ」

「沢田家光…」

「今回のお前たちの騒動は隠蔽されることになった」

本命を切り出す家光に入江は眉を顰める。

ここで、弁解をしたところで画策していた証拠もなければ無実だと言ふ証拠もなかった。

しかも、こちらはオツタビオを殺している。

唯一の証言者を殺しているの、口止めに殺したのではと言われるのが関の山だ。

全ての行動が裏目に出ている今で、無実を証明するのは難しいと判断した。

「ボスはどこだ…」



「ザンザスは眠っている……永らくは目を覚まさないだろう」

沢田家光の言葉に入江は目を見開く。

凍らされて……しまったのか？

ヴェロニカちゃんか？

「どういうことだ……」

「ヴァリアーは表面上存続させるが、事実上凍結だ……」

「おい」

「九代目も重症を負わされた……ヴァリアーが解体されなかっただけ有難く思え」

「聞けよ」

「それと、今後のヴァリアーは九代目の指揮下に置くことになった」

「聞けっつていつてんだろうが！」

入江の言葉を無視する家光に怒鳴った。

「ボスはどこにいる……」

「教えるわけにはいかない」

家光はそれだけ言うと、病室を出ていった。

義手が外されている左腕を右手で掴む。

そんな……ヴェロニカちゃん……

僕は……これからどうすれば……

？生きろ？

入江は拳を強く握りしめた。

「8年……生きて……みせるよ……」

この時の僕は涙を堪える為にただただ歯を食いしばるしかできなかった。

## Veronicaの覚醒

寒い

ここはどこだ

冷たい……

いつからここにいるんだろう

寂しい

いつまでここにいなければいけないんだろう

この冷たさを私はどこかで感じたような気がする…

ずっと昔に——…

「何してやがる」

「おはよ…夜だけど……」

任務から帰ってきたヴェロニカは椅子の上で眠っていたザンザスの手を触っていた。

手の感触でザンザスが起きる。

「任務終わったよ」

「そうか」

「報告書置いといた」

ヴェロニカはそれだけ言うと、またザンザスの手を触り始める。

「おい触んな」

「パパってさ普段は体温冷たいよね」

「…」

「炎とか手の平から出すから、てつきり暖かいと思ってた」

一向に離す気がないヴェロニカにザンザスは諦めて再び眠る体勢に入る。

「何でこんなに冷たいんだろう…」

「知るか」

「私はこんなに冷たくないのに」

何も言わないザンザスにヴェロニカはお構いなしに話を続ける。

「過去を変える前、パパが死ぬ直前に私の頭を撫でた話したでしょ？」

「あのときね、凄く…パパの手冷たかったの……」

「それが怖くて…寂しくて…悲しかった…」

「当時の私はまだ小さかったから、どうしてこんなに心臓が苦しいのか分かんなかったけどね」

「だからパパの手が冷たいと怖くて…」

「でも…今はちゃんと生きてるんだなって…感じれるから……とても安心するわ」

「ねえパパ、今暖かいでしょ」

寒い 冷たい 苦しい

……は……

暗くて 足場もなくて

手を伸ばしても何も分からないの

さつきまであった体温がどこにもないの……

怖い 恐い……

ここは寒い 冷たい 苦しい

助けて……

………ピキ………

助けて……

………パキ………ピシッ………

? ヴエロニカ?

一瞬だけ手の平に温もりが宿ったような気がした

パライイイイン

「…げほっ……」

ドサリと自身の身体が地面に転がり、手に伝わる感触は固い床だった。

「はっ……はぁ……ふっ……」

次に息苦しさと、胸と腕に鋭い痛みが走る。

「うぐっ……」

ガシヤン、と氷が碎ける音と共に、痛みでまともに動かない体を無理やり動かせ床を這いずる。

口から滑った液体が零れ落ちるのも気にせず、壁際まで這いずっていく。

そして体を起こし壁に背中を預け、頭の中を整理しようと目を閉じる。

そうだ…今、パパの体について…

オツタビオが…それで九代目と…

…凍らされたんだ…

「けほっ……げほっ……ふっ……」

口から血を吐き、痛む箇所を探る。

くそ、体内で炎を回した時に、中を少し焼いてしまったのか…

どうしてあの時、あんなに怒りが溢れていたんだろう…

自分でも分からないくらい怒ってて、何に怒っていたかも今じゃ思い出せない

ただあれは私だけの怒りじゃなかった

あれは…パパの怒りだ

自分の感情が制御出来なくて、ただ悲しくて、虚しくて、辛くて……  
全てが怒りとなっていくのが止められなかった  
目の前の全てを焼き払うことしか頭の中になかった  
早くこの苦しい感情から逃げたくて、ただただ解放されたくて怒っ  
ていた

パパの原点を見たような気がした

ああ、あれは苦しい

凍らされている間も、寒くて冷たくて……寂しかった

パパはこんな苦しかったの？

8年という月日を……ずっとあんな冷たい場所で……眠らされてたの  
？

ヴェロニカは自身の手を見つめる。

パパの手の温度は……ここが原点だ

心臓が冷えていく感覚が

臓腑が筋肉が神経が凍らされていくあの感覚が

体温が下がっていく感覚が

とても怖かった

「パパ………」

少し経つと痛みが若干引いていき、力の入らなかった足にやっと感  
覚が戻ってきた。

そりや凍らされて仮死状態にされてたんだ……

筋肉が戻るのは時間がかかりそうだ

ていうかここどこだ

どっかの地下牢のようなところだろうか

窓もないし、光もないから全く見えない

ヴェロニカは怪我をしていない方の手で炎を灯す。

するとそこは何もない、ただの広い部屋だった。

周りを見ると、奥の方に扉のようなものを見つけた。

未だ歩けるほど回復してないし、もう少し休むか

っ……かほんと原作通りになっちゃったな……

パパが16歳の頃にクーデターを起こした…ってあったし  
待て、私もしかして8年眠ってたっぽい？

え、でも誰もこの氷溶かしてなくね？

死ぬ気の炎を冷却した氷は、死ぬ気の炎でしか溶けないハズだ  
なら誰かが溶かしたハズだ…なのに目覚めた時は一人だった

一体誰がザンザスを起こしたんだ？

元の世界に戻ったらパパに聞いてみよう

ていうか中身が私である以上、同じ可能性は高いわけじゃない

今回凍らされて閉じ込められた場所が原作でもここだったという  
わけでもないし

にしてもどうしようかな

これ起きたのバレたら九代目来るよな

原作じゃ、そのままゴーストモスカんとこ行って何かして、ボンゴレ  
リング争奪戦って流れだったけど。

ん？九代目を襲撃してゴーストモスカの中に入れるのはいつだろう。

いやいや何考えてんだ、私は別に九代目に仕返ししようなんて思っ  
てないし

少し根に持ってるけど…つかこれ冤罪じゃん！

オツタビオ許すまじ…ここ出たらずぐ殺す

入江無事かな…

ああああ、あの後一体ヴァリアーどうなってんだろ

原作とは違って、ヴァリアーはクーデターを画策していない

オツタビオに嵌められた…けれど…それを知っているのはスク  
アーロのみ…

いや確かルツスーリアにも連絡した時教えてたかな？

じゃあ仮に幹部に伝わっていると、何故私が未だ氷に閉じ込め  
られていたのか

あ、アカンこれ入江が口止めで殺されてそうな気がするけど…パパ  
の直感が生きてるって言ってくれてる…

ってことはオツタビオ死んでるのかな？

オツタビオ殺したから無実の証明が難しくなって、そのままクーデター企ててたことになっちゃった感じかな…

うっそーん、じゃあこれからどうすんのさ

沢田綱吉んとこ殺しに行く？

ていうか行かないとボンゴレリング諸々どうすんだろうか…

このリング争奪戦がないと、あいつ零地点突破を会得出来ずに未来編行くってことでしょ？

んでもってそれなかったら未来のG O H S Tで詰むんじゃない？

私の体内コントロールは、G O H S Tの吸収から逃れる方法であつて倒す方法じゃないし

これは…沢田綱吉襲撃せねば未来で詰むのか

必要的かませ犬じゃん…

正直これ今の私が行けば、絶対沢田綱吉に勝てるわ

あいつが零地点突破使つても、こちとら九代目の対決で対策が有効だと言うことが判明したわけですから

うわあ…行きたくない

でも行かないと沢田綱吉は強くなんないし、いつそ白蘭を今の時代で殺そうかなと思うが居場所分かんないし

これは入江と相談事項だな

少し考え事してたら、痛み引いてきたな…パパの体つて本当に丈夫だよ

ヴェロニカは凝り固まっている筋肉を少し動かし、手のひらを開いては閉じて感覚を確認する。

氷の残骸へ足を向け、氷を憤怒の炎で溶かして銃と剣を回収する。そして、奥にある扉を開こうとするが鍵がかかっているビクともしなかった。

扉の隙間を見ると、鎖で封鎖されているのが分かった。炎を細く糸状にして、隙間から外に出し鎖を焼き切る。

ジャラン、と鎖が床に落ちる音と共にギイイと扉が錆びれた音を出しながら開いていく。

出たところは閉じ込められていた部屋よりは明かりがあり、段々と

目が慣れて行った。

長い廊下を進むと、階段がありそこを登ると大きな扉がありここも外から鎖と鍵がかけられていた。

本当は憤怒の炎でカッ消したいが、バレても面倒なので音をなるべく出さぬようゆっくりと鍵を糸状の炎で溶かしていく。

ガシャン、と外の方で鍵が落ちる音と鎖が解かれた音を確認して扉をゆっくり開いた。

まず最初に光だった。

蛍光灯の光に当てられ、手で目を覆った。

直ぐに明かりに慣れると、周りを見回す。

知らない場所：でも天井や壁、窓の作りがボンゴレ本部のものに似てる

窓の外が全部森だ：ボンゴレ本部にもヴァリアー本部にも直ぐ近くに森があるから判断出来ないな：

ここをボンゴレ本部と仮定して動くか

ヴェロニカは音を出さずに出口を探していた。

すると、声が聞こえてきて曲がり角の柱に隠れる。

「——で、——が…あはは、それで——」

携帯を片手に持った男が過ぎ去り、ヴェロニカはその男が出て行った扉へ忍び寄る。

そして車のエンジン音が遠くなったのを確認し、扉を開けると辺り一面の森があった。

周囲にはご丁寧に幻術が張り巡らされていて、普通ならば誰にもこの場所に建物があるこ

とすら分からないだろう。

術者にバレないよう幻術を解かずに、敷地を出るのは苦労したが、なんとか脱出出来た。

「どこだ…ここは…」

直ぐ手前の木に登り、上から辺りを見回すと、ボンゴレ本部が直ぐ隣にあった。

あ、ボンゴレ本部の別棟か



ああ、いつも本部の玄関から見える建物ってこのことだったんだ  
…なるほど

ヴェロニカはボンゴレ本部の位置が分かったので、ヴァリアー本部  
へ向かうことにした。

途中誰にも見つからないように細心の注意を払い、人のいない道を  
歩く。

流石に起きたばかりで走ることは出来ず、ヴァリアー本部に着くの  
に数時間かかった。

はあ：起きたばかりにあの距離歩くの結構疲れるな…

肺の近くを火傷している状態で歩くのは、思っていた以上にきつ  
かったようだ。

ヴェロニカは銃を地面に向け炎を噴射し、炎の推進力でザンザスの  
執務室があるであろう場所の窓から侵入する。

すると中にはピンクの髪に、仮面を被る女性が二人佇んでいた。

ヴェロニカは一瞬構えるも、彼女たちが何者であるか理解し銃を収  
める。

「お待ちしておりました、ザンザス様」

「チエルベツロか…」

「な、我々のことをどこで」

「要件を言え」

「……………我々はあなた様にボンゴレリングの存在についてお話に参り  
ました」

「話せ」

チエルベツロがボンゴレリングの存在について長々と話している  
間、ヴェロニカは別のことを考えていた。

まず、このチエルベツロ達の正体である。

ハッキリ言っていていつら九代目直属とか言ってるけど、沢田綱吉が  
10代目だった時代でもこいつらの存在を知らなかった。

ってことは九代目から彼女たちの正体を教えてもらっていないと  
いうことだ。

しかもだ、未来編では白蘭の手下になってたし、ぶっちゃけ九代目

の直属の者達とか怪しすぎる…つか不気味。

だけれど、こいつらは原作でも正体は謎のままだったし、多分原作の矛盾を埋める役割でもしてるのかなーとか昔は思ってた。

今もそうだ、私が脱走…つうか起きたことは誰も知らないハズなのにこいつら知っていたかのようにそこにいた。

九代目も知らないのに、だ。

多分…こいつらは原作の流れに沿って、行動しているだけ。

分岐点関係なく、そうなるようにするための存在…チエルベツロ。んでもって今行動している目的は、私にボンゴレリング争奪戦をさせるためだろうな。

ここでこいつら無視してもいいがそれを判断するには少し情報と時間が足りない。

「——と、いうわけです。」

「リングは選ばれし者へ継がれることは必然、そこで10代目候補は5人」

「——に、ザンザス様…そして沢田綱吉」

「沢田綱吉？」

「沢田家光のご子息です。現在日本の並盛に住んでいます」

ふむふむ、原作のパパもこいつらにいい様に利用されたんだな…

にしても候補って沢田綱吉とザンザス以外に3人いたのか

うーん、パパのことだから先にそいつらから暗殺しそうだけど

「話は終わりだ、消えろ」

「ザンザス様、それではっ」

「消えろ、と言った…三度目はねえ」

「…ではまた後日、伺いに来ます」

それだけ言うと、チエルベツロは去っていく。

チエルベツロが去っていった後の部屋は以前と変わらなかった。

机の位置も、棚も、ソファも、全てそのままだった。

書類はザンザスが凍らされる前の日付のまままで置かれていた。

ヴェロニカは執務室の扉を開き、廊下を歩く。

廊下を歩き、変わらない天井を見ていると耳に声が聞こえてきた。

「う” おおい——イカサマ——ろお”」

「——弱いだけ——あ、ほら——カード」

懐かしい声に足の速度が速くなる。

カツカツと足音を隠さずに、声のする方へと進み、その部屋の扉を思い切り開いた。

「あ？」

懐かしい声と共に、髪を伸ばしたスクアアロが視界に入った。

隣には背が伸びたベルと、変わらぬ姿のマーモンがいた。

ひと時の静寂の末、動いたのはベルだった。

「……………ボス？」

「…」

椅子から立ち上がったベルは勢いよく抱き着いてきた。

本来のザンザスよりも若干刺々しきのないヴェロニカだからこそ  
の行動だろうか。

パパならここで剥がすかぶつ飛ばすかするんだろうなあ…

だが残念今の私にそんなことする体力はない

「離れるベル」

「いつ起きたの？ボス」

「ついさっき」

「血出てるけど、どっか怪我してんの？」

「問題ない、いいから離れろ」

「久しぶりボス……………僕、皆呼んでくるね……………」

マーモンは驚きながらも、冷静に他の者達を呼びに行く。

ベルは仕方なくといった風に離れ、ヴェロニカはスクアアロを見る。  
スクアアロは目を見開いて固まっている。

「おいカス鮫」

ヴェロニカの声に我に返ったスクアアロは混乱しながらも立ち上がる。  
がる。

「ヴェ…ヴェロ——」

パリン

スクアーロの言葉が言い終える前に、ヴェロニカは無意識に近くに  
あつた酒瓶でスクアーロの頭を殴りつけた。

いきなりの暴拳に油断していたスクアーロはそのまま気絶する。

ベルがうつわー、とか言っているのを聞きながらヴェロニカは内心  
汗ばむ。

あつぶねー、こいつ今驚きすぎて入江出てきてたわ

私の名前言おうとしたもん

「おいベル」

「何、ボス」

「どれくらい経った…」

「8年だよ……ボス……今9月9日……」

「そうか」

おおー、やっぱり8年眠ってたのか

寒いとしか分かんなかったからなあ…

ベルの背が伸びてる…8年で長い

にしても冷凍期間までびったりとは…何かの修正力が働いてる気  
がする

少しすると、忙しい足音がこちらへ向かって来て、勢いよく扉が開  
かれた。

「ああくん、ボスうううううう！待ってたわよ〜！」

「…」

「ボス！お目覚めでなによりです…このレヴィ・ア・タン…次こそは…  
次こそはボスをお守り致します！」

うるさい奴等がきた。

っていうかこいつらオツタビオが裏切ったこと知ってたのか？

「お前ら今回の詳細知ってんのか？」

「ちゃんとスクちゃんから聞いたわよ、オツタビオの仕業だったって  
…」

「そのカスはどこだ」

「スクちゃんが8年前に殺したわ」

「そうか」

これは意外だった

まさか入江がオツタビオを殺すとは

いや対峙して止む無く殺したのか…

「他には」

「えつと…ボスと九代目がやり合った場所がなくなっていたり…九代目が重症だったり…？」

「なくなっていた？」

「そうよくあたしが一番最初にそこに着いたけど、丸く円球に削られたみたいにその場所だけ無くなってたわ」

「…ジジイは」

「良くは知らないけど、かなり重症だったみたいだよ…」

「どういうことだ？」

腕と腹部に氷を刺したが、致命傷になるものじゃあなかったはずだ  
最後の…炎の暴走か？

自分でもまともに覚えていない…

「これからどうすんの？ボス」

「……………九代目を潰す…」

「シシッ、面白そうじゃん」

「誰にも俺が起きたことを言うんじゃねえぞ」

「…了解…」

それだけ言うと、気絶しているスクアアローを放置しヴェロニカは自  
室に戻る。

まずは傷を治して体力を戻さない…

ベッドに横になり目を閉じようとした時、扉が開いた。

スクアアローが無表情で入ってきて、扉の鍵を閉めるとベッドの方ま  
で寄ってくる。

未だ傷と疲労でだるい体を、壁に凭れながら上体を起こした。

「……………ボ…ス……………」

「……………よく生き残ったな…入江」

スクアアローの仮面がポロポロと剥がれ、目からは止めどなく涙が溢  
れていた。

「ヴェロニカ……ちゃん……」

多分、本当の名前を呼ばれるのも8年ぶりだろう

ずっと長い間仮面を被り続けていた入江は称賛に値する

「良かった……君がこのまま起きないのではと……怖かったんだ……」

鼻を吸る姿はみつともなく、いつもならば殴っていただろう。

「待たせてすまない……あの時の状況を聞いてもいいか？」

「え、ああ……待って……」

涙と鼻水をティッシュで拭く様子が、本当の姿と重なりそうだった。

ヴェロニカは思わず苦笑する。

ようやく落ち着いた入江は、当時の状況を教えてくれた。

やはりオツタビオはスクアーロが殺してしまい、クーデターを画策していたという虚実に拍車がかかってしまったとのこと。

何故幹部含め、あの日の場にヴァリアー隊員がいなかったのだと聞くと、オツタビオが人員を動かしていたようだ。

そして入江曰く、オツタビオはスクアーロを憎んでいた、と。

理想からかけ離れたザンザスが許せずスクアーロと共に葬り去りたかったのだと。

呆れた話だ……やはり最初のあの対面で殺しておけばよかった。

一応、私の九代目との対決の詳細を教えはしたが、最後はあまり記憶になかったので言えることはなかった。

その後、ヴァリアーは実質凍結……表面的には存続していたらしい。それからは、九代目指揮下で任務を遂行していたとのこと。

8年という月日は入江にも大きかったらしく、すっかりヴァリアー幹部の一人で、ボスに次ぐNo2という地位を確立させていた。

生き残ることだけを考えて生きていたら強くなったとのこと。

さきほど号泣していた彼を見て、なんて遅いヘタレになったのだろうかと感傷深かった。

ヴェロニカは現状報告を聞くと、これからのことを話し始める。

「まず……さきほどチエルベツロに会った」

「チエルベツロだつて!？」

入江には印象深く残っているだろう…なんせミルフィオーレにいた時彼女たちが常に近くにいたのだから。

「ボンゴレリングの存在をわざわざ教えてきて、争奪戦に誘導しているみたいだったな」

「君は今回…ボンゴレリング争奪戦を起こすつもりなのかい？」

「考えれば、分かると思うが…それなかったら沢田綱吉が零地点突破を覚えないぞ…」

「あ」

「10年後にボンゴレが負ける可能性が高くなる…起こさないといけないだろう」

「で、でも九代目にバレルんじゃ…」

「まず九代目を口封じで襲う」

「え!?それじゃ本当にクーデターになっちゃうじゃないか!」

「もうクーデターになっている…史実として訂正は出来ないところまで来てしまったのだからやるしかない」

「いいのかい?今度は君の意思で…クーデターを起こすということになるよ…」

「それしかない…それでボンゴレ争奪戦なんだけど…その前に雲の守護者を見つけないと」

「前の世界では誰だったんだい？」

「ゴーラモスカよ…中に九代目を拘束して放り込んだ」

「は!？」

「それを沢田綱吉が破壊して、九代目の仇を名目に父が沢田綱吉を殺すことの正当性を得ようとした」

「なんていうか…下衆いね…ザンザス」

「言うな、私も思った…今回のリング争奪戦もそうしようかと思っただけだ…」

「あ、九代目襲撃するの?」

「いや…今回、九代目が8年前の対決で重症を負ったみたいだからゴーラモスカに入れちゃうと本気で死んじゃう気がする…直感的に」

「いつそのこと殺しちやええば…いや後々面倒になるかもしれない…」  
「そう、だからほんと今困ってる…それにだ…ぶっちゃけボンゴレリング嵌めたら拒絶されて痛い目見るの私だし」

「あ、そうか血が繋がってないから」

「…だからボンゴレリング嵌めたくない…なら周りになんて言えばいいか…」

「いつその事、九代目と沢田綱吉どっちも殺して俺がドン・ボンゴレになるっていう路線で行けばいいんじゃないかな？」

「……待て、うん……それって沢田綱吉には負けなきゃいけないんだろ？…今の沢田綱吉に勝てる自信しかないんだけどこれわざと負けなきゃいけないのかな…」

「え」

「8年前、九代目と戦って体内に炎を循環させて戦うっていう戦法は有効だと証明されたわけで…二度も同じミスする気はないし……わざと負けるのはプライドが許さない」

「いやそこはプライド捨てちやおうよ」

「ふざけるな、私はザンザスの娘だぞ」

「待って、その顔で言われても……」

「ああもう…いつそ本当にヴァリアーを完全に独立組織にしてやろうか」

「あ、それいいね」

「え」

「それを名目にしさえすれば、今回のクーデターとか全て上手く辻褄合わせ出来るんじゃないかい？」

「……ボンゴレ欲しかったけど、ボンゴレリング継承出来ないからヴァリアーだけでも貰うという？」

「ボンゴレには興冷めたから俺だけの組織を作るとか何とか言っちゃえばいいんじゃないかな」

「あー……まあそれならザンザスっぽいな…じゃあそのスタンスで行くか」

「なんか壮大な目的になったけど…上手く行けるんじゃない？」



「じゃあまずはゴーラモスカの設計図奪いに行くか」

「え、何で」

「雲の守護者いないだろ」

「いやそつちじゃなくて」

「？」

「設計図なんて取りに行かずとも、僕がいるじゃないか」

「……………え、設計覚えてるの？あれ確か作ったのスパナでしょ」

「スパナから設計図は何度も見せてもらったし、元の世界じゃスパナが第三世代のモスカも開発しようとして、僕もそれに協力してたから」

「マジか、なら今から作らせて間に合うか？」

「勿論、無人モスカ作れるけどどうしようか」

「いや、九代目入れるから……………ああ、でも九代目の体に優しいゴーラモスカ作ってくれ」

「言ってることめちやくちやだけど……………まあ善処するよ……………研究者としての腕が鳴るね」

「お前今剣士でしょ」

「それ言わないでくれ」

3日後、体力と傷ともに回復させたヴェロニカは幹部を集めた。

「一か月後……………九代目を襲撃する」

ヴェロニカのボンゴレリング争奪戦への道が開かれた。

## Veronicaの強襲

中身が入江のスクアアローが隠し部屋の研究室に籠ること一週間が経った。

幹部の者にはモスカという兵器の機密情報を奪う長期任務、ボンゴレの方には負傷して寝込んでいると言って紛らわせていた。

たまに執務室から出てきて、太陽だけ浴びるとまた中に籠っていく彼をヴェロニカは見守っている。

久々に研究だけに集中出来るなんて、と本人は目の下に隈を作りながら喜んでいた。

見た目がスクアアローなだけあって、研究員の作業着はとても似合っていない。

ヴェロニカは今もまだボンゴレの者達を欺いている最中なので、下手に部下を動かさず執務室で過ごしている。

九代目奇襲作戦を幹部に伝えた翌日、どこからともなくチエルベツロが現れて、ボンゴレリングの継承者云々を伝えに来ていた。

取り合えず、ボンゴレリングを掛けて沢田綱吉と殺し合いする方向で進めているので、チエルベツロ達も何も言わずについてきている。

幹部の者にも一応チエルベツロの存在は説明し、彼女たちには争奪戦が始まる時までは存在を控えてもらう。

近くにいられても何の得にもならないし

確か、元の世界で過去に飛ばされたときに黒曜編からヴァリアー編まで大体一か月くらい間が空いてたから、丁度今から一週間前に六道骸と対峙しているはずだ

ならば少しだけ早めに行くか？長くここにいるのもリスクが高いし

私が目覚めたことを九代目に悟られる前に、無力化しないといけな

いや別に九代目を殺したいわけじゃないけれど…

ただ一応凍らされた恨みというか…少しだけ仕返し程度でダメー  
ジ与えられれば文句はない

にしてもこれ確か争奪戦で、雨の守護者対決の時スクアールが鯨に喰われるハズだけど…入江に言つといた方がいいのかな

晴、雷、嵐、雨、霧、雲、大空の順で対決があつた気が…今の入江がスクアールじゃないから実力にどれくらい誤差が出てるのか分からないんだよね

当の本人は研究室に引き籠つてるし、邪魔するのも気が引ける…あー取り合えず早く入江がゴーラムス力を完成させなきゃ何も始まらない

ヴェロニカはこの数週間を何もせずに過ごすつもりはなかった。空いてる時間は殆ど誰も使わない訓練所に籠っている。

8年前からここは使用禁止となっていたようで、誰も入らなかったようだ。

監視カメラも音声マイクも全て切ると、昔のようにそこで修行をしていた。

修行とかザンザスらしくないので、幹部の者には言っていない。というより幹部は幹部でボンゴレから渡される任務で忙しい。

ヴェロニカは両手で剣を振り回し、乱雑に炎を薄く張っていく。部屋全体を覆う糸状の炎に、大量の炎を通しだすと一斉に爆発した。

腕が訛るといけないので、定期的に技の精度を確かめながら修行していった。

そして経つこと2週間…

ヴェロニカが目覚めて3週間目に入ったところで、目の下に大量の隈を携えた入江が研究所から這いずつてきた。

「ヴェロニカちゃん…出来たよお」

入江は、本来数名で製作するモノを一人でやっていたので不眠不休で作っていた。

「お疲れ、明日九代目を奇襲するからそれまで眠ってていいぞ」「分かった……」

入江は気絶するように眠り出す。

そして翌日、ヴァリアー隊員にはザンザスが復活したことを伝え

た。

伝えてた同時刻、スクアアロ、マーモンだけでボンゴレへの奇襲作戦、ハーフリング強奪、沢田綱吉以外のボス候補の暗殺を実行した。数刻経つと、執務室にスクアアロとマーモンが入ってきて抱えていた白い布を巻かれた長物を地面に落とした。

「う” おおい、ボスさんよお”：リング搔つ攫つて来たぜえ”」

「ボス：九代目を連れてきたよ」

ヴェロニカは布を剥いで、九代日本人であることを確認し、入江の開発したゴラモスカの中に放り込んだ。

既にボンゴレには偽物の九代目を置いており、リングがなくなっていることに気付いた沢田家光はザンザスが起きたことを知るだろう。

ザンザスは九代目から奪い取ったハーフボンゴレリングを手にし、幹部の者達に渡した。

そして先日、ボンゴレリングをバジルが所持しているという情報があったので一応偽物だとは分かっているが、ルツスーリアにはバジルの襲撃してもらいにいく。

それからリングが偽物だと分かり、日本へ行くことになった。

幹部と小部隊の者達はここから全て別行動となっている。

ヴェロニカは九代目の持っているジェット機を使い、幹部含め6人と一機で日本へ飛び立った。

数時間後、日本へ着くとレヴィがマーモンと共にハーフボンゴレリングを探しに向かった。

数十分後にレヴィから連絡が来て、沢田綱吉一行が集まっている場所へ向かう。

ここまでは原作通りだと思いつながら幹部の者達と行動していた。

唯一違いがあるとしたら、バジルの襲い沢田綱吉と対峙したのはルツスーリアであることだ。

沢田綱吉は数日前襲撃してきたルツスーリアを見て困惑している。ベルが沢田綱吉達を殺そうとした時、沢田家光達が乱入してきた。

「ボンゴレ後継者候補、沢田綱吉」

家光はザンザスに視線を向ける。

「同じく、後継者候補ザンザス」

ヴェロニカはスクアアロの方を見やると、彼は冷静に沢田綱吉を見下ろしていた。

微塵も表情を変えないスクアアロに8年という月日を感じさせられる。

そう考え事をしてしていると、家光の宣言は終盤へ差し掛かっていた。

「ツナファミリー対ヴァリアーの決闘だ！」

家光が高々と宣言し終えた直後、チエルベツロが乱入する。

そして九代目直属のチエルベツロ機関だ何やらと喋り始めた。

沢田家光も口を出すのが、チエルベツロは論破し、そのままジャッジを務めることとなった。

「それでは明晩11時、お待ちしております」

それだけ言うと、チエルベツロは森の中に消えて行き、ヴェロニカはボンゴレの所有しているホテルに戻るため、その場を去った。

翌日の夜、ザンザス以外全員が会場に向かうが、途中でスクアアロが帰ってきた。

「晴の決戦だったから戻ってきた……君は何で来なかったんだい？」

ヴェロニカは椅子に座りながら入江の問いに答える。

「負け試合を見に行くつもりはない……それに私にとってボンゴレリング争奪戦は二度目だ……勝敗は知っている」

「え、ああ……そっか……ん？じゃあ僕の勝負の行方も知っているのかい？」

「スクアアロなら知っているが、入江が憑依している時点で結果は変わる」

「そりやそうだけど、スクアアロはどうなったんだい」

「山本に負けて鯨に喰われた」

「鯨に？」

「山本を最初から全力で殺しに行かないからだ……」

「……でも中学校で何で鯨が？」

「ああ……雨の守護者対決では鯨が用意されてた」

「うわあ、気を付けよ」

「…雨と雲以外行く気ないから」

「え、僕の来るの？」

「8年の間お前がどれだけ強くなったのか見たい」

「いや…まあ…8年前よりは強くなってる自信はあるけど…」

入江は恥ずかしがりながら苦笑する。

「にしても綱吉君、若かったなあ」

「まあ約40年も変わればなあ…」

「それもそうか……」

「そういえば元の世界へ帰る糸口は見つかったか？」

「…時間がある時に調べはしたけど…成果は見られなかったよ」

「そうか…」

「元の世界でも時間は過ぎてるのかなあ…そしたら僕死んでそうだよ…」

「ヴァリアーが心配だな…それと父が」

「暴走してそうだよね、ザンザス親バカだし」

「……妙な気分だ…今はザンザスなのに……父を思うとこの体は一体誰なのか…そう思ってしまう」

「まあ同一人物だけど、君の父親ではないから…違和感あるよね」

「このまま私がザンザスになっている限り、この世界に私は存在することはないし、ザンザスが父親になることもないだろう」

「ああ、そうか……そうだよね…」

「父の過去を遡って体験しているような感覚だな」

「僕としては、ヴァリアーのイメージが少し変わったかなあ」

「イメージ？」

「直ぐに暴力で訴えかける人ばかりだと思っていたから…割と話せば分かる人もいるんだとか…上下関係とかとつても厳しいなあとか」

「ああ、ルツスーリアに至ってはオカマと死体愛好家な所を除けば普通の常識人だからなあ」

「その二つが果てしなく残念だけどね」

「マーモンは常識人じゃない？」

「ああ、まあ…あの守銭奴なところは呆れるけど」

入江と話していると、そろそろルツスーリアが負けて帰ってくる頃だと思ひ会話を切り上げる。

その数分後、ボロボロのルツスーリアを担ぎ上げるゴーラモスカと他のメンバーが帰ってきた。

「つーかスクアアローロ何で帰ったんだよ」

「用事あったんだよ…明日は行くぞお」

ベルの問いにスクアアローロが答える。

そして他の幹部たちは自室に戻っていく。

ルツスーリアはゴーラモスカに運ばれ、治療室へ向かっていった。

ヴェロニカも自室に戻ると、ふと思ひ出した。

あ、家光…：イタリアに行かせなきや

明日雷の対決行つて、それとなくイタリアに帰らせねば

明日の予定を考えながらその日は眠りについた。

翌日、ただ夜になるのを待つだけでは暇で、本を読んでいるとベルが部屋に入ってくる。

「ねえボス、ポーカーしようぜ」

ベルはカードを分けて、ヴェロニカに差し出す。

丁度暇だったので、気まぐれにそのカードを取りポーカーを始める。

「今度は負けねーから」

数分後…

「フルハウス」

「フォアカード」

数十分後…

「フォアカード」

「ストレートフラッシュ」

一時間後…

「ストレートフラッシュ！」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

ヴェロニカは衰れに机に突っ伏すベルを見やる。

私も、ザンザスの幸運には少し引いてる。

何引いても揃うんだもん…

「何なのマジで…」

ベルが打ちひしがれている時、スクアアロが入ってきた。

「う” おおい、ボス…つてカードゲームしてんのか？」

「ツチ、何の用だカス鯨」

「今夜の対決行くのかあ？」

「あ？ボスが行くわけねーじゃん」

「少し家光に用があるからな…最後の方で顔は出す」

「は？マジ？今日嵐の対決してくんねーかな、シシツ」

「了解、っーかカードゲーム混ぜろよ、夜まで暇なんだよ」

スクアアロもカードゲームに入ってくる。

それからまた数十分やり始めるが、どうやってもヴェロニカが一人勝ちする結果となった。

「待て、ボス相手にポーカーはダメだあ”…大富豪しようぜえ”」

「大富豪？何それ」

「ルール教えてやるよお”」

大富豪…懐かしい名前出すなあ…

スクアアロがルールを教えるのを見ながら前世でやった記憶を掘り起こしていた。

そして始まる大富豪…人数は若干足りない者の、出だしは順調に始まっていく。

ヴェロニカの手札にはAと2、Kエース デュース キングが偏って何枚も入っており、いかにも大富豪のカードのみだった。

スクアアロの手札が一向に減らず、貧民はスクアアロだと思っていた。

すると、スクアアロの番でスクアアロは口角を上げ、手札から四枚取り出した。

「う” おおおい！革命だあ！”」

9ナインを四枚出し、階級を逆転させた。

ベルもこれには驚き、ポーカーフェイスを突き通すも手札を掴む指



が若干ピクリと動く。

そしてヴェロニカは自身の手札を見る。

「……………」

「う”おおおい、ボス！手も足も出ねえかあ” ああああ！」

ヴェロニカを煽りまくるスクアアロ。

いやはや入江よ…スクアアロに成りきるの上手くなつたじゃないか……

そんなことを考えているヴェロニカは無言でスクアアロを見やり、また手札を見る。

そして心の中で合掌した。

ヴェロニカは手札を全て投げ、呟く。

「革命」

「二え」

そこにはA<sup>エース</sup>が四枚。

これにはベルもスクアアロも素っ頓狂な声を出した。

そしてヴェロニカの手にはカードが残っていなかった。

自身が勝利したついでにスクアアロをどん底に突き落としたのだ。

ベルがにんまり笑い、スクアアロは手札を見て絶望した顔をしている。

決着は数分で着いた。

「シシツ、大貧民隊長」

「るせえぞお」

一通り暇を潰した後、食事を取るとレヴィは先に会場へ向かっていった。

二時間後、マーモンがレインウェアを配りヴェロニカ以外はホテルを出た。

ヴェロニカも一緒について行こうかと思つたが、それだとレヴィが調子づいてランボを真っ先に殺しそうなので、後々行くことにする。

ヴェロニカが雨が少し弱くなっていた頃にホテルを出て、並盛に向かうと丁度沢田綱吉がランボを助ける場面だった。

ヴェロニカは挨拶代わりに沢田綱吉に向かって弱めの一発を放つ。

それで、ヴァリアーの者達もヴェロニカの存在に気付く。  
飛ばされた沢田綱吉は、よろめきながらも立ち上がりザンザスを見据えた。

「何だその目は…まさかお前、本気で俺を倒して後継者にでもなれると思ってるのか？」

多分こんなこと言ってたような気がする。

ヴェロニカの言葉に沢田綱吉が返す。

「そんなこと思ってないよ！俺はただこの戦いで仲間をだれ一人失いたくないんだ！」

甘ちゃんめ…：そんな思考ばっかしてるからパパに嫌われんのよ

私だつて沢田綱吉の性格は嫌いじゃないけど、その高すぎる理想は嫌いだ…

まあ主人公だからこそその台詞でもあるんだろうけどね

ヴェロニカが銃口を向けると、チエルベツロが入ってきた。

「お待ちくださいザンザス様！ここで手を上げればリング争奪戦の意味が…手をお収め下さい！」

そのチエルベツロに向かって容赦なく発砲する。

あ、加減間違えた…

体を貫く威力で放ってしまい、チエルベツロは心臓に当たり即死する。

「俺はキレちゃいねえ…むしろ楽しくなってきたぞ」

歪な笑みを見せると、幹部たちが反応する。

ボスの笑みは久しぶりだとか、8年ぶりだとか…

ヴェロニカはチエルベツロに進めろと命令する。

「は、勝負の結果をお伝えします。今回の守護者の対決は沢田氏の妨害によりレヴィ・ア・タンの勝利とし、雷のリング…並びに大空のリングはヴァリアー側のものとなります」

「え…」

「アホ牛だけではなく、十代目のリングまでっ」

「話が違う！失格ではないはずだ！沢田殿はフィールド内に入っていないかった！」

バジルの批判を家光が止め、チエルベツロが沢田綱吉から大空のリングを没収する。

そしてザンザスの方へ行き、大空のリングを譲渡する。

ヴェロニカはハーフボンゴレリングを合わせて、指に嵌める。

「他のリングなどどうでもいい…これで俺の命令でボンゴレの名のもとお前たちを殺すことも出来る」

「そ、そんなっ」

「だがあの老いぼれが一度は後継者に選んだお前をただ消したのではつまらなくなつた…お前を葬るのはリング争奪戦で本当の絶望を味わわせてからだ…あの老いぼれのような」

その言葉に反応したのはリボンと家光だった。

「ザンザス貴様、九代目に何をした！」

「それを調べるのがお前の仕事だろ、門外顧問」

前に出そうになる家光をリボンが止める。

「喜べ偽物共、お前らにはチャンスをやったんだ。残りのバトルも全て行え…方が一お前らが勝ち越すようなことがあればボンゴレリングもボスの地位も全てくれてやる…だが負けたらお前の大切なものを全て消す」

ヴェロニカはチエルベツロに進めろと命令する。

「では明晩のリング争奪戦のカードを発表します…明日の対戦は嵐の守護者の対決です」

その言葉にベルがにんまり笑い、レヴィがヴェロニカの元に来る。

「ボス、雷のリングだ…納めてくれ」

「いらねえ…レヴィ、次に醜態を晒してみろ」

「死にます…」

この頃のパパって凄く性格悪かったから、こんくらい冷酷じゃないかな、うん

何かスクアアロがこつち見てるけど…あれ？引いてるの？

この後ヴァリアーは並盛中を去っていく。

ホテルに着くと各自自室に戻っていく中スクアアロだけこちらに向かつて来た。

部屋に入ると、スクアーロは水をグラスに入れて差し出してくる。

「……あの言葉本当かい」

「なに」

「負ければ全員殺す……って……」

「殺す気はない……が沢田綱吉次第だ」

「え……」

「あいつが零地点突破を習得出来なきや殺すつもりだ」

「そんなっ……いや、うん、君に従うよ」

「リング争奪戦が終われば直ぐに未来に飛ばされるんだぞ……足手纏いが増えるくらいなら殺した方がマシだ」

「そう……だね……」

「それに逆境を乗り越えるのが奴等だ……心配せずともボロカスに痛めつければ直感で会得するだろ」

「それ全然心配出来ないよ!」

真面目な空気が紛散し、入江はおやすみとだけ言うと言って行った。

その日はそのまま眠りについた。

## Veronicaの傍観

その日の夜、嵐の決戦が終わる頃にヴェロニカに連絡が入った。沢田家光がイタリアに着いた、と。

流石早い家光……もう少し焦らすべきだったか

ヴェロニカの考えを他所にベルが傷を負いながら帰ってきた。

なんてこつたい、嵐の守護者対決は獄寺が勝利してしまっただと？

あれれ？ベルが勝つんじゃないかな？

これ勝ち越されるとヴァリアー側の負けになっちゃうんだけど…。

明日入江が勝つても、霧と雲で負けるから……あれれ……負け戦じゃねえか！

いやまあ今回の目的は沢田綱吉の零地点突破の会得だから別に負けてもいいんだけどさあ。

悩むヴェロニカの横でスクアアロが簡易的な措置をして、ベルを休ませる。

次の日は朝から本を読んで時間を潰していたが、いきなりコンビニのスイーツが食べたくなりスクアアロに買いに行かせた。

何故かスクアアロが神妙な顔をしながら、コンビニに売られてあるスイーツを買ってくる。

久々に食べるコンビニのスイーツは美味しかった。

レヴィやベルが横で、庶民のスイーツを食べているザンザスに心底驚いていたのは無視しよう。

因みにスクアアロが帰路の途中で買って来た駄菓子も頂いた。

スクアアロは駄菓子なんぞ買わないぞ入江め……

そして夜になると雨の守護者の決戦があり、会場に足を向ける。

確か原作でも山本が即興で作ったオリジナルの型を使ったことで勝利したが、入江には通じないと思った。

なんせ入江はミルフェオーレに潜伏していた頃、ボンゴレファミリーを徹底的に調べていて山本の時雨蒼燕流も調べ尽くしているはずだ。

今日新しく作られる九の型も入江の中には情報として入ってるは

ずだ。

「雨の守護者の対決を始めます」

チエルベツロの声に意識を戻し、スクリーンを見る。

さあ…見せてみる入江…お前の8年間を——

スクアールside

それはヴェロニカちゃんと同じ部屋で、ゴーラモスカの資料を見ていた時だった。

「…コンビニ行きたい」

最初は幻聴かと思い、再び手元の資料を見る。

視界の隅で、ヴェロニカちゃんがごそごそと動いていて、椅子を立ち上がって扉に向かっていく。

「待て待て、待って！」

「なに」

「いや何じゃないよ！どこ行く気だい!？」

「コンビニ」

「幻聴じゃなかった！」

「スイーツ食べたい」

「何で!?!このルームサービスで事足りるだろう!？」

「いやコンビニのスイーツが食べたくなったから買いに行く」

「待って、ホテルの方が美味しいに決まってるじゃないか!というか君コンビニなんて行ったことないでしょ!？」

「失敬な、過去に行ったときに何度か行ってるから問題ない」

「問題ありだよ!ザンザスがコンビニだなんて!」

「ならお前が買ってこい」

「何で僕!?!」

財布を持って出ようとするヴェロニカちゃんを押しとどめ、仕方なく僕がスイーツを買いに行った。

一応日本出身なだけあって、学生時代はよく利用していたコンビニだが、イタリアに移住して以来一度も行っていないかった。

コンビニの変わらない様に懐かしさを覚えながら入店する。

店員の声を耳にスイーツの場所へ向かう。

モンブランやショートケーキ、その他諸々カゴの中に入れていき、どうせならとアイスに飲み物も買っていく。

学生時代を思い出し、どれが好きだったか、どれをよく買っていたかを思い出すとついつい手が出てしまい、最終的に結構な量を購入してしまう。

まあこれ経費で落とせるよね…多分

数千円の買い物をする、帰り道に並盛を懐かしみながら歩いていった。

ああ、そういえば僕この時まだ学生かあ…

目の前の駄菓子屋を見つけて、中でいつも買っていた駄菓子を少しだけ買うとアイスを思い出しホテルへ直帰しようとした。

次の曲がり角でホテルが見えるというところで、人とぶつかる。

「ああ…悪い」

「すみませ…あ」

「あ?」

そこにいたのは山本君と綱吉君だった。

何で彼らがここに!?…いやここ並盛だから別におかしいことじゃないか

「あわわわわ」

山本君は怯える綱吉君を庇いながら、こちらを見てくる。

今の僕はスクアア口だから、やっぱり怖いのかなあ…

でも今の僕と綱吉君達は言葉を交わしたこともないんだよなあ  
やっぱ眼つき悪いもんね、スクアア口って

そのまま二人を無視して、ホテルに戻ろうとすると、それが意外だったのか山本が声を掛ける。

「なああんだ」

「あ?」

「あんたヴァリアアの…雨の守護者…スクアア口だっけか?」

「そうだが…」

「いや何か…ヴァリアアの奴等って攻撃的かと思ってたけど、あんた

は別にそんな感じしないんだな」

相変わらずの能天気つばさに入江すら呆れ、隣の沢田も愕然として  
いる。

「わざわざ決闘の場を設けられてんだあ」…この場で争うメリットな  
んてねえだろお」

本来のスクアアローじゃ考えられないほど落ち着いた言葉だとは思  
うが、対面していきなり喧嘩吹っ掛けるような手間を掛けることが面  
倒だったので、嫌々ながら返事をした。

色々と昔の僕じゃ考えられない思考回路になつてきているけれど、  
ヴアリアーについて8年だから仕方ないのかな…

僕の言葉が意外だったのか沢田綱吉も目を丸くしている。

「昨日デイーノつて人が、あんたのことを鮫みたいに突進してくる  
奴つて言つてたから…なんかイメージと結構かけ離れてるのな」

「や、山本っ…」

「あいつと最後に言葉を交わしたのは何年前だと思つてんだか…」

「それに何かあんたは他の奴等と違つて話し合えそうな雰囲気だしな  
！」

「おめーの目腐つてんじゃねえかあ？」

先ほどから隣の綱吉君涙目だけど、無視なのかい？

そりゃ僕はヘタレなところもあるし、基本穏健な性格だと思つてい  
る。

他のヴアリアーの面子と比べれば話合える……のかなー？でも今  
はスクアアローだし…

「今夜は真剣勝負でよろしくな！」

笑みを作る山本に今度は入江が面食らう。

殺し合いによろしくもくそもないよ……つていうか殺す気はないけ  
ど！

綱吉君も呆れ返つて顔が引き攣つてるよ…

「てめーの剣技…楽しみにしてんぞお」

僕はそのまま彼らに背を向け、ホテルの方向へ歩いていった。

僕は溜め息を吐いて、コンビニ袋の中身を見る。



ああ、少し溶けてる…

ホテルに戻ると、コンビニ袋をぶら下げている僕にベルが興味津々に袋の中身を覗き始める。

「うー、おい、食うならアイスだけにしろよお」…それ以外はボスのもんだあ」

「は？ボスがこんな食うわけないじゃん」

「いいからおめーはこれでも食ってろお」

そういつてベルにはガリガリ君とハーゲンダッツを渡す。

ベルも渋々それをスプーンで食べ始め、僕はヴェロニカちゃんに、スイーツ類の入った袋を渡した。

ヴェロニカちゃんは袋の中身を見ると、モンブランを取り出し食べ始める。

ヴェロニカちゃんは気付いているか知らないけど、後ろでレヴィとベルの顔が凄いことになってるよ…

まあ女の子だもんね、たまには甘いもの食べたいよね…

うん、でも何でこのタイミングでそれ食べたんだろ

モンブランを食べ終わると、満足だったのか他のスイーツは冷蔵庫に入れると言われた。

ていうか他のやつも食べる気なのかな？

僕は好きだった駄菓子を食べ始める。

「ねえスクアアロそれ何」

「これかあ…途中で気になって買った…ふがしってやつだあ」

「美味しいの？」

「あー、まあまあだな」

嘘です、とっても好きなんですコレ

僕が学生時代よく食べてたので、つい買ったけど凄くベル君がじーっと見つめてます。

仕方なく残りをあげたら、思いのほか気に入ったようで全部食べていた。

よく見たらレヴィやマーモンがタマゴボーロを食べていた。

何故!?!と思えばレヴィの視線を辿ると、ヴェロニカちゃんが無心にタ

マゴボーロを食べていた。

ヴェロニカちゃん自重おとおおお！

いや買って来たのは僕だけど！

ザンザス絶対そんなの食べないから！違和感だらけだよ！

やばい、ヴァリアーで駄菓子が行りそう：

僕の心配を他所に、夜になり僕は並盛中学校へ向かった。

会場へ着くと、そこは浸水している校内だった。

チエルベツコの説明に耳を傾けながら、辺りを見回して足場を確認していた。

一定の水位に達すると、猛猛な生物が解き放たれますって言うてるけど、これ鮫？

試合開始の声と共に、小手調べで山本君に切りかかる。

いや一応10年後の山本武のデータは覚えてるから、小手調べに意味はないけれど体面的にやっておかねばと思いどん切り掛かっていく。

山本も焦りながらスクアアロの攻撃を躲したりして、忙しく動く。

山本が両手で刀を持つと、このあと繰り広げる技の詳細を入江は脳内データで素早く処理していく。

「時雨蒼燕流、一の型…車軸の雨」

攻式を繰り出す彼に、剣で軌道を逸らし胴体を思い切り蹴り上げた。

剣に仕込んだ爆弾を彼に向けて投げつけ爆破させるが、それも守式で切り抜けられる。

確か元の世界で山本君から聞いた話じゃ、この頃はまだ時雨蒼燕流を覚えてたで八の型までしかなく、逆境時に九の型を編み出したハズだ。

ならば編み出す前に倒さないと！

正直、8年も頑張ったからこんなところで負けたくない。

漸く山本に隙が出来、入江の攻撃が肩に入った。

痛みで顔を歪める山本に畳みかける様に、斬り掛かり、足、脇に軽

傷を負わせる。

どこから見ても逆転出来るような状況じゃなくなるが、入江の警戒は上がっていく。

山本が二の型を使い、水を巻き上げこちらに飛ばしてくる。

目隠しのつもりだろうか、それを次々と切りつける。

彼の影が見えた時に、それに切りかかろうとした瞬間

ガコツ

『水が一定量の水位に到達したため獯猛な生物を解き放ちます』

チエルベツ口の声と共に、四方から2体の気配を感知し、すぐさまその場を離れる。

山本もこの場は危ないと感じ、直ぐに瓦礫の上に退避する。

鯨が出たことで遥かに戦いずらくなつた戦場で、双方睨み合いながら相手の動向を探っている。

剣に仕込んだ爆薬を彼に放つと、彼の足場は崩れ、彼はその場から飛び移る。

そこを狙つて斬り掛かるが、水を巻き上げられ姿を失つた。

だが視界の端で巻き上げられた水の中に影が移り、それが九の型に移行する為のフェイクだと分かると敢えてその影を切りつけた。

瞬間、背後から来る気配に体を傾け、視界の横を通る刃先と山本君を見やる。

奇襲が成功したと思つていたようで、攻撃を避けられたその顔は驚愕を表していた。

彼の攻撃を避けたまま、彼の腹部をこれでもかというくらいの力で蹴り上げた。

すると山本君は突き抜けていた二階の足場まで飛ばされていった。もちろん鯨のことを考えると、一階は危ないので二階に避難させた

だけである。

彼の安全面を考えているばかりで、僕は自身に向かう鯨の気配に気付かなかつた。

バシヤアア

「!」

背後から水飛沫とともに鮫が口を開けて突っ込んできた。

咄嗟に義手の方を手前に出してしまい、鮫に腕を噛みつかれ水に落とされる。

鮫の泳ぐ速さは速くどれだけ鮫の胴体を蹴り上げてもびくともしなかつた。

生命の危機に若干焦るも、直ぐに冷静になり鮫の生態を思い出し、鮫の鼻を抑える。

すると鮫は嫌がるかのように離れて行った。

もう一匹の場所を確認すると、直ぐに水から出て足場のある所へ移る。

山本君を飛ばした場所を見ると、姿は消えていてどこかに隠れただろうと思ひ、二階へ移動する。

二階へ飛び移った瞬間、後ろから山本君が斬り掛かってくるが、剣でガードし反撃をし出す。

先ほどから繁吹きしぶきあめ雨を多用しているようで、巻き上げられた水で視界が見えにくくなっていた。

そして傷が痛んだのか一瞬、山本の足が止まったのを見て一気に決着を付けようと僕は走りだす。

剣で山本君の日本刀を上に弾き飛ばし、そのまま致命傷になりにくい部分を刺そうとするが、紙一重で躲される。

追撃しようとしたら、腹部に衝撃が走った。

「三の型……遣やらずの雨……」

息も絶え絶えになっている山本君の足には、先ほど飛ばした刀の頭部分が足の平に乗せられていて、刀の先端は僕の腹部に刺し込まれていた。

一瞬鋭い痛みに襲われるも、入江はそのまま山本の肩を斬り付け、窓の外に放り投げた。

まさかあれで動かれるとは思っていなかったのか、それとも既に躲す体力がなかったのか、山本君はあっさりと窓ガラスを破り外に投げ出されていった。

腹部に刺さったままの日本刀を抜き、窓ガラスから下を覗くと、山

本君が意識を失いながら地面に倒れていた。

チエルベツロが山本君に近づき、意識の有無を確認すると、宣言した。

「雨の守護者の対決はスペルビ・スクアーロの勝利とします」

あー、痛い…。

あまり深く刺さっていないけど、痛いもんは痛い。

包帯で止血しておけば明日にでも動けるようにはなるかなと思いつながらザンザスの方へ向かう。

チエルベツロから雨のハーFRINGを貰うと、そのまま合体させてホテルへ帰っていった。

山本君大丈夫だろうか…一応全部急所は外してるから死なないけど……

ホテルに帰ると、他の者は直ぐに眠り出したが、僕はヴェロニカちゃんの部屋に向かった。

ノックをして入ると、ヴェロニカちゃんが眠るところだったのかベッドの中に入っていた。

「あ、寝るところだったんだ……」

「ああ、それより山本武に勝利するとは強くなったな……」

「まあ8年間の経験と意地と約30年分のデータが僕にはあったからね」

「少し有利だったが、勝ったことに違いはない…傷はどうだ」

「ん、浅いから明日には動けるよ…桔梗にやられたやつに比べればこれくらい……」

「大空戦ではデスヒーターの毒を打たれるんだが」

「え」

「途中助けてやるから心配するな」

「いや、まあ…それならいいけど……」

「ところで何で来たんだ？」

「僕は強くなったかなーって聞きに来ただけだったんだけど、先に言われてしまったよ」

「そうか」

「じゃあ僕も休むから、おやすみ」

「ああ」

僕はそのまま自分の部屋に入ると、疲れの溜まった体を一刻でも早く休ませたくて直ぐにベッドに潜り込んで眠りについた。

山本 side

ツナと一緒に今夜行われる雨の守護者の対決について話しながら並盛を歩いていた。

曲がり角でツナと俺は人にぶつかり、謝ろうとしたら相手の顔を見て固まる。

そこにいたのは今夜戦う相手側の雨の守護者だった。

確かスクアーロとかいうやつで、ディーノからそいつは危険だと忠告された。

俺はツナを背中に庇い、相手の動向を見ていたらそいつは何事もなかったように俺たちを通り過ぎしていこうとした。

その行動が意外で俺は声をかけた。

「なああんた」

「あ?」

「あんたヴァリアーの…雨の守護者…スクアーロだっけか?」

「そうだが…」

「いや何か…ヴァリアーの奴等って攻撃的かと思ってたけど、あんたは別にそんな感じしないんだな」

他の奴等からは殺気だけしか感じなかったのに、こいつだけからは何も感じなかった。

今も、面と向かって喋っているが、本人は害意のがの字もなさそうな雰囲気を纏っていた。

しかも手にはコンビニ袋をぶら下げていて、若干中身が見えたがアイスやスイーツしか入っていないかった。

一見一般人だとすら思えるような物腰に他の奴等とは何かが決定

的に違い、俺は内心首を傾げる。

「わざわざ決闘の場を設けられてんだあ」…この場で争うメリットなんてねえだろお」

公私をきっちり分けているのか？

それとも無駄な労力を使いたくないだけか？

なんだかディーノが教えてた人物像とはとてもかけ離れていると思っただけか？

「昨日ディーノって人が、あんたのことを鮫みたいに進んでくる奴って言ってたから…なんかイメージと結構かけ離れてるのな」

「や、山本っ…」

「あいつと最後に言葉を交わしたのは何年前だと思っただか…」

「それに何かあんたは他の奴等と違って話し合えそうな雰囲気だしな！」

「おめーの目腐ってんじゃねえかあ？」

本気に不思議そうに、そして呆れられたような顔で俺を見るスクアアロに俺は笑みを作る。

「今夜は真剣勝負でよろしくな！」

スクアアロは一瞬目を見開くと、また元のダルそうな顔に戻り、今度はこそ俺たちを通り越す。

俺もそのまま帰ろうと足を動かそうとしたら背後からスクアアロが声を出す。

「おめーの剣技…楽しみにしてんぞお」

ああやっぱり、あいつは他の奴等とは何かが違う。

一瞬だけ振り向いてスクアアロの背中を見た。

そこには暗殺部隊だなんて物騒な肩書を持っている男の背中には見えなかった。

そしてその夜、俺は雨の守護者の対戦でスクアアロと対峙していた。

昼間とは違い、鋭くこちらを射抜く表情に武者震いする。

剣の切っ先を俺に向け、俺の一拳一動を警戒していた。

あまりにも、他の者達と違う戦い方だがそれは俺を警戒するに値す

る男だと認めてくれたのか？

俺は守式攻式を使い分けながらスクアアロに立ち向かうが、容易く躲される。

スクアアロの速い特攻に俺が防戦一方の状態が続き、隙を突かれた俺は肩に重めの一撃を喰らう。

痛みが硬直している暇もない程、スクアアロが畳みかけてきてそれを凌ぐだけでいっぱいだった。

スクアアロに貰った傷で、足と脇の方は浅かったが、水に浸かっているせいで出血量が倍ほど出ていた。

途中途中、何かの違和感を感じるがそれも分からず俺はスクアアロの隙を必死に探す。

だが俺が傷つくごとにスクアアロの警戒度は高くなっていき、隙が中々見つからない。

俺がオリジナルの技を使おうとすると、アウンスが流れた。

『水が一定量の水位に到達したため獐猛な生物を解き放ちます』

何か檻のようなものが開く音と共に水面に浮かぶ二つの背びれに猛獣の正体が分かった。

目の前にいたスクアアロは危険を察知し、いち早く高めの足場に飛び移る。

俺も今の足場は危ないと感じ、高い場所へ飛び移った。

若干スクアアロとの距離が開き、冷静になる。

お互い相手の挙動を警戒しながら睨み合っていると、スクアアロが爆弾を撃ち込んできた。

それを避け隣の足場に立つと、水をいくつか巻き上げスクアアロの視界を塞ぐ。

そして俺の作り出したオリジナルの型を構え、スクアアロに向けて走り出す。

目の前にはスクアアロの背中で、奴は俺の影が映る水流を斬り付けていた。

隙をついた俺の攻撃はスクアアロの腹に入った、と思った瞬間にスクアアロの体がズレ、刃先が宙を切った。



躲された事実には驚愕している間にスクアーロは体勢を変え俺を蹴り飛ばした。

重い一撃に息が詰まり、俺は二階の足場まで飛ばされる。

また違和感が頭を過ぎるが、痛みと苦しきで直ぐに消えて行つた。

「いほっ……ぐう……」

脇腹が折れているのか、鈍痛が走る。

ここまで圧倒的な力を見せつけられるが、俺にはツナを守るという信念があり、意地があつた。

何とか立ち上がり下を覗くと、スクアーロが鮫に左腕を噛まれて水の中に引き摺られていく瞬間だつた。

目の前の光景に驚愕し、助けようかと体が動かそうとするが激痛が走りとてもじやないが下の階に降りることが出来なかつた。

数秒すると、スクアーロは何事もなかつたように水から出てきてた。

俺は生きていることに安堵すると直ぐに思考を切り替え、柱の陰に隠れる。

スクアーロが俺を探しに、二階に登つてきた瞬間を狙い、俺はやつに刃先を向け走りだす。

予想通り、スクアーロは防ぐが俺はそのまま水を巻き上げては視界を潰していく。

今度こそ九の型で決めようと思つて刀を振るっていると、脇腹に一旦鋭い痛みが走り一瞬手を止めてしまった。

それを目の前のスクアーロは見逃さず、奴は俺の刀を上方に弾き飛ばした。

痛みに握りが緩んだ手から刀が飛び、今度こそ絶体絶命だと思つた最後の悪足掻きでスクアーロの攻撃を首を動かして避け、一歩下が

る。  
もう動けないなと思つた視線の先に、先ほど上方に飛ばされた刀が落ちてくる瞬間を捉えた。

そこからは無意識で、右足をあげ刀の頭につま先を当てていた。

そして足で押し出した刀の刃先が、追撃しようとしていたスクアー

口の腹部に静かに入った。

あ、入ったと気付いた時には勝手に声が出ていた。

「三の型……遣<sup>や</sup>ら<sup>ず</sup>の……雨……」

一瞬の後、俺は肩を斬り付けられ体が浮いた。

肩の痛みを感じるよりも、窓ガラスを割れる音と共に体に衝撃が走り、その直後に浮遊感に襲われる。

既に動ける体力も気力もなく、呆然と夜空を視界に入れると意識はそこで途切れていた。

ツナと獄寺の声と…他にも笹川先輩の声が聞こえて、瞼を開ける。

そこには心配そうに俺を見るツナと焦った顔をしている獄寺と笹川先輩がいた。

そこで俺はようやく状況を理解した。

負けたんだ……俺。

途端胸の奥がずっしりと重くなり、苦しくなった。

「ツナ……わり、負けちゃった……」

「ううん、大丈夫だよ！山本が死ななくてよかった！」

やっとの思いで出た声は少しだけ上擦っていた。

ああ、この胸の重みは……何だろ

努力して、確かにスクアーロに一撃入れた時俺の中に何かが湧き出たんだ。

あれは何だ、俺の修行の成果が形を成したことへの高揚感なのか。ただどその時とは裏腹に今は只々胸が苦しい

「あ」

「え……どうしたの山本……どつか苦しい？今シヤマル呼んだから安心して……」

「あはは……そっか……」

「や、山本？」

ツナの困惑した声が入るが、今の俺には返す余裕はなかった。

そうか、これは……

「悔しいなあ……」

昼間に見たスクアーロの背中を思い出す。

今じや記憶の中にあるあいつの背中がとても大きい壁に見えた。

「強えな……ぜんっぜん歯が立たなかつた……」

「そんなことないよ、山本は最後に一撃入れたじゃないか！」

ツナの言葉が耳に入ることはなく、只々先ほどの一戦を脳内で繰り返す。

気が付くとシャマルが険しい顔で傷を見ていた。

傷の具合を見終えたシャマルは包帯で応急処置をしている最中、俺に言ってきた。

「おめーさん、ほんと運がよかつたな……出血が派手なだけで致命傷は一つもねえんだから、二代目剣帝相手に善戦した方だろ」

それを聞いた瞬間、戦闘中に過ぎつた違和感を理解した。

いや、してしまった。

何故あの時斬りつけずに二階へ蹴り上げたのか、何故あの時刺し殺さずに窓の外にぶん投げたのか……

「あー……くっそ……」

これほど悔しいことがあるなんて

「……悔しい……」

なんとなく、昼間に見た……あいつの纏う雰囲気が本当の姿だと思つた。

その頃ヴェロニカ達は……

「入江、褒美だ」

「え、なにこれ」

「コンビニスイーツ」

「見たら分か……買ってきたの!？」

「ああ」

「自重してよ!」

## Veronicaの懸念

今夜は霧の守護者対決で、マーモンは面倒くさそうに体育館へ移動していた。

ヴェロニカも一応渋々だが、見に行くことになった。

マーモンの幻覚なんて調和して解除したいけれど、それだとクロームに掛かる幻覚も解いてしまう為わざわざ掛からないといけないのだ。

この上なく面倒だが、仕方なく霧の守護者対決を見ることにした。チエルベツコの開始宣言で、クロームが先制攻撃を放つがマーモンには全く効いていなかった。

マーモンも容赦なくクロームを叩きのめし、ハーフリングを奪おうとした時、状況が一変する。

空気が変わり、クロームの雰囲気も変化する。

体育館全体に掛かっていた霧が晴れると、そこには六道骸が立っていた。

マーモンは六道骸の登場に驚くも、すぐさま攻撃に移る。

体育館の床が歪んだり、一種の視覚の暴力にヴェロニカは眉間に皺を寄せる。

後は記憶通りにマーモンが破裂し、逃走していった。

ゴーストには後ほどマーモンを殺せと沢田綱吉達の前で命令した。

すると六道骸がヴェロニカに向かって喋り出す。

「全く君はマフィアの闇そのもの——……」

だが、ヴェロニカを目にした瞬間、骸は目を見開き驚愕を露わにした。

「これは…珍しいですね……クフフ、僕と同じような状態の者を見るとは……」

「！」

表情にこそ出さないが、ヴェロニカと隣にいたスクアードが内心驚く。

まさか、骸は分かるのか？

確かに今の私たちは憑依中だが……

骸の発言にヴェロニカと入江以外の者は意味を分かっているようだった。

「クフフ、どうしてそうなっているのかは分かりませんが……僕と違って深く、それも強く結びついています……」

「何をべらべら喋ってやがる」

「クフフ……まあいいでしょう。それよりも君の考えている恐ろしい企ては僕すら畏怖の念を感じますよ」

誰が教えたんだろうな――

内心家光を疑うヴェロニカはそのまま骸を睨みつける。

骸はそれを一蹴し、振り返り沢田綱吉の方向へ歩いていく。

そして沢田綱吉と少しだけ言葉を交わすと、骸はクロームに戻った。

その日の霧の守護者対決は終わった。

ホテルに戻ると、スクアアローがヴェロニカの部屋に入ってきた。

「ヴェロニカちゃん……さっきの骸の言葉……」

「まあ確実にバレてるだろうな」

「やっぱりそうだよね……」

「別に誰かにばらす様なことはしないだろ」

「そうだといいけど……」

どうせあいつ10年後まで復讐者の牢獄から出てこれないし。

二人とも、胸の中にモヤモヤを抱えたまま、その日は終わった。

翌日の昼、スクアアローはこっそりとゴーラモスカの点検を行っている、中にいる九代目が気になった。

第二・第三世代のモスカの設計図を思い出して、中にいる者の炎の吸収効率を大幅に高めた機械になっていて、さらに中には衝撃吸収のマットレスを胸部と頭部に設置している。

あとはヴェロニカから聞いた話では沢田綱吉がゴーラ・モスカの胸部に穴を空けると言っていたので、致命傷になりえる箇所は少し硬め

の装甲にした。

結構九代目に優しすぎるのでは？と思いましたが、取り合えず致死率のない神経毒を気化して中に充満させてある。

ゴーラ・モスカは今も作動していて、それは中で九代目が生存している証拠でもあった。

それでも、中を開けて容態を見てみようとは思ったが、開けたが最後気化されている神経毒に侵されて自分も動けなくなると思い止まる。

「これからどうなるんだろ………」

入江のか細い声は誰にも聞こえずに消えて行った。

その夜、並盛中のグラウンドで雲の守護者の対決があった。

チエルベツロの声で試合が始まり、雲雀恭弥とゴーラモスカが対峙する。

ヴェロニカはその様子を見て内心首を傾げる。

んん？何か……なんていうか………拮抗してね？

原作でも過去でも確か、ここってモスカ瞬殺じゃなかった？

入江え？何したの………というか何作つたの？

雲雀とゴーラモスカは今も尚激しい戦闘が行われ、会場に埋められている地雷がいくつも爆発している。

雲雀のトンファーはゴーラ・モスカの装甲にこれといったダメージを与えていないことは見るからに明らかだった。

あ、入江が知ってるモスカって………第二世代だよね………

第二世代って強くなつてたんだっけ？

でも雲雀だし、それでも勝てるかと思つてただけど、これ如何に………

めつちや苦戦してるじゃないですかー

これマジどうしよう

雲雀がちゃんと勝負に勝てたところで、沢田綱吉が暴走するゴーラモスカを破壊いなきやいけないんだが、これは予想以上に時間がかかるかもしれない。

まずゴーラ・モスカが本来より果てしなくグレードアップしちやつてるし。

ヴェロニカの焦りを知らずか、ゴーラ・モスカと雲雀の戦いは苛烈になっていくばかりだった。

試合を観ている山本達も、ゴーラ・モスカの強さに唾然としている。

「そ、そんな…雲雀が苦戦してるだなんて」

「あの機械野郎…」

数十分経つと、タイムリミットが近づいていきそろそろ時間だと思いい焦っていたヴェロニカだったが、ようやく雲雀恭弥がゴーラ・モスカに大打撃を与えた。

所々から立ち上がる煙に、獄寺達は喜んでいるような雰囲気を纏う。

ここから、本番だな。

ヴェロニカは立ち上がり、モスカと雲雀恭弥の方に向かって歩き出す。

雲雀はトンファアを構えるが、ヴェロニカはそれを無視してゴーラモスカの方へ手を伸ばす。

だが雲雀は無視されたことに腹が立ったのか、ヴェロニカに向かって走り出す。

トンファアで攻撃するも、ヴェロニカは軽々と避けていく。

「俺はその壊れたガラクタを回収しに来ただけだ」

勿論、雲雀がそんな言葉で止まらないことなど百も承知だった。

自分らの負けだと言ってみたが案の定一蹴され、攻撃し続ける。

雲雀の攻撃を躲し、ゴーラモスカの暴走を待つ。

ちゃんと途中でチエルベツロに念を押すのを忘れずに。

「チエルベツロ、この一部始終を忘れるな…俺は攻撃してねえとな」

言い終えると同時に、雲雀がトンファアを振り下ろしてきた。

その瞬間、緑色の光線が雲雀の足を掠め、肉を抉る。

突然のことに観戦していた者達はスクアア口とマーモン以外皆同様に驚愕する。

雲雀は足を抉られた痛みで膝をつく。

そしてゴースカスの暴走が始まった。

「言わんこつちやねえ…俺は回収しようとしたがそれを向こうの雲の守護者が阻んだ」

ゴースカスの暴走を見ながら笑みを浮かべ、周りの者に言う。

「奴のせいでモスカの制御が効かなくなっちゃった」

「暴走してるっていうのか……」

ヴェロニカ言葉に獄寺が冷や汗を浮かべながら、ゴースカスを睨む。

ゴースカスは敵味方構わず、攻撃しまくり、後ろの方でレヴィが被害を喰らっていた。

すると、逃げ回っていたクロームが会場に入っけいき地雷を踏んでしまい、それを犬と千種が助けていた。

だがそこにゴースカスの放つ弾丸とレーザーが彼らを襲う。

誰もがやられたと思ったが、そこにはオレンジ色の炎がレーザーから三人を守っていた。

来たか…沢田綱吉…

沢田綱吉はゴースカと空中戦をし出す。

うわあ…装甲硬すぎない？アレ…

アームの関節部分も壊れにくくなってるじゃん

沢田がめちやくちや殴ってるのにあんま効いてないし…

一体いつになったら倒すんだろう…

ヴェロニカの思いは誰にも分からず、ただその場にいる者は皆空中での戦いを只々眺めているだけだった。

沢田家光 side

ボンゴレ本部では、腹部に重傷を負った家光とその部下がいた。

今まで本部にいた九代目が偽物で、既に本物は日本へ行っていたことが分かり、皆は驚いていた。

そんな時に…



「くひひ…」

「!?!」

急に笑い出した拘束された九代目の影武者にその場に居た者が振り返る。

「手遅れだ…」

「何を……言っているんだ」

「手遅れだって言ってるんだよ」

九代目の皮を被ったその男は、醜い笑みを作り、その場にいるものを嘲笑う。

部下の一人、ターメリックが男の襟元を掴み、声を荒げる。

「おい、何が手遅れなんだ！さっさと答えろ！」

男は笑いながらゴーラモスカのことを喋る。

ヴァリアーが軍から盗ってきた設計図を基にモスカを作ったこと。

そして、モスカの動力源が死ぬ気の炎の生命エネルギーであること。

それを聞いた瞬間、俺は最悪の予想が脳裏を過ぎった。

「——しだ…」

「え」

「中止だ！今すぐ雲のリングの争奪戦を中止するんだ！」

まさか九代目は——…

俺は感情に任せて男を殴る。

同時に腹部から血がどぷりと流れ出るが怒りと焦燥は静まらなかった。

俺に殴られた男は笑いながら、だが憎たらしいような顔で睨みつけてきた。

「っは、お前らはまた騙されたんだ！今も昔も！げはははははは」

「黙れ！8年前の九代目の温情を仇で返しやがって!!」

俺の言葉に男は急に静まった。

その様子にその場にいた者は訝し気に男を見ていた。

「温情……温情だと？」

先ほど笑っていた男の表情は今にもこちらを殺さんといわんばか

りの憎しみが表れる。

「ふざけるなよ！オツタビオの戯言を信じたクソジジイの温情など溝に捨ててやる！」

男が拘束された体を動かした瞬間、辺りが爆発する。

俺は熱風に巻き込まれ飛ばされる。

他の者も飛ばされるが、誰も致命傷を負った者はおらず、俺は安堵した。

そして先ほどの男が拘束されていた場所を見ると、原型が留めていない肉片があった。

「…自害したか……」

「親方様、大丈夫ですか？」

「ああ……それよりも……」

「先ほどの言葉、引つ掛かるな」

俺の言葉を被せる様にラルが発言する。

「オツタビオって確か……」

「ああ、ザンザスの腹心だった男……8年前にスクアーロに殺された男だ」

「そして、ザンザスのクーデター計画を密告した者……」

ラルの言葉にその場に居たオレガノが反応する。

「待て、でもさつき男は……オツタビオの虚言と……」

「ああ、これは……一度全て洗い出す必要があるかもしれないぞ」

「8年前の真実を……」

あの男の言葉が本当ならば……ザンザスは——

俺はそこまで思考するが、元々負っていた傷と先ほどの爆発での出血で意識が遠のいていった。

？聞けつつつてんだらうが!?

？ボスはどこだ……？

ああ、あの時のスクアーロの表情の意味が分かったかもしれない……

あれは失望だ。

ヴェロニカ side

「うおおおおおおおつ」

沢田綱吉の雄叫びと共にゴーラモスカの装甲が真ん中から真つ二つに引き裂かれた。

それはゴーラモスカと沢田綱吉が対峙してから既に15分近く経っていた頃だった。

ヴェロニカはそれを眺めながら内心安堵した。  
ちゃんと倒せたか。

あつぶなあ、ほんと、やっと勝てた感がめっちゃあるんだけど…  
沢田とか凄く息が荒いし、何か所々火傷や打撲傷が見える。

うーん、これちゃんと明日、零地点突破を会得出来るのかな？  
ていうかじいちゃん大丈夫かな…

一応入江には中の人に優しめに作ってとはいったけど、生命力奪われることに違いないし。

ヴェロニカがそう思っている時に、ゴーラモスカから人影が現れる。  
る。

その影はゆつくりとモスカの外に出てきて、重力に従い地面に落ちた。

その場にいた者は、出てきた人物に驚愕する。

「この人……九代目……」

沢田は驚愕し、通常の状態に戻る。

直ぐにリボンが近寄り、九代目の状態を診る。

そして九代目が危険な状態ということが分かると困惑する沢田綱吉に、ヴェロニカは喋り出した。

「誰だ…ジジイを容赦なくぶん殴ったのは…」

自身の手を見て震える沢田綱吉に追い打ちをかけるように畳みかける。

「誰だあ、モスカごとジジイを真つ二つに焼き切ってたのはよお」

まあ沢田の攻撃は、ほとんど衝撃吸収マットでダメージいってないと思うけどね

多分その九代目が倒れてるのって、生命力の枯渇と神経毒のせいじゃないかな？

そこまで強い毒ではなかったはずだけど

「そ、そんな……俺が九代目を……」

ヴェロニカの内心も分からず、沢田綱吉は絶望したかのように九代目を見る。

と、その時、九代目が薄く目を開けた。

「違う……」

「！」

「悪いのは……私だ……」

「きゅ、九代目！」

マジか……じいちゃん起きやがった

タフネスなジジイだなあ……流石ボンゴレのボスってことか

「こうなったのは全て私の弱さ故……私の弱さからザンザスを永い眠りから目覚めさせてしまった」

「眠りとはどういうことだ？ザンザスはゆりかごの後、ファミリーを抜けボンゴレの嚴重な監視下に置かれていたはずだぞ」

「ゆりかご？」

リボーンの言葉に沢田綱吉が反応する。

「8年前、ザンザスがクーデターを策略し、それを事前に知ったボンゴレがヴァリアー本部にザンザスを制圧しようと突入した時に起きた事件のことだ……」

ザンザスの抵抗は過激で、ヴァリアー本部はほぼ全壊……九代目との戦闘で巨大な太陽を生み出したとまで言われている」

「太………陽……」

「ああ、それを相殺しようとして九代目が全力を尽くすが、一部は建物を巻き込み全壊させ、九代目日本人も過去一番の重傷を負ったと言われている……」

そんな事件の首謀者が九代目の息子、ザンザスであるという恐ろし

い事實は極秘扱いにされ、知るのは上層部とそのとき戦ったボンゴレの超精鋭のみだがな」

初耳なんですけど？

いやまあ入江は気絶してたって言ってたし…当時の被害なんて詳しく聞かなかったのもあるけど…

太陽？なにそれ…

いや思い当たることはあるっちゃあるけど…多分最後に暴走しちゃったやつだよ

あれそんな被害生み出したんだ…恐ろしや

ていうか私が言うのもなんだけど、重症負わされておきながらそのまま殺さずに凍らせるとか…九代目はマフィアのボスに絶対合わないよな

「ザンザスの時間は8年間止まったままだった…あの時のまま眠り続けていたのだ。怖ろしい程の怒りと執念を増幅させて…」

執念はともかく、若干の怒りはあったわこの野郎

元はと言えばオツタビオが全ての元凶だけだな！

こちらら冤罪で8年間を無駄にしたわけで…怒ってもいい気がする

オツタビオとかなぶり殺したかったけど、入江が殺してしまったしそんな中怒りのやり場が九代目に行くの必然じゃね？

私聖人君子じゃないし、パパの娘でマフィアのボスだけあって冷酷な部分も持ち合わせてると言う自覚あるし

いくらじいちゃん相手でも、やられたらやり返す精神である

「いつも君のことはリボンから聞いていたよ

だから私は君をボンゴレ十代目を選んだ…すまない…だが君でよかった」

段々と生気が薄れていく九代目に沢田綱吉は焦り出す。

「待って…そんな、待ってください九代目っ…」

沢田綱吉の言葉は虚しく、九代目はそのまま目を閉じてしまう。

さてここからパパのあのセリフ…崇高なるボンゴレがくだが、あれを言えば途中で吹きそうなので言わないことにした。

取り合えずそれらしいことは言えればいいかな、うん。

「よくも九代目を殺してくれたな……もはやリング争奪戦は無意味……お前をボンゴレの敵としてここで殺す」

すつごく棒読みというか……感情が籠ってないというか……

多分小学生並みの演技力だと思った。

そこからはリボンやバジルがこちらを射殺しそうなほど睨んでくる。

そして獄寺なども、暴言を吐き出すがそこにチエルベツロが仲裁に入る。

「皆さん、憶測での発言は慎んでください」

「すべての発言は我々が公式に記録しています」

チエルベツロの言葉は彼らの怒りを助長させるばかりだが、なんとかリング争奪戦が続行することになる。

そこで沢田綱吉の纏う雰囲気少し変わり、目が合う。

「ザンザス、そのリングは返してもらおう……お前に九代目の後は継がせはしない」

「ふ、ボンゴレの歴史に刻んでやる……ザンザスにたてついた愚かなチビが一人いたとな」

ヴェロニカの言葉に、沢田綱吉の守護者達が反応してきた。

これまで原作通りか。

チエルベツロが両者に宣言する。

「勝利者が時期ボスとなるこの戦いを大空のリング戦と位置づけます」

帰り際にヴェロニカは、沢田綱吉に向かって吐き捨てた。

「明日が喜劇の最終章だ、せいぜい足掻け」

そういうと、ヴェロニカは並盛中を去る。

沢田綱吉 side

ザンザスが去っていた後、俺が重傷を負わせてしまった九代目が、病院に搬送されるのを呆然と見ていた。

九代目の言葉で軽くはなったが、直ぐに消えない罪悪感に胸が苦しくなる。

リボーンやディーノさんが声をかけるが、俺は明日の天空のリング戦のことばかりが頭を駆け巡る。

俺を心配していたディーノさんが急に表情を変え、リボーンにあることを告げた。

「リボーン……先ほど門外顧問のチームから連絡がきた、と言っただろう」

「ああ」

「そこで……気になることが出来たらしいんだ」

「気になること？」

「ああ、8年前の件で……一度洗い直す必要がある……って言ってたが意味わかるか？」

「洗い直す？」

ディーノさんの言葉にリボーンは急に考え込む。

俺は二人の会話についていく気力はなく、俺に近寄ってきた獄寺君や山本、京子ちゃんのお兄さんたちと安否を確認していた。

そうだ……明日で全てが決まる

俺がザンザスを倒さないと、いけないんだ……

九代目の為にも、あいつを十代目にしてはダメだ

「俺、頑張るよ……勝ってみせる」

俺の言葉にその場にいた誰もが、笑みを作った。

その頃ヴェロニカ達は……

「弁解は」

「ありません、正直あれは強く作り過ぎたと思ってる」

## Veronicaの潔白

大空戦の時刻となり、ヴァリアー側も沢田側も並盛中に集まり出す。

今まではただ単に邪魔だからというだけで、ホテルに置いてきていた剣を腰に差していたヴェロニカを見て、沢田側が驚いていた。

「け、剣？」

「あいつ…剣も扱えるのか」

緊張した面持ちでこちらを観察してくる彼らを視界に入れず、ヴェロニカはチエルベツロに進行を急かす。

ルッスーリアやランボなど重症な者も集められ、沢田綱吉はそれを非難するがチエルベツロは受け付けなかった。

全員が集まると、リストバンドの装着を命じられる。

そして各自、対戦会場だった場所へと向かう。

すると、モニターに映された守護者達がうめき声をあげながら倒れだした。

ヴェロニカは余め分かっていたので反応はしないが、沢田綱吉は他の者の様子に混乱していた。

そしてチエルベツロが大空戦の説明をし出す。

デスヒーターのタイムリミットは30分だと聞いた沢田綱吉側の人間が焦り出した。

他の観覧者は特定の位置で待機するよう移動した後、沢田綱吉とヴェロニカの二人だけになり、チエルベツロの戦闘開始の合図で、ヴェロニカは地を踏み出す。

序盤は剣を使わずに、銃だけで相手をする。

パパなら最初は素手で相手するだろうが、そんなナメぶ精神は私にないから。

最初からフルボッコにしていきたいと思う。

銃を推進力で空中戦が可能になり、ヴェロニカは沢田綱吉と空中で衝突する。

何かりボーンの声がここまで聞こえてくるんだが、これ憤怒の炎に



ついで説明してんのかな。

ヴェロニカは目の前の沢田に炎を強めに一発撃ち込み、距離を取った。

屋上に足を着け、他の守護者の場所を横目で確認する。

そして、向かってくる沢田を避けながら、反撃を装い他の守護者のポールを破壊する。

雨、嵐、雷と破壊していき、ヴェロニカの狙いが分かったのか、沢田が先ほどよりも一層警戒してきた。

沢田はベル、レヴィ、そしてスクアアロが動けるようになったことに焦り出す。

ヴェロニカは彼らから意識を逸らし、沢田綱吉に向かって攻撃を仕掛ける。

沢田はヴェロニカとの応酬に疲弊していき息が乱れ始めるが、ヴェロニカは手を休めず段々と沢田綱吉を追い詰める。

本来のヴェロニカは元々スピード戦を得意とし、火力戦は消耗の関係や効率を考えると進んですることのない戦闘スタイルだった。

最小限の効率を重視した結果、技術の精度、いわばコントロール力は随一だった。

そんなヴェロニカがザンザスに憑依した時、一番に驚いたのはその炎の保有量：いわば体力である。

ヴェロニカもザンザスの血を受け継いでいるので、他よりも遥かに炎の保有量が多いが、ザンザスはそれをも凌いでいた。

まるで底の見えない保有量に、なるほどだからあんなに消耗を気にせずに火力戦を主としていたのだと納得するほどである。

コントロール力を極めたヴェロニカがザンザスの炎の保有量を兼ね備えている今、沢田綱吉の勝率は絶望的だった。

また銃に込める炎の量や形質を変えるだけで攻撃のバリエーションは幅広くなることが沢田を苦しめる要因にもなっている。

ここでもう一つヴェロニカについて付け加えると、彼女が得意なのが銃撃戦や剣術戦のみではないということ。

彼女が14歳から18歳の間にスクアアロとザンザスからしか学

んだわけではなかったのだ。

短剣や空間認識などはベルから、死ぬ気の炎や任務への効率的な動きはレヴィ、戦術や全ての属性への特徴などの座学をマーモン、そしてルツスーリアから体術と、様々なものをスペシャリストから教わっていたのだ。

その中でもヴェロニカの専売特許であるコントロール力を応用出来るものが体術だった。

体外の至る所に炎を纏い身体能力を上げるといふ集中力とコントロール力を必要とする難易度の高い技術を習得していたヴェロニカだからこそ体術と相性が良かったのだ。

それは晴の活性化による身体能力の底上げよりは劣るも、大空・憤怒の炎を纏った身体能力は逸脱していたものである。

どれだけ沢田綱吉の反射神経や身体能力を上げていても、それはあくまで炎の放出による恩恵である為、ヴェロニカと同レベルになることはない。

ヴェロニカは銃という遠距離戦向きの武器を手にしながらも体術という近距離戦の両方を使い分けながら沢田を追い詰めていく。

いくら沢田綱吉が修行したといっても、一週間程度で彼がヴェロニカに勝てる理由にはならなかった。

一際強く沢田綱吉の脳天目掛けて踵落としを喰らわせると、沢田綱吉はそのまま地面に衝突し、クレーターが出来る。

「沢田殿！」

「おいおい……実力が違い過ぎるぜ……ザンザスは無傷だ」

「ザンザスの奴め……遠距離近距離からの戦術を得意としているのか……ツナの奴に不利すぎる……やべーな」

外野の焦る声と、リボーンの解説する声を耳を傾けられる程度にはヴェロニカに余裕があった。

するとよろめきながらも立ち上がった沢田綱吉は両手を胸の位置に持っていくと、炎の波動が変化する。

きた！

ヴェロニカはそれを促進するかのようになり、沢田綱吉を遠くの方へ強

く飛ばし時間を稼がせる。

ゆつくり歩いている最中、モニターを見て他の守護者の様子を少しだけ覗く。

そこでは雲雀は山本の場所へ、ベルはマーモンの場所に、獄寺はレヴィを倒していてランボを救出、スクアードは晴の守護者の場所に出た。

ヴェロニカは遠くで沢田綱吉の波長が変化するのを察知した。

ようやく零地点突破の状態になったと分かると、そこへスピードを出して向かう。

零地点突破は相手の炎を中和してダメージを抑える技である。

ヴェロニカの、相手の炎を調和してダメージを無効化する技と原理は同じだ。

だが沢田綱吉は超直感で辿り着き、ヴェロニカは努力で到達した。そしてこの技らは似通っていないながらもデメリットが異なる。

零地点突破は、相手の攻撃力が大きければ全て中和しきれず体力を摩耗するという点があり、ヴェロニカの調和の技術は波長を掴むまでの集中力と、掴んだ後の波長に合わせるコントロール力がとても難しいという点だ。

その点ヴェロニカは長年の戦闘や修行でこのデメリットを克服しているが、沢田綱吉は会得して間もないため原作でもザンザスの炎を中和しきれずに摩耗したのだ。

ヴェロニカが沢田綱吉の場所へ着くと、そこには先ほどの波長とは異なる沢田綱吉がいた。

直ぐにヴェロニカは彼の波長を掴もうと意識しながら攻撃を繰り返す。

先ほどよりも強力な攻撃を連発する。

沢田綱吉はその攻撃を中和しようとするが、先ほどより量の多い炎を中和しきれずに体力を消耗していく。

その様子を見ながら外野は騒然としていた。

だがボロボロになる沢田綱吉を畳みかける様にヴェロニカは、蹴つたり殴つたりして遠くに吹き飛ばす。

出来るだけ遠くに飛ばして時間を稼がして、零地点突破・改を会得してくればなあ：

周りの様子と段違いのヴェロニカの内心に気付いているのは多分入江だけである。

銃の弾を補充すると、そのまま沢田の元へゆつくりと向かう。

敢えてゆつくり歩いているが、他の者から見ればじわじわと殺しにかかっているように見えていることをヴェロニカは気付いていない。

「おい…そのしよぼい零地点突破でお前のいう大事な仲間は誰も救われてねえぞ」

「今度は俺の番だ…」

ヴェロニカの言葉に煽られるように、沢田綱吉は右手の手の平と左手の手の甲を相手に向けて組み合わせ、四角形を作る。

「零地点突破…改！」

その言葉を聞くと、ヴェロニカは沢田綱吉に向かって一発だけ放った。

ここで何発も当てると、逆に体力回復することは分かっているので、敢えて一発のみである。

予想通り炎を吸収して体力を回復させた沢田綱吉がいた。

リボンやシャマル、バジルにコロネロが遠くに見え、喜んでいる様子が伝わる。

このまま初代エディションに至る為に何発か弱い弾を撃ち込み吸収させ、沢田綱吉の体力を回復させる。

「お前を絶対に十代目になどさせるものか」

沢田綱吉はヴェロニカに向かって来て、炎を纏った拳で殴ろうとする。

だが既に見切っているヴェロニカには通用しない。

まだ初代エディションの段階に移行するのに時間がかかるのか？

もう一度遠くの方にぶっ飛ばすか…

沢田綱吉の拳を避けながら、そんなことを思考するヴェロニカは左手で沢田綱吉の顔面を掴んだ。

そのまま全力で投げ飛ばそうとした時——…

ピキリ

「!?」

冷気が漂い、一気にヴェロニカの左手が凍り出す。これを狙っていたのか!

凍る左手を下げ、沢田綱吉と距離を取る。

凍っている左手を右手で溶かそうとするが、沢田綱吉がそれを阻むように特攻してくる。

「チッ」

ヴェロニカは銃を右手から離し、剣を抜いた。

沢田綱吉はこの状況で武器を変えたザンザスに警戒しながらも、攻撃を繰り返そうとした。

ヴェロニカは剣の先から広範囲に渡り炎をまき散らして、視界を潰す。

それも直ぐに沢田綱吉が吸収したので、視界は正常になるが、そのひと時でも十分であり、ヴェロニカは態勢を整える。

凍った左手は溶かす暇はないので、諦めて右手だけで構えだす。そして体内に炎を巡らせ始める。

「お前を……倒すー」

沢田綱吉が畳みかけてくるのを、剣で捌きだす。

沢田は自身の炎を氷にして、ヴェロニカの動きを止めようとするが、ヴェロニカのスピードは人間離れしていた。

「おい、今のザンザスは炎を吸収されるから使えないハズだ…なのに何であんな動きが出来るんだ!?!」

「おかしいぞ…あれは人間が出来る動きじゃねえ」

「な、何故…」

「あいつ……一体何をしやがったんだ! コラ!」

外野はザンザスの動きに困惑しているが、今のヴェロニカにはそれを耳に入れる余裕はなかった。

ヴェロニカは辺りを見回す。

今二人が対峙している場所はグラウンドであり、周りにものがない。そのためヴェロニカの十八番である糸状の炎を巡らすことが出来

ないでいた。

このまま剣で凌ぐのは体力を使うが、それは相手も同じであり疲労が蓄積している様子の沢田綱吉を見て、ヴェロニカは息を吐き覚悟を決める。

最大の防御は攻撃である、とは誰の言葉だろうか。

その言葉の通りヴェロニカは防御を捨て、攻撃と回避のみで沢田綱吉とやり合い始める。

フェイントやカウンターを狙い、絶対に体を接触させないようにした。

一瞬だけ剣先に炎を纏わせて、氷を砕きそれを蹴り飛ばす。

いきなりの飛来物に対処出来ずに、そのまま沢田綱吉の額に氷が当たると。

足を止めた彼の額からは夥しい血の量が流れていた。

ヴェロニカは視界が悪くなった沢田綱吉の頭を掴み、思い切り地面に叩きつけた。

そして剣を振り下ろそうとした時――

「ザンザス！」

一人の男の声がグラウンドに響いた。

沢田綱吉は意識が遠ざかりそうなか、声の主を見やる。

「デイーノ……う？」

沢田の声に反応し、ヴェロニカもそちらを向く。

そこには金髪の男性、デイーノが大声をだして叫んでいた。

「お前ら争奪戦は一時中止だ！」

デイーノの言葉に誰もが驚愕し、いち早くチェルベツロがやってくる。

「それを決めるのは私たちです、試合の邪魔はしないでください」

「それが、九代目の勅命でもか？」

「!?」

デイーノが出してきたのは九代目の勅命印の灯った書状だった。

そして日付はついさつきを記載されていた。

「さつき九代目が意識を取り戻した：そして争奪戦を中止するよう

言ったんだ：いくらお前らでも九代目の命には逆らえないだろう？」

デイーノの言葉にヴェロニカも驚く。

まさかこんなに早く起き上がるとは予想外だったな

いやでももう沢田綱吉が零地点突破初代エディションを会得したことだし、もう戦う理由もないんだけどね

ただここで引くとヴァリアーの面々に示しつかないしなあ

ベルやマーモン、スクアアローなど幹部達が既にグラウンドに集まっていて、沢田達の守護者も駆け付けている中、デイーノは携帯を取り出す。

「それと門外顧問からだ：ザンザス、お前に確認したいことがあると言っている」

うん？

内心首を傾げながらも、沈黙を貫き通す。

デイーノはそのまま携帯のボタンを押すと、スピーカーになりその場に居る者全員に声が響いた。

『ザンザス』

「…」

家光の声はなんとなく苦しそうで、確かイタリアで重症を負っていたのを思い出す。

『さきほど…8年前の…：ゆりかごの事件を…俺たちは洗い直していた…：』

んん？何で？

『そこ…で…森の方でスクアアローとオツタビオの…戦闘していたところに監視カメラがあったが…：当時のザンザスの最期の攻撃の衝撃波で壊れたそれを復元することは出来なかった…だが、現代の技術でなんとか復元することが出来た…』

お、おう…

一体何がしたいんだ？

『声も録音されていて…その時の音声を流す』

『「オツタビオかあ」…』

「あなたはここで殺させてもらいます」

「黙れこの裏切り者があ」

「てめえ何で嵌めやがった…」

「何で……ですか……」

「あなたが彼に出会いさえしなければ……こうはなりませんでしたよ」

「あ?」

「あなたも彼も、ここで葬り去って……私が理想のヴァリアーにしてみせますよ」

「何だど?」

「彼が幼い頃から仕えていたというのに……その恩を忘れて薄汚い銀色なんぞに……私の理想はこうではないんだ、何の為にザンザスに仕えてやったと思ってるんだ!」

「ふざけんじゃねえ!」

「っ」

「ザンザスはてめえの玩具じゃねえんだぞ! オツタビオ!」

「黙れ!」

辺りは静まり返っていて、誰もがその会話に目を見開いていた。

「な……それ、じゃあ……」

隣にいた沢田は、こちらを振り向く。

『ザンザス……8年前……クーデターを策略していた……というのは、オツタビオの嘘だったのか?』

その言葉にヴァリアー以外の者が全員驚愕し、ザンザスに視線を向ける。

ま・さ・か・の!

潔白を証明されちゃったよ!

いやそれ8年前にして欲しかった! 切実に。

ええええ……そんなあ……

一気に気落ちし、ため息が出てきた。

その溜め息にスクアーロが反応し、家光の問いに答える。

「そうだあ」……ボスは何も策略なんぞ企てていなかったぞ……」

『……』





ヴェロニカはそのまま地面に倒れる沢田綱吉を無視して校庭を出ようと足を動かした。

チエルベツロが慌てて止めに入る。

「ザンザス様、リングの行方を決めるまで——…」

「リングなんて興味ねえよ」

ヴェロニカはチエルベツロの二人に炎を放ち、灰にする。

その所業に周りは驚く。

「興冷めだ」

それだけ呟くと、その場を去った。

スクアール side

僕はデスヒーターの毒で動けなくなり、山本君と共に倒れていた。だが、ヴェロニカちゃんやんがポールを破壊してくれたおかげで、解毒が出来て一息つく。

そして足元を見ると、苦しんでいる山本君がいた。

僕は監視カメラを全て壊していき、壊し切ると山本君のリストバンドにリングを嵌めて解毒した。

僕の行動が意外だったのか目を丸くして驚いていた。

「何で…」

「勘違いすんじゃないぞ」

それだけ言うと、そのままルツスーリアの方へ向かう。

そこに着くと、まだ誰もついていないようにで笹川とルツスーリアが苦しんでいる。

「スクチャあん、助けてちよおだあい…おねがあい」

重症の体に毒じゃ直ぐに死んでしまうと思いきや早めに来たが、この調子なら普通に30分は大丈夫だと思った。

「貸しだ」

「分かってるわよん…」

ポールを破壊しルツスーリアを解毒すると、笹川の解毒を考慮してリングはそこら辺に放り投げて、体育館へ向かう。

だが途中で雲雀恭弥と山本に遭遇し、戦闘になった。

山本は先ほどの解毒のこともあり、全く手は出さずに雲雀と対戦しているのを眺めていた。

疲労していた雲雀は思っていたよりも早く倒すことが出来、意識だけ狩ってそこらへんに放り投げる。

そして山本君に向け、剣を構える。

「来いよ」

「いや……俺はいいや」

「あ？」

「さっき助けてもらったし……あなたは悪い奴じやない気がするのな」

「ためー頭おかしいぜえ」……俺はただためーとまた殺し合いが出来るから解毒させたんだぞお」

「でもそれで俺は助かった、ありがとな！」

これは天然で済まされないような……

入江はそのまま体育館へ行こうとした時、グラウンドで激しい音がした。

山本君は外の音を気にしながらも校舎を走っていった。

これ以上下手なこととしてヴェアリアーの面々に疑われてもなあ

入江はそのままグラウンドに向かう。

そこではヴェエロニカちゃんと綱吉君の勝負が苛烈を極めていた。

挟れる地面と灰と化す壁、沢田綱吉が零地点突破・改を出したところだった。

あ、ヴェエロニカちゃんこれ待ってたんだ……

うっわあそれでもフルボッコ……

やっぱり経験や年の差もあって綱吉君が彼女に勝利する見込みはほぼないな、うん

少しすると零地点突破初代エディションで、ザンザスの左手を凍らせたことにスクアーロは驚く。

だが、ヴェエロニカちゃんがそのまま右手だけで沢田綱吉をのしてい

く姿に、やっぱり勝てないなあと思っっていたりする。

大空戦を見ていると、ベルやマーモンがリングを持ってグラウンドへ姿を現す。

レヴィもボロボロになりながらもスクアアロの所へ寄ってきた。

「早く解毒してたならリング集めろよ」

ベルから文句を言われるが、スクアアロはそのままヴェロニカの戦いを見ていた。

ヴェロニカが沢田綱吉の頭を掴み地面に叩きつけ、剣を振り下ろそうとした時、ディーノの声がグラウンドに響く。

突然の乱入者にベルもマーモンも警戒するが、次に放たれる言葉に驚愕する。

「お前ら争奪戦は一時中止だ！」

「はあ？」

「どうということだい」

ベルとマーモンが困惑しているが、そのままディーノは喋り続け九代目の勅命印のある書状をチエルベツロに見せていた。

そして携帯を取り出して何をするかと思えば、門外顧問と繋がった。

そこからは衝撃的な展開だった。

まさかの僕とオツタビオの戦闘の録画、録音がされていたなんて！録音を流し終わると門外顧問がヴェロニカちゃんに話しかけるが、ヴェロニカちゃんは溜め息を吐くだけだった。

あ、あれ多分疲れてるんだ…

いち早くヴェロニカちゃんの内心に気付き、スクアアロが家光の問いに答える。

ヴァリアアの面々は憤慨しているようだが、今は頼むから何もしないで欲しい。

「そうだあ」……ボスは何も策略なんぞ企てていなかったぞ……」

「……」

「何か言いやがれてんだ！あ”あ”!」

君たちのせいで僕がこの8年間どれだけ苦労してきたことか！

三枚に卸してやろうか！

危ない、スクアアローの影響が……

その後家光との通話を切り、九代目に繋げる。

九代目は今にも死にそうな声でヴェロニカちゃんに謝っていた。

それでも僕は許すことは出来なかった。

多分、昔の僕なら納得は出来なくとも許していただろう……

だけど、ヴェロニカちゃんといった日々を思えば、九代目を許そうと

は思わなかった。

だからといって殺したいとは思えないけれど。

ヴェロニカちゃんも九代目に落ち着いた声で許しはしないと  
言った。

それはザンザスの言葉なのか、ヴェロニカちゃんの言葉なのか分  
らなかつたけど、多分どっちの言葉でもあるのかなと思った。

そのまま彼女は並盛中を去り、幹部達も不満を表しながら帰って  
いく。

あ、ルツスーリア忘れてた。

仕方なく、ルツスーリアのいる場所まで向かおうとすると、視界の  
端で沢田綱吉が倒れるのが見えた。

あんなにヴェロニカちゃんにボコられてよく今まで意識保てた  
なあ……

僕なら瞬殺だね、うん

思考を戻し、ルツスーリアの場所へ行こうとしたら山本が声を掛け  
てきた。

それに獄寺は驚きまくっている。

「なあスクアアロー」

「あ？？」

「あんたが俺に手加減してたのって……本当は十代目の座が欲しかっ  
たわけじゃなかったからか？」

「手加減しても沢田綱吉が負ければ、ボスはあのままお前らを殺す気  
だったぞ」

「やっぱツナとの闘いでもザンザスは手加減してたのか……」

「当たり前だろ、あのガキがどれだけ修行しようが…うちのボスに勝てる日なんて来ねえよ」

ヴェロニカちゃんは凄いんだ！と言いたいけど、遠回しに自慢するしか出来なかった。

山本君から視線を外して、今度こそルツスーリアを回収しに向かった。

あー、これから忙しくなりそうだなあ…

## Veronicaの不意

リング争奪戦の大空戦の翌日、ヴァリアーの宿泊するホテルにデイーノが訪れた。

ドアを開けたスクアーロは眉を顰め、用件を聞いた。

「よ」

「何の用だあ」…跳ね馬」

「門外顧問からお前たちに書状を持って行つて欲しいと頼まれてな」  
「……」

俺くらいしかお前らと話せる奴いねーだろと後付けしてくる  
デイーノを仕方なく中に入れる。

他のヴァリアーの面々はデイーノが来たことに怪しむが、そのまま  
ヴェロニカの部屋まで案内する。

「いつイタリア帰るんだ？」

「さあ…ボスの気分じゃねえかあ」……まあ近いうちに帰ると思っ  
けどな」

昨日の殺伐とした雰囲気はなく、昔馴染みと会話しているように接  
する。

だが忘れてはいけない、入江はデイーノのことをそこまで知ってい  
るわけではない。

8年前から数度会っただけなので、普通に知り合い程度としか思っ  
ていない。

「う”お”い、ボス入るぞお”」

ヴェロニカの部屋のドアを開けると、そこには本を読んでいるヴェ  
ロニカがいた。

「よ、昨日ぶりだな」

「あ？跳ね馬？何の用だ…」

「門外顧問との繋ぎだとよお”」

「ほらよ、書状持ってきたぞ」

デイーノは懐から出した書状をザンザスに投げ渡す。

それを開き、内容をぎつと目を通し、読み終わるとスクアーロに渡

す。

要約すると、今回の騒動に関してお咎め無し、そのままヴァリアーの任務頑張つて。というだけの内容だった。

予想内だったのでヴェロニカの反応はない。

「なあザンザス……」

「あ？」

「お前、九代目を本当に憎んでたのか？」

「……何が言いたい」

「あの後、研究班がゴーストモスカを調査したんだ……だが中身は軍が開発したものは全く内容が異なっていた」

「……」

「操縦者……いや今回は動力源と言った方がいいか？随分負担のない造りだったみたいでな」

確かに衝撃吸収マットレスあったもんな。

「それに九代目を診た医師がこのモスカの構造を見たら、軍の構造のまま作っていれば九代目は確実に死んでいたって言ってたからな……お前、そこまで分かってたのか？」

バレバレじゃないですかヤダー

にしてもやっぱり原作と違って九代目の体にガタが来ていたってことか。

多分8年前戦ったのが私だったからだろうなあ……

ゴーストモスカ改良しててよかったと心底思ったヴェロニカだった。

「途中で死なれて計画がとん挫しちや楽しくねーだろ……」

「……ま、これからも腐れ縁としてよろしくなザンザス」

デイーノは快活に笑う。

「ちゃんと九代目の見舞い行って来いよ！すっげえショック受けてたからなー」

それだけ言うと、デイーノは帰っていった。

部下を付けていなかったが、果たして彼はちゃんと帰れるのだろうか。

部屋にはスクアーロとヴェロニカしかいなかった。



「お咎め無しでよかったね」

「ふん、それより入江……聞きたいことがある……」

「何だい？」

「私たちはこの体に憑依している身だ、お前はスクアアールの感情を感じたことはないか？」

「スクアアールの？……ああ、過去に数度だけ……今はもうないよ」

「どんなときにあったんだ？」

「最初は君が眠りについて直ぐの頃……任務で重症負ってね、もうダメだ死んでしまうつて時だったかな」

「……」

「いきなり体の中から、こう……俺はこんなところで死ぬわけにはいかねえんだ！……ってスクアアールの幻聴みたいなのが聞こえると、それまで動かなかった体が少しだけ動かせるようになってね……必死に本部に帰った時があったなあ」

「そうか……もうないんだな……」

「うん……何かこう……受け入れたって感じかな……スクアアールの体を借りてるわけだし、なんか彼も僕の一部というか……僕が彼の一部というか……」

「不思議なものだな」

「ヴェロニカちゃんはあつたのかい？」

「一度だけ……8年前のあの日に……九代目と対峙している時にな」

「え……」

「オツタビオの虚言を信じた九代目が心底憎くなったんだ……自分でも分からない程、憎くて、虚しくて……それが怒りとなり飲み込まれるように……自分が自分でないような感覚に襲われた……」

「それって……ザンザスの……」

「ああ、あれが父の怒りだ……怒りとして全てを消化するしかなかったんだ……それしか父には方法が分からなかったんだろうな」

「ヴェロニカちゃん……」

「父の過去は知っているから仕方ないとは思っている……が、少し……胸が痛いな」

それからヴェロニカが喋ることはなかった。

この身を滅ぼしかねない怒りに身を委ねることがどれだけ怖かったことか……

?ヴェロニカ……お前は俺のようになるな……?

パパの言っていたのはこのことなの?

憎しみと怒りに身を委ねるような人間に……

憤怒の炎が心の底から溢れ出てくるようなあの感覚を覚えるなど

ズキリと痛む胸に手を当てながら今よりも少し低くなった父の声を思い出した。

スクアード side

ヴェロニカちゃんを一人にしてあげたくて、幹部の人達には誰も入らないように念を押して、僕はホテルを出る。

今回のクーデターに関しては、何もお咎めが無くてよかったと心底安堵した。

にしても、僕はこれから10年後に向けて強くならなければならぬ。

白蘭さんや真6 弔花に勝てる様に、今からでも可能な限りの研究をして、対策を立てなきゃいけないんだ。

特にこの時代からでも匣兵器は作るべきだろうか……任務の合間に進めていた発明品を今度ヴェロニカちゃんに渡してみよう。

入江はそのまま歩いていると、再び駄菓子屋を視界に入れ、そこに入っていく。

ベルが気に入ったふがしと、マーモンやレヴィが食べていたタマゴボーロを購入する。

その他にもアイスやマツタケの森などを買い込み、ご満悦で店を出

る。

アイスの袋を破り、食べ歩きをしながら並盛を散歩する。すると、またもや曲がり角で人とぶつかる。

ぶつかった者は尻もちをつき、入江は内心慌てる。

「おい、悪いな…大丈夫かあ」

「い、いえー！こちらこそよそ見しててっ」

そこには茶髪で、ヘッドホンを首にかけている学ランの入江正一がいた。

ぼ、僕ううううううう!?!

まさかの自身へのエンカウントに驚くスクアアロと、ぶつかってしまったのが外国人でしかも眼つきの悪い銀髪の人でビビりまくる入江がいた。

スクアアロは手元に持っていたアイスがなくなっていることに気が付き、入江のシャツを見るとそこにべっとりついていていた。

「悪い…ぶつかった拍子にアイス付いちまって…」

「え!?あー！いいえ、だだだ大丈夫です!」

入江のおどおどした態度にスクアアロは悟る。

あ、この僕今ゼったスクアアロにビビってる。

うん、だって僕も街でぶつかったのがこんな長身の銀髪外人なら怯えるし

でもまだ何も知らない僕ってこんなに怯える子だったっけ…だったね、うん。

しみじみと自身の過去を見るスクアアロに、入江は急いで立ち上がる。

「ああああの、アイスごめんなさい！わざとじゃなかったんです!」

「ああ、いや…俺もよそ見してたし…:あ」

「え!?!」

スクアアロは持っていた駄菓子やの袋から好物のふがしを取り出す。

「これ、詫びだあ」…受け取っとけ」

「え!?!だ、大丈夫ですよ!」

「いいから、おめーこれ好物だろお」

無理やり持たせると、スクアーロは入江の頭を撫でて去っていく。「あれ？何で僕の好物知って……」

入江の言葉はスクアーロには届かなかった。

入江は10年後にボンゴレ日本支部があるであろう場所まで行くことにした。

辿り着いたそこは何もなく、ただの草木の生い茂る森でしかなかった。

ここは真6弔花に位置を知られてしまっていたし、別の位置に移すべきなんだろうなあ

多分位置がバレたのって白蘭さんの能力でだし

他の場所を見て回っていると、夕日は傾き始め、そろそろ帰ろうかと来た道に戻る。

別の場所を探すよりも、基地自体強化した方がいいのかな……

そんなことを考えながらホテルに戻ると、入江はヴェロニカに尋ねた。

「ボス、いつイタリア帰んだ？」

「明日」

「了解」

これを幹部も聞いていて、皆了承していた中マーモンが口を開く。

「ねえボス」

「あ？」

「どうして彼らを殺さなかったんだい？」

「九代目がしぶとく生きていた…奴らを殺しても無意味だ」

「ボスは…まだボンゴレボスの座を狙っているって解釈でいいのかい？」

「……俺は気に入らねえ奴をカッ消すだけだ」

「気に入らないやつをカッ消す過程でボンゴレボスの座を手に入れられるならそれはそれでよし、ってことか……」

「ま、俺はボスの下が一番楽しいから、そのままでもいいぜ、シシッ」

「僕もここが一番給料いいからね」

「マーモンとベルはそれだけ言って各自の部屋に戻る。」

「ボス、俺はどこまでもボスについて行く…絶対だ」

「あらやだ、私だってずっとボスについていくわよん！」

レヴィとルツスーリアもそれだけ言うど部屋を出ていく。

部屋にはスクアアロとヴェロニカのみとなる。

「タマゴボーロ食べる？」

「食べる」

入江はヴェロニカに駄菓子を渡す。

「これから白蘭さんに向けて対策立てなきゃね…」

「そうだな」

「忙しくなるね」

「そうだな」

「僕もずっとヴェロニカちゃんについて行くからね」

「そうか…」

ヴァリアーは翌日の早朝、イタリアへ帰国した。

ヴェロニカ side

イタリアに帰ると、ヴァリアー本部では小部隊が先に帰還していた。

そして翌日からはそのままいつも通りに任務を遂行することになった。

今回の騒動で、ヴァリアーはボンゴレから再び独立した機関に復帰する。

それが嬉しかったのか、部下たちは宴会のようなものを開いていた。

ヴェロニカはあまり興味もなかったので、そのまま部屋に籠ってこれからの書類に目を通していた。

すると入江が入ってくる。

「ボス、奥使う」

奥、というのは研究室のことだ。

スクアードは執務室の本棚の隣に設置した研究室を虹彩認証で扉を開ける。

そのまま扉は壁になり、虹彩認証も不可視になる。

そして目を跨いだ<sup>また</sup>が、入江が出てくることはなかった。

ヴェロニカはそれが当たり前前にあつたので、何も言わずそのまま放っておいた。

それから二日後…

「ねえボス、スクちゃん見なかったかしら？」

「あ？」

「一昨日から見てないのよ…ほら今日はあの子任務入ってたでしょ？」

「つち、あのカス鯨が」

「皆知らないから困ってるのよね」

再び屋敷内を探しに行ったルツスーリアの言葉に、ヴェロニカは嘆息する。

まだ研究室籠ってたのか…

研究に熱中するのはいいが、任務をほったらかすとはどういう見だ

ヴェロニカは執務室へ行き、直ぐに研究室に入る。

「おい入江、お前今日任務——……………入江？」

広いとは言えない研究室には、資料と部品が床に散らばっていて誰もいなかった。

テーブルの上に置いてあつたパソコンを付けると、そこには三日前の日付が記されていた。

そしてそれ以降、何も記述はない。

ヴェロニカは研究室の辺りを見回すが、見慣れない機材ばかりでここで何を発明していたのかさっぱりであった。

ヴェロニカが研究室を出ようとドアのぶに手を掛けた瞬間、後ろからピコン、と機械音が響いた。

振り向くと、大きなスクリーン画面に数字が書かれていた。

「3?」

すると、数字が変わる。

『2』

ヴェロニカは首を傾げるが、次の文字を見た瞬間それが何なのか分かる。

『1』

「カウンントか…!」

周りを警戒して、銃を抜く。

『GO!』

スクリーンの画面に出ていた文字と共に、何とも言い難い感覚が襲う。

あ、これ知ってるわ……10年バズーカと同じ感覚……

ふと思う嫌な予感に頭痛を覚えるが、そのまま流れに身を任せる。

瞬きをすると、そこは同じ研究室だった。

だがよく見ると、先ほどと広さや機材や資料の配置が違うことに気付く。

そして目の前にあるパソコンを起動する。

するとデスクトップの下の方の日付を見ると本格的に頭を抱える。

「何で私が10年後に来てんだ……」

研究室を見渡して、何かないかと探し出すが無も見つけられず考え込む。

取り合えず入江探さすか…

そう思い至ったヴェロニカは研究室を出て執務室を出る。

そして廊下を歩いて、ヴァリアー本部を見渡していると後ろから声がした。

「ボス？」

振り向くと、そこには背の高くなつた10年後のベルがいた。ベルはヴェロニカを見るとこれでもかというほど驚いていた。

「は？え、何でボスまで若返ってんの？」

「10年前から飛ばされてきた」

「うっそ…マジか…」

「おいカス鯨もこっちに飛ばされてこなかったか」

「ああ、一応来てるよ…多分広間にいるんじゃない？」

そしてベルは広間に行く道中、この時代の状況を説明し出す。

ミルフィオーレのことは分かっているつもりなのであまり聞いていないが。

広間へ行くと、スクアアローは居らず、他の幹部がヴェロニカの姿に驚いていた。

「ああん！ボスも急に若くなってるうう！」

「ボスも10年前から飛ばされてきたのか!？」

ルツスーリアとレヴィと、緑色の髪をしている少年…フランがこちらを見つめている。

最初はフランを無視しようとしたが、そういえばこの身体じゃ初対面だということを思い出す。

「もしかして10年前のボスですかー？」

「てめえ誰だ」

「ミーはフランですー、前任の霧の守護者、マーモンって人の後任ですー」

「ふん」

マーモンはこの時点じゃ死んでるか、ていうかボンゴレ狩りが存在している時点で沢田も死んでるのか。

それより沢田綱吉達が未来に飛ばされて、イタリア主力戦まで確か一週間ほどあった気がするけど、今何時頃だろうか。

「つていうかー、スクアアロー隊長もボスも10年前から飛ばされてきてますけど、これ幹部全員時間差で飛ばされてきたりするんですかー？」



「……それはない」

だつて研究所の場所誰も知らないし。  
待てよ、この時代に匣兵器あるつてことは、ベスターに会えるとい  
うことか。

上手くいけば過去に持つてけるかな

「あ、ボス、この時代の兵器として一般化されている匣兵器というものがあつて——……」

レヴィが取り合えず一通りこの時代の武器やリングなどを説明して、ザンザスの匣兵器のことも教えてくれた。

さつき執務室行つたときによく見とけばよかつた。

ヴェロニカがそう思つていたら丁度、扉が開きスクアアロが入つてきた。

「う” おおい、アアロがこつちに来なかつたかあ”……つてボス？」

スクアアロはヴェロニカの顔を見ると驚いている。

「ボスも飛んできたのかよお”……」

「つち」

「う” おおおい、この時代のボンゴレ窮地に陥つてるらしいぞお”」

「るせえ、カス」

入江を無視して、部屋を出る。

多分直ぐに入江が追つてくるだろ……んでもつて説明させる。

執務室に戻ると、机の上に匣があり、ベスターを出そうとするがリングがないことに気付き研究所の中を探す。

探していると、リングがいくつか入っている箱を見つけたので中からランクA相当のリングを拝借して指に嵌める。

研究室を出て漸くリングに火をともし、匣に注入する。

するとベスターが出てきて一吠えする。

何度か撫でていたら扉が開き、スクアアロがどぎまぎしながら入つてきて、扉が閉まつた瞬間ヴェロニカは無理やり笑みを作る。

「おい、どういふことだ」

「あああ、ほんとごめん！何か僕も予想外だつたんだ！」

入江は謝りながら研究室のドアを開いて中に入つていく。

仕方なくヴェロニカもそれに続き、二人とも研究室の椅子に座る。  
「ええと、まず……この時代飛ばされたのはなんていうか……とつても……事故なんだ」  
「は？」

「僕が元の世界に戻れるようにバズーカの研究をしていて、その途中で10年バズーカみたいな機能の副産物が出来てしまったんだ……それを保管してただけで、ケーブルが多分センサーのアダプタに刺し込んだままだったのかもしれない……研究室を出る際に虹彩認証でセンサーを起動したと同時にその機械も始動しちゃって……」  
「つまりお前の注意不足と？」

「返す言葉ありません、ごめんなさい」  
「どうやら10年前に飛ばされたのは入江の開発途中の副産物のせいらしく、飛ばされて直ぐに入江は状況を理解したらしい。」

ただ沢田綱吉達とは違い10年後の体は過去にいつてるとのこと。そして研究室の記録から入江が10年後もこの研究室を使用していることから未だ私達は元の世界に帰れていないことが分かる。

中身が入江とヴェロニカだからこそ何も行動を起こさないと分かっていた、安心出来るようだったものだった。

「10年前に戻ったら覚えておけよ、今は白蘭と真6吊花のことを考えよう」

「そうだね……」

「このまま白蘭と対峙するのは面倒だな……一応匣兵器の扱い方は知っているけれどもベスターを使役するのは初めてだからな、制御出来るかどうか……」

「うん、僕もさつきアークを出してみたんだ……多分コンビネーション技とか全く出来ないと思う」

「っち」

「それでさ僕少し研究室に籠りたいんだけど……ダメかい？」

「何を作る気だ」

「決戦の時に、白蘭さんが他の人から吸収した炎が蓄積されたものが翼のように昇華したと聞いたんだけど……」

「ああ、あれか…」

「それで、その炎が凝縮したその翼を破壊すれば、結構な痛手になるんじゃないかな…って思ってた…」

「つまり？」

「内部から炎を発散させる物質を作りたいんだ…一応元の世界では炎の解明は出来てたし…多分作れると思うんだ」

「どれくらいかかる？」

「ええと…3週間は欲しい…いや3週間で作り終えてみせる！」

「分かった…だが、約一週間後のミルフィオーレ殲滅戦には参加しろ」  
「ええ…」

「少しでも匣兵器に慣れておけ、この時代の者達は段違いに強くなってるからな」

「そ、そうだね…分かった」

「それ以外、何とか他の奴等を誤魔化しておく」

「ありがとう！ヴェロニカちゃん！あ、あとこの時代のリングなんだけど…」

「さつき研究室の中探ってたらランクAのリング見つけたから大丈夫」

「分かった、じゃあ僕は研究を始めるね」

その場での過ごし方が決まり、早速入江はパソコンを開き始める。

ヴェロニカは研究室を出て、外で待っていたベスターを撫でる。

取り合えず、ベスターと親睦でも深めるか…あと修行しようかなあ

…

よし、思い立ったが吉日って言うもんね

ヴェロニカはすぐさま広場へ向かい、扉を開け放つ。

中にいた幹部は一齐にこちら向き、ルツスーリアが反応した。

「ああんボス！何かあったかしらあ？」

「てめえら全員表出ろ」

「「「え」」」

「肩慣らしにお前ら全員を相手してやる」

この後ベル、ルツスーリア、レヴィ、フランがフルボツコにされたのは言うまでもない。

## Veronicaの提案

満月が見える夜を背景に、ヴェロニカは低い声で言い放つ。

「いいか、見つけ次第殺せ」

「了解」

10年後に飛ばされて4日経つ頃、ミルフィオーレのヴァリアー奇襲作戦を知り、奇襲返し作戦を立てていた。

因みにスクアアロも作戦隊長として戦闘に参加しており、ヴェロニカは8年ぶりにスクアアロの作戦を立てる姿を見る。

スクアアロの立てていく作戦に反対する者はいなく、よく考えたらこいつミルフィオーレの司令塔だったなあと思いつく。

作戦の説明が終わると、冒頭の言葉と共に敵の古城へ攻め込む。

古城へ足を入れると同時に銃を構え、人に向け撃ちまくる。

スクアアロは研究室に籠り過ぎて体が訛っているせいか、それとも殺しを極力したくないのかヴェロニカの近くでスローペースで敵を狩っていた。

多分後者だろうと思いつつ、目の前の敵を葬る。

一階を制圧し、通信機でベルとフランからの制圧報告が入る。

そして少し遅れてルツスーリアとレヴィから三階の制圧報告が入った。

ヴェロニカはレヴィの用意した上質の椅子に座りながら、敵の部隊が攻めて来るのを待っていた。

多分今頃、沢田綱吉達はメローネ基地で入江の仲間入りって場面だろうな：

丁度いいところでスクアアロの通信機に他の隊の者から連絡が入る。

敵が森へ攻め込んできたのでこちらも四方に隊員を散りばめ守る為幹部を呼ぶ。

そこでもレヴィとフランが喧嘩になっていた。

ルツスーリアがレヴィを宥めスクアアロに声を掛ける。

「で、皆の配置はどうするの？スクアアロ作戦隊長」

「レヴィとルツスーリアは城で待機、何かあればサポート。俺は東の抜け道を守る……南はフランとベルだ。雑魚は連れてけ」

スクアアロの言葉にベルが嫌そうな顔をし出す。

「げ…俺がフランのお守!?!」

「嫌なのはミーも同じです…あいつ嫌なタイプです。前任のマーモンって人の代わりだとかで、こんな被り物強制的に被せられるのも納得いかないしー」

「スクアアロ作戦隊長、任務中あのカエル死ぬかもしれない。俺の手によって」

「う」 おおおい!ふぎけてねえで早く行きやがれ!」

スクアアロはフランとベルを怒鳴り散らす。

南の方角に向かった二人を見送ると、彼も東の方角に向かって飛び立つ。

ルツスーリアとレヴィは城の外で周囲を警戒する。

そんな中ヴェロニカはというと、ベスターを匣から出して密かに本部から持ってきたお菓子を摘まんでいた。

ぶつちやけベルのお兄さん来るまで暇なので、ベスターで時間を潰していた。

「ベスター」

名前を呼ぶと、ちゃんと来てくれるベスターにでれでれしながら頭や顎下を撫でまくる。

誰もいないことをきちんと確認してからベスターをモフっているので痴態を晒すことはない。

レヴィが用意してきた肉や酒には一切手を付けず、クッキーや紅茶を飲む。

肉が減っていないのも怪しまれそうなので、ベスターに食べさせる。

少し遠くの方で大きい騒音が聞こえ、本格的な殲滅戦が始まったと分かった。

通信機からもスクアアロが状況を説明していた。

空飛ぶ象がいるから気を付けてーみたいなのを言われ、ジルが来

るのだと分かると急いでクツキーを口に放り込んで袋を灰にする。

その瞬間、古城の屋根が吹き飛んだ。

ヴェロニカはザンザスの様に太々しい態度で穴の開いた屋根を見る。  
やる。

そこにはベルの兄であるジルが笑いながらこちらを見下してきていた。

「ふうん、お前がザンザスねえ…ただの不良集団の大將じゃねえか」

何かもう…潔いほどの雑魚臭を放つなあ……

ジルの煽りが全く耳に入っていないヴェロニカはどうやって倒そうか悩んでいた。

ここは一瞬で殺してあげた方がいいのかなあ…私パパみたいになメプして耳やられたくないし

全く聞いている様子のないヴェロニカにジルが腹を立て、傍の側近が様子見で攻撃を仕掛けてきた。

象が襲ってくるが、行動する前にベスターが石化させて灰にしてしまふ。

ベスター賢いな…ああ、これそのままベスターだけで倒せ………ないな、流星に無理そうだな。

ヴェロニカは心底面倒くさそうに、手のひらで光球を出しジルに向けて放つ。

これまた側近の者が匣兵器を盾に庇う。

ジルが自身の匣兵器で攻撃しようと、その炎を調和してダメージを無効にした。

「なっ、何で効いてねえんだ！」

欠伸をするベスターにジルは何が起こったか分からず困惑している。

側近も流星に解説出来ず、再び匣兵器を出す。

すると少しだけ多めにベスターに炎を与えると、ベスターが広範囲に咆哮した。

すると側近のハゲや、周りにいた側近の匣兵器とジルのコウモリ達が次々と石化して灰になっていく。

ジルはまだ混乱している！

というテロップが出てくるが、ヴェロニカは焦るジルの言葉を待たず銃で大きめの炎をぶつ放す。

ギリギリで躲したジルは、形勢が不利と悟ったのか撤退する素振りを見せるがベスターが再び咆哮し、ジルの足から徐々に石化していった。

命乞いするジルに向かって、若干多めに炎を溜めた銃弾を撃ち込むと憤怒の炎で一帯が明るくなる。

たくまやくつてか、笑えない：

少しすると、ルツスーリアが寄ってきた。

「ああん、ボスったらもう殺しちゃったの？」

くねくねしながらすり寄ってくるオカマを無視して、ヴェロニカは通信機に耳を傾ける。

『う』 おおい！ボス！狩り終わったぜえ！』

『隊長うるさいですー、もう少し音量抑えてくださいー』

『ボス！このレヴィ・ア・タン！敵を倒しました！』

『うるせえ』

皆無事そうだったので、取り合えず通信機を耳から外し地面に放り投げる。

少し経つと幹部が揃い、スクアアロが日本支部へ連絡をしていた。

「う」 おおい、日本支部には連絡したぞ…これからどうすんだボス」

「まだイタリアに残党がいるはずだ、片っ端から殺してけ」

それだけ言うと、椅子から立ち上がり本部の方角に歩いていく。

ヴァリアー本部へ着くと幹部達は広間でいつものように寛ぎ始める。

「残党の排除はレヴィとルツスーリアでやれ」

「分かったわあ」

「分かった…だが何故こいつらは何もないんだ」

スクアアロから指示されたレヴィはフランとベルを指差し不満そうに言い放つ。

「お前らがこいつらより討伐が少なかったからだあ」…それと俺はこ



れから単独任務で長期間いねえからなあ」

「単独任務って何ですかー？」

「てめえらに言う必要はねえよ、ちゃんと本部守ってる」

「ちえー」

フランの問いかけに答えることなく、スクアアロはその場を去っていく。

そのまま執務室に入り、周りの気配を探り終わるとヴェロニカへ声を掛ける。

「ヴェロニカちゃん、僕はこれから研究室に籠るね」

「分かった」

「でも何だろ……何か忘れてる気が——……」

入江の言葉と同時に扉がノックされ、すぐさまスクアアロに切り替える。

扉を開けてきたのは一般隊士で右手には書類を持っていた。

「失礼します、先ほど日本支部から送られてきた資料です」

そいつはそれだけ言うと、資料を渡して下がっていった。

スクアアロと共に資料を見ると、それはボンゴレ10代目達、いわゆる沢田綱吉一行のメローネ基地攻略レポートだった。

「そういえばこんなの送ったね」

「今頃全員チョイスに向けて修行して……」

「あ、山本武……」

ヴェロニカとスクアアロはお互いの顔を見る。

「忘れてた……僕、彼の修行手伝わなきゃいけないんだった」

「……………いや」

肩を落とす入江にヴェロニカは考え込む。

少しして、顔を上げて入江に言い放つ。

「私が日本へ行こう、お前はそのまま開発に集中してくれ」

「え!?ヴェロニカちゃんが山本君の修行を手伝いにいくの!?!」

「お前に剣術を教えたの誰だと思ってるんだ……どのみちこれから10日くらい時間が空くだろうしな、丁度いい時間潰しになる」

「時間潰しって……でもザンザスがスクアアロの代わりに行くって何か

おかしくないかい？」

「別に暇潰しって言えば通じる気がするがな……それに本来の父との性格の違いは段々と出てきているからそこまで違和感あるか？」

「えええ……で、でも……いやそれで山本君が強くなれるならお願いした方がいいよね……」

「つてなわけだ、今から個人ジェットで行ってくる」

「え!?今から!？」

「時差と移動時間考えれば、今からじゃないと間に合わなくなるだろ」「そうだけど、他の皆にはなんていうの？」

「言う必要ないでしょ、最終的に皆日本に行く予定だし……ただ先に私だけ日本に行くってだけで」

「大問題だよ!」

「取り合えず、跳ね馬には私から連絡しとくから、お前は早く開発に取り組んで」

「そ、そんな……分かったよ……」

入江は不安そうな表情のまま、研究室に入っていった。

ヴェロニカはそのまま携帯を取り出し、ディーノに連絡する。

山本武 side

「山本、お前はパスだ」

「え!？」

これからチヨイスに向けて修行するにあたって、ディーノが各自に練習内容を教えていく中俺はパスと言われ驚く。

折角ツナ達を守る為の心の整理が出来たというのに、自主練のみになったことにガツカリした。

「お前にはとある指導者がつく予定だが、一日遅れてここに到着する予定だ」

「指導者?誰だ?」

「来てからのお楽しみだな、じゃお前ら修行に取り組んでくれ!」

皆が散らばる中、俺は自主練しようと部屋を出るところでリボーン

とデイーノの会話が耳に入ってきた。

「おい、山本の指導者って——じゃねえのか？」

「それが俺も予想外でな……」が直々に来るらしい」

「——が？それは本当か？」

「な、意外だろ……俺も聞き間違いと思ったけど、本人曰く暇潰しらしい」

「奴らしい理由だな、だがこれほど頼りになる奴はいないだろ」

「まあな」

「一体誰だろうか？」

暇潰しで来るとか言ってるが、本当に強くなれるのか疑問だ。

まあ俺は俺が出来るだけのことをすればいいか！

俺は前向きに考えることにして修行初日は自主練をして過ごした。

夕飯の時間になり、皆で食べているとツナや獄寺が俺の指導者について話していた。

「にしても山本の指導者って誰だろう……」

「俺も気になるのな」

「つけ、何でこいつだけ……」

「まあまあ……でも山本の指導者ってことは剣士かな？」

「だと思っけど……どうなんだろうな」

「剣士……つつたら……スクアアロとかしか知らねえな」

「確かに……もしかしてスクアアロだったりしてな」

「ないだろ、あいつは今イタリアにいんだぞ」

山本の予想を獄寺が一蹴し、再び食べることに集中する。

そして俺たちはこの予想を上回る人物がくることを知らなかった。

翌日もまだ俺の指導者は遅れると言われ、そのまま自主練で時間を過ごし、夕飯時に色々なことを聞いた。

笹川京子がアジトを抜け出したけど、ツナがそれを追いかけて詳しく説明したとか、三浦ハルにも説明してしまったことなど。

夕飯を食べ終え、モニターのあある会議室へ獄寺、笹川、ツナと俺が向かっていた。

「そういえば山本の指導者まだ来ないの？」

「え？ああ、今日中に来る予定だったんだけど…来なかったのな」

「えええ、大丈夫かなあ…」

「まあ一人でも出来ることあるから大丈夫だろ」

会議室へ入り、リボンとツナが話しているといきなりモニターがハッキングされ、白蘭が映る。

そこでは6日後、過去から来たものは全員並盛神社に集合とだけ伝えられモニター通信は切れる。

笹川兄がツナに怒って殴り出す事態があつたけど、なんとか収まる。

皆一様に不安を隠せないまま、会議室を出て広間に戻ろうとした。

廊下を歩いていると笹川京子とすれ違い、俺に声を掛けてきた。

「あ、山本君」

「ん？どうした？笹川」

「さっき、山本達の知り合いが来ててね、今キッチンでおもてなししてたの」

「え？知り合い？」

「うん、山本君に用事があつて来たって言ってたよ」

「え、今もキッチンいるのか？」

「うん」

「ありがとな、笹川」

会話が終わると、笹川はそのまま廊下をまっすぐ行き突き当りで曲がっていった。

「知り合い？誰だろ…」

「この時代の俺たちの知り合いなのかな？まあ行ってみようよ山本」  
「そうだな」

「もしかして指導者かもしれないし」

山本、沢田、獄寺、笹川はキッチンへ足を運ぶ。

キッチンのドアを開くと、目の前の光景に誰もが目を疑った。

黒を基調にサイドにベージュの切り替えのあるコートを羽織り、特徴的な髪飾りをしていて、腰には剣を差し、頬に大きな傷跡が残っている男が椅子に座りパフェを食べていた。

「ザ、ザンザス!?!?!」

笹川先輩だけ名前を思い出せないようで、あの時の!と大きな声で叫んでいた。

目の前のザンザスはうっとおしそうにこちらに視線を移し、そのまま俺と目が合う。

「ようやく来たか…山本武」

「え、あ!もしかして俺の指導者って…ザンザスなのか!?!」

「ええええ!?!」

「マジかよ!」

ツナと獄寺がとても驚き、声に出ていた。

だが俺は、ザンザスが10年前と変わっていないことに気づき、問いかけた。

「あれ?何であんた10年前と変わんねーんだ?」

「あれ!?確かに!」

「何でてめーらに言わなきゃいけないんだ、黙れカス共」

「ひいひいひいひい」

「てめっ、十代目に向かってなんて口聞きやがるんだ!」

「待って獄寺君、喧嘩腰はやめて!」

ツナが血相変えて獄寺に縋りつく。

確かに、今このアジトで一番強いと言えばザンザスかもしれないもんな、と正直に思った。

ザンザスはパフェを平らげ、椅子を立ちあがり俺たちの方へ向かって来た。

咄嗟にザンザスを避けると、ザンザスはそのままキッチンから出ていく。

出る際に一言呟く。

「ついでにい、山本武」

「え、あ、ああ!」

俺は、ツナと獄寺、笹川先輩を残して、ザンザスについていった。

訓練出来る場所へ向かっているのだと思ひ、途中で喋りかける。

「なあ、何であんた変わんねーんだ?」

「てめーらとは別経由で飛ばされた」

「え？じやあやっぱあんたも10年前から来たのか…」

もう一度聞くと答えてくれるのか、それとも一対一だから答えるのか分からないが、そのまま言葉を続ける。

「スクアードだと思ってたぜ」

「カス鯨は別任務だ」

「そういえばあんたも剣を扱えるんだよな…」

リング争奪戦でツナ相手に最後剣を使って相手していたのを思い出す。

凄まじい剣捌きに、どっちの武器がメインなのか分からなかった。空いてる訓練所のドアを開け、ザンザスは鍵を掛ける。

訓練所の壁に嵌め込まれている機械を扱い始め、俺は何をしてるか分からなかったが数分するところを振り向く。

「今日はお前の力量を測るだけだ」

「おう、何すんだ？打ち合いか？」

「そんなもんだ、構えろ」

思っていたよりもちゃんとした指導をつけるらしく、意外なことばかりだった。

ツナとの戦闘を見ていた俺はザンザスの剣の力量を大体知っている。

だから剣を片手で構えたザンザス相手に遠慮なく全力で打ち込んだ。

数分打ち合いをして理解したことがある。

全然歯が立たない……！

こちらの全力の攻撃すらも全く堪えておらず、余裕の表情で防いでくる。

幻騎士よりも大きな壁に思え、俺は武者震いしながらもザンザスに突っ込む。

型や匣兵器を使った連携技を使いながら攻め込むが、避けられるか防がれるかでザンザスに疲れた様子はない。

「はあ……はあ……やっぱ…強えな…」

「てめーは弱えな」

「つく…まだまだー」

ザンザスの言葉に歯を食いしばりながら、スコントロ・デイ・ローンティネ 燕 特 攻を繰り出す。

刃先がザンザスへ届くというところで、意識が飛んだ。

ヴェロニカ side

訓練所でヴェロニカは山本と打ち合っていた。

まだ剣を握って直ぐの割にはぶれていない山本の剣筋に目を見張るものがあるものの、粗が見える。

ヴェロニカは、元の世界のスクアードを思い出し、今の山本と比べるがまるで話にならない程実力が離れていると思った。

まあ一年も経たずにここまで振れるとなると称賛ものではあるが、生憎ザンザスの姿をしている今彼を褒めることはない。

何度か型を使ってくるが、予備動作が分かりやすい為すごく防ぎやすいのだ。

これも修行中に直さなければと考えながら、山本の剣術の粗探しをする。

いくつかの指摘点を見つけると、今日はこれで引き上げようかと思っていた時、山本が口を開く。

「はあ…はあ…やっぱ…強えな…」

「てめーは弱えな」

「つく…まだまだー」

ヴェロニカの言葉に意地になる山本は匣兵器とのコンビネーション技を繰り広げた。

だが切っ先がヴェロニカに当たる直前で、上体をねじり足を振り上げ山本の顎を蹴り上げた。

カウンター攻撃にすんなりノックアウトした山本を見下ろし、ため息を吐く。

ヴェロニカは気絶した山本を放置して、先ほどの壁に埋め込まれている機械を扱います。

さきほど、こちらへ入室する際監視カメラがあるか確認していたのだ。

それを後で見返し、他に直す点や指摘する点を見つければと思っていた。

どのみち今夜はもう風呂へ入り寝るだけなので、山本はそのまま放ってヴェロニカは広間へ行く。

そこには沢田綱吉やその他の者もあり、中には入江正一もいた。

ここで本来の通りスクアールが来ていたらと思うと、少しだけ気になった。

それよりも急に現れたヴェロニカに皆が固まっている最中、リボーンが動き出す。

「おいザンザス、山本はどうした」

「伸びてる」

「そうか、にしてもお前が剣を教えるなんて何考えてやがるんだ」

「暇潰しだ」

「どうか何でおめーも10年後に来てんだ？」

「ま、待ってくれ！」

リボーンとザンザスの会話に入江が慌てたような驚いたような顔で入ってくる。

「どうした入江」

「ザ、ザンザスまで10年前から来たって言うのかい!？」

「ああ、どう見てもこの間戦ったばかりのザンザスにしか見えねーぞ」

「そんな、どうやって来たんだい!？僕達の持てる最新技術で綱吉くん達をこの時代に飛ばしたんだ…ヴァリアーにもそれ程の技術者がいるのかい!？」

「るせえ、黙れ」

「ひいつ…」

「で、どうなんだ？」

「ふん」



「他にこの時代に飛ばされたやつはいねーのか？」

これ以上答える気は無く、そのまま口を閉じているとリボンも質問を諦める。

その後はビアンキがザンザスを部屋へ案内した。

ザンザスはシャワーを浴び、先ほどの監視カメラで撮った山本との撃ち合いの動画を眺めている。

ぶっちゃけ何も出来なかった入江を当時のスクアアローレベルにまで育てれたし、山本とか楽勝だろ。

にしてもやっぱりザンザスが指導者とかないな

でもまあ、入江は今手が離せないし：仕方ないか

私が山本に剣を教えるなんて：何が起ころるか分かったもんじゃないな

動画を切り、ヴェロニカは瞼を閉じた。

## Veronicaの指導

翌日の朝、ヴェロニカが昨夜の訓練所へ向かう途中、廊下の曲がり角から声がしてきた。

それは沢田綱吉と山本の声だった。

「おう、ツナおはよ」

「や、山本！おはよう…昨日は大丈夫だったの？」

「ん？」

「ほら、ザンザスといきなりどつか行つてたけど…」

「ああ！俺の実力知りたいからって打ち合いしてたんだ！全く歯が立たなかったけどな」

「ええ、山本でも歯が立たなかったの!？」

「でもこれから沢山吸収して強くなってやるんだ」

「え、えつと…それならいいんだけど…」

二人分の会話が近くづいていき、曲がり角を曲がると声の主と盛大に鉢合わせる。

「うわっ、ザ、ザンザス…」

「お、ザンザス！探してたんだ、いつから修行するんだ？」

「5分後に昨日の場所へ来い」

「了解」

始終ビビっていた沢田を無視して要件だけ伝え、そのまま通り過ぎる。

5分後、訓練所に向かうと既にそこには山本が体を解していた。

「いよ！今日は何するんだ？」

「最初はリングの炎のコントロールの訓練だ」

「え？打ち合いじゃねえの？」

「剣術も無駄な動きは多いが、それ以前に炎の使用効率が悪すぎんだよドカス」

「効率？」

「1で済ませられるものを、お前は5で消費してる節があるからな…体力切れを起こしやすくなる」

「へえ…んで俺はどうすればいいんだ？」

「リングに炎を灯せ」

「おう」

「それを消しては灯してを繰り返せ、出来るだけ早くだ」

「お、おう？」

いつそのこと、休業期間全てで山本を魔改造してやろう。

それが、今回のヴェロニカの目標だった。

さきほど言ったように、山本だけでなく他の奴等も炎の使用効率悪すぎるんだよ。

まあ短期間で戦えることだけ考えていて、炎の効率なんぞ考える暇はなかったと思うが、それをするかしないかで戦況は大きく変わる。

特にコントロール力においては、鍛えると鍛えるだけ察知能力が向上する。

山本は基本感覚派ではあるが、思考力が低いわけではない。

言うならばバランスのいい戦闘スタイルなのだ。

剣士としては一級品のセンスがあるだろう、それに覚悟と経験が重なれば、恐ろしい程強くなる。

目の前の山本はリングに集中していて、最初と比べて炎を灯す感覚が早くなっている。

直ぐにコツを掴んだ山本の才能は目を見張るものがあり、今も段々感覚が狭まっていく。

スクアア口が勿体ないと思ひ指導を付ける意味が今なら分かる。

こいつは、剣士として育てたくなるわな、そりゃ。

「な、なあ…これ一体どれくらいの感覚まで短くすればいいんだ？」

数十分経つてくると、少し飽きてきたのか山本が問いかける。

ヴェロニカは仕方なく、自身のリングに炎を灯す。

そして消しては灯す感覚を徐々に早め、最終的にずっと灯しているかのように見えるまでになる。

「最終的にこれくらいにはなれ」

「え、これ今も消して灯してんの!?ずっと灯してるようにしか見えねえ！」

山本は目標が明確になったことで、再びリングに集中し出す。それから数十分経ち、そろそろ山本の集中力が切れかけてきたので一旦止めさせる。

「それは毎日最初に練習するくらいでいい、刀を構えろ」

「え？お、おう！」

いきなり剣を抜くヴェロニカに焦るように山本も刀を構える。

「お前の直すべきところは指摘する、それを意識しろ」

「分かった」

山本は真剣な表情になり、刀をヴェロニカに向ける。

そして最初から型を使いながら攻めてきた。

さて、ここからどれだけ強くできるのやら…

ヴェロニカも剣を振るった。

数十分後、倒れたのは山本だ。

どうやら体力が底を尽きたらしく、ヴェロニカはストップウオッチを見る。

『20分46秒』

ハッキリ言って予想以上に短かった。

まさかアニメ一本分しか体力ないとは…

チヨイスとか10話くらいあるんだから頑張っただけ欲しい。

目の前の山本は息切れを起こし、足に酸素が行っていないのか震えている。

途中で指摘した場所は、数度打ち合いしていく中で直そうとはしていたようだが、直ぐに戻ってしまっていた。

こればかりは時間がかかるもので、仕方ないとは思っている。

「はあ……はあ……」

ずっと肩で息をしている彼を見る。

パパの体って不思議、全く疲れないんだな…

いやまあ炎や体力の消費を最小で抑えて戦っているから、これくらいで疲れはしないが。

数分するとようやく息が整って来たのか、山本が口を開く。

「あ、あのよ…あんたとってもスクアールと剣術が似てるんだけど…

スクアアロから教わったのか？」

全くもって遺憾である。

いや元を辿ればスクアアロだけど！

この世界のスクアアロ：否、入江には私が教えたのだ。

「逆だ」

「え？」

「俺が奴に教えた」

「じゃあザンザスは剣がメインだったのか？」

「違え」

「はは……マジか」

なんだかショック受けてるみたいだが、多分あと数年すれば君の方が剣術は上になると思う。マジで。

安心して強くなって欲しい、切実に。

「なあ……俺は弱いか？」

「ああ」

「そっか……」

初心者にしては強いよって言いたいけど、ザンザスはそんなこと言わないし私も言わないと思う。

確かこいつまだ剣握って二か月とかでしょ？

ぶつちやけこいつの成長速度は半端ない。

流星レギュラーなだけありますわ。

漸く立ち上がった山本と再び打ち合いが始まる。

昼は笹川涼子に持ってきてもらい、そのまま訓練所に籠ること数時間、そろそろ寝る時間だと思ひ修行は切り上げる。

ボロボロの山本は歩くのがしんどいらしく、少し休んでから部屋に戻るようだ。

まああれだけフルボッコにしたのに喰らい付いてくるその意気やよし。

今日までこのアジトで修行して、明日から場所移すか。

森の中とかでいいだろ、雨属性の炎を感覚で捉えるのは森など自然が一番らしいし。

地面に横になる山本を見て、自身の体も少しだるさを感じた。どうやら私も久々に長期間体を動かして疲れているらしい。訓練所を出て、部屋に戻りシャワーを浴びるとそのまま爆睡する。

沢田綱吉 side

夕飯を食べている時にそれに気付いた。

「あれ？そういえば山本いないね…まだ修行してるのかな？」

「ザンザスの指導なので余程厳しいんじゃないでしょうか」

「あああ、大丈夫かなー山本…」

「少し見てみますか？まだやってるハズですし」

「えええ、ザンザス怒らないかな」

「その時は俺がお守り致しますよ！」

獄寺君の言葉は頼もしいけれど、ザンザス相手だと不安しか感じない。

俺は零地点突破を習得しても、ザンザスには勝てなかった。

それどころか、どこか余裕そうな表情で相手をされていたから、多分ザンザスの本気は俺じゃ敵わない。

つい最近俺たちを殺そうと襲って来て、でも理由があって、何も言わずにイタリアに去っていったヴァリアー。

最後は釈然としなかったし、ザンザスが九代目を本当に殺したいほど憎くて、復讐に俺を殺そうとしたって今でも違和感が残っていた。

ザンザスの怒っていた理由も全部露わになったけれど、本当にそれだけだったのかが分からなかった。

九代目の謝罪にザンザスが何を思ったのかは分からないけど、あの件は何事もなかったかのように揉み消されたって言ってたし。

やっぱりこの間殺してきた相手に、山本を任せるのは不安すぎる。特にザンザスは冷酷な仕打ちをした奴だから尚更…

考えごとをしていたら、頭に強い衝撃が襲う。

振り返るとそこにはリボンがいた。

「おいツナ」

「いったあ！何すんだよ！」

「山本が心配なら見に行けばいいだろ」

「分かってるよ…つたく…」

俺は頭を摩りながら、夕飯を食べ終わると獄寺君と一緒に山本のいる訓練所に向かった。

近づくにつれて金属の衝突音と、声が聞こえてきた。

「なんか聞こえますね」

「やっぱりまだ修行してたんだ…」

獄寺君と一緒にドアを少しだけ開けて中を覗く。

すると、そこには山本とザンザスが打ち合っていた。

山本が刀を振るっているのとは逆に、ザンザスは常に避け続けている。

「おい、下手くそなカウンター狙うよりフェイントを狙え、カス」

「ぐっ」

山本が距離を取り、匣兵器を出して攻撃に移る時、ザンザスが一気に攻撃に転じる。

表情を曇め攻撃をギリギリで防ぐ山本に対して、ザンザスはそのまま畳みかける。

「足」

「うおっ」

ザンザスが山本の足を蹴り、山本のバランスが崩れる。

ザンザスは敢えてそこに攻撃は加えずに、再び構えだすのを待っていた。

そして山本が刀を振り上げる。

「予備動作が長え」

「ぐあっ」

大きく振るったザンザスの攻撃に山本が飛ばされる。

一瞬山本に駆け寄ろうと体が動くが、それを抑える。

「集中切らすんじゃねえカス！」

「おう！」

二人の打ち合いを見て、息をのみ込んだ。  
十数分すると、山本が倒れる。

「ゼー……はー……はっ、はあ………」

ザンザスは訓練所の隅に置いてある椅子に座り、何かカメラのようなものを眺めている。

俺と獄寺君はそこまで見ると、そのまま訓練所を遠ざかる。

廊下で歩いている際、お互い無言だったけど、獄寺君が口を開いた。

「ザ、ザンザスの野郎……ちゃんと指導してやがりましたね」

「う、うん」

「なんつーか……意外でしたが」

俺たちがこうやって話をしてる間に山本はまだ修行をしてるんだ

…

体に鞭打って、今も汗水垂らして必死に立ち上がってる

「獄寺君、俺……もう少しだけ訓練してくる」

「お、俺も……自主練してきます」

俺達もまだ出来るんだ、まだ強くなれるんだ——

ヴェロニカ side

ヴェロニカです、修行を始めて六日経ちました。

多分今日チョイスだった気がするんだが……

目の前には匣兵器と連携技を鍛えている山本がいた。

そろそろ言った方がいいかな？これ遅刻しそうだし。

「おい」

「ん？何だ？」

「そろそろチョイスとやらの時間じゃねえのか？」

「え？あ！今何時だ!？」

「11時58分」

「えええ!?もう時間ねえじゃん!急がねえと!」



現在時刻を知った山本が焦りながら支度を始める。

走っても間に合わないのは分かっているので、山本は刀に炎を灯しその推進力で飛行して並盛神社に向かっている。

仕方ないので手向けとして、チョイス会場への転送に必要な炎は私が出してやろうと思ったヴェロニカは、山本の後をベスターに乗りながら猛スピードで追い、その間に炎を銃に溜められるだけ溜めまくっていた。

多分これ程までの大量の炎を絞り切ったことがないと言うほど銃に溜め込んだところで、そろそろ並盛神社が見えてきた。

何かすごく大きな白蘭の顔が宙に浮いてるんだけど、なにあれ気色悪っ！

山本と同時に沢田綱吉率いる守護者の立っていた場所に着地した瞬間、宙に浮いている白蘭の顔に向かって銃口を向ける。

隣にいた山本と沢田綱吉は目を丸くして、ヴェロニカの挙動に固まっていた。

「予定狂って残念だったな、カスが」

どうせ沢田綱吉達にここで疲労させるつもりだったんだろ、知っていた。

でも残念でした、私が全部持ってやるよ！

500万 F ファイアンマホルテージ Vなら最大火力出せばいけると思う、多分、きつと、メイビー。

白蘭の驚愕する表情に引き金を引き、銃弾を放つ。

橙色の禍々しい憤怒の炎が、衝撃波を描きながら白蘭の脳天にぶち当たる。

風圧が一带を包み込み周りの木々は勢いよく揺れ、沢田綱吉達も必死に踏ん張っていた。

そして数値は5,000,000を超え始める。  
「バカな……」

白蘭が呆然と無意識に放った言葉だろう、それに俺は口元をあげる。

ざまあみやがれ、このマシユマロ野郎！

にしても多すぎたかな…表示が5,000,000,000を超えて測定不能になってんですが。

流石に全部出し切った感あって、大きな疲労を感じるが、段々と体力が少しずつ回復していく様子にヴェロニカは驚き呆れる。

ここまで来ると、パパの体つてもはや神秘なのは…

その後白蘭がフィールドカードの抽選を行い、沢田綱吉が雷のフィールドを引く。

移動装置が光り出し、ヴェロニカ含むその場にいる全員が移動させられる。

移動中、山本がこちらに笑顔のまま声を掛けてきた。

「ザンザス！何か知らねーが助かったぜ！」

「施しだ」

「ありがとなー」

能天気な山本の笑顔に若干苛つくが、無視してそのまま浮遊感に身を任せる。

なんだか入江が有り得ないようなものを見る目でこちらを見ているが、この際気にしたら負けだと思う。

目の前が眩い光で覆われ、ヴェロニカは目を細めた。

浮遊感が無くなり視界が少しずつ見えてくると、そこは高層ビル群のど真ん中だった。

他の人達も転送された場所に驚きを示す。

「何度も会ってるような気がするけど、僕に会うのは初めてかい？綱吉君」

そこに白蘭が笑顔のまま登場する。

沢田綱吉達は皆一樣な反応を示し、白蘭は沢田綱吉の次にヴェロニカに視線をズラす。

「やあザンザス、初めまして、かな」

「…」

「君がこの場にいるなんて…中々予想外だったよ」

まあそうでしょうな、どの並行世界でもザンザスがチョイスの場にいる世界はなさそうだし。

「それに、何故君まで過去から飛ばされてきているのか……俄然興味が沸いた」

ものすごく見つめられていて普通の人なら怯む<sup>ひる</sup>んだろうけど、残念怒ったパパの方が怖いわ。

この世界線のザンザスという男はどの並行世界よりも異色を放っているだろうね

白蘭は視線を沢田に移すと、チョイスについて話し始めた。

そしてジャイロルーレットを取り出し、沢田と共にルーレットを回し始めた。

大空、嵐、雨が一人ずつ、無属性が二人と原作通りの人選になる。

そしてターゲットが入江になり、チエルベツロが登場しヴェロニカ達は観戦室へと移動した。

観戦室に入る前に近場のビルのガラスを銃弾で撃ち割って、中から社長椅子を拝借する。

椅子を手にしながら入って来たヴェロニカにディーノ達が驚くが、無視してそのまま観戦室の奥で椅子に座りながらモニターを見る。

チョイスが始まり、沢田綱吉とカブトの戦闘が始まった。

あー始まったかあ…

あ、入江忘れてた…

ヴェロニカは携帯を取り出し、イタリアの研究室に籠っているであろうスクアアロにかける。

少しのコールの後、覇気のないスクアアロの声が聞こえてきた。

『もしもし』

「…既にチョイス始まってるぞ」

『え』

「それと日本へ来るとき、あいつらも連れてこい」

『ちよ、ま』

それだけ言うとお話を切り、モニターを再び見る。

沢田綱吉がカブトの作った檻を石化していた。

数分後、沢田綱吉とカブトの戦闘が一段落すると山本のモニターに視線を移す。

見せてみる、山本…お前の成長を。

山本 side

曲がり角で囷の炎が揺れた直後、俺は走りだす。

すると、目の前の囷から触手が生え出して、俺に襲い掛かって来た。

?常に足元を意識しろ?

今までザンザスから口酸っぱく言われた言葉を思い出し、足元を横目で確認すると、地面に亀裂が走っていた。

直ぐに一歩下がると、先ほど立っていた場所には触手が地面から生えてくる。

「あぶねー…」

汗が頬を伝う中、目の前に猿と言われていた霧の守護者が現れる。

「今のを躲すか、山本武…：少なくとも最初の頃よりは強くなったと見える」

「最初？」

「これなら分かるか？」

俺の言葉に、猿という男の姿に霧がかかり、徐々にそれが晴れていくとそこには幻騎士がいた。

「お前は…：幻騎士！」

「俺との実力差は知っているな…：尽きのない男よ」

幻騎士は俺を見下しながら、剣を振り上げる。

そして振り下ろす直前に、俺は匣兵器に炎を注入する。

すると、小次郎と次郎が出てきて幻騎士の攻撃を相殺する。

「リベンジ出来るこの時を待ってたぜ」

「その刀を背負った犬が貴様のボンゴレ匣か」

「まあな」

?戦闘中は何も喋るな?

ザンザスの教えがなかったら、俺は普段の様に次郎と小次郎の紹介も、本当は四刀流だということも教えていただろう。

言葉の駆け引きをするには俺には早すぎるからと、取り合えず何も喋るな、必要以上に情報を与えるな、これだけは徹底しろと何度も念を押された。

「ふん、貴様があの時より強くなっていたからと言って俺に勝てると思うなよ！」

幻騎士が声を張り上げると同時に奴の眼力が一層険しくなる。すると空気中の僅かな炎の揺らぎを感知する。

俺はすぐさま刀の鑢を地面に向け、炎を放出して推進力で空中に移動しそれを回避する。

直ぐ傍で爆音がなり響き、俺は炎を一瞬で最大火力を放出し、幻騎士に接近し刀を振り下ろした。

このスピードもザンザスのお陰だ。

火を点けたり消したりする作業は、最終的に一気に最大火力へ引き上げる感覚を大幅に短くした。

加えてザンザスが出来るだけ探知力に力を入れながら鍛えてくれたおかげで、さっきの爆発物の存在にも気付けた。

そんな俺の修行の成果に、目の前の幻騎士は目を見開いて攻撃を防ごうとするが、防ぎきれなかった斬撃が幻騎士の頬と額の装甲ごと深く抉る。

幻騎士から離れると、攻撃が入ったことがショックだったのか奴は啞然として、次に怒り狂い触手を出した。

俺の周りは触手に包まれドーム状のようになる。

そして直ぐ上の方から、先ほどと同じような炎の揺らぎを察知しその場を飛ぶ。

流石に幻騎士本人に纏っている幻術は精度が違う為奴の居場所が分からず、小次郎に触手の上から鎮静の炎を少量ずつ降らせる。

見えない爆弾を避けながら、鎮静の炎の効力が出てくるのを待つ。すると、少しずつ他の空間とズレが生じている部分を見つけた。

「そこだ！」

俺は二本の柄を投げ、それは幻騎士の角部分に刺さる。

そして、幻術が解け幻騎士が可視状態になり一気に畳みかける。

？相手に反撃をさせる暇を与えるな？

ザンザスに言われた言葉通り、猛攻撃を幻騎士に畳みかけた。

幻騎士は驚く暇もなく俺の攻撃を躲したり防いだりしていく。

俺は小次郎とスピードを合わせて幻騎士に攻撃を続けながら、自然な動作で小次郎を形態カンビオ・フォルマ変化させる。

そこに言葉はなく、コンビネーションの特訓の成果でもあった。

俺の猛攻に焦る幻騎士は俺の刀が変形したことに驚愕している。

ザンザスから徹底的に、そして一番力を入れて鍛えてくれたのが、型までの予備動作の短縮だった。

何度も予備動作が長いと言われ反撃されてきて、何度も小次郎と技の練度をあげていたのだ。

悟られるな、自然に、気付かれる前に――！

攻式――

『真6 弔花や白蘭、そしてお前たちの弱点を言ってみろ』

『え、弱点……？』

『それが無ければ確実に戦力がガタ落ちするのが一つだけあんだろっ  
が』

『確実に戦力が落ちる？』

――八の型――

『リングだ』

――篠突く雨――

一瞬でスピードを最大火力まであげ、幻騎士に向けて斬撃を突き上げた。

ビッ

頬に液体を浴びるのを無視し、直ぐに目的のものに手を伸ばす。

生暖かいソレを手の中に収め、背後にいるであろう幻騎士から距離を取る。

さきほどの攻撃は、手に残る感触からして直撃しなかったことが分かっていたので警戒を解かず幻騎士の方へ振り向く。

そこには浅い傷ではあるが胸部からズレたところに傷を負った幻騎士が地面に膝をついてきて、その形相は言葉で言い表せないような、憎しみと怒りで満ちていた。

「きさ、ま……貴様あああああああ！」

幻騎士の剣を握る手の人差し指と中指が途中で切れていてそこからは血が止めどなく流れている。

指を失ったせいで剣を握る力が足りなくなったのか、はたまた痛み of せいのか、幻騎士の手から剣が離れる。

俺は握りしめていた手を広げると、そこにはリングを嵌めたままの血だらけな中指と人差し指があった。

指からリングを外し、リングをスーツのポケットに入れると幻騎士に視線を戻す。

そして俺は残酷な言葉を放った。

「まともに剣も持てないだろ…降参してくれよ」

剣士にとって指がどれだけ大切なものであるか知っていた。

だけれど、ザンザスの言葉が何故か自分の中に留まっていた。

『人を殺したくないテメーに、致命傷になるかもしれない攻撃で胴体を斬りつけるのと、指を斬り落として戦闘不能にするのに…選ぶ余地なんてあるのか?』

手の平に転がる幻騎士の指は徐々に熱を失い、俺の中で何かが凍えるような感覚だけが残った。

## Veronicaの思惑

ヴェロニカは山本と幻騎士の対決が始まるのをモニター越しに観戦していた。

山本が地面から生えてくる触手を躲すと、相手は自身を覆っている幻覚を解いた。

すると、リボーンとディーノが驚く。

「あれは幻騎士！死んだんじゃないのか？」

「あいつ…生きてやがったのか…」

幻騎士の攻撃を山本が匣兵器を出して防ぐ。

「あれが山本のボンゴレ匣…」

ディーノの言葉にそれぞれも反応する。

モニターには、小次郎と次郎が山本の傍に出てきていて幻騎士もそれに警戒を表していた。

幻騎士がウミウシを放つが当たる前に山本が回避した。

「山本の奴、スベットロ・ヌディブランキウミウシの位置を察知しやがった…炎の探知力が前とは比べ物にならねえくらい上がってやがる」

リボーンの言葉にディーノが意外そうな表情をする。

「それだけじゃねえ、飛行手段を用いて回避した際に炎の出力をゼロから最大まで瞬時に放出してやがる」

「瞬時に？俺でも難しいのに…山本の奴炎のコントロール力が上手くなってるやがるな」

「ああ、俺の予想以上の機動力だ」

リボーンが山本を褒めまくってるが、切実に私を褒めてほしい。

まああの短期間でこれ程までにコントロール力や探知力を上げられたのは、山本の天賦の才故だろうけど。

こちら何年掛けて地道にやってきたと思ってんだチクシヨ

山本の成長を傍で見ている、レギュラー補正を直に見せつけられたよ。

もう涙目だよ、うん。

モニターでは、山本が触手に囲まれ、ドームの中に閉じ込められて



いた。

中で爆発音が聞こえる中、ドームの上で小次郎が飛び回りながら鎮静の雨の炎を降らせていた。

そして触手の壁から幻騎士が吹き飛ばされてきて、バジルが啞然としている。

肩を斬りつけられよろめく幻騎士に山本は攻撃を畳みかける。

そしてよく見ていないと分からない程自然に、小次郎が山本の傍まで飛んできた。

リボーンが漸く気付き、驚愕している。

「なんて奴だ、自然な動作で匣兵器を形態変化カンビオ・フォルマしやがった！俺でさえ気付くのが遅れるくらいだぞ」

「ああ、俺も気付くのが遅れたが…山本のやつ、猛攻撃を休めずに幻騎士を押し切るつもりか？」

「そのようだな」

「匣兵器にも驚くが、それを使いこなす山本の成長が半端ねえぜ」

「ああ、今までにねえ気迫が奴の剣をこれまでとは別次元の強さにしてんな、一体何があったんだ…」

するとディーノがヴェロニカの方へ振り向く。

「選択を与えただけだ」

どんな障害が残るか分からない攻撃を繰り返すか、確実に相手の戦力を落とすに少しだけちよん切るか、二択を山本に与えただけだよ。

実はファミリーの中で山本は雲雀の次に容赦がない。

それは戦いを楽しむその心と、一度でも覚悟を決めれば容赦を捨てられるところにある。

今回も、山本からしたら少しだけ酷だろうが私は選択を迫った。

そしてそれを選択したのは山本だ。

ヴェロニカの言葉に首を傾げるディーノはリボーン言葉に視線をモニターに戻す。

「おいディーノ」

「え、っ！」

モニターには山本が攻式を使った場面だった。

「あれは攻式八の型、篠突く雨！」

「今回の修行で一番成長したのはあいつかもしれないな」

「ああ、そうだな……技の速さも剣の切れも段違いだ」

「それだけじゃねえ……」

「え？」

リボーンの言葉に後ろにいたバジルが反応する。

だが、その言葉がモニターに映される映像で理解する。

幻騎士が山本に向かって怒鳴り出し、山本は自身の握っていた拳を開く。

「あー！幻騎士の指がつー！」

「リングを嵌めていた指だけを斬り落としたのか……確かに少し前の山本じゃ考えられないかもな……」

シヨッキングな映像だったのか、ビアンキが笹川と三浦を部屋から出す。

「お前の入れ知恵か？ザンザス」

リボーンがヴェロニカに問いかける。

うん、まあ指ちよん切れって言ったのは私だね。

でも別に未来では人殺すんだし、今のうちにこういう切断系は慣れておかないとダメじゃね？

「俺は選択を与えただけ……選んだのはあいつだ」

「……そうか」

その場に居た者は再びモニターを眺める。

そこにはふらついなながらも無事だった左手で大剣を握り立ち上がる幻騎士がいた。

『まともに剣も持てないだろ……降参してくれよ』

『ふざけるなよ……これしきで……これしきで負ける俺ではないぞ！』

幻騎士は憤慨し、山本に向かって剣を振りかぶる。

だが山本に剣先が届くことはなかった。

『バカ……な……』

『剣士が足使っちゃダメなルールなんてないだろ？』

山本の蹴りが幻騎士の顎に直撃して、幻騎士は今度こそ意識を失い

倒れた。

ヴェロニカはそれを見て目を僅かに開く。

あれ私がめちやくちや山本にやったやつじゃね？

いつも打ち合いの最後らへんになると集中力切らしてくるから、蹴りや拳入れて気絶させてたんだけど。

痛み慣れのつもりだったのに、まさか覚えるとは…おっそろしい奴だなあ

あ、幻騎士に近付いて…：あーちゃんと関節まで外してるじゃん。

モニター越しの山本は幻騎士の手足の関節を外していつて、万一体力が回復しても動けないようにしていた。

うんうん、殺さない代わりに起きられないように関節外しとけつて言つて外し方教えてよかった。

何かデイーノやバジル、ジャンニーニの視線が痛いが無視だ。

山本は通信機に手を当て、方向を変えてバイクで走つていった。

多分、デイジীরところにいったんだろうなあ…でもデイジীরつて不死身だよな。

ああ、場面が変わる。

もうチョイスの行方に興味無くなつたし寝るか、どのみちボンゴレ側の敗北だろ。

ヴェロニカは目を閉じて浅い睡眠に入る。

だが十数分すると騒がしい声が聞こえ、目を開ける。

モニターを見ると、そこには腹部に穴を開けられた入江が倒れていてた。

あ、終わってる。

沢田綱吉が焦つて入江に近寄るがチエルベツロが静止する。

そして別モニターでは山本がデイジীরを気絶させていた。

デイジীরの指にリングがないことを見るとちちゃんと回収したようだ。

指輪を奪ったから再び真6吊花として戻ることはないと思うので戦力を削れてよかった。

だが打ち所が甘かったのかデイジীরが覚醒したことでミルフィ

オーレの勝利となり、ボンゴレ側は皆入江の場所へ集まり出す。仕方なくヴェロニカも後ろからゆつくりとついて行く。

ようやく視界にボンゴレ側の集団が見えると、そこにはユニに近づく白蘭がいた。

ロリコン死すべし慈悲はない。

ヴェロニカは銃を取り出し炎を溜めて白蘭の腕目掛けて放つ。

すると、予想外の方向からの狙撃に気付くのが遅れたのか腕に直撃する銃弾に驚いた白蘭がヴェロニカの方を向く。

「また……君か、ザンザス」

どうやら相当私の拳動が気に入らないらしい、めちやくちや睨んでくる

数多の並行世界を破壊し尽くしている奴だが、私が神になるをリアル体現した中二病な上にロリコンだと思えば全く怖くないんだがこれ如何に。

取り合えず、立ち止まり白蘭と目を合わせる。

「僕の邪魔をしないでくれるかい？今は虫の居所が悪いんだ」

「うっせえロリコン」

おっとつい本音がっ……おい山本笑うな

目の前の白蘭はニコニコしてるけど、目が笑ってない。

その後ユニと白蘭の会話が続き、ボンゴレ側が撤退する方向へ状況が向き始めた。

すると桔梗やザクロがユニを狙ってきたが獄寺が匣兵器を開匣し、対応する。

皆は転送システムの場所へ走りだすと、真6弔花はそれを阻止する為に動き出した。

ヴェロニカは獄寺に向かって声を掛ける。

「おいカス……てめえだ爆弾魔」

「ああ!?!誰が爆弾魔だ!!」

獄寺がキャンキャン吠えてくるが、それを無視して離れる様に言い放つ。

「退け」

「あ？」

「巻き添え喰らいたくなけりやな」

ヴェロニカは腰に差していた剣を抜き、憤怒の炎と大空の炎を剣に纏い出す。

それを見た獄寺は何かを察したようで匣兵器を戻し退避し出す。

少し規模大きくて疲れそうだけど、さつき観戦室で十分に休んだから大丈夫だと思いたい。

ヴェロニカは大量の炎を溜めた剣を振り上げた。

すると炎はとてつもない勢いで壁を作り出す。

剣を腰に差したかと思えば今度は銃を取り出して1発ずつ放った。

放たれた銃弾は炎の壁を螺旋状に掛け上り、壁の表面に細微な炎を纏うと壁の方に吞まれて見えなくなる。

それは、ヴェロニカが元の世界で過去に行つたとき、ザンザスと自身を囲った炎の壁と同じものである。

壁は広範囲に渡り白蘭達ごと飲み込み、ドーム状に形成する。

長年の修行である時の壁よりも数段グレードアップしたそれを、いくら白蘭でも解くのは時間がかかるだろう。

精密に憤怒と大空の炎を編み込んだことで強度は硬く、強行突破するにはそれなりの炎の量が必要になる。

因みに銃弾で炎の壁にコーティングした憤怒の炎は少しでも触れれば爆発する仕組みだ。

あ、でも真6弔花が全員修羅開匣して白蘭が本気出したら直ぐに破られるかも。

まあ若干の時間稼ぎにでもなればいいか…

ヴェロニカは銃で炎を放出し、推進力で移動する。

「何だこれ!？」

「極限に分からん!何故空がオレンジ色になっているのだー!」

「なにあれ…炎の壁?」

「十代目、ザンザスの奴の技です!早く撤退しましょう!」

「ええ!?ザンザスの!？」

転送システムの場所まで向かうと、そこにはドーム状の壁に困惑し

ている沢田綱吉とその守護者がいた。

そしてヴェロニカがシステムの真下に突っ込んだ瞬間、転送システムが作動した。

なんとか白蘭から逃げられた…。

流星に大量の炎を消費し過ぎてヴェロニカは疲労した。

転送した先で、木の上に降り立つと周りを見渡す。

そこは並盛神社で、いち早く獄寺が転送装置にミサイルを撃ち込んだ。

だが破壊しきれず、転送装置は煙を上げながら空中を降下し、転移した。

「なっ、き、消えた!?!」

「どういうことだっ」

「白蘭の元に戻ったな…破壊出来ていなかったのか」

ディーノの言葉に沢田が困惑していると、通信機からリボンが応答する。

『心配すんな、完全に破壊出来なかったが、ダメージは与えた…暫くは戻ってこれねえハズだ』

「暫くってどれくらい?」

『ダメージを与えただけだからな…まあせいぜい数時間だろ』

「数時間しかないのぉ!?!」

沢田綱吉の困惑を他所に、草壁が登場してきたり雲雀がその場を離れたりと慌ただしかった。

一段落つき、皆でアジトへ戻ろうとしたときに、山本がふと思い出したように、木から降りたザンザスの元へ歩いてきた。

「ザンザス、これ…あんたに頼まれてたもん回収してきたぞ」

山本が何かを握りながら手を差し出してきたので、ヴェロニカも手のひらを上にしてそれを受け取る。

チャリ、と金属が擦れる音と共に渡されたそれを見やる。

「ザンザスのお陰でめちやくちや強くなれたぜ、ありがとな」

爽やかに笑いながら感謝を述べると、山本は沢田のもとへ戻って行く。

ザンザスの手元に転がるのは、高ランクの霧属性のリングとヘルリング、そして晴のマーレリングだった。

どれも山本が幻騎士とデイジーから奪い取ってきたものだろう。それらをポケットの中に入れて、もう一度山本の様子を見る。

沢田綱吉の隣でへらへらを笑っている様子を見て、未恐ろしいなとヴェロニカは素直に思う。

このリングも山本への修行を見る対価として修行最終日に提示した頼み事だ。

これで戦力は少しでも削げたので、今回の私の努力は無駄ではなかったか。

ヴェロニカは疲労した分の体力を回復させるべく、アジトに向かっていった。

スクアアロside

チヨイスが終了する数時間前：

「んあああああーやっとな終わったあああああー」

スクアアロは凝り固まった体で背伸びをし、机に突っ伏した。

漸く体内の生命エネルギーを分解する物質を作り終え、体に残る疲労感に睡眠を欲していた。

瞼を閉じて、少しだけ寝ようと思った矢先だった。

p r r r r r r

携帯が鳴り、ディスプレイを確認して目を見開いて通話ボタンを押す。

「もしもし」

『：既にチヨイス始まってるぞ』

「え」

『それと日本へ来るとき、あいつらも連れてこい』

「ちよ、ま——」

返事をする暇もなく切られた通話に、スクアアロは目を点にする。

そして日付を確認する。

数秒の間。

「ああああああ！時差ああああああ！」

スクアアールは必要なものだけかき集めて、研究室を出る。

そして広間の方に早歩きで向かっていき、扉を勢いよく開いた。

「う” おおおおい！てめえらああああ！」

一週間ほど姿を見せなかったスクアアール突然の登場に広間にいた幹部は固まる。

そこにはルツスーリア、ベルがいた。

「あらア、スクちゃん久々に見るわねえ、目の下に大量の隈出来てるけど大丈夫？」

「つか連絡なかったから死んだと思ってたぜ、シシツ」

「るせえええええええ！おめえら！日本へ行くぞおおおい！」

「何言ってるんだよ、シシツ」

「そうよ、今私たちはミルフィオーレの残党狩りに忙しいのよ」

「そんなのほっとけえ、既にボスが日本にいる」

「え」

「おいルツスーリア、レヴィとフランを呼び戻せ、幹部は全員日本へ向かうぞおおお！」

「ちよ、待てよ、何でボス日本にいるわけ？」

「あ”？何だおめーら知らなかったのかあ”？」

「ちよつとおスクちゃんそれどういう意味!？」

「ボスは一週間前から日本に発ってるハズだあ”」

「はあ!？ボスが暫く見かけないと思ってたけど、日本行ってたのかよ！」

「つーか早く準備しろお！」

ルツスーリアはレヴィとフランに連絡を取り出すと、スクアアールは荷物を最小限にして広間を出る。

数十分後、レヴィが本部に慌てた様子で戻ってくると、スクアアールはすぐさまジェット機の操縦室に乗り込む。

「おいルツスーリア、フランはどうしたあ！」





を使えるとは、少し警戒すべきですね」

他の真6弔花の面々もそう思ったのか、頬に汗が伝っている。

そして転送システムの場所へ向かうと、そこには誰もおらず既に転送したのだと分かる。彼らは白蘭に頭を下げる。

「申し訳ありません、我らがついていながらユニ様を…」

「いやああの子にはしてやられたよねえ、こんなことならチヨイスの再戦素直に受けとけば良かったかな…でもユニちゃんは断るのを見通してやっていただろうし、無理か」

「にゆにゆ、白蘭なんかブーだ！何でユニなんて人形娘に振り回されてんのー!?きつさと始末しちやえばいいのにー!」

「やだなあブルーベル、ユニちゃんを始末するなんて………次言ったら捻り潰す」

僕がブルーベルの首に手を当ててそう告げれば、殺気に当てられたブルーベルは固まり、桔梗がそれを庇う。

「失礼しました白蘭様、出来れば私どもにもユニ様を追う理由をお教え願えないでしょうか」

桔梗の言葉に白蘭は語り出す。

どの並行世界のトリニセットをコンプリートしても世界を把握できるといふ力は発揮しなかったこと。

そして先ほどのユニの輝きを見て、トリニセットの覚醒はユニの魂が必要であることが分かったこと。

「分かったらきつさと追おうね?一刻も早くユニを奪え」

あれが欲しい

ボンゴレは二の次だ、今はあれが欲しい

「そういえばデイジーはどこ?」

白蘭の言葉に漸くデイジーがいないことに気付く面々は、辺りを見渡すがデイジーの気配を見つけれられる者はいなかった。

「少しお待ち下さい」

桔梗がその場を離れ、少しするとデイジーを担ぎながら戻ってくる。

「先ほどのターゲットとして待機していた場所にいました、白蘭様」

「何でそこに行ってたんだい？デイジー」

「ぼぼっ……その…僕チンのリング…なくなってたんだ、だから探してて…」

「それは本当ですか？デイジー」

「気絶した時にどっかに落ちたのかも……やっぱりもう一度探してくる」

再び戻ろうとするデイジーに白蘭がマシユマロの入った袋を破裂させる。

それに皆が驚き固まる。

「……………フフ、また彼の仕業か」

「彼？」

「ザンザスだよ」

桔梗の言葉に白蘭が答える。

「ザンザス？山本武ではなく？」

「そう、その山本武にリングを回収しろと指示したハズだよ…なんせ山本武の修行に付き合ってたのは他ならぬ彼だからね、この調子だと幻騎士のリングも回収されてるハズだ」

「ヘルリング、ですか」

「ほんと、どこまで邪魔してくれる男だね…捻り潰したくなるよ」

白蘭の不機嫌を悟り、真6弔花は冷や汗が背中を伝う。

「白蘭様、デイジーの処分はどうしますか？」

「うん、そのままでもいいよ…ここで殺しても彼の思うつぼだ。デイジーにはランクA相当のリングを代わりに渡しておいて」

「分かりました」

「君たち、ユニを奪う過程でザンザスに会ったら出来るだけ彼は殺すこと…これ以上邪魔されたくないからね」

「はっ」

それだけ忠告すると、真6弔花と共にその場を去る。

ユニもそうだが、この世界は他とは異色を放っている。

最もたるはザンザスだ。

どの世界にも剣を腰に差している彼はいなかった。

どの世界にも先ほどの高純度で超硬度の炎の壁を作る技を持って  
いる彼はいなかった。

何かが違う…

異色を放つ彼は何かが違う。

早く殺さなければ——…

## Veronicaの戦闘

気が付くと、そこはイタリアのヴァリアー本部だった。そこはザンザスの執務室で、私は真ん中に立っていた。

「あれ…う？」

いつから私はここにいたのだろうか…

よく見ると胸に二つの膨らみがあり、目を大きく見開く。

「も、戻ってる…？？」

「じゃあここは元の世界!？」

私は直ぐに机の上の書類を確かめようとした。

「え？」

書類に触ろうとすると、そのまま手が机をすり抜けた。

「んんんん？」

何度か机に触ろうとするが、すり抜けるので夢だと分かった。

自覚夢って初めてだと思いつつながら部屋を出る。

扉を開こうとするが、ドアノブが触れずそのまま扉をすり抜ける。

廊下で何人かとすれ違おうが誰も自信に気付いていないことに分かった。

広場にはベルヤルツスーリア、レヴィにマーモンがいた。

今はいつだろうと思いつつながら執務室へ戻る。

するとさきほどいかなかったザンザスが椅子に座っていた。

「パパ」

ヴェロニカの声に反応するようにザンザスが目線を合わせた。

「お前か…俺の体に乗っ取ってたのは」

「え」

ヴェロニカはザンザスの言葉に固まる。

「ツチ」

「え、え…見えるの？」

「あ？つかてめえ誰だ」

「え、あ…私は…ヴェロニカ…」

ヴェロニカはこれは夢だと思い出すと落ち着きを取り戻し、ザンザ

スに近寄る。

ザンザスは近寄ってくるヴェロニカを睨みつけるが、全く効いた様な様子はない。

「何が目的だ」

「え？」

「俺の体に乗っ取ってただろうが」

「あ、あれは入江のせいで不本意だよ…ごめんねパパ」

「俺はてめえの父親になった覚えはねえぞ、つかどう見てもてめえのが年上だろ」

「ああ、私未来のパラレルワールドから来たザンザスの娘よ」

「は？」

「もう28になったけどね…まさかこの年でパパの体に憑依するなんて予想外だったわ」

「俺はてめえの父親じゃねえ」

「うんそうだね、あなたはザンザスであって、私のパパじゃないね…」

「ごめんね」

「ツチ」

「にしても凄く変な夢だ…」

「あ？」

ヴェロニカはザンザスの手のひらに自身の手を重ねる。

温度も感触も何もかも感じない、手を重ねたように見える、見せかけの自身の手をただ見つめる。

「今凄く…懐かしくて…変な気分…あなたは私のパパじゃないのに…何でだろ…」

「……」

「おかしな夢ね」

ヴェロニカが瞼を閉じると、急に重力が体に掛かる。

「ん……」

重い体に違和感を抱き、目を開けるとそこはまた別の天井が見えた。

数秒ここがどこだか分からずぼーつとしていた。

「あ、日本支部アジト……」

そういえば未来に来てるんだった……

体を起こし、顔を洗いに部屋に付けられた洗面台まで歩く。

そうだ、チョイスが終わってアジトに逃げ帰って直ぐに眠ったんだ。

炎の消費が思ったより多くて疲労してたから結構深く眠ったな……

水で顔を洗うと、頭が整理されていき、時計に視線を移す。

4時間も寝てたのか……なら白蘭が来るのも直ぐか。

武器を装備して部屋を出て、モニタールームに向かう。

向かう途中、警報が鳴り響く。

タイミング良いのか悪いのか……確かこの時きたのはザクロだったか。

取り合えずザクロの気配を探さねば……

ヴェロニカは集中して周辺を探り出す。

すると、爆発音が聞こえた場所へ向かうとそこには山本たちもいた。

山本がヴェロニカに気付く。

「ザンザス……」

「黙れカス」

敵さんに位置がバレちゃうんじゃない

沢田が口を開こうとした時に、壁が勢いよく破壊される。

ヴェロニカは瞬時に銃を取り出し、破壊された壁に向かって銃弾を放つ。

急な攻撃に驚く沢田達を無視して、壁に連続で撃ち込む。

「ザ、ザンザス!?!」

盛大な破壊音と共に煙が立ち込め、中から声が出てきた。

「おいおいいきなり攻撃たあ、血の気が多いなあ」

「こ、この声は……!」

「あのマグマ野郎!確かザクロとかいう奴っすよ!」

ザクロはマーレリングの嵌めた手を胸に持って行き、不可視の攻撃

を仕掛ける。

それにヴェロニカは上空の炎で調和して無効化する。

「無線もレーダーも粉々になって一時はどうなるかと思っただが、意外といけるもんだな」

「ふざけたこと抜かしやがって！」

「変な奴だな」

ザクロの言葉に山本と獄寺が構えだすが、それをヴェロニカが静止した。

「おいてめえら、邪魔だ消えろ」

「あ!？」

「おいザンザス、あんた一人であいつを相手にする気か!？」

「消えろ…次はねえぞ」

少しだけ威圧すると、その場にいる者の顔色が変わる。

「おいツナ、ここはザンザスに任せて俺達はユニを避難させるぞ」

「リボーン!?!でもザンザスがっ」

「あいつの戦いを知らないお前じゃないだろ、足手纏いになる可能性がある」

「っ…………」

「それに、ザンザスが強いことはお前が一番知ってんだろ」

「!……………分かった」

沢田達はリボーンに説得され、その場を去っていく。

誰もいなくなったところで静観していたザクロが声を掛けてきた。

「おいおい一人でいいのかあ?」

「てめーの攻撃も見えねえガキらはただの足手纏いだ」

「っは、違いねえ」

ヴェロニカは銃を構えザクロに炎を放ち、ザクロもそれを迎え撃つ。

盛大にアジトが破壊するが、二人の戦闘は過激になるばかりだった。

銃だけで応戦するヴェロニカと高純度の嵐の炎を放ってくるザクロの戦闘は、苛烈で凄まじく、沢田達が居合わせたらひとたまりもな



かっただろう。

ヴェロニカの攻撃をザクロは容易く回避していき鼻で笑いだす。

「どうしたあー！んな遅え弾じゃ俺には当たんねーぞー！」

「ツチ」

煽られたヴェロニカは僅かに上がったスピードで応戦する。

すると、速くなったヴェロニカの攻撃ににんまりと口角を上げるザクロ。

ザクロにヴェロニカの銃弾が当たり、ザクロは壁に激突する。

煙が立ちあがり視界が奪われた直後、ヴェロニカの目の前に拳が現れた。

「んな弱え攻撃でくたばるとでも思ってたのかあ？」

ヴェロニカの額に衝撃が走り、そのまま壁を突き抜けフロア2つ分ほど吹き飛ばされる。

壁に背中からぶつかり、眩暈を起こし膝をつく。

「……………」

直ぐに壁に背を預けながら、ゆっくりと立ち上がり、額から流れる血を拭う。

すると、瓦礫を踏みながら近づいてくる足音が耳に入ってくる。

「白蘭様や桔梗が言うほど強くねえなあ…おら匣兵器でも出してみろよー！」

ザクロが笑いながらこちらに歩いてきていて、ヴェロニカは赤く染まる視界の中思考を巡らせる。

そして銃を両手に、貫通力の高い炎を放ち、ザクロにもろに命中する。

「おいおい少し威力が上がっただけかあ？っは、期待外れだな……死ぬね」

ザクロが地面を蹴り、ヴェロニカの顔面に向けて嵐の炎を纏った手を伸ばす。

それはそのままヴェロニカの顔面を消し飛ばす————ハズだった。

ブツッ

肉が、骨が 切れる音が響いた。

音と共に黒い影が宙を舞い、ヴェロニカとザクロの間を重力に従い落ちてくる。

ポトツ

黒いソレはザクロの右腕であることに本人が気付くまで数秒を要した。

「うぎやあああああああああああ！」

切断面から夥しい量の血が流れだし、ザクロは痛みに悲鳴をあげる。

それを眺めながらヴェロニカは自身の額から垂れてくる血を舌で舐めとり、目の前の標的を捉える。

そして腰に差していた剣を引き抜き、一気にザクロへ駆け出す。

痛みで混乱していたザクロはヴェロニカに気付くのが一瞬遅れ、左腕でなんとか防ごうとするが――

ザシユツ

高純度の憤怒の炎を纏った剣は、ザクロの左腕をいとも容易く斬り飛ばした。

両腕を失ったザクロは、目の前の状況に脳が追いつかず、痛みで叫ぶだけしか出来ずにいた。

「ぐああああああつ――」

ザクロの悲鳴は途中で切れ、ヴェロニカは剣を振り下ろしこびり付いた血を振るう。

ヴェロニカの足元にはザクロの首が転がっていた。

右腕の指に嵌められた嵐のマーレリングを回収すると、離れた首と胴体ごと憤怒の炎で灰にする。

そしてヴェロニカは深く息を吐きだした。

「はあああああああ」

倒せた、やった、疲れた：

わざと追い込まれたフリしたけど、上手くいってよかった  
相手がザクロだったから本当に賭けのようなものだった。

ヴェロニカは額の血を拭いながら周りを見渡す。

そこには、炎の糸が複雑に張り巡らされていた。

ザクロに若干強めの攻撃を撃ち込み、反撃を喰らうのは計算済み  
だった。

殴り返してくるのに合わせて体を炎で纏ってダメージを最小限に  
抑えながらフロアをぶつちぎって吹き飛ばされた後、ザクロが吹き飛  
ばされた場所に来るまでの間に出来るだけの糸を張り巡らしていた  
のだ。

そしてザクロがザンザスを確実に殺せる自信からきた一瞬の気の  
緩みを見逃さずに糸に炎を流しザクロの腕を切り落とした。

混乱するザクロに畳み掛けるように左手も斬り落とした上で首を  
斬り落として殺したのだ。

修羅開匣だけは避けたかったから本当にうまくいってよかった。

本気で叩き潰そうとしても一瞬で倒せなくて、修羅開匣される可能  
性は高かったし、時間が掛かれば修羅開匣で瞬殺を測る可能性も高  
かった。

そして剣を使うのもリスクが高く、銃での応戦でしか奴の隙を作れ  
ないと考え、わざとやられたフリをしながら糸を張れる場所に吹き飛  
ばされるよう誘導したのだ。

これは自身の力を過信して、隙が出る相手でない限り無理なもの  
だった。

ブルーベルやデイジー相手であれば成功率は高かったが、桔梗やト  
リカブトであれば失敗していただろう。

ザクロは慢心するが、直感力はある、とても頭が悪いわけでもな  
かったので引っ掛かるかは賭けだった。

そしてヴェロニカはその賭けに勝ったのだ。

修羅開匣されれば、戦闘が長引く上にこちらも疲労するし、なによ

りも勝敗が分からないことが恐ろしかった。

どれだけ自身が強くなったとはいえず、彼らの強さは原作知識で知っていた為、ハツキリ言って相手したくなかった。

特に修羅開匣。

もし勝てたとしても、こちらの被害はただでは済まなかったに違いない。

これから白蘭を相手にするため、ザクロで消耗するのはなんと少しでも避けたかった。

ヴェロニカは張りつめていた緊張を解き、その場を離れる。

ダメージを最小限にしたと言っても、額を切ったせいで血が派手に流れて視界がとても悪い。

シャワールームへ向かい、タオルを探す。

痛みはなく、ハンドタオルで傷口を圧迫して止血を試みる。

止血が終わると、ヴェロニカは思案する。

このまま川平不動屋に行っても意味ないし：

どうせなら明日の最終決戦までここで休むか。

さつき無事だった部屋あったからそこで寝よ。

部屋に行く前に体が空腹を訴え、そのままキッチンに行くことになったヴェロニカは瓦礫の上をどうにか歩いてキッチンの方へ向かう。

キッチンへ着くと、そこは破壊を免れており、中は少し瓦礫が散らばっているが全然料理出来るレベルで無事だった。

ヴェロニカは箆筒を漁り、インスタントラーメンを見つけると、それを取り出してやかんに水を入れてコンロの上に置く。

だがガスが通っていないのか、コンロに火が付かず眉を顰め手を顎に添える。

……これ炎で温められないかな……

何故この時にアホな思考をしていたのかは本人にも分かっていないが、そのままやかに手を置く。

恐らく頭から血を流し過ぎたのだろうか。

溶解しない程度に炎を調節してやかんを温めるヴェロニカだが、この場にスクアール：否、入江がいたら頭を抱えていただろう。お湯を憤怒の炎で温めてるザンザスの図が出来上がった瞬間である。

やかんが鳴り、沸騰したお湯をラーメンの容器に注ぐ。

そして蓋をして3分待ち、蓋を開けて箸を持ち食べ始めた。

何年ぶりのラーメンだろ…

昔を懐かしみながらラーメンを啜っていると、複数の足音が聞こえてきた。

これはジャンニーニやビアンキ、スパナ、山本の足音かな？

敵であつても取り合えず麺伸びるから食べ終わってカツ消せばいいか。

「ザンザス…何してんだ…あんだ…」

どうやら山本達だったらしい。

「見てわからねえのか…」

「いや何でラーメン食ってた？ザクロはどうしたんだよ」

「カツ消した」

「え、た、倒したのか!？」

表情が明るくなり、後ろにいたビアンキやジャンニーニが喜びだす。

スパナは沢田綱吉達に報告すべく連絡を取っている。

「流石ザンザスなのな」

「てめーら何で戻ってきてんだ」

「あんたが心配で戻って来たけど…必要なかったみたいだ……」

山本は笑いながら安堵していた。

その後山本は沢田綱吉達と合流してくると言つてアジトを離れて行った。

ヴェロニカは森で野宿なんぞぶざんげなと思い、そのままアジトに残った。

その後、ジャンニーニから雲雀恭弥がデイジーを討伐したという報

告を聞く。

まあマーレリングは私が持っているから、多分普通のリングを代用させたのか…

戦力が大幅になくなったデイジーを雲雀がフルボッコにしたことは想像に容易く、今のところ着々とミルファイオーレ勢の勢力を減らせていることに安堵する。

そして明日の決戦に向け、体力温存しておくためにヴェロニカは眠りについた。

山本 s i d e

川平不動産に逃げ込んだはいいが、ザンザスが心配でツナ達と別れてアジトに一旦戻ることにした。

そこでビアンキとスパナ、ジャンニーニが一緒についてきて、アジトの場所に辿り着く。

「なに……これ……」

ビアンキの言葉にその場の誰もが返すことが出来なかった。

アジトの出入り口であった場所は破壊され、瓦礫が積み重なっていたり、爆破した後がちらほら見えていた。

ザンザスとザクロの戦いがどれほど激しかったのかが一目で分かるようなものだった。

「これじゃ、中に入れない……」

「待ってくれ、入れそうな場所を……」

「あそこ、少し隙間があるわ」

ビアンキの言葉に視線をそこへ向けると、瓦礫が積み上がっている場所が人が一人潜れるほどの隙間があり、俺達はそこから入ることになった。

「戦闘音がないから、既に決着はついてるのか……」

「そ、そうですね……にしても一体何をしたらここまで……」

ジャンニーニが顔を引き攣らせながら周りを見渡す。

いくつかの壁は溶けていたりして、未だに熱を持っていた。

少し中へ行くと、壁が大きく抉れている場所があり、穴が開いている向こう側を覗く。

「あ」

「何か見つけたのか？」

隣にいたスパナが俺の漏れた言葉に反応する。

「あ、いや…少し遠くに血…が見える」

「行こう」

目の前にはフロアをいくつかぶち抜いた穴と、一番奥のフロアの床に血が飛び散っていた。

そこまで瓦礫を避けて歩いていくと、床一面に沢山の血が流れているだけで、そこにはなにもなかった。

「これほどの出血量なら死んでもおかしくない」

「ザンザスを探そう」

スパナの言葉に少しだけ焦るが、冷静になる。

あのザンザスが負けるわけがない、というか負ける姿が思い浮かばない。

だから、あの血はザクロのものなんだと自分に言い聞かせてアジトを進む。

すると空腹を誘うような匂いが鼻についた。

「ん？」

「…この匂いは…何でしょうか」

「キッチンからみたいね」

俺は前に出て刀を片手に、キッチンの戦闘で壊れきったであろう扉から中を覗く。

するとそこには、服のあちこちが焦げているザンザスがラーメンを啜っていた。

もう一度言う、ラーメンを啜っていた。

ザンザスと目が合うが、そのままザンザスはラーメンを食べ続ける。

ズゾー…ズズズ…

啜る音に我に返り、ザンザスに声を掛ける。

「ザンザス…何してんだ…あんだ…」

「見てわからねえのか…」

「いや何でラーメン食ってんだ？ザクロはどうしたんだよ」

「カツ消した」

「え、た、倒したのか!？」

ザンザスの言葉に、やはりさきほどの血はザクロのだったのかと安堵する。

目の前のザンザスは至ってピンピンしていて、いかにも楽勝でしたといわんばかりの態度だった。

俺は安心して笑みが零れた。

「流石ザンザスなのな」

「てめーら何で戻ってきてんだ」

「あんたが心配で戻って来たけど…必要なかつたみてえだ…」

やっぱりザンザスは凄いのな

俺もザンザスを見ていたらお腹が空いてきて、一緒にラーメンを食べるとそのままツナのところに合流すると言ってアジトを離れた。

ザンザスも誘うが、とても嫌そうに断ってきたので諦めて一人でツナの元へ戻っていった。

ツナ達と連絡を取ると、俺達と別れた後トリカブトが襲撃したようで森に逃げているのだと教えてもらい、森へ向かう。

「ツナー！」

「山本！」

ツナ達の姿が見えると、走って近寄っていく。

「聞いたよ、ザンザスがザクロを倒してくれたって！」

「そうなのな、めちやくちやぴんぴんしてたぜ、ザンザスの奴」

「そうなの!？」

ツナは啞然としていて、他の皆も驚いていた。

「ザンザスの奴、真6吊花相手に圧勝しやがったか…流石ヴァリアーのボスだな」



「そうだね…」

「流石ザンザスなのな！」

「アハハ…」

笑顔が引き攣っているツナに笑いかける。

その晩は森の中で野宿することになり、俺は木に凭れて眠った。

## Veronicaの安堵

ヴェロニカです。

現在最終決戦が行われている森へ向かっています。

ぶつちやけ寝坊しましたよ、ええ。

ほんとすまん。

多分もう始まっているよ、だってすごい轟音がここまで聞こえてくるんだもん…

森に入って数分ほど進んだところで、漸く真6弔花が見えてきた。

桔梗もブルーベルも修羅開匣していて、人外の姿になったいた。

そして既にヴァリアーの幹部達も揃っているところである。

すごい状況が進んでる…アニメでいうと多分5話くらいずつと爆睡してた。

これは反省せねば。

よく見ると山本武と獄寺隼人はルッスーリアに治療されていて、恐らくブルーベルに負けたのだらうと分かった。

すると、ブルーベルと桔梗にフランと六道骸が幻覚を掛け始める。

タイミングを見計らって茂みから出てくる。

茂みを掻き分けた音に全員が反応し、ヴェロニカの姿を見ると誰もが固まった。

直ぐにルッスーリアとレヴィが近寄ってくる。

「ああん！ボスう！何で黙って日本に行っちゃったのよ〜！」

「ボス！無事でなによりです！」

「シシツ、ボス重役出勤じゃん」

「う” おおい！ボス！」

スクアアロの声にそちらへ視線を向けると、スクアアロが何かを投げつけてきたのでそれを受け取る。

「例のもんだあ！」

その言葉だけで、それが入江がこの三週間かけて発明したものだとは分かった。

黒い箱で、それを開けると3発の銃弾が入っていた。

恐らくこれを体内にぶち込むことで体内エネルギーを分解するの  
だろう。

「一発でも入れれば効果はあるハズだあ」

「おい、一発はてめえが持つてろ」

一発だけスクアーロに投げ渡し、ヴェロニカは二発の銃弾を銃の中  
に込める。

すると六道骸が含みのある笑みでこちらを見ていた。

「クフフ、10年ぶりにあなたを見ますが、やはりその状態は興味があ  
りますね」

意味深なことを呟くや、桔梗やブルーベルの様子が急変し、幻覚が  
解ける。

すると無傷のヴァリアーと六道骸の姿を見て驚愕していた。

「あの男は…六道骸！」

「にゅにゅ、誰よそいつ」

「何故だ…貴様は復讐者の牢獄にいるハズだ！」

「ミーの師匠は復讐者の牢獄から出所しましたー」

「なっ!？」

桔梗と六道骸の会話が続き、やっと終わるとヴァリアー、骸と真6  
弔花の戦闘が始まる。

ザクロがない分、6弔花が劣勢だった。

ヴェロニカはブルーベルを集中的に狙いながら戦闘に参加してい  
た。

何故ブルーベルかって？

だってこいつこの後GHOSHに吸われるじゃん、今のうちに殺し  
ておかなきゃ…

本当は桔梗も殺したいけど、無理そうだし。

白蘭が控えてるからここで全力だすのは避けたい。

葛藤の末、ブルーベルだけは殺そうかと集中的に狙いまくるヴェロ  
ニカに、ブルーベルは焦り出す。

「さっきからあんた何なのよ！しっつこい！」

「黙れドカスが」

ブルーベルの言葉を一蹴して撃ちまくる。

因みに銃は片方しか使っていない、もう片方には白蘭専用の弾丸が入っているので使えないのだ。

ブルーベルの左腕に銃弾が当たり、肘部分まで火傷を負う。

「あああああー！」

痛みに耐えながら、他の銃弾やベルのナイフから逃れる。

だが六道骸が幻術でブルーベルを捉え、触手で縛り上げた。

「にゅっ、しまった」

苦悶の表情をするが、自らの周辺に純度100%の雨の炎で出来たバリアを張ってなんとか逃れる。

「はあ…はあ……」

ブルーベルは明らかに疲弊していて、このままいけば殺せるのでは？と思った時だった。

空間に静電気のような音がなり、GHOSTが現れた。

レヴィが攻撃をしている最中、ヴェロニカは直ぐにリングを外し距離を取る。

視界の端にいるスクアードもリングを外していた。

すると、GHOSTの覚醒が始まり、周りの者の炎を吸収し出す。

そしてGHOSTの光線がブルーベルに当たり瞬く間に干からびていく。

それを見ていた全員が驚愕し、回避し出す。

「!?リングの炎がっ」

「何もしてねえのにダダ漏れだぜ！これじゃ全部もってかれちゃう！」

「リングはつけてちゃやばいわ！匣兵器もダメ！炎が効かないの！」

皆が焦る中ルッスーリアの忠告でリングを外しだす。

そして誰もが手を出せない状態で、GHOSTに手をこまねいていた時――

「それはさせない」

凜とした声と共に、目の前に迫っていた炎が消える。

誰もが声の元へ視線を向けると、沢田綱吉が零地点突破・改の姿勢

を取っていた。

そしてGHOSTとの吸収対決が始まる。

なんとかGHOSTの吸収が収まり、沢田綱吉が勝利する。

他の者は嬉しさのあまり沢田に近寄るが、沢田の静止で足を止める。

そこに白蘭が現れ、言い放つ。

「いやあ、すごいすごい、GHOSTを倒しちゃうなんてさ」

笑顔のままその場に居る者達に挨拶をし出す。

そして沢田綱吉の方に視線を固定し話し続ける。

「それにして綱吉君、君は物好きだなあ：骸君にザンザス君、かつて君の命を狙って来た者を従えてるなんて正気の沙汰じゃない」

「ここか。」

「おいカス、俺は沢田のガキに従った覚えはねえぞ」

ヴェロニカは一步前に出て銃口を白蘭に向ける。

視界の隅で骸が槍を振るうのを捉えながら銃弾を放つ。

全く炎を吸われていなく疲労をしていないヴェロニカは、中々強めの一発をお見舞いする。

ここで白蘭が自身の炎で防ぐのは知っているので入江から貰った弾が入っている銃で撃っていない。

入江と一瞬目が合うが、白蘭の声で視線を戻す。

「あれれ？さつきGHOSTに炎を吸収されてガス欠のハズなんだけどなあ：ザンザス君」

油断していたのか、白蘭の髪の毛の端っこが若干焦げていた。

沢田綱吉の静止が入る前に、なんとしてでもあの銃弾を撃ち込まねばと思い、白蘭に銃弾を撃ち出す。

他の者は沢田以外ガス欠で戦闘に参加する気はなさそうだったので遠慮なく白蘭に攻撃を仕掛ける。

「その様子じゃ炎を吸われてないみたいだけど、何をしたんだい？」

「さあな」

「君みたいなザンザスほどのパラレルワールドにもいなかった……だからこそ興味が沸くよー！」

いくら疲労していないヴェロニカであっても、周りの者達から炎を吸収して白蘭相手だと劣勢になりつつあった。

白蘭の攻撃は一撃一撃が重く、防ぐのは返って疲労を蓄積するので回避に重きを置く。

一瞬視界から白蘭を失った瞬間、後ろから声が聞こえると同時にヴェロニカはコート越しに背後に向けて銃を発砲する。

それが意外だったのか白蘭がギリギリで躲したところに、体勢を整えて特殊弾を込めた銃の引き金を引く。

完全に隙をついたと思ったが、それも寸でのところで防がれ舌打ちを漏らす。

そして白蘭の攻撃がヴェロニカの腕に掠り、片方の銃だけ宙を舞い、掠った部分から血が滲み出す。

だが空いた方の手で腰に差していた剣を抜き、白蘭へ構える。

「ほんとピンピンしてるね君……でも、今は君に割いてる時間はないんだ」

白蘭が目を薄く開けると、一気にスピードを上げて炎を纏う手を突き出してきた。

ヴェロニカは急に上がったスピードに驚きながら回避するため後方へ飛ぶ。

白蘭が続けて攻撃してくることに銃弾の残りに焦り、念のために体に纏っていた炎を厚くする。

白蘭の猛攻を剣で凌ぐことがきつくなり、ついに腹部に白蘭の手が突き刺さった。

周りにいる者は皆焦り出す。

「「ボスー！」」

「ん、君には興味はあったけど今はただ邪魔なだけだよ……じゃあね」  
白蘭は腹部に突き刺した手で炎を放ち、ザンザスを消し飛ばさそうとする。

だがヴェロニカは白蘭の出す炎を調和して無効化した上に、体内に炎を回し白蘭の手を燃やそうと試みた。

腹の中にある異物感と痛みで意識が持って行かれそうになるのを

必死に繋ぎ止め、体の内側に炎を纏い始める。

「！」

どれだけ炎を発しても消し飛ぶどころか何の反応もないヴェロニカを不審に思い始める。

「どうした、消し飛ばしてみろ」

「っ！」

口に溜まった血を吐き出したヴェロニカは挑発的な笑みを浮かべながら、剣を手放し白蘭の腹部に突き刺さっている方の腕を掴む。

段々手が熱くなつていくことに白蘭が驚いている瞬間、もう片方の手に持っていた特殊弾が込められていた銃を白蘭に向けて放った。

「白蘭様！」

大きな発砲の音がその場に響き、桔梗の叫びが木霊す。

「いやあ、今のは焦っちゃった」

零距离からの銃弾を躲せるはずがないと、高を括っていたヴェロニカは目を見開く。

そこには、白蘭が空いている方の手で銃弾を握っていた。

白蘭は力づくでヴェロニカの腹部から腕を引き抜き、ヴェロニカを蹴り飛ばす。

「っぐ」

「君の腹部に突っ込んだ手が火傷しちやっとなあ……：……：やつぱり君は危険だ」

ヴェロニカが宙に飛ばされ、体勢を立て直そうとした時、白蘭の言葉がすぐ後ろから聞こえた。

後ろを振り向くと同時に、白蘭の放った炎が目の前に迫っていた。

あ、死ぬ——

そう悟った刹那

ダンッ

一発の発砲音が響き、直後白蘭の腕から血しぶきがあがる。軌道が逸れた炎はヴェロニカの直ぐ側を過ぎ去っていった。

白蘭もヴェロニカも目を見開き、視線を移す。

するとそこには先ほどザンザスが落とした銃を片手に構えたスク

アールがいた。

我に返ったヴェロニカは白蘭から距離を取った。

「あーあ……腕、やられちゃったなあ……予想外だよ」

白蘭は平然と笑顔で言い放ち、ヴェロニカへ視線を戻す。

「ま、片手でも君らを殺せるから問題ないけどね」

そして宙を蹴った直後、白蘭の体勢が崩れる。

ヴェロニカは目を見開き、白蘭も自身の体の様子に驚いていた。

「なっ……なに……がああああああ!!」

急に悲鳴を上げ始める白蘭にその場に居た者は皆目を見開く。

白蘭の様子に驚きながらも気に背中を預けながら立っていたヴェロニカにスクアールが寄って来た。

「う” おおいボス、大丈夫かあ” …」

スクアールの声にそちらを振り向くと、スクアールが笑みを作りながら銃を差し出して来た。

それでヴェロニカは何故白蘭の様子が変わったのかが分かった。

「俺に一発渡してて正解だったなあ」

スクアールの言葉にヴェロニカは脱力して、白蘭の方を見る。

するとそこには肩で息をし、苦し気な表情をしている白蘭がいた。

「はあ……はあ……何を……何をしたあああああああ!」

白蘭が凄まじい形相でこちらに向かって飛んできて、スクアールがヴェロニカの前に出て剣を構える。

だが彼の手が二人に届く前に沢田綱吉が入ってきた。

「お前の相手は俺だ」

そして沢田は白蘭を思い切り殴り飛ばし、白蘭は遠くまで吹き飛ばされる。

ヴェロニカは腹部を押さえて威勢を張っていると、ルッスーリアが駆け付けてきた。

「ボス！今治すわ!」

ルッスーリアのなけなしの炎でなんとか止血し、ヴェロニカは一先ず息を吐く。

あとは、沢田綱吉に任せよう…



飛ばされた場所から戻って来た白蘭と沢田が戦闘を繰り広げだした。

「どいてくれないかい！綱吉君！今僕は彼らに用があるんだ！」

「どくものか！お前はここで倒す！」

冷静さを若干取り戻した白蘭の猛攻に苦戦を強いられるも沢田綱吉は互角で渡り合う。

白龍やナツツの匣兵器が加わった戦いは苛烈になっていく。

さきほどのスクアーロの一発で大幅に体内の炎が分解された白蘭は原作よりも大きく弱体化したものの、元々の実力で沢田綱吉を押し始める。

ヴェロニカはただ脱力したまま目の前の戦闘を見続けていた。

少しするとトリニセツテの上空のリングが共鳴し、強力な結界を作り出す。

そしてユニが空からゆっくりと結界の中に吸い込まれていき、獄寺や山本が結界を壊そうと攻撃をする。

だが結界はビクともせず、手が出せずにいた。

中では、追い詰められた沢田綱吉が初代ボンゴレから枷を外してもらい、白蘭と再び対等に渡り合う。

そして二人の傍でユニが死んだアルコバレーノを生き返らせようとおしやぶりに炎を注ぎ込んでいた。

そういえばアルコバレーノを生き返らせないとトウリニテッセの秩序うんたらをラルが喋ってたな。

まずトウリニテッセを理解してないから何がしたいのか分かんないけど、取り合えずアルコバレーノを復活させないとヤバイのは分かった。

そしてアルコバレーノを復活させるにはユニの炎が必要であることも。

アルコバレーノが死んだ時点でユニの死は確定されたものだったのか。

これから死ぬだろうユニの運命を知りながら、何もしない自分に何を思うわけでもなく、ただ、目の前の少女を目に焼き付けようと思っ

た。

仲間の、世界の為に命を張り、運命を受け入れた少女を

白蘭がそれを止めようとするが、沢田がそれを妨害し出す。

結界の外では、周囲にいた者達が炎を全てバジルの匣兵器である雨イルカに注いでいた。

ヴェロニカは傷の痛みには耐えながら、両手に銃を構え結界に銃口を向ける。

目を閉じ、銃に溜める炎に集中し出す。

イルカの鳴き声と共に何かにぶつかる音が聞こえた瞬間、ヴェロニカは目を見開き引き金を引いた。

銃口から吹き出す炎は直線上に衝撃波を描き、雨イルカが結界に激突して出来た罅へぶつかり、結界をぶち破る。

結界に大きな穴が開き、γがそこに入り込むと結界は再び直つていく。

そしてγがユニを抱きしめ、ユニは泣きながら炎を注ぎ終え二人とも消えていった。

それを見た白蘭が放った言葉に沢田が怒り、一騎打ちになった二人の攻撃が衝突し結界が盛大に壊れる。

暴風が周囲を襲い、ヴェロニカは目を細める。

視界が晴れると、そこには白蘭はいなく、大空のマーレリングのみが地面に落ちていた。

沢田綱吉が勝利したことを悟った守護者達が盛大に喜ぶが、その後に生き残った桔梗の処遇の話になった。

桔梗も自身の境遇に怒りながら白蘭への忠誠心やらプライドやらを怒鳴っている。

耳障りな負け犬の遠吠えを止めようと、ヴェロニカは銃を至近距離でぶつ放す。

直撃した桔梗はそのまま気絶し、ルツスーリアが治療を施しながら引き摺っていく。

複雑な顔をしている沢田綱吉をスルーし、桔梗をルツスーリアに任せるとそのままヘリのある場所へ入江に案内させる。

ジェット機に乗り込み、寝る体勢に入った私は瞼を閉じた。腹部の傷や炎の消費での疲労もあって、ぐっすりとイタリアまで眠りについた。

イタリアに戻り、翌日には残党を狩る任務が残っていた幹部達は各地に散らばる。

スクアードのみ研究室に籠っていて、ヴェロニカと彼が10年前に戻る為の装置を開発していた。

眠る暇もなくパソコンと機械に囲まれながら作業している入江にコーヒーを渡すと、入江は眉間を指で解しながらお礼を言い、ヴェロニカへと視線を移す。

「あとどれくらいで完成しそうだ？」

「一週間程度かな……ここ一か月詰め込み過ぎて肩が凝るよ」

重いため息を吐く入江を眺めていると、ふいに入江がコーヒーへと視線を移す。

「ヴェロニカちゃん……」

「何だ」

「僕がしたことは……意味があったのかな……」

首を傾げるヴェロニカを他所に入江は自嘲気味に笑みを作る。

「僕が白蘭さんの対策に作り出したあの弾丸は、白蘭さんに届いた……そして白蘭さんの戦力を大幅に落とせた」

そこまで聞いて、漸くヴェロニカは入江が言いたいことを悟った。

「でも、結局は……ユニは死んだし、被害も前回と大差なかった……あってもなくても結果は変わらなかった」

「……」

「僕の努力は無駄だったのかな……って……」

ヴェロニカは落ち込んでいる様子の入江に対して言葉を探す。

誰かを慰めるのはどうも性に合わないと、頬杖をつきながら口を開く。

「別に結果に響くようにそうでなかつたら、お前の作ったものが有効で

あることは証明されたんなら、きつと意味はあったんじゃないか？」  
「意味…ねえ…」

「ま、過去に帰る時にお前がこの一か月で得た情報を全部入江に渡し  
ておけばいいだろ…少なくともボンゴレの技術開発力に貢献するハ  
ズだ」

「それも、そうだね……………」

「自信を持って、そんな気弱な奴が私の部下なんぞ務められないし、務め  
させない」

「うん、すまない……………ありがとう、少し気が楽になったよ」

「お前私より年上だろ、それでも男か」

「あはは、手厳しいや」

それから一週間ほど未来に滞在していたら、漸くスクアーロ…否、  
入江が10年前に戻る装置を完成させた。

しかも10年前の飛ばされた時期に合わせて戻れるとのこと。

急ピッチだったためかゲツソリとしてしまったスクアーロに誰も  
が首を傾げていたがヴェロニカ以外その理由を知る者はいなかった。

因みに桔梗には制御装置のついた首輪をつけて、ヴァリアーの元で  
働かせていた。

彼含む幹部達は現在長期任務だったので誰もいなかった。

本部にいるのはヴェロニカとスクアーロのみ。

二人は匣兵器を自室に置くと、研究室に入り、10年前に戻ろうと  
試みた。

装置を起動する前に入江が、過去の自分に連絡を取りたいと言うの  
で一旦日本支部に繋げることにする。

日本支部に回線を繋げると、そこにはスパナと入江がいた。

二人とも包帯やらガーゼやらを貼っていたが既に動き回れるよう  
で、モニターの前でキーの上に指を置いていた。

そしてヴァリアーからの連絡に大層驚いたようで、入江は縮こまっ  
ていた。

そんな中スクアーロが口を開く。

『そ、そういえば君たちいつ過去へ帰るんだい？既に綱吉君達は過去に帰ったよ…』

「う” おおおい、おめえにやるもんがある…今からデータ送るから待ってろお”」

『データ？』

入江の言葉を無視してスクアアローは素早いタイピングでキーを打っていき、入江たちはスクアアローがタイピングが出来ることに驚いていた。

そして数分すると、入江の元に一つのファイルが届く。

スパナと入江はそれを開き、内容を流し読みすると段々と表情が驚愕に染まっていく。

『こ、これは！』

「死ぬ気の炎の解析結果だあ”…それ以外にも研究課程の副産物だよお”」

『ま、待ってくれ！これを発見、解明したのは誰だい!?ヴァリアーの専属研究者なのか!?!』

「企業秘密だあ”」

『こんなの最新技術を持っていたミルフィオーレでさえ知らない！これは少なくとも今の技術ではとても解明なんて…』

愕然としているモニターの向こうの二人にヴェロニカはそりやそうだ、と内心独り言ちる。

正確に言えばこの時間軸から28年後に発見され解明されるものなのだから。

「用はこれだけだ、切るぞお”」

『あ！ま、待ってくれ！』

「あ”？」

『あ、あの…ずっとスクアアローに聞きたかったんだけど……』

『君は覚えているか分からないんだが、10年前…君と並盛で会ったんだ』

「ああ、あのアイスの奴か」

『そ、それなんだけど……』

「それがどうしたあ」……」

『どうして僕の好物がふがしだなんて知ってたんだい？』

「あ——…んなこと言ってたかあ？」

『不思議だったんだ…スクアアロの情報をミルファイオーレで調べると、あの時会ったスクアアロと全くかけ離れていて…』

「……」

何だか不穏な気配を察知したらしいスクアアロの頬に一筋の汗が伝う。

「あ、あれだあ」…日本人はふ、ふがしが大好物って聞いたからそうだと思っただあ」……」

『ああ、そうだったのか……にしても君は裏表のある人なのかい？』

「いやあの時は丁度機嫌が良かっただけだあ」……多分……」

『そ、そっか……いやすまない変な質問をしてしまつて、そ、それで君たちいつ帰るんだ？』

「今からだ」

『そうか今から……え、今？』

「じゃあな」

『え、ちよ——』

通信を切ると、スクアアロは装置のボタンを押す。

「ねえヴェロニカちゃん、これ10年前戻ったら僕に休暇くれないかい？」

「まあ数日くらいならな……」

「流石に今回は精神的疲労が大きすぎたよ……」

段々と重力がなくなり、浮遊感に包まれる。

そして再び重力が掛かるのを感じ、目を開けると同じ研究室だった。

入江は無言でパソコンを起動させ、日付を確認する。

「ちゃんと戻っているよ……まあヴェロニカちゃんの飛ばされた時期に合わせたから、僕は数日行方不明だろうけどね」

「ああ、そういえばお前が任務があるにも関わらずいなかったからこ

ここに探しにきたんだっただな…」

「げっ、じゃあ僕今から任務!?!」

「まあ明日から有休取って休め」

「うへえ…」

二人とも研究室を出て、ザンザスの執務室に出る。

「じゃあ任務いつてくるよ…」

「ああ」

「あ、ヴェロニカちゃん」

入江は執務室の扉に手を置き、顔だけ振り返る。

「お疲れ様」

「お前もな」

漸く二人にこの世界の日常が戻って来た日だった。

## Veronicaの哀愁

「あ」

「あ”?”

「夢か」

ヴェロニカです。

現在、私は執務室にいて目の前には若いザンザスがいます。

多分これは未来で見た夢と同じものだろうと思いつながらザンザスに声をかける。

「久しぶり」

「てめえか…おい、いつまで俺の体を使う気だ」

「さあ…」

「カツ消してえ」

「ねえ、ザンザスはずっとここにいるの?」

「やることねえしな」

「一人でずっとここにいるの?」

「…」

急に黙る彼に、おや?と首を傾げていた時、背後の扉が開く。

「う” おおおいボス!聞いてくれよ!また俺が情けねえ顔——」

スクアアロが何かを愚痴りながら入ってくるが、ヴェロニカの姿を見ると静かになった。

「あ”?おめーボスさんに憑りついてるやつじゃねえか」

「え?」

「つーかてめーらいつまで俺らの体乗っ取ってんだよ」

「??もしかして入江じゃなくて、本物の方のスクアアロ?」

「お”う」

「あなた達同じ空間にいたの?」

「誰も俺らに気付かねえけどなあ!」

「へえ、ごめんね…私も返したいんだけど、どうすればいいか分からないんだ」



「ツチ、今ここで三枚に卸してやろうかあ」

「それあなたが負けるわよ」

「あゝあゝ!? てめえ今ザンザスじゃねえだろ! ただの女に俺が負けるわけ——」

「その女だけど、パラレルワールドのザンザスの娘でヴァリアーのボスしてるのよ?」

「はあゝあゝあゝ あああ!? ザンザスの娘だとお〃お〃お!?!」

「あなた達一緒の空間いるのにザンザスから聞いてなかったのね…」

「つーか俺を乗っ取ってるあの入江とかいうひよろっこ! どうにか出来ねえのか!」

「入江が何かしてんの?」

「毎度毎度、任務帰りのあのしけた面を俺の顔でやんだぞ! 情けねえつたらありやしねえ!」

「ああー……それは、まあ……彼はヘタレだし、というかあなた達って私たちの会話とか把握してるわけ?」

「あゝ? いや、まあたまに声が聞こえてくるぐれえだなあ」

「そう……うーんじゃあ入江が死にそうな時とかに声が聞こえたって言ったのはあなたの声だったのかもね」

「死にかけ? ああ、あれか……あんな雑魚にやられるとか俺のプライドが許さなかったからなあ……喝を入れてやったんだあ!」

「それで入江は助かったんだ、ありがとう」

「けっ、俺は自分を助けただけだあ!」

「もしかして私たちが未来にいったこととかも知ってるの?」

「あゝ? どいつもこいつもいきなり様変わりしてやがると思ってたら未来だったのかあ」

どうやら場面は見えても声は相当なことがない限り聞こえないようだ。

詳しく聞けば、行動範囲が自身の身体の半径10mほどで、本人たちは私たちが離れることは出来ず、抵抗しても引き摺られるらしい。

うわあこれはザンザスから見ると相当ご立腹だと思うが、何故かそ



「お前が任務中に死にかけた時声を掛けたのはそのスクアールらしいぞ」

「なっ……あ、ありがとう……」

「ツケ、あんな雑魚にやられるなんざどういう神経してんだ、このカス！」

「ひえええええ……し、仕方ないじゃないかあ！」

元の姿に戻ったからか怯え腰に戻っている入江から視線を外し、先ほどから何も喋らないザンザスにヴェロニカは近づいていく。

スクアールと入江に聞こえないくらい小さな声で声を掛けた。

「パ……ザンザス、あなた……8年間の記憶あるの？」

「……………ねえ」

「そ……つか……………ごめんね……」

「あれは、本当か……」

「あれ？」

「ジジイのことだ」

「あ……………」

まつさかのここでそれくるか……

血縁関係まだバレてないときに憑依されちゃったもんなあ

言いにくい、本人……それも精神年齢推定16歳のザンザスに。

何で夢でここまで気まずい思いしなきゃいけないんだろ。

「うん、本当……本当だよ」

ザンザスは黙り込み、窓の外に視線を移すとそれ以降こちらを見ることはなかった。

何か慰めの一言でも口にしようものならぶち切れそうなので何も喋らず、自身の手を見ては細い腕を抓む。

あ……、何だろ久々に自分の体を見たから不思議な気分だ。

でも、この、少しムカムカするよう……

軽いホームシックだろうか。

……………。パパに会いたい……

元の世界じゃ私はどうなってるんだろう。

このまま時間が同時に進んでたら、8年もあちらにいないことにな

るし、意識のないまま眠ってるか…最悪死んでるか…

パパも不健康な生活してたからそこまで寿命長いわけじゃないだろうし

死んでたらどうしょ

パパの死に目にも会えなかったらどうしよう

会いたい

パパに会いたいなあ……

寂しい――

気付くとそこは執務室だった。

ヴェロニカは頬杖をつきながら書類を片手に眠っていたのだと分かった。

未来から帰って来たばかりで疲労が溜まっているのだろうと思い、背伸びをする。

今日中に終わらせるものに再び目を通そうとすると、スクアアロが扉を開けて入って来た。

スクアアロは片手に報告書を持っていて、提出する為に来たのだと分かったとまた視線を書類に戻す。

「ヴェロニカちゃん」

「何だ」

「夢を見た……」

入江の言葉に引つ掛かり、視線をあげる。

「ザンザスとスクアアロとヴェロニカちゃんと……僕がいた……何か身に覚えはないかい？」

「……同じ……夢を見た……」

「……」

ここまで来るとただの夢ではないと自覚する。

であればあれは何だというのだ。

「入江……まさかあれは……」

「恐らく、僕らの精神的世界か何かだ……そしてこの体の本当の持ち主たちを閉じ込めていた場所かもしれない」

「……」

「まあ、ここまできると流石の僕でも専門外だ……それに携わる者に聞くのが一番じゃないだろうか」

「六道……骸か……？」

「そうしたいが彼は今復讐者の牢獄だ」

「そうだな……今度クローム髑髏を通してコンタクトを取ってみよう」

「そうだね……なんだかなあ……改めてこの体は僕のものではないことを突きつけられたよ」

「……………」

「早く戻るようやれるだけはやろう」

「ああ」

入江はそれだけ言うと、執務室を出ていく。

ヴェロニカは自身の手のひらを見つめる。

先ほどの夢とは違い、逞しい大きな手のひらを。

「ムカムカする……」

とてもとても小さな声が零れた。

ああ、一度思うと深みに嵌まっていく奴だこれは……

ホームシックだ。

ヴェロニカは深くため息を吐き、そのまま仕事を片付ける。

数日後、ヴァリアー宛に一通の書状が届いた。

それは継承式についてであり、ヴェロニカは首を傾げた。

いくら沢田綱吉が強くなっていたとしても、まだ十代目になることを忌避していたはずだが。

九代目もそれが分からないアホではないし……

いや、元の世界でも沢田綱吉が十代目として周知されたのはこの時期だったって聞いた気がする。

多分本来のザンザスなら絶対に参加しなかったんだろうけどなあ  
ぶっちゃけ私がボンゴレボスの座を狙っているってわけでもない

し。

でもたかが継承式で足を運ぶのも…

取り合えず、ヴェロニカは書状の内容をスクアーロに教え、幹部達へ通達させる。

時計の針がそろそろ0時を回る頃に、執務室の扉がゆっくり開きスクアーロが入ってくる。

「あ、まだ仕事してたのかい？ならまた後で来るよ」

「いや、もう終わる…待っている」

「…うん」

入江を部屋の中に留め、残り少ない書類を全て処理すると、コーヒーを片手に入江に話しかける。

「それで要件は？」

「あ、えっと…今日報告があつた継承式なんだけど」

「僕もあまり覚えてはいないんだけど、この継承式でひと悶着あつたと聞いたことがあつたんだ」

「それは、元の世界の沢田にか？」

「うん、確かシモンファミリーだったかな…反逆？みたいで。シモンファミリーって聞いたことある？」

「確かシモンファミリーは私が産まれた時代には既に同盟ファミリーとして連なっていた者達だ…」

「そうか…彼らが何かするのは分かるんだけど、僕が君に言ってきたかったことはこれだけじゃないんだ」

「まだ何かあるのか？」

「虹の呪いを解く機会が近いうちにあると思うんだ、こっちが本命だ」

「アルコバレーノの呪いを？」

「ああ、とても壮絶な話になるけど聞いてくれ」

入江は虹の代理戦争のことを事細かく教えてくれた。

正直聞いている途中で頭が痛くなってきた。

「待て、じゃあ何だ…このままだと私は腕一本と両足を斬られて重症になるってこと？」

「後遺症はなかったけれど、一時は危ない状態だったとか……」

「頭痛い……何でそんな強い奴が出てくるかな……」

「はは……スクアーロなんて心臓破壊されてたから、僕の方が死亡率高いんだけど」

「……待って少し……整理するから」

虹の代理戦争……こんな大きな出来事あったなんて……

しかもアルコバレーノ同士のバトルロワイヤルの上に最終的には共闘して復讐者と対決みたいなことになってるし。

ていうかトウリニテツセってそんなややこしいものだったのか。

それに、トウリニテツセの維持装置を開発したことで代理戦争の意味を成さないし。

だが入江が詳細を知ってることから最低限の対策は立てられそうなのが唯一の救いだろうか。

まず入江の話だと、イエーガーっていう奴が無茶苦茶強くて太刀打ちできないとか言ってることから、今の時点で勝つことよりも致命傷を回避することに重きを置きながら対策を練らないといけないということが分かった。

とりあえず入江はその戦闘じゃただの足手纏いになりそうだから、別のことしてもらおうか。

それとウオツチを持っていない復讐者が闇討ちに来るだろうから、それを迎え撃つか、やり過ぎすかも考える必要があるな。

「分かった……取り合えず対策を練ろう……少しでも死亡率を下げないことにはどうにもならん」

「ああ、そ、そうだね……」

それから入江と共に代理戦争へ向けて準備が始まった。

数日後、ヴェロニカは継承式に参加せずにイタリアに残ることにした。

幹部達には日本に向かってもらい、入江の通信機越しに状況を把握していた。

山本が不在であることも、継承式の途中でシモンファミリーが襲撃してきたことも、そして沢田達がシモンファミリーを追っていったこ

と。

「どうやら彼らの勝負の決着がつくまでヴァリアーは動けないようだ。」

「これなら入江を継承式行かせるんじゃないかなあ……」

ヴェロニカは空腹を訴え、シエフを呼ぼうと思ったが現時刻を思い出す。

イタリアではまだ夜中だった為、夜食の為だけに起こすのも悪いなと思い、仕方なく自身で作ることにした。

ヴェロニカはお菓子限定でポイズンクッキングなだけで、料理の腕は基本的にまともである。

絶対にヴァリアーでは出ないであろう、和風パスタを作る。

作り終わると、いつも座って食べていた場所に移動しようとして、一瞬止まる。

すると方向転換し、誰も使っていない椅子に座る。

そこは、元の世界でのヴェロニカの定位置だった場所である。

誰もいない部屋で一人、もくもくとパスタを腹に入れていく。

「いつ……帰れるんだろう……」

無意識に零れた言葉に我に返る。

ヴェロニカはパスタを食べ終え、執務室に戻ると酒を飲み始める。

ああ、ムカムカする

一時でもいいと、今までにないくらいの量を煽る。

酔いつぶれる様子のないザンザスの身体に呆れながら、ヴェロニカは机の上に何本も転がる酒瓶を眺める。

なんとなく、何で悲しくなったのかも曖昧になってきて、ヴェロニカはそのまま椅子に凭れながら瞼を瞑った。

？ヴェロニカ？

低く イラついたような 懐かしい声



「おい、起きろ……」  
やめて 呼ばないで

「起きろつつつてんだろ！ドカス！」

その怒鳴り声と共に、頭に衝撃が走る。

「は!？」

ヴェロニカは驚き、顔をあげると目の前にはザンザスが立っていた。

酔いが吹っ飛び、怒り気味のザンザスに戸惑う。

「え?」

「そこ退け」

ザンザスの言葉にヴェロニカは周りを見る。

いつもの執務室に、いつもの椅子、そして本来の自身の体。

ああ、これは……またあの精神世界だろうか。

ヴェロニカはそう判断し、取り合えず椅子から立ち上がりザンザスに譲る。

そして自分はソファの方に行き横になる。

「いつになったら私は戻れるのかなー」

「知るか」

「あなたの体でもあるんだからちゃんと考えてよ」

「じゃあてめえが死ねばいいだろ」

「痛いのはやだ」

今回スクアアロはいないらしく、ザンザスと会話する。

この世界だと話し相手がいなくて退屈だったのか、きちんと話し相手になってくれる彼にヴェロニカは苦笑する。

「パパに会いたい……ちゃんと生きてるかが凄く心配……」

「このファザコンが」

「別にいいじゃん、パパ好きだし」

「……」

「ベルもレヴィもルツスーリアもマーモンもスクアアロも好きだよ……」

「この世界の彼らじゃないけど」

「ふん」

「……」

「しけた面しやがって、ためー俺の顔でその面してみろ、カツ消すからな」

「はいはい」

段々と遠くなっていく意識の中でヴェロニカはくつくつ笑いながら呟く。

「ザンザスと話したおかげでもう少し頑張れそうだよ…ありがとね」  
仰向けになりながらザンザスの顔を覗く。

口を開いて何かを呟いているも、彼の声が耳に届くことはなかった。

そしてヴェロニカは瞼を閉じて、再び現実世界へと旅立った。

「ん…」

朝日が顔に差し込み、目を細めながら辺りを見渡す。

転がる酒瓶に現実に戻って来たと分かり、時計を見やる。

あれから数時間も経っていて日本では既に夜になっていた。

入江の報告でも未だ決着はついていないようだ。

ヴェロニカが日課のトレーニングを終え、いつものように書類処理を済ませていると通信機に声が入る。

「どうやらシモンファミリーとボンゴレファミリーですれ違いがあったようで、無事仲直りしたらしい。」

初代霧の守護者D・スピードが黒幕だったことにはとても驚いたけれどね。

「ていうか骸乗っ取られてやんの、ザマアしたかった。」

翌日、幹部達がヴァリアー本部に帰還し、消化不良の様子だったのでその日に任務を与えた。

代理戦争まであまり時間があるわけではなく、取り合えずヴェロニカはトレーニング室に籠っている毎日だった。

そんなところにスクアールがヴェロニカと幹部を全員会議室に集

めた。

出遅れたマーモンで全員が集まったと確認するとスクアア口は皆に言い放った。

「今日でめーらを集めたのは他でもねえ、うちの新しい幹部候補生をスカウトするためだあ」

「なぬう!?!」

「まあ」

「ん?」

「新しい幹部?」

え。

## Veronicaの驚愕

ヴェロニカです。

現在フランスの山奥にきています。

この時代のフランスの勧誘に向かつてる最中です。

フランスは別に勧誘出来たらいいなーと思ってたぐらいだったんだが、これからのことを考えると必要になってきたので本腰あげて勧誘することになりました。

本当は私まで勧誘に行く予定はさらっさらなかったし、他の奴等で事足りると思っていた。

だが、スクアアロが幹部全員連れて行くと言い出したので、理由を問いただしたところ他の組織もフランスを狙っているとのこと。

んで、その組織に六道骸とかいるのでは？と予想した私は、六道骸に会えれば儲けものな感覚で一緒に行くことになった。

ぶっちゃけこの憑依状態をどうにかしてほしい。

幹部達は物凄く驚いていたけれど、今ではピクニックというかプチ旅行のような雰囲気になってしまっている。

おいフランスに遊びに来てんじゃねえんだぞ、本場のシュークリーン美味しいですチクショウ。

早1時間、山を登っていると、滝がありそこを一気に駆け上がっていく。

「あいつこーゆー所で遊んでたんだ」

「確かに悪くない自然の道具だが、普通のガキならぜってー来れねえな」

「やっぱフランスは普通じゃなくてアホってことだろ？」

「まったくだびよん」

ベルとスクアアロの会話にヴァリアー以外の第三者の声が降って来た。

「なっ」

「んあ!?!」

声のした方へ全員が視線を向けると、そこには六道骸の一味がい

た。

予想が当たったぜヤツホーイ

内心そんなことを思いながら数歩下がって六道骸とヴァリアーの会話を眺めていた。

するとベルが川の方を指差すので、その場に居た者が視線を移す。「相変わらずおばあちゃんの弁当まずかったなー：何してグレようかなー」

巨大なリンゴの被り物をしていた少年の後ろ姿に誰もが呆れる中、その少年が後ろを振り向いた。

「やべ、妖精が見える」

開口一言目で誰もが唾然としている中、ヴェロニカは暑いのが我慢ならずその場を離れ目の届く範囲内の木の下に移動する。

コートを脱ぎ袖を捲り、木の下にある石に座り込み、六道骸とスクアードそしてフランの会話を眺め始める。

「フラン僕です！わかりますね、お前の師匠です！」

「たまげましたビックリですー、こんな山の中にパイナップルの精が」  
「ぶっ」

フランの言葉にヴェロニカは思わず吹き出す。距離があつたためか誰も気付かなかつた。

「あ、よく見るとロンゲのあなたは見覚えがありますー、というよりこちら側のみなさんは知ってます、一つの集団ですよね」

「やっとなつていたか」

「虫歯菌だ」

「虫歯菌は妖精でもねえだろおが！」

そんな会話の途中でマーモンが、ヴェロニカが離れたところに避難していることに気付き近づいてくる。

「ボス、僕は少し用事で離れたんだけど許可をくれるかい？」

「好きにしろ」

「ありがとう」

マーモンはそれだけ言うて姿を消す。

そして視線を戻すと、そこには今にもフランに襲い掛かろうとして

千種に止められている六道骸と、ナイフを投げ出したベルがいた。

「ヘルプミー！前髪切り忘れた頭の悪そうな虫菌菌がいかにオ리지ナルって感じのダサダサナイフ投げてきたー！」

「びよんとかいい顔で言えるのはバカだから！きつとバカの精だ触るとバカがうつる」

「なんでだろうこの虫菌菌全然怖くないや、スルーしよつと」

ベル、犬、レヴィにそれぞれ毒を吐きながら逃げるフランにスクアールと千種、六道骸がフランの逃げ道を塞ぐ。

「う〱お〱 おい！そんなに死にてーのかあ」

「観念しなさい」

「ヤバイ…妖精をおだてて鎮めないで殺される」

次々と的確に相手に毒を吐いていくフランにスクアールが思案顔で言い放つ。

「う〱お〱 おい、一つ聞くぞフラン。お前最近頭強く打った覚えはねえかあ!？」

「おばあちゃんによるとチーズの角で頭打ったらしいですけど、ミーは記憶を失って覚えていないんですー」

「……………」

フランの言葉にその場の誰もが無言になり、三人は考え込み始める。

それを好機と思ったのかフランがすぐさま立ち上がり方向転換し、逃げ始める。

逃げたフランを追おうと周りが反応する。

追いかけてつこを見るのに飽きて、視線を外して緑を眺める。

天気が良すぎて日差しが強いが、たまには森の中を散歩するのもいいかもしれないな…

今度本部の隣にある森の中に休暇用の別荘作ろうかな。

ヴェロニカが考え込んでいると、突然背中に小さな衝撃を受ける。

「?」

内心首を傾げながら後ろを振り向くと、そこにはリンゴの被り物を被っているフランが腕をヴェロニカの腰に巻き付いていた。

ヴェロニカは急なことに目を見開く。

「助けて下さいーい、いかにも悪党ですって顔の人達に追われて命狙われてますー」

「…」

待て、ザンザスの顔もいかにも悪党って顔をしていると思うぞ少年よ。

だって頬とか額に傷残ってるし、ザンザスの眼つきは最高に悪いし。

ヴェロニカの思考を他所にフランの奇行に周りにいた者は全員固まっていた。

「おいおい、あれフラン殺されね？勧誘する前に殺されね？」

「うむ、短い人生だったな…あの小僧」

「少し可哀そうだけど、仕方ないわねん」

「ちよつと、あなた達のボスでしょう!?止めなさい!」

「お前師匠だろ!?弟子を助けてやれよ!」

「牢獄から出たばかりなんです!まだリハビリ中なんですよ!」

「う〃お〃おい!取り合えず誰かフラン引き剥がせえええええ」

「あなたがしなさい!」

骸とヴァリアアの幹部の会話がきつちりとこちらまで聞こえているヴェロニカは後で彼らに一発ずつお見舞いしようと思いつながらフランを見下ろす。

そしてリングゴの被り物に手を伸ばし、被り物の幻術を調和で解く。

「虫歯菌とパイナップルの精から助けて下さい、お姉さん」

「はっ」

フランの言葉に今度こそ思考が止まる。

お、お姉さん?

待てこいつは、ザンザスの姿を女と間違えるほど頭イカれていたのだろうか?

ヴェロニカは自身の胸板を見て、ない、と思い再びフランを見る。

「にしてもお姉さん、さつきから姿がぼやけてて怖い人と被って見えませすー」

今度こそヴェロニカは確信し、フランを脇に担ぎその場を全速力で走りだす。

周りの者はフランの奇行に次ぐザンザスの奇行にまたもや固まっていた。

数分ほど走って誰も周りにいないことを確認すると、肩に乗せていたフランを降ろす。

「ありがとうございますーお陰で助かりましたー」

「そんなことどうでもいい、フラン、今お前の目に俺はどう映っている？」

「綺麗な20代のお姉さんに見えますよー眉毛割れてるけど」

やはり、フランには私の本当の姿が見えているようだ

何故見えるかは分からないが、これが六道骸の元に行くのは全力で避けたい。

というより変な疑いを持たれたくないので誰にも言わないで欲しい、切実に。

「さつきいた銀髪のロンゲの奴は姿がぶれてたりしてたか？」

「いいえー？あなただけですー」

「フラン、お前が見ている姿と他の人が見ている姿は別物だ…他の人には男に見えている…それも結構な強面の」

「え」

「このことは誰にも言うな、分かったな？」

「ていうか本当はどっちなんですかー？」

「さあな、少し複雑なんだ…男でもあり女でもある、他の者には男にか見えないから、男と男思ってくれていい」

「そうですかー…大人は複雑ですねー」

「で、だ。お前に提案がある」

「なんですかー？」

「お前を俺の部下としてスカウトしたい、こんな山奥でひっそりと暮らすよりは刺激があつて楽しいと思う」

「部下ですかー？給料ですかー？」

「最初は候補だからな、そこまで給料は出ないが…まあ一年あれば普



通に働くよりは倍以上出る」

「おおーでも何かきな臭いですねー、お仕事なんですかー？」

「マフィアだ」

「えーお断りしてもいいですかー？」

「俺の話を断るのは自由だ、だが先ほどの銀髪ロンゲとナツポーヘアの奴らはお前を裏の世界へ引き込むつもりだ」

「なるほど、お姉さんは銀髪ロンゲの方の仲間なんですか？」

「あいつらの上司だ」

「パイナップルの精はどんな人ですかー？」

「さあな、あまり奴のことは知らんが：僕と契約しましょうだクフフだ永遠のサンバだのとのたまう奴であることは知っている」

「お姉さんの方について行きますー」

「じゃあ早速イタリアに連れて行く、家族に教えてこい」

「はーい」

「マフィアの部分は濁して伝えろよ」

「分かってまーす、あ」

「？」

「お姉さんの名前は何ですかー？」

「ザンザスだ：」

「それは男の方のですよね、女の方は何ですか？」

「何故それを聞く」

「ミーにはお姉さんにしか見えないんですーだから違和感すごくてー」

「教えてやってもいいが、誰にも言わないと約束出来るか？」

「破ったらどうなりますかー？」

「聞きたいか？」

「嫌な予感がしたのでやっぱいいですー、でも名前は教えて下さーい」  
「……………ヴェロニカ：」

「じゃあヴェロニカお姉さんですなー」

「人前では間違っても口を滑らせるなよ」

「はーい、じゃあ荷物纏めて来ますなー」

「ああ、一時間後また先ほどの川へ来い」

「分かりましたー」

フランは走りながら森の中に消えていき、ヴェロニカは溜め息を吐き先ほどの川へ戻る。

ヴェロニカが川の方に出た瞬間ヴァリアーと骸の一味が一斉にこちらを振り向いた。

「ボボボボス…ももしかして殺しちゃったの？」

「あーあ、折角来たのに無駄足だったね」

「ちよつと！人の弟子を勝手に殺さないでくださいよ！」

一旦ぶっ飛ばしていいかな？

ヴェロニカは一体に炎をまき散らし、取り合えず全員に一発ずつお見舞いする。

そして火傷を負いながらも復活する幹部共と六道骸に言い放つ。

「おい、カス…あのガキはヴァリアーで預かる」

「え」

「う〱お〱おい！ボス！あのガキは記憶がなくてだなあ！」

スクアアロの言葉を無視して、木陰の方で寝る体勢で瞼を閉じた。

少しすると、まだ声変わりのしていない子供の声が聞こえ瞼を開ける。

体を起こすと、そこにはヴァリアーの面々とフランがいた。

どうやら六道の一味は既に去ったらしい。

あ、そういえば六道骸に憑依のこと聞きに来たのにフランの言葉が衝撃的過ぎてスツカリ忘れてた。

しかたない、今度聞かか。

フランはヴェロニカが起きたことに気付き、近寄ってくる。

「ボスーおばあちゃんに話して来ましたー」

「そうか」

ヴェロニカは立ち上がり、背伸びをするとスクアアロに声を掛ける。

「おいカス鮫帰んぞ」

「了解…」

「ボスーあの銀髪ロンゲってカス鮫って名前何ですかー？」

「そうだ」

「う〱お〱 おい！嘘教えてんじゃねえ！俺はスペルビ・スクアーロだあ〱」

「私はルツスーリアよおん」

「シシツ、俺ベル、間違ったらお前ハリセンボンな」

「俺の名前はレヴィ・アー」「あ、そっちのおっさんは別にいいですー、じゃあよろしくお願いしますねー虫歯菌の皆さん」

「二〱誰が虫歯菌だ／よ！二〱」

「わー虫歯菌が怒ったので匿ってくださいーいボスー」

「…はあ」

途中でマーモンと合流し、イタリアに帰るまでフランはヴェロニカの隣に居座り、離れようとはしなかった。

その日は、何故かとても懐かれてしまっていることに戸惑いを隠せないヴェロニカと、ヴェロニカに大胆な行動を取るフランと、それをハラハラしながら眺める幹部達の姿が見られた。

そして翌日からフランの幻術指導が始まった。

だが、その日の昼にマーモンがそわそわしながらヴェロニカの執務室に入ってくる。

「誰だ」

「僕…マーモン」

「何だ？」

「ボスに聞いてほしい頼みがあるんだ…」

きた、これか…

「虹がらみだな」

「…うん」

「内容次第だ」

マーモンが今回の代理戦争のことを教え始める。

元々参加しようとは思っていたので、即了承するとマーモンがあからさまに安堵していた。

「だが条件がある」

「え……な、なんだい……」

いきなりの発言に表情が強張るマーモン。  
心配するな、難しい話じゃないんだから。

「フランの幻術レベルを急ピッチで上げろ」

「え？あ、それくらいお安い御用さ！」

「そうか、ならその代理戦争までにだ」

「ああ！じゃあ今から特訓を付けてくるよ！」

マーモンがそう意気込みながら出ていく。

すまんなフラン、暫しの辛抱だ。

出来るだけ計画を成功させる確率を上げたいからな。

夜になり、やることもなくなつたヴェロニカはトレーニング室へ行く。

いつも使っているトレーニング室の隣が使用中になつており、中を見てみるとマーモンの幻術の攻撃をフランがひたすら避けていた。

あれじゃいくらやつたつて上がらないのでは、とすら思っているとマーモンがヴェロニカの存在に気付き攻撃の手を止める。

「ボスじゃないか、どうしたんだい」

「いや偶々目に入っただけだ」

「ボスー助けてくださーい、マーモンって人がー、ミーを殺そうとしますー」

「君はボスに頼り過ぎだよ！早く君には強くなつてもらわなきゃいけないんだからね」

「ボスー」

フランのやる気を削ぐのは避けたいし、特訓を詰めすぎるのは返つて逆効果でもある。

特にフランの様な性格の者ならば強制的にやらせるのは悪手だ。

「マーモン、今日はもういい」

「ボス!？」

「わーい流石ボスー」

「その代わりに、フラン、てめえは明日のこの時間までに有幻覚を自由に操れるようにしておけ」

「分かりましたー」

「何か分からないことがあればマーモンに聞け」

昨日のりんごの被り物の幻覚の精度からして有幻覚を自分のものにするのはそこまで難しくないだろうし、当面は攻撃の幅と技術を伸ばしてもらおう。

ヴェロニカはそれだけ言うと、隣のトレーニングルームに向かう。仮想空間で仮想敵と戦えるように設定して、トレーニングルームへ入る。

そしてそこから数時間程体を動かして、息が上がってきたところで時刻を確認する。

そろそろ日付が変わる時間だったのでそのまま切り上げて、シャワーを浴びて自室へ戻る。

部屋に戻ると机の上に資料の束が置いてあり、それを一枚ずつ読み出す。

そこには並盛の地図と近場の広い場所や廃墟、また今回の代理戦争中の相手チームの名前と行動が大雑把ながら記されていた。

地形などは入江が記憶を絞り出して書いたのだろうと思い、再び資料すべてに目を通す。

全て読み終える頃には夜中の1時になっていて、流星に眠ろうと思いつつベッドに横になる。

明日には日本へ飛ばねければならないと思うと、気が重くなる。もう少しだけ時間があればなあ

フランス side

ミーはフランスに住んでいて、家族はおばあちゃんだけで、いつも自覚のないマズい弁当をミーにあげます。

ミーは人とは少しだけ違うところがあった。

それはないものが作れたり、まるでそこに本当にあるかのような現象を作り出したりと魔法使いのようなことが出来ること。

それを皆が怖がって近寄らないのもあったけど、ミーはあまり気に

していなかった。

お母さんもお父さんもミーが怖くて逃げだしたのを知っているから、尚更他人が離れていくことが当然のように思っていた。

なのにおばあちゃんだけがミーを引き取ってくれた。

だけどミーは、おばあちゃんもミーを怖がっているのを知っている。

それから誰の前でもこの力を使うことはしなくなって、誰も登れない滝の上で時間を潰していた。

初めて力を使って作ったリングを、被り物の大きさにして被っている。

誰もいないこの川で力を使って時間を潰していた。

最近頭をぶつけて前後の記憶がなくなっちゃったけれど、どのみち同じ毎日だと思いなんとも思わなかった。

本当に寂しくも悲しくもなかったけれど、つまらなかった。

そんな時に、いつもの川で暇潰ししようとしていたら知らない人たちが現れた。

片方はパイナップルの精で、もう片方は虫歯菌だった。

そいつらはミーを追いかけて殺そうとしたので、取り合えず人通りのある場所に逃げようかと思っていた。

流石に人前で殺しはしないだろうと思って逃げようとしたけど、先回りされたことに驚いて尻もちをつく。

何やら変なことを言いながら銀髪ロングの質問に答えると急に静かになり出したので逃げようと再び走り出した。

すると視界の端にセミロングのお姉さんが木陰の下で大きめの石に座っていたので、助けを求めようとそこに走り出す。

そして勢いよく走っていたお陰で止まらずそのままお姉さんにしがみつく。

「虫歯菌とパイナップルの精から助けて下さい、お姉さん」

「は？」

ミーの言葉でお姉さんが固まる。

そんなお姉さんを眺めていると、なんだかお姉さんの体がぶれ始め

る。

首を傾げながら目を細めると、頬に傷のある男の人が一瞬だけ重  
なつて見えて驚く。

「にしてもお姉さん、さつきから姿がぼやけてて怖い人と被つて見え  
ますー」

それを教えると、今度こそお姉さんは目を見開きミーを担ぎ上げて  
その場から離れた。

遠くまできたところでお姉さんがミーを下ろす。

お礼を言うが、お姉さんはそれどころじゃないらしく、あれやこれ  
やと質問を投げかけてくる。

素直に答えていくと、お姉さんはまさかのニューハーフみたいなの  
だった。

お姉さんはミーをマフィアにスカウトしに来たみたいで丁寧に断  
ろうと思っただけど、お姉さんの言葉に先ほどのナツポーとロンゲを思  
い出す。

どのみち怖い場所に引き込まれるなら待遇のいい方を選ぶのかな  
と思つて質問をする。

「なるほど、お姉さんは銀髪ロンゲの方の仲間なんですか？」

「あいつらの上司だ」

「パイナップルの精はどんな人ですかー？」

「さあな、あまり奴のことは知らんが：僕と契約しましょうだクフフ  
だ永遠のサンバだのとのたまう奴であることは知っている」

「お姉さんの方について行きますー」

やはりあのナツポーは変人だったのかと納得して、常識人そうなお  
姉さんの言う通りにおばあちゃんに一言断つてからこの街を出よう  
と思つた。

お姉さんと別れる際にお姉さんの名前を聞きだした。

「……………ヴェロニカ」

「じゃあヴェロニカお姉さんですねー」

多分さつきあんなに誰にも言うなつて言つてたから、誰もお姉さん  
の名前を知らないんだと思う。

少しだけ優越感に浸りながら家に帰る。

家に帰ると、少ない私物を鞆に詰めてキッチンにいるであろうおばあちゃんに声を掛ける。

「おばあちゃん、ミーはこの街を出ます」

「ああそうかい……って、え？」

「なのでミーはもう戻ってこないと思います、おばあちゃんはそろそろ楽して生きて下さいーい」

「ちよつとお待ち、また…何でだい？誰かに嫌なこと言われたかい？」

「自分の居場所を探しに行こうと思つてますー」

「…そうかい……気を付けて行つてくるんだよ…」

「はい、今までありがとうございましたー」

少し心配そうにしてくるおばあちゃんに簡素な礼だけを述べて家を出る。

ミーを本気で嫌つてはいなかったけれど、恐怖は抱かれていたので、おばあちゃんのストレスにはなつてたと思つた。

軽い足取りで、先ほどの滝を登つた所の川へ行くと、お姉さんはすよすよと眠つていて、他のオカマや前髪やロンゲ、おっさんの視線が一斉にこちらに向く。

「おいマジで生きてやがった」

「う〱お〱おい、ガキ！よくボスから生き延びたなあ！」

「シシツ、そのまま死んでも良かったんだぜ」

「前髪伸ばして前見えなない人の方が死ぬ確率高そうですねー」

「お前ほんと生意気」

前髪の人々が怒り出し、その人から逃げているとお姉さんが起き出したので、そちらに駆け寄る。

お姉さんの後ろに隠れると、前髪だけじゃなく皆が狼狽えている。

お姉さんは帰るとだけ言つて歩き出すその速度に合わせて隣を歩きながら、前髪の人と言い合いをする。

どうやらお姉さんは怖い人を演じているようなので、これを利用して危なくなつたらお姉さんの後ろに隠れようと思う。

その日はイタリアに向かい新しい部屋を与えられた。



そして自身の持っている力が幻術であるということ赤ん坊に教わった。

正直赤ん坊に教わるのはどうかと思ひ、ちよくちよく力を使って抵抗したが、ものの数秒で抑えられて説明を続けられた。

不満たらたらずその説明を聞くと、ミーが使っていた力を使う者はこの世に数百人以上もいると言われた。

マフィアがどういったものか知らないけど興味を沸いた。

翌日から赤ん坊に幻術を教わることになった。

朝からずつとトレーニングトレーニングしか言わない赤ん坊を驚かす。

「おいマーモン先輩とやらよお、さつきから同じことばかりやらせやがってノイローゼになるわ」

「は、離せ！僕だって君みたいなガキのお守は嫌なんだよ！」

「あ？誰がガキだよこの野郎、てめーの方が年下だろ」

「少なくとも僕は君より年上だよ！ったく」

「嘘つくよこのツーフインガーがお前の目を突き破って前頭葉とコンニチワですよ」

指二本のピースサインをマーモンの目に向けて伸ばすと、痺れを切らしたマーモンが幻術を使ってきてミーの足元を崩しだす。

ミーはその場を飛ぶと、目の間のマーモンは宙に浮かんでいた。

「わーそれ何の手法ですかー？ミーもやりたーい」

「これだから子供は！何でボスもこのガキを僕に任せたのやら…ほらさつきの練習をもう一度しな！」

不服だけど幻術の腕は少しだけマーモン先輩の方が上のようなので、指示には従う。

数時間すると、時間は夜でミーはとても眠くて幻術どころじゃなくなつた頃にマーモンが叱る。

「明後日までに君を僕レベルの術師に仕立て上げるんだ！寝る暇なんてないよ！」

「横暴だー、いじめだー」

嫌々と態度に表していると、マーモンの幻術が止まる。

それに首を傾げながらマーモンの視線を追うと、ヴェロニカお姉さんがいた。

直ぐにお姉さんに縋りつくど、お姉さんは暫し考える。

「マーモン、今日はもういい」

「ボス!？」

「わーい流石ボスー」

「その代わりに、フラン、てめえは明日のこの時間までに有幻覚を自由に操れるようにしておけ」

「分かりましたー」

「何か分からないことがあればマーモンに聞け」

宿題ができたが、今日の修行が終わったことに喜ぶ。

そしてお姉さんが隣のトレーニングルームに入っていくと、ミーはマーモンに声を掛ける。

「全くボスは何でこのガキに甘いんだい…」

「で、有幻覚って何ですか?」

「それも分からないのかい?仕方ないから見せてあげるよ」

それから数分マーモンから有幻覚を教わり、その日の修行を終えて自分の部屋に戻る。

早くこの有幻覚を覚えて、お姉さんに褒めてもらおう。

フランはただひたすらベッドの中で有幻覚のリングを作り出す。

直ぐに本格的に眠くなり、瞼を閉じる。

木陰で石の上に座るお姉さんの姿が、一瞬だけお母さんに見えたのは誰にも教えないミーだけの秘密です。

## Veronicaの虚像

はい、ヴェロニカです。

現在日本にいます。

今回の代理戦争参加者には十分な注意を払いながら日本に赴いたわけで、ホテルとかも何度も誰とも被ってないか確認したから安心出来るね。

代理戦争の詳しい説明は後日分かるってマーモン入ってたけど、今日あたりに説明役の下っ端が来る予定だろう。

「見て下さいよボス」

フランの声に視線を移すと、そこにはベルの人形を有幻覚で作り出し、これまた有幻覚の針で突き刺している。

「ミーも有幻覚使いこなせてますよ」

「……」

背後でベルがスクアアローに羽織締めにされて抑えられているのを見てフランに呆れながらため息を吐く。

「よくやった、だが無意味にベルを煽るな」

「えー」

ぶーぶー言いながら有幻覚を解いて、別のものを作り出していく。そして夜、皆が夕飯を食べ終わった頃だった。

いきなり部屋のインターホンが鳴るので、ルツスーリアに外を覗かせに行くと、チェツカーフェイスの遣いの者がきたのだ。

中に入れて、今回の代理戦争の説明を受ける。

・アルコバレーノは直接戦闘に出てはならない。

・アルコバレーノは自分の代理を立てて戦う。代理は誰でもいいし物でもいい。この集団をチームと呼ぶ。

・チームには腕時計が8つ支給される。アルコバレーノ用のアルコバレーノウォッチ1本、代理のリーダー用ボスウォッチ1本、代理メンバー用バトラーウォッチ6本。

・代理のリーダーがつけたボスウォッチが破壊された場合、そのチームは負け。即退場。

・バトラーウオッチを破壊された代理メンバーは、チーム内で未使用のバトラーウオッチがある場合、または別のチームとして敗者復活可能。

・バトラーウオッチを破壊された代理メンバーがその状態でバトルに関与した場合、そのチームは失格。即退場。

・戦闘は一日一回、一定時間行われる。いつ始まるかは腕時計が開始1分前に知らせる。戦いの地は日本。

・戦闘許可時間外にバトルを行った場合、そのチームは失格。即退場。

の以上だった。

遣いの尾道は説明が終わり次第、帰っていく。

そしてマーモンはヴェロニカにボスウオッチを、幹部達に一つずつバトラーウオッチを配る。

皆が付け終わると同時に、マーモンが全財産を叩いてまで作らせたヴアリアーリングを配り出す。

自分だけ配られていないことに不満を露わにするフランにヴェロニカが別のリングを渡す。

「やる」

「何ですかーこれ」

「ヘルリング」

「「ぶっ」」

ヴェロニカの言葉に他の幹部が全員吹き出す。

直ぐにベルとマーモン、スクアールが反応する。

「ちよ、え!?何でボスがそれ持つてんの?」

「未来で幻騎士から奪った」

「つーかそれ所有者の精神喰わせて増力するタイプでしょ、やばいやつじゃね?」

「ボスー、ベル先輩がそんなこと言ってるんですがー」

「だから他にこれ付けとけ」

「次は何ですかー」

「マモンチェーんだ、それで効力がある程度は抑えるから精神を喰わ

れても理性を削られることはない」

「それ本当ですかー」

「ああ、カスに一週間それつけて実証済みだ」

「ボスがそういうなら確かですねー、じゃあ嵌めてみますー」

「最高ランクの霧属性のリングだ、マモンチエーンで抑えられていたとしてもそれなりの増力になるだろ」

「わーい」

「施しだ」

「待て待て待て！最近俺の部下が鬱状態になりがちだったのそれのせいかあ!？」

いち早く復活した入江がヴェロニカを問いただす。

「うるせえ」

必死の入江を一蹴して、ヴェロニカはヘルリングを嵌めたフランを見る。

「んー、何が変わったとか特にこれと言って分かるわけではないんですけどねー」

「だろうな、まあ戦闘になれば嫌でも理解するだろ」

「ぶっつけ本番ってことですか」

フランは興味深そうにヘルリングをじっくり眺めていた。

「おい、てめえら…明日の代理戦争…最初に――」

ヴェロニカの言葉にその場の全員が口角を上げる。

「二」「了解ボス」「二」

ホテルの部屋は和室と洋室があり、ヴェロニカは和室で寛いでいた。

一つ手前の広間では他の者達が酒を飲んで、筋トレをしたりと時間を潰している中、スクアアローがヴェロニカのいる奥の間を開ける。

「ヴェロニカちゃん」

「何だ」

「これ」

小声で話しかけてきた入江はヴェロニカにイヤホン型の超小型通

信機と半径5mmほど発信機を渡す。

ヴェロニカはそれを受け取ると、発信機の方を迷わず口に放り込む。

そして入江の持っている端末に点滅が付く。

「よし、成功だ…そのイヤホンを付ける際に憤怒の炎を灯してね、切る時も同じだ」

「分かった」

「じゃあ武運を」

「お前もな」

入江はそれだけ言うと、何事もなかったように広間に戻る。

その夜、ヴェロニカはフランの寝ている部屋に入りフランを揺すっていた。

「おい、フラン」

「うくん…：…ん？」

「起きろ」

「ヴェロニカの…お姉さん」

「寝ぼけるな、お前に頼みがある」

「ふあい…」

「いいか、今から——」

「え」

「よくやった」

「…：…このこと知ってる人はミーだけですか？」

「スクアールも知っている…：だが誰にも悟られないようにしろ」

「はーい」

「フラン、頑張れよ」

「分かりました…」

ヴェロニカはフランの頭をくしゃくしゃと軽く撫でると、部屋を出る。

そして誰にも見られていないことを確認し、ヴァリアーリングにマモンチエーンを巻く。

「さてと……やるか」

窓を開け、縁の方に足を掛け、月の光で照らされる夜景に足を踏み出した。

そこには黒いローブが夜の冷たい風に靡かれながら宙を掛けていた

マーモン side

代理戦争 一日目

並盛中では放課後になったばかりの時刻で、第一回目のバトル開始の合図が鳴り響いた。

僕も参加しようと思ったけれど視界の中にいるボスが未だにソファで眠りこけていることに焦り出す。

取り合えず起こしてみようかな…ダメだ、怖くて出来ない  
すると部屋の中にフランが入ってくる。

「あれーマーモン先輩、戦いにいかないんですかー？」

「ボスが起きないんだよ」

「それ潔く諦めて一人で行けばいいと思います」

「ったく、どのみちスクアール口達が早々負けるとは思っていないよ…  
最初は様子見することにするさ」

「それって移動するのが面倒なだけですかー？」

「君こそ何でここにいるのさ」

「ミーはボスの側近です」

「ボスにそんなのいないよ」

「まあまあ、今のミーが行ったところでバトラウオッチ破壊される  
だけですよ」

「それもそうか」

あっという間に10分は過ぎ去り、何事もなく初戦が終了してしま  
う。

少しすると、無傷の幹部が帰ってきて報告してくる。

そしてアルコバレーノウオッチに例の言葉を伝えると、一時的な呪

解が出来ることを知ったのはよかった。

すると途中で忌々しいチエツカーフェイスから現状報告があった。そこには10分間に、いくつかバトラウオッチが壊されていた。

コロネロチームは二人敗退。

マーモンチームとスカルチームは敗退者無し。

ヴェルデチームとユニチーム、リボンチームともに敗退者一名。

マーモンはこれにまざまずの出だしだと思い、ボスを見るが食事を平らげている彼に内心不安を隠せなかった。

ねえボス：やる時はやってくれるよね……信じてるよ……

翌日、常に身構えていたけど夜になるまでバトル開始の合図が鳴ることはなかった。

今夜のバトルは夜戦ということもあって、再び作戦を立てようと言おうとすると、徐にスクアアロが立ち上がる。

「おめーら、今から場所を変える。荷物を纏めろ」

「はあ？」

「あら」

「なぬ？」

他のやつも驚いているからスクアアロの独断……なのか？

マーモンは困惑しながらボスに視線をやると、既に黒いコートを羽織っていた。

場所移す気満々だ！この人！

「ちよ、ちよっと！何でホテル替えるのよ？」

「復讐者がうろついているという情報が入った」

「！！！！？」

「おいマーモン、心当たりはあるかあ」

スクアアロの言葉に僕は先日のリボーンの手紙を思い出す。

そこには第8属性の炎、バミューダ・フォン・ヴェツケンシユタインについてだったのを、その場にいる幹部達に教える。

「透明のおしやぶり持つアルコバレーノか……」



「そいつが復讐者と繋がってるってことなのよね？」

「そうだよ、だから今回の代理戦争を復讐者が嗅ぎつけてきたんじゃないかな……」

「なるほど」

「なら尚更場所移動すんぞお、あいつらは俺達のことを探っている可能性も無いわけじゃねえってことだあ」

「どういう意味？」

ルツスーリアの問いにスクアーロは頭を掻きながら順を追って説明していく。

「そいつらがいきなり乱入してくることを前提にすると、どうやってこの代理戦争に参加すると思ってるんだあ」

「え、あ……」

「そうだ、どこかのチームからウオツチを奪うことだろうなあ……そしてそれはウオツチを一つも破壊されていないチームを狙うハズだ」

「スカルチームと俺達ってわけね」

「ってわけだ、移動するぞお。それとこれおめーらのリングに巻きつけ」

ベルの言葉にスクアーロはそう応えてあるものを投げ渡す。

僕は手の平に落ちてきたものを見ると、それはマモンチェーンだった。

とても精密に作られていると分かるそれを一体スクアーロはどこから持ってきたのかは分からないが、どのみち教えるつもりはないだろうと思ひ、素直にチェーンをリングに巻きつける。

恐らく復讐者に感知されないようにするためのものだろう。

「う〱お〱 おいボス、あんたもだ、ほらよ」

スクアーロはボスにもそれを渡し、ボスも渋々それをリングに巻きつける。

派手な戦いを好きな時に好きなだけしたいボスに、この戦争の細かいルールは合わなかったらしく、とてもやる気を削がれることが一目見ても分かった。

だからこそ、ボスのやる気が完全に無くなる前にどこかのチームを

押し付けて、ボスにカツ消してもらいたかった。

それと先ほどからボスから離れようとしないうフランに苛つくも、ボスが何も言わないので放置する。

ルッスーリアやレヴィの妬みの視線が集中しているがフランは気にしていないようだった。

そしてスクアアロの後を追って僕らは別のホテルに移動する。

既に外は暗くなってきたいて、移動先のホテルに着いてチエツクインをする。

するとスクアアロが地図を取り出してくる。

地図を囲んで、スクアアロの指示に耳を傾ける幹部達を他所に眠っているボスに僕は焦る。

スクアアロはコロネロチームとヴェルデチームに警戒し、復讐者にも気を付けるよう忠告をしていた。

フランも聞いてるようで聞いていないことが丸わかりな態度でふざけたリングの被り物で遊んでいた。

あのガキにバトルウオッチをあげたのは間違いだったか……すると、バトルウオッチが鳴り出す。

それに反応して他のチームの場所を割り出して、スクアアロ達がそこに向かいだす。

僕も眠り込んでいるボスと遊んでいるフランを放置して幹部達についていく。

数分で辿り着いたそこには、別荘のような所で他チームが密集して戦闘を繰り広げていた。

目に見える範囲でヴェルデ・リボン・ユニのチームが戦闘していて、僕たちも乱入しようとしたらスクアアロに止められる。

「おい、森の方……5〜6000m地点だ……誰かいるぞお」  
「はっ」

「待て、今近くの監視カメラで確認させてる」

いつになく険しいスクアアロが通信機越しに、さらに眉を顰める。

静かにスクアアロの言葉を待つ幹部達に、スクアアロは一旦距離を置くようにジェスチャーする。

「5000m地点、崖の上にコロネロチームがいた、恐らく一網打尽を狙ってたんだろうな」

「シシツ、あつぶねー」

「あら危なかったわね〜」

「そのまま奴らの隙について殺すのか？スクアアロ」

「が、いいだろうなあ…：なら出来るだけ戦闘終了間近がいいだろ…取り合えず奴等の視界に入らずに近寄るぞ」

「了解」

これなら本当に勝てるかもしれない！

僕は、いつになく慎重になっているスクアアロに内心感謝していた。

戦闘開始から早20分ほど経ったところ、コロネロたちのいる場所の200mほど離れた地点でヴァリアーが張っていた。

スクアアロが双眼鏡を覗きながら戦況を通信機越しに皆に教えていた。

『沢田綱吉と沢田家光が戦闘を開始した、そのまま待機』

僕はベルの肩に乗りながらスクアアロの報告を聞いていた。

「シシ、そのまま相打ちにでもなってくれねーかなー」

「あの門外顧問、想像以上に強いね」

『ルツスーリア、ベル、西に300m移動』

「了解」

スクアアロの指示通りの配置に置につき、アルコバレーノウオッチを見ると、そこには4分と表示されていた。

『残り1分になった瞬間に乗り込む、ルツスーリア、お前はラル・ミルチを。レヴィ、ベルは沢田家光だ。俺は沢田綱吉をやる。』

残り3分が僕にはとてつもなく長く感じた。

20秒前になると、ベルが立ち上がりリングに巻きつけていたマモンチェーンを外す。

3…2…1

『行け！』

バトルウオッチの残り時間が1分を切った瞬間に、ベルが駆け出し

た。

そして戦闘中の沢田家光に向かってナイフを投げ出した。

「!？」

突然の乱入者に驚愕する者達に構わずにナイフを数十本投げると、流石は門外顧問か急変する状況でも冷静に判断し、ベルのナイフと共に真上からレヴィの落した雷も避けだす。

沢田綱吉はスクアードに襟元を掴まれて森の中の方に消えていき、リボンもそれを追っていく。

「まさかヴァリアーもこの場にいたとはな」

「シシツ、うちの隊長があんた達見つけなきゃやばかったけどね」

「ここで殺されてもらうぞ、門外顧問」

「積年の恨みってやつ？シシツ」

レヴィとベルは8年間ボスを凍らせた九代目とそれに関与していた沢田家光を激しく嫌ってたなと思いつく。

僕は邪魔にならないよう少し離れた場所にいき、コロネロを監視する。

「おいコラ！奇襲とはいいい度胸だな！コラ！」

「フン、君たちに言われたくないよ」

「だがお前たちヴァリアーの戦力じゃ家光には勝てねーぞ！コラ！」

「それは君が決めることじゃないよ、そろそろ黙ってくれないかい？」

コロネロを黙らせて、戦況を眺める。

20秒を切った今既にレヴィのウォッチが壊されて森の方にふっ飛ばされていた。

なんとかベルが家光の攻撃を防いでいるが、それも持つか分らなかったなので僕は呪解する。

「ウロボロス！」

「!？」

ベルと家光、そしてコロネロも驚いていたが、僕はすぐに家光に向かって幻術で攻撃を掛ける。

「ベル！僕が少しの間抑えるからその間に殺して！」

僕は全力で家光に幻術を掛けていく。

五感を惑わせるとともに、二重で幻術を掛けていく。  
そしてベルが家光の頸動脈を狙ってナイフを飛ばす。

「やらせるか！コラー！」

そこにコロネロが呪解してフランのナイフを撃ち落としていた。  
そしてコロネロが目にも止まらぬスピードでベルを追い詰めるが、  
僕が咄嗟にコロネロの足を幻術で凍らせる。

均衡する状況の中で、家光がマーモンの幻術を破ってきた。

マーモンは再び幻術にかけようとするがその前に家光の拳がベル  
のウオッチに触れようとした瞬間――

ジリリリリリリリリリリッ

家光の拳が止まり、ベルの頬に汗が伝う。

僕もコロネロも呪解が解けて、再び赤ん坊の姿になった。

「時間切れか」

家光の声にハツとして、僕はベルに駆け寄る。

「ベル！ウオッチは!？」

「え、あ…」

するとそこにはウイッチに罫が入っていて至る所が外れていた。

家光の拳は触れることはなかったが、風圧と拳に纏っていた大空の  
炎が微量に時計に触れたことで壊れたようだった。

僕はショックに言葉が出なく、ベルもバツが悪そうにマーモンを腕  
の中に抱えだす。

「悪かったって、マーモン」

「うう…」

目の前の家光は、危なかったーと能天気には笑っており、今すぐに殺  
したい気持ちになりさっさと帰りたくなった。

だがその時だった。

バキッ

ウオッチが壊れる音と共に、少量の血が地面に散る。

「なっ……」

その場の誰もが目を見開き、言葉を失う。

「おいおい油断大敵だぜえッ」

そこには銀色の長い髪を靡かせながら、家光のウォッチを破壊したスクアアロがいた。

我に返ったコロネロと家光がスクアアロの行動を咎める。

「おい！バトル終了の合図は鳴ったぞ！コラー！」

「そうだ、お前がしたのは反則の何ものでもないぞ、スクアアロ」

「失格だぞ！コラー！」

コロネロの言葉に我に返った僕は今度こそ青ざめて意識が遠ざかりそうになった。

「それは代理戦争参加者だけだろお？ルール見直してこいや」

「!?!」

家光、コロネロが目を見開く。

そしてそれは僕やベルも例外ではなかった。

「何言って、おめーの腕にしてあるウォッチが…」

「おいおいおめーの目は節穴かあ？これは似てるが市販で買った別もんだあ」

「!?!」

今度こそその場の誰もが声を出して驚く。

よく見たら本当に似てるけど、違う部分があった。

じゃあ僕に渡されたウォッチは今どこに!?!

「おい、反則じゃねえよな？尾道」

「はい、まだスクアアロさんは参加者ではありませんので」

急に登場する尾道に僕は驚くが、この男の言う通りならば…

「コロネロチームはボスウォッチを破壊された為失格です」

「くっそー！ー！ー！」

尾道の言葉にコロネロが地面を叩いて叫び出す。

家光もルールを掻い潜ったスクアアロに対して苦い顔をする。

スクアアロはとてご満悦のようで、家光に対してニヤニヤと笑っていた。

「ツハ、ざまあねえなあー！」

そういえば8年前のゆりかごの件で、一番怒っていたのはスクアアロだったなと思ひ出す。

しかも家光に対してとても、とてもご立腹だったから今回のことでスッキリしたらしい。

「シシツ、そういうえばオカマはどうなったんだよ？」

「私はここより、ちゃんと死守したわ〜！」

ルツスーリアの声が上の方から聞こえてくる。

「つてことはこっちはバトラウオツチ2つ壊しちゃったけど、1チーム潰したつてことっしょ」

「こっちの損害もあったが、警戒していたチームを潰せたのは大きかったつてことだあ〜」

スクアアロの言葉に確かに、と思った。

そしてコロネロチームを放置して、そのままホテルに帰る道中でスクアアロが確認しだす。

「おいお前らちゃんとチェーンつけ直したか？」

「してるよー」

「私もちゃんとつけ直したわ」

「忘れるわけがないだろう」

「僕もつけてるよ」

皆が付いていることを確認し終わると、ホテルの方へ戻っていた。

ホテルに戻るとフランが眠っているボスの横で爆睡していた。

「う〱お〱おい！こいつに危機感つてのはねえのかあ！」

「つーかボスもずっと眠ってたわけ？ウケるんですけど」

「ボスがずっと眠ってるのはいつものことでしょ！ほら私たちももう休みましょ」

「そうだな」

何だろ、代理戦争中まだボスと話していないけど…本当にボスは戦ってくれるのかな…

若干不安になりつつも、僕はアルコバレーノの会合に向かった。

スクアアロside

「なっ、スクアーロ!？」

襟元を掴まれた綱吉君が僕を見て驚いていた。

そのまま森の中まで降りていき、崖の上の方と距離が開いたことを確認して綱吉君を離す。

綱吉君が僕を警戒しているところに、リボーン君が追いついてくる。

「おめー達はこれを狙ってやがったのか」

「さあな、だが今おめーと戦うつもりはねえよ」

「!？」

「どういうことだ？」

「俺の目的はお前と家光を離すことと、ある情報を伝えることだあ」

「情報？」

「復讐者がうろついている」

「!？」

「復讐者の中に透明のおしやぶりを持ったアルコバレーノがいるとマーモンから聞いた、そいつが関わっているかもしれないなあ」

「な、何で俺達にそれを教えてくれるんだ？」

「さあな、俺は確かに伝えたぞ」

僕の言葉と共に、バトルウオッチが鳴り出す。

二日目のバトルが終わったと同時に、僕は崖を一気に登り始めた。

そして崖を登り切ると一気に沢田家光と距離を詰めて、背後からボスウオッチを狙う。

誰もが安堵している瞬間に響く破壊音に、僕は今度こそ息を吐く。

少し沢田家光に対して恨みがあった分スッキリしながら、文句を言ってくるコロネロや家光に対して説明し出す。

そしてそのままマーモン達とホテルに戻っていく。

今回は雲雀恭弥と鉢合わせしたくないが為にわざわざこつちに来ただけで、ついでにコロネロチームを倒せたのは運が良かった。

にしてもウオッチに関しては本当に急ぎだった。

あらゆる時計店を回りまくって似ているものを見つけて、そこからさらに似せるように改造した偽ウオッチ。



本物のバトラウオッチはホテルの引き出しの中にしまっている。元の世界でも復讐者がこの作戦を使っていたけどチェツカーフェイスからの勧告がなかったことから有効であるはずだ。

そして僕にとってこれからが本番でもある。

それは復讐者の奇襲の回避だ。

帰る途中、ちゃんとチェーンをしているかも確認しながらホテルに入る。

部屋に戻った瞬間にチェツカーフェイスの報告があった。

現在、ユニとコロネロチームが敗退しており、他は生き残っていた。スカルチームはバミューダチームとなり、シモンファミリーは既に全滅させられたことが分かる。

ここから復讐者の奇襲が始まるはずだ。

わざわざ当初予約していたホテルをやめて、別のホテルにした上、先ほどホテルを移動した。

さらにマモンチェーンをつけているので、炎を察知して僕らの居場所を特定することは困難のはずだ。

しかも一日目に泊まったホテルには身代わりを置いているから、そっちへ奇襲する可能性が高い。

それでもどこか何かの拍子で居場所が割れてしまう可能性だってあるのだ。

警戒を解くことは出来ない。

ヴェロニカちゃんの方は大丈夫だろうか…。

それにフラン君の体力が気掛かりだ、あと少しだけ持つてくれればいいんだけど。

僕は自分の部屋に戻り、PCを立ち上げて街の至る所に設置した監視カメラを見出した。

風side

雲雀恭弥がデイーノのいるホテルに乗り込んで、デイーノと戦闘を始めてそろそろ30分が経とうとしていた。

どちらもまだ戦える状況で、ついに戦闘終了の合図が鳴り響いた。

「ふうー…」

「なに、まだあなたを咬み殺せてないよ」

「今日のバトルは終わりだ恭弥…まあ明日にでも——」

「ならこんな時計要らない」

雲雀恭弥の言葉を飲み込む前に、目の前で雲雀恭弥が自身のウオツチに向けてトンファーを振り下ろそうとしていた。

止めようと慌てて動こうとした時、盛大な爆音と共に雲雀恭弥とデイーノが飛ばされていく。

いきなりの奇襲に驚くも、私は周りを警戒し出す。

煙の立つ中、瓦礫の崩れる音と、誰かの足音が聞こえそこに視線を移し、構えだす。

煙で誰かが分からないが、その影は雲雀恭弥の飛ばされたところへ向かっていく。

「あなたは誰です、代理戦争者の参加者ですか？」

既に戦闘時間外であり、参加者は戦えないことになっている。

ならば参加者がどこぞの刺客でも雇ったのか？

煙が晴れていき、さきほどの攻撃が直撃して意識のない雲雀の腕を掴んでいる者を視界に捉えると、私は目を見開いた。

「何故あなたが——…」

## Veronicaの懐古

代理戦争二日目の夜

各チームが同時に復讐者による奇襲を受けていた。

骸side

そいつは急に空間を開いて現れた。

「何で今こいつが現れるびよん!」

「はて、何しに来られたのですか?」

動揺する犬を宥める様に静かに言い放つ。

だがそいつは無言で攻撃を仕掛けてきた。

「一体どういうことでしょう!」

本気で殺すつもり……

「復讐者!」

目の前の復讐者は何も応えずただ僕たちを殺そうと襲い掛かる。

攻撃を防ぎながら、犬や千種に逃げるよう施す。

「千種、退却しなさい」

「…しかし、また…」

「今度はすぐ戻ります」

「…退こう犬!骸様の足手纏いになる!」

「仕方ないっわかったびよん!」

二人が逃げたことを確認すると復讐者に視線を戻し、幻術で攻撃を繰り返す。

戦況が均衡している時に、僕の背後の空間が揺れ出した。

「!?!」

直ぐにその場を離れると、復讐者がもう一体増えていた。

「ちいっ」

二対を相手にしながら、戦っていると先ほどの戦闘でやられた傷が痛みだし、僅かに動きが鈍る。

それを逃さない復讐者の攻撃が僕の心臓を貫こうとしたら、いきなり鎖が千切れる。

急なことに驚く僕は復讐者を見やるが、彼らも動揺していた。

「動くなよ、六道骸」

「！」

低く、威圧的な声が頭上から降って来た。

すると瞬く間に片方の復讐者の首が胴体と離れていき、もう片方の復讐者の腕から夥しい鮮血が飛び散る。

腕が斬られたと分かると共に、乱入者がそのまま復讐者にたたみ掛ける。

戦力的にも不利と悟った片腕の無い復讐者は黒いワープを作り出し、去っていった。

乱入者は僕のすぐ隣に歩いてくる。

あそこまで苦勞して戦った相手をこうも容易く殺し、退かせた目の間の人物に背中に冷や汗が伝う。

「何故あなたがここにいるのです？」

「お前に、少し聞きたいことがある」

「つぶ、それはあなたが憑依者であるということでしょうか……ザンザス」

暗い空間の中、ザンザスの真つ赤な瞳が僕を射抜いた。

沢田綱吉 side

同時多発で色んなチームに奇襲が来た。

リボーンが各チームと連絡を取っている間は風さんが俺らについてくれていた。

漸くリボーンが帰ってきて、現状報告をし出す。

「今現在残っているチームは風・ヴェルデ・マーモン・俺達のチームだ」

「え、じゃあ今回の奇襲で脱落したチームはいなかったの？」

「ああ風とマーモン達は奇襲にあっついていない上にヴェルデのチームも被害は少ないって言ってたぞ」

「え!？」

「マーモンチームは一日目に泊まったホテルに函を置いていて、二日目から別のホテルに移ってたらしい……だから復讐者も奴らの場所は

分からなかったみてえだな」

「そんなことまでしてたんだ…でも風さんは？」

「単に奴の代理者の行方が掴めなかったただけだと言っていたが…」

「風さんの代理って雲雀さんじゃ…」

「違えど、雲雀は既に代理戦争を降りてる」

「ええ!？」

「詳しいことは聞いてねえが、風も代理者から口止めされてるらしくてな」

「なんだか分かんなくなってきたなあ…にしてもいきなり乱入するなんて酷い奴等だな…」

「これで奴らのやり方がわかったな、これからもどんな汚い手を使ってくるか分かんねー相手だぞ」

「フェアじゃねーのな…」

「チエツカーフェイスは何で何も注意しねーんだ!審判じゃねーのかよ!？」

「お前たちはとにかく休め、今から寝てどれだけ体力が回復するかがカギだ」

リボーンの言葉に山本も獄寺君も渋々ながら寝る体勢に入る。

だが時刻が0時になった瞬間に再び戦闘開始前の合図が鳴り出す。

「そんな、もう戦闘開始!？」

「確かに理屈としては日が変わったけど夜中の12時ってなあ…」

「チエツカーフェイスのクソオヤジ!休ませねえつもりかよ!」

文句を言いつつも、戦闘可能な広い場所に移る。

20秒を切ったところで公園に入ると、そこには骸がいた。

何であいつが並盛にいるのかは分からないが、ここで戦闘を始めようとする。

『バトル開始、今回の制限時間は12分です』

戦闘開始の合図になると同時に、ヴェルデチームが集まって来た。

ヴェルデチームと戦闘になるかと思った時に、空間に黒い靄が現れる。

皆が反応し出す。

「やはり来たか！」

「なんてことだ！」

「復讐者がっ…三体!？」

そこには一体でも苦勞した復讐者が三体も現れた。

本当にこいつらを倒すことが出来るんだろうか…

俺は不安になりながらも、死ぬ気モードになり復讐者に挑みに地を蹴った。

フランク side

ヴェロニカお姉さんの言う通りに、ずっとボスの隣にいた。

でもずっとホテルの部屋の中にいるのが飽きてきて、外に出た。

ちゃんとリングにマモンチェーンをつけてるし、既に今日の戦闘は終わっているから大丈夫だと思って公園に向かう。

辺りは暗くて誰もいなかったので、公園を貸し切った気持ちになっていた。

遊んでも外れないようにマモンチェーンをキツく巻きなおして、公園を走り回る。

ブランコや滑り台で遊んでいて、そろそろ帰ろうかと思って時計塔を見やった。

「げ、もう0時だ…バレたらロンゲと前髪先輩に怒られる」

げんなりしながらも眠くなっていたのでそのまま公園を出ようとしていたら、急に時計が鳴り出した。

『バトル開始一分前です』

「え、あ」

今からホテルに戻ろうとしてもホテルまで走って5分もするから間に合わないし…

急に足底が冷えるような気がして身震いする。

「どうしよう」

助けを呼ぼうにも携帯もない、財布もない。

ミーは困惑する中で公園の中に戻る。

そして公園のトイレに入る。

一番奥に入り、鍵を閉めずに扉の裏に隠れるとカウントダウンが終わる。

『バトル開始、今回の戦闘時間は12分です』

12分だけ見つからなければいいんだ、12分だけ…

ミーは息を殺して隠れていた。

5分が過ぎても公園に誰も入っては来なかった。

6分、7分と段々と時間は過ぎていき、これなら大丈夫だと思い始める。

9分、10分が経ち、あと2分というところで公園に足音が鳴った。

ジャリ、ジャリ、と地面と擦れる音に息を飲む。

「ここから戦闘前に僅かな炎を感じた…」

「代理戦争の参加者は皆殺しだ、探し出せ」

人間とは思えないような声があると同時に、片方の足音が近づいてくる。

時計を見ると残り一分だったけど、既に足音はトイレの中に入ってきていた。

ミーはとにかく息を殺していたけれど、心臓の音でバレないか怖くて目の前がぼやける。

ミーのいる扉まで来ると月の光で影が見えた。

帽子を被った影と、鎖の影が見えて思わず声が漏れそうになる。

何か肉が腐ったような匂いまでしてきて、咄嗟に両手で口と鼻を塞ぐ。

「そこか」

その一言と共に、視界の端に包帯が見えた。

ゆっくりと扉が開いていき、もうダメだと思って体が震えだす。

そして視界にそれが映る。

顔を包帯で巻き、黒い帽子、長い鎖を持っている手が徐にミーに伸びてきた。

「カツ消えろ」

凜とした声が響いて、目の前の怪物が消えた。  
そして轟音と共に、トイレの壁が崩れていく。

「ひいっ」

情けない声を出すと同時に、ウォッチが鳴り響いた。

『戦闘終了』

フランの体から力が抜けていくと、頭上から声が降ってくる。

「何でお前こんなところにいやがる」

「あ……………ヴェロニカ…お姉さん」

そこには黒髪のセミロングで、少し厚めの唇、割れた眉毛のヴェロニカお姉さんがいた。

ミーは今度こそ我慢していた涙が止まらずに、ヴェロニカお姉さんにしがみつく。

ヴェロニカお姉さんは溜息を吐き、ミーを抱き上げる。

「おい、その名で呼ぶなと言ったはずだ」

「ごめんなさい」

「いやそれより何で外に出た…一人で出るなどスクアアロが言っていただろ」

「ううううう……………ぐす…怖かったです……………う…」

「……………」

「あれ死神ですかあ……………」

「あれが敵だ……………」

「怖いのでミーは戦いたくないです……………」

「そうか……………」

ヴェロニカお姉さんが、ミーの背中を軽く叩いてくるので段々と眠くなっていく。

ミーは我慢できなくてそのまま眠ることにした。

ヴェロニカ side



用事を済ませて、そろそろスクアール口達と合流をしようとした時だった。

時計を確認すると既に0時になる3分前で、復讐者が自分たちを探していることは知っていたので一旦コンビニの中に隠れてリングにマモンチェーンをつける。

すると原作通りに0時に戦闘開始前の合図が鳴り響く。

マモンチェーンをしている限り、奴らがこちらに気付くことはないと思い、コンビニで立ち読みしながら時間が過ぎるのを待っていた。どうやら今度の戦闘は12分かと思いつながら、雑誌を読み始める。すると8分を過ぎた辺りで、第8属性の炎の気配が近くに感じた。ここは現在ヴァリアアの泊まっているホテルの近くとあって、もしかしたらヴァリアアの誰かが見つかったのかもしれないと、コンビニを出て炎の気配を辿っていく。

「こっちは…」

炎を感知されないために、気配を消しながら徒歩で第8属性の炎の気配を追っていく。

2分ほど歩いたところに公園が見え、公園の中に2体の復讐者が入っていくのが見える。

一体は中に入っていく、もう一体は別の場所へ向かいます。

会話を聞き取っていると、どうやら僅かな炎の反応を感知して探しに来たらしかった。

んー、僅かな炎の反応ってことは尚更ヴァリアアの誰かだろうか…でも、うちの幹部らはスクアールの報告じゃ、まだ復讐者と対峙してないから力量分からずに突っ込んでいきそう…

何で隠れてるんだ？

んー？

「あ…」

もしかしてフランだろうか？

マモンチェーンをしても運が悪ければ微量は察知されるし、炎のコントロールが出来ないフランなら尚更。

一応他のチームの代理人ということも考えながら、ウォッチを見

る。

そこには時間が1分を切つていることを確認する。

どのみち復讐者と今ドンパチやっても1分くらいなら大丈夫だろうと思ひ、公園に入った方の復讐者をつけて行く。

気配を完全に消して、復讐者の入つていったトイレを覗く。

「そこか」

すると復讐者は奥のトイレの扉の前で止まり、徐に手を扉に当てて扉を開く。

復讐者の意識が完全にトイレの中に向いてる瞬間に、ヴェロニカは銃口を復讐者の頭部に向けて間髪開けずに撃ち込む。

「カッ消えろ」

復讐者はそのまま壁をぶち抜いて、公園の端まで吹き飛ばされる。いきなりの攻撃に反応できずもろに攻撃が入り、よろめいているのが見えた。

そいつが立ち上がり、こちらに向かう前にウォッチが鳴り響く。

『戦闘終了です』

その言葉に、血を流している復讐者はワープを使って消えていく。それを見送ると、トイレの中で震えている背中を見る。

あー、やっぱりフランだったか。

どうせ窮屈になって外に出たとかだろうけど……これ私が気付かなかつたら死んでたパターンだよな。

あつぶな、コイツ死んだら計画がパーになるところだった。

「何でお前こんなところにいやがる」

「あ……ヴェロニカ……お姉さん」

いつも思うけど、何でこいつにだけは私が精神体で見えるんだろうか……

フランが泣きながら抱き着いてくるので、仕方なく抱き上げる。

これ幹部に見られたら別人だと思われる、絶対に。

「おい、その名で呼ぶなと言ったはずだ」

「ごめんなさい」

「いやそれより何で外に出た……一人で出るなとスクアアロが言ってい

ただろ」

「ううううう……ぐす……怖かったです……う……」

「……」

いやまあ復讐者って一種のグロだもんね。

グロ注意とかないと多分心臓悪い人とか死んじやうよね。

フランも子供だし、怖がるのは無理ないのかなあ……

なんかおっさんのフランしか見たことなかったから、子供フランが新鮮すぎる。

「あれ死神ですかあ……」

「あれが敵だ……」

「怖いのでミーは戦いたくないです……」

「そうか……」

戦場には連れて行く予定だけど、戦闘させる予定はないから大丈夫だと思う……

泣き止まないフランの背中をリズムよく叩いてみると、フランの寝息が聞こえてきた。

既に戦闘時間も過ぎているため、復讐者の気配はどこにもなく、そのままトイレを出る。

直ぐにホテルに行っても良かったが、今まで色々動き回っていたお陰で疲労を感じ、少し間だけ休もうとブランコに腰掛ける。

勿論フランを抱えたままでだ。

入江が見たら絶叫しそう……んでもって他の人が見たら取り合えず目を擦るだろうなあ……

1時間くらい休んでから公園を出るところで、かなりのスピードでこちらに近付いてくる気配を察知する。

これは、沢田綱吉か……

同盟の話で私を探し回ってたのか？

待って、待て、フラン抱っこしたままだから会えない。

ザンザスの印象が崩壊しまくる。

慌ててフランをベンチに寝かせようと一歩踏み出すと、背後から声を掛けられた。

「ザンザス」

遅かったー！くっそ、これならそのままホテルに戻ればよかった！  
沢田綱吉はヴェロニカの姿を見て一瞬目を見開くが、直ぐに真剣な表情に戻る。

「力を貸してくれ」

とても真剣な雰囲気が悪いんだけど、フランを抱っこしてる子連れの男性にそれ言ってもさあ…

黙っているヴェロニカに、沢田綱吉はそのまま言葉を続ける。

バミューダの目的、そしてアルコバレーノの末路、今回の代理戦争の真実を全て話し終える。

「それで、俺一人じゃ絶対勝てないんだ！だから、だからっ協力してほしい！」

わーお、入江に一応聞いていたけど、ここまで詳細は分かんなかったから聞いて良かった。

マーモン死んじゃうのか、それは私も嫌だなあ。

別の世界ではあるけれど、マーモンは家族みたいなもんだし。

「明日、全チームを呼んで話し合いをするから参加してほしいんだ」

「それを、俺が聞き入れるとでも？」

「頼む、ザンザスは強いから大きな戦力になる………」

「……」

一向に首を縦に振らないザンザスに沢田は痺れを切らして叫ぶ。

「頼むよー！リボーンを助けたいんだ!!」

「…」

「直ぐ殴るし、人の言うこと聞かないし、いつも勝手に俺を巻き込むし、無茶苦茶な奴だけどー俺の大事な家庭教師なんだよ！」

「いいだろう、同盟を組んでやる」

「えっ」

目を丸くして、ヴェロニカの言葉に驚いている沢田綱吉を見る。

まるで、昔の私を思い出すなあ…

？非情で、冷酷で、暴君で、極悪人だったけど……？  
今よりも年を重ねた沢田綱吉に必死に縋った自身を。  
？それでも私の……血の繋がった……たった一人の父親なんだ……？

「借りは返した」

「え？か、借り？」

何のことだか分からないという様な表情をしている沢田綱吉に内心笑う。

教えるつもりはない。

私だけが知っていればいい。

ヴェロニカはその場を去ろうと、沢田綱吉の横を通り過ぎる。

すると沢田綱吉が慌てたように引き留める。

「あ！あのさ、ザンザス！」

振り返らずに足だけ止める。

「お前……いつまで偽ってるんだ……」

「あ……？」

「リング争奪戦の時もそうだったし、未来でもそうだった……お、お前本当は」

「黙れカス」

沢田綱吉の言葉を遮る。

「お前が何を勘違いしてんのか知らねえが、俺は気に入らねえ奴なら誰だろうとカツ消すぞ」

「ザン」「余計な口利く暇あんなら動け」

それ以降、沢田綱吉の言葉を無視してフランを抱えながらホテルに戻る。

あー、もう締まる雰囲気もフランのせいでおじゃんだよ。

ホテルに戻ると、スクアアローが玄関先に立っていた。

そろそろ帰ってくることを知らされていたけど、途中で戦闘時間に入ってしまったので心配していたとのこと。

フランを預けてホテルの中に入る。

「あ、ボス」

幹部達が全員集まっていて、何やら今後のことを話そうとしていたらしい。

マーモンがザンザスの存在に気づき、寄ってくる。

「ボス、その…少し大変なことになったんだ」

「聞いた、復讐者の参戦だろ」

「…ああ」

どうやら他のチームが復讐者によって奇襲されたことが伝わっていらしい。

そして、アルコバレーノの末路、今回の虹の代理戦争の真の目的をマーモンが幹部達に説明していた。

そこはかとなくマーモンが気落ちしているように見えるが、まあ仕方ないかと思う。

縫った先が死亡フラグだったと聞かされれば泣くわな。

マーモンが他のチームとの同盟が必要になるかもしれないと遠回しに伝えながら私をチラチラ見ていた。

「そ、それでね…ボス…あの…」

いじらしいなあ…可愛いからもう少し見ておこう。

ザンザスが怖くて言い出せないマーモンが可哀そうになってきたのかルツスーリアが入って来た。

「ボス、他のチームと同盟組んじやダメなの？」

「う〱お〱おい！ボス！意地悪いことしてねーで早く教えてやれよ」

「…同盟ならさきほどこしてきた」

「…え」

「ボ、ボス！ありがとうっ」

マーモンが感激しながらお礼を言ってくる。

「俺が気に入らねえ作戦だったら即刻破棄するがな」  
それだけ付け足して、ヴェロニカは奥の間に戻る。

少し後にスクアアローが入って来た。

「お疲れ…フランには僕からきつく言っておくよ」

「あと少しで復讐者に殺されてたところだったぞ、気を付けろ」

「本当にごめん」

「誰も気付いていないな？」

「ああ」

「：明日で全てが終わる」

「分かってる」

既に時刻は2時を回っていたのでその日はもう寝ることにした。

## Veronicaの憤怒

代理戦争3日目、ヴェロニカ達含む、生き残っているチームが沢田家が集まっていた。

沢田綱吉の説明会みたいなものだった。

要約すると、俺一人じゃ勝てないから一緒に戦ってくれ、ていうか多分皆で力合わせても勝ち目薄いから無理と思う人は抜けていいという内容だった。

まあイエーガー相手なら結構苦戦すると思うなあ…入江の話聞いてる限りじゃ。

取り合えず抜ける人はいないようで、沢田綱吉は作戦を伝えていく。

迎撃するつもりかあ…

それも各自の炎を内蔵した人形を囮に使って、特定の場所に誘導したら迎撃って感じか。

ここでもまた、意見の食い違い勃発。

誰がイエーガーを相手するかで、白蘭・骸・私が口論する。

パワーバランス崩れると危惧していた沢田綱吉をデイーノが説得して、配置は以下ようになった。

(ボス) イエーガー：白蘭・ザンザス・骸・デイーノ

(バトラー) 復讐者：沢田・バジル・炎真

(バトラー) 復讐者：フラン・山本・獄寺・クローム・スクアアロ

スクアアロは最後まで渋ってはいたが、最終的には納得していた。

代理戦争4日目

スクアアロside

時計を見ると、2時と表示されていて、僕は指示された配置場所の近くで待機していた。

早く復讐者を倒して、ヴェロニカちゃんの所へ駆けつけたい気持ちを抑えながら相手が現れるのを待っていた。

待機し始めて1時間後、ようやく戦闘開始前の合図が鳴り響いた。



カウントダウンが始まると、復讐者が炎を感知して現れる。現れたのはビックピノとスモールギアという復讐者だ。

そして戦闘開始の合図と共に囹の人形を倒し始めた。

囹の人形がいなくなった後からは、クロームちゃんとフラン君の幻覚で足止めをする。

駐車場の四角にあるバックミラー越しに山本君とアイコンタクトをすると、同時に復讐者に攻撃を仕掛けた。

二人同時の攻撃を防がれるが、山本君が攻式で相手を攻めていく。

僕も、スモールギアに攻撃を仕掛けるも尽く防がれる。

復讐者は手強く、幻覚で隠れていたクロームちゃんとフラン君・獄寺君の位置がバレて、攻撃された。

獄寺君の防御壁が破壊され、その際に3人を庇った山本君の刀が二本折られる。

僕も何とか一撃でも入れようと突撃したら、ビックピノからの攻撃で吹き飛ばされた上に肋骨が数本折れる音が聞こえた。

ビックピノの一際大きい攻撃が戦力を失った僕たちに放たれ、絶体絶命かと思った瞬間、浮遊感に襲われる。

「う、浮いてる!?!」

獄寺君の声に僕は自分の体を見ると、確かに地面から数mのところまで浮いていた。

すると先ほど僕たちがいた場所に三つの影が現れた。

それは綱吉君に炎真君、バジル君だった。

「じゅ、十代目!」

「ツナ!」

「お前の相手は俺達だ!」

「ツフ、ちったあ骨のあるエモノが増えたかあ……こいつは楽しめそうだけ、俺的にな」

スモールギアと綱吉君達が戦闘を始める。

スモールギアの攻撃に綱吉君がバリアを張るが、スモールギアの舌がバリアを突き抜けて、バリア内にいたバジル君を外へ飛ばす。

宙に放り投げられたバジル君にビックピノの攻撃が直撃し、バジル

君のウオッチが破壊された。

怒気を表した綱吉君はスモールギアに突っ込むが、スモールギアがフラッシュを使い、綱吉君の視界を潰す。

隙の出来た綱吉君を殺そうと、スモールギアが攻撃に移るといふところで、山本君が飛びつき、動きを抑え込んだ。

獄寺君はビツクピノに飛びつき、爆弾に火を点ける。

「古里！俺達に考えがある！死ぬつもりはねえから目一杯こいつらに縛り付けてくれ！」

「わかった！」

獄寺君の言葉で炎真君が重力を操り、自由を奪う。

そして獄寺君と山本君がクロームちゃんに体をセラミックでコーティングするよう頼む。

大規模な爆発が起これると思い、僕は数歩下がる。

フランの補助がありながらも、セラミックで二人を覆った瞬間、大きな爆発が起こった。

彼らの立っていた場所の地面が抉れ、瓦礫が辺りに飛び散る。

飛び散った瓦礫の一部がフランの顔面に向けて直撃しそうだったので、僕は走りだしその瓦礫を剣で薙ぎ払う。

「気を抜くなフラン」

「わー、ロンゲ隊長じゃないですかーありがとうございます」

「お前はいちいち人の癪に障る言い方しか出来ねえのかあ！」

「すみませーん」

爆風が収まり、爆発源を見ると山本君と獄寺君が無傷で出てきた。だがウオッチは壊されている。

重症を負ったバジル君を笹川君が治療し、綱吉君も少し休み、白蘭さんやヴェロニカちゃん達のいる公園に向かう。

僕がフラン君を置いて行こうとしたら、服の端を引っ張られる。

「隊長ー、ミーも行きます」

「はあ？お前復讐者にビビってたじゃねえか……」

「いーきーまーすー」

「………気い抜くなよお」

「はい」

フラン君のウォッチが壊れていないことを確認した僕は彼を抱え、アールロを出して沢田綱吉の後を追う。

そろそろ公園が見えてくるといふところで騒音が聞こえてきた。

そして一際大きな爆発音がして、目を凝らして公園を見る。

「え、ヴェロニカちゃ……」

無意識にフラン君をアールロに降ろして、僕はアールロから飛び降りた。

ヴェロニカ side

囷を破壊していくイエーガーとバミューダの前に私達は姿を現した。

ザンザス、白蘭、ディーノ、骸と主戦力と言っていい面子ばかりの登場に怯むことなく逆に雑魚とすら宣うバミューダを見据えた。

やけに余裕の態度が気になる……それほど戦力差があるということか。

入江に聞いた未来を知っているヴェロニカは、この場にいる誰よりも目の前の敵を警戒していた。

先ほど誰が一番手に立つかでじゃんけんをしてたんだけど、ハツキリ言つて負ける自信しかなかったから遠慮した。

初っ端から相手に当たるのは危ないので、誰かを先に当てて相手の戦力を見ておきたい。

外道？ 保身と言つてくれ。

ディーノがバミューダに今戦力の理由を話しているのを聞きながら立地をもう一度横目で確認する。

広さがあつて炎の糸を張り辛い……これじゃ無理か。

私の目的は相手を倒すことじゃない、生き残ることだ。

それに復讐者に関しては、入江の話から私が尽力を尽くさずとも沢田綱吉が解決すると思っていた。

一応並行世界という前提で入江の話は分岐点の一つに過ぎないのも事実で、今回のウオッチに関しては保険も掛けている。

だから今私がすべきことは相手を倒すことではなく、五体満足で生き残ること。

そんなこと思っていると白蘭がイエーガーに攻撃を仕掛けていき、その場の者は皆武器を構える。

「！！！！」

白蘭の攻撃した先にイエーガーの姿はなく、その場に居た者は皆目を見開いた。

ぞわっ

瞬間首筋に寒気が走り、私は反射的にその場で姿勢を落とした。

すると髪の毛の上を何かが風と共に通過し、私は後ろを向くこともせずマント越しに背後へと発砲した。

発砲音がその場を包み込むと同時に、一瞬遅れた周りが私の方へ振り向く。

だが私はそれどころではなくて、発砲と同時にその場から離れる。

直後、私のいた場所にイエーガーが手を突きつけていた。

「へえ、彼の攻撃を躲せる実力者がいるとは…」

バミューダの言葉には純粋な驚きと感嘆があり、イエーガーもそれに頷いていた。

そんな彼らを前に私は正直叫びたかった。

こんな反則技があるか！と。

瞬間移動を使用することは知っていたが、見るのとは全く違う。ハッキリ言って速度に追いつけない。

先ほどはザンザスの身体に搭載されてる疑似超直感でなんとかやり過ごせたけれど、今度はどうなるか分からない。

あれは目で追おうと思えば思うほどダメなんじゃないか。

パパの疑似超直感に頼るしかないのかもしれない、といち早くこの場で状況を悟る。

あいつは強すぎる：私達だけでは倒せない。

ヴェロニカ程ではなくともイエーガーの実力を垣間見た骸や白蘭、デイーノは一对一で通用する相手ではないと即座に判断した。

そんな中イエーガーが動き出し誰もが警戒をする中、今度は瞬間移動することなく白蘭の方へ向かって行く。

白蘭はイエーガーに構え、手を前に出して炎を放った。

だがその炎をイエーガーが容易く弾き飛ばし、白蘭の背後を取ろうと移動した時、骸が白蘭の背後に壁を幻術で作り出した。

だがそれが油断となった。

イエーガーが部分的ワープを使い、壁を腕が突き抜けそのまま白蘭の心臓を貫いた。

「あれ？どーなってるの？これ…」

おかしそうに、どこか苦し気に笑う白蘭にその場の誰もが次へと行動を移す。

白蘭が心臓を貫いたイエーガーの手を掴み精一杯の拘束をした直後、骸とデイーノが両側からイエーガーに広範囲の攻撃を放つ。

だがイエーガーは瞬間移動をしてその攻撃を凌ぐ。

そんな中私は、脳内でイエーガーの状態の観察と、彼の瞬間移動回数を数えていた。

入江の言葉を思い出す。

『確かイエーガー達復讐者はバミューダの炎を糧に生きていたハズだ』

『僕はその場にいなかったから分からないけれど、絶対にそういう兆候が出るはずだよ』

肩で息をし始めるイエーガーにヴェロニカは目を細めた。

息が……荒い

入江の言葉通り推測するなら、バミューダからの炎の供給はどうやってる？

何故イエーガーの息は荒いままなのか。

それはバミューダの供給が足りないからで……供給をしていない、いや、出来ないんだ。

最初に現れる時もバミューダはイエーガーの肩に乗っていた…接触することで供給を可能にしているというのならば……

骸とデイーノから距離を取ったイエーガーの直ぐ近くまで近寄ってきているバミューダが視界に入ったと共に、私は彼らに向かって標準を絞った。

鳴り響く発砲音に一番最初に反応したのはバミューダである。

近寄ろうとしていた足を止め、ザンザスの攻撃を避けた。

イエーガーは息を乱しながらもザンザスの攻撃を弾き飛ばし、ザンザスへと攻撃を仕掛ける。

だが瞬間移動はせずに脚力だけで向かって来たイエーガーにヴェロニカは超直感のような確信をした。

こいつはもう瞬間移動するだけの炎をもっていない。

瞬間移動がなければまだやりようはある、とヴェロニカは接近戦に持ち込もうとすイエーガーに応えて腰に差していた剣を抜きだした。

そこからは一瞬も気の抜けない攻防となる。

一瞬の隙さえも命を落とすであろう一撃がヴェロニカの右頬を掠り、濃厚な殺気の中、唾を飲む事すら出来ず目の前のイエーガーに喰らい付いていく。

一際鋭い一撃を腹部に喰らい、数m吹き飛ばされる。

「ザンザス！」

デイーノの声と共に一瞬飛びそうになった意識を繋ぎ止め、なんとか着地する。

視線をイエーガーに向けると既に距離を取っていて、肩にバミューダが座っていた。

ヴェロニカは舌打ちしながら鈍い痛みのある腹部を押しさえ付ける。炎を纏っていたから骨は折れてない…けど、罅は入ってるか…？

口の中の血を吐き出して、同じチームのメンバーを横目で見る。

白蘭は既に戦闘不能で横たわっていた。

だがウオッチが壊れていない為に外野は手助けが出来ないのだ。

対戦中の私達はイエーガーに注意を払うのに精一杯でウオッチを壊す余裕はなかった。

「イエーガー君、ザンザスから殺せ」

「二！二」

「分かった」

その場の誰もがバミューダの名指しに目を見開いた。するとイエーガーが瞬間移動を発動し、皆がヴェロニカへと注意を向ける。

骸がヴェロニカの周りに防御壁を作ろうとした矢先にイエーガーがヴェロニカの背後へと現れる。

私は後ろを振り返ることもなく、前に飛ぶ。

地面で一回転して、左手を地面に付けたまま右手で剣を振るイエーガーの現れた場所へと炎を放った。

既にイエーガーがそこにはおらず、私は目を見開く。

「ザンザス！後ろです！」

骸の声で我に返り、剣先を背後へと振り回した。

剣越しでヴェロニカの腕に重い衝撃が伝わりと同時に漸くイエーガーの姿を認識した。

イエーガーは片手でヴェロニカの攻撃を塞いでいて、もう片方の手を高く振り上げていた。

そんな時、その片手をデイーノの鞭が捉えた。

両手が塞がっているイエーガーに骸が幻術で攻撃を放った。

誰もが直撃すると思っていたそれがイエーガーに届くことはなく、イエーガーはデイーノの後ろへと瞬間移動していた。

デイーノがそれに反応するも対応し切れず、肩から腰まで重い一撃を喰らう。

「うぐっ」

「死ね」

イエーガーの片腕がデイーノの顔面へと向かおうとしていた時、高い金属音と共にデイーノの目の前に黒い影が現れた。

「悪いけど、この人を咬み殺すのは僕だよ」

「恭弥！」

それは学ラン姿の雲雀恭弥だ。

雲雀はイエーガーへと攻撃を繰り返すが、イエーガーが雲雀から距離を取った。

そして攻撃が一旦止んだ時にバミューダの元へとイエーガーが戻ろうとしたのだ。

それを見ていた私は銃を引き抜いた。

「おい！イエーガーをバミューダに近づけるな!!」

そう叫ぶと共に、大量の炎をイエーガーにバミューダ諸共撃ち込んだ。

炎が着弾し、その場で爆発する。

全身のワープを2回……それが上限か。

「どういうことですかザンザス」

「やはり君は気付いていたか……」

骸が私の言葉に問いかけてきて、それに答えようとしたが、それをバミューダの言葉で遮られる。

「君は最初に殺すべきだった」

バミューダの言葉の意味が分かっている骸は私へと視線を投げ、私は仕方なく短く説明する。

「復讐者の動力源は全てバミューダから供給されている、だがそれは相手に接触しなければ供給出来ない……」

「……なるほど、バミューダがイエーガーの肩に頻繁に乗っているのはその為だったのか!」

「精々全身のワープは2回、部分なら4〜5回つてところか」

「そこまで観察していたか、末恐ろしいな」

「おい！それはルール違反だぞ」

バミューダの言葉にリボーンが訴えると、どこからいたのか尾道が現れた。

「戦闘中のチームのアルコバレーノと言えど呪解していなければ部外者です!! 以後の接触は エネルギー供給の協力行為とみなし禁止します、破れば反則負けです!」

そう言うとき尾道は直ぐに姿を消した。

バミューダが渋々といったような様子で、最期の供給を済ませて



イエーガーから離れた。

今後の供給は出来ないので人数的にイエーガーが不利となった。

この状況で焦り出したのか、イエーガーが雲雀と骸へと焦点を絞り出した。

瞬間移動がなくとも、最強の復讐者という名を持つイエーガーの戦闘力は桁違いで、雲雀も骸も回避するよりもどう致命傷を避けるかで精いっぱいの様子だった。

私は、傷が増えていく二人に畳み掛けるイエーガーへと走りだす。

視界の内に走ってくる私が見えたのか、雲雀と骸が攻撃を喰らいながらもイエーガーを拘束し出す。

「早くー」

「うぐっ」

どちらも傷口の激痛に顔を歪ませながらもイエーガーにこれでもかというほどしがみ付いていた。

「離すなよー」

私は銃にこれでもかというほど炎を溜め込み、イエーガーへと放つ。

衝撃波を描きながらイエーガーの心臓付近を貫き、行き場を失った炎はその場で膨張し爆発を起こした。

イエーガーを拘束していた二人も一緒に爆風に巻き込まれ数m先に吹き飛ばされる。

落ちた拍子にウオッチを壊してしまい、実質同盟チームでの戦力は私と沢田綱吉のみとなった。

ていうか沢田綱吉はまだなのか。

このままイエーガーのウオッチを壊せば沢田綱吉の出番ないじゃん。

未だ現れぬ沢田綱吉に不服ながらも倒れたまま起き上がらないイエーガーの元へと向かう。

脊髄をやられたのか、浅く息を繰り返すイエーガーの胸にはぼつかりと大きな穴が開いていた。

見る限りウオッチは壊れてはおらず、私はイエーガーのウオッチ目

掛けて剣を高く振り下ろす。

その時だった。

背後で何かが地面を擦る音と、液体が地面に跳ねる音が聞こえ、私は瞬時に振り返る。

そこにあつたのは銀色だった。

振り返った私の頬に赤が飛び散る。

細い銀糸が舞い上がり、重力に従って落ちていく。

地面に落ちたソレを理解した瞬間、私の中で沸々と何かが沸き上がる。

銃を手放し剣を引き抜いた私は、目の前にいたシルクハットを被った黒へと剣を振りかぶるが、そいつは悠々と躲す。

剣に収まりきらなかった炎がその場へと散り、地面を僅かに削る。

「ツチ、思わぬ邪魔が入ったようだ……」

「……」

足元に溜まっていく血だまりと、目を薄く開けたまま物言わぬ彼が視界に入る。

異様に冷めている頭とは逆に腹の内から湧いてくる、この煮えたぎるものは何だ。

ああ、そうか………これが………

憤怒か

手から剣が離れていくのも気にせず、私は目の前の彼から視線を外すことが出来なかった。

熱い……体が、熱い……

腹から全身へと何かが伝わっていく

神経が 細胞が 全部 全部

熱くて仕方ないんだ——…

黒い影へと腕を伸ばした次の瞬間

私の中でぷつりと何かが切れた音がして、目の前一面を橙色のよう  
な赤黒い炎が埋め尽くす。

それを皮切りに、地を蹴り黒い影へと拳を振り下ろした。

何をしたいのかも、何をしたかったのかも、全部忘れてしまった  
ただ ただ この怒りを 瞋りを いかりを

吐き出したくて——…

『ヴェロニカ』

ふと私を呼ぶ声が聞こえて足を止める

「パパ…」

小さく呟いた言葉は誰の耳にも届くことはなく

腹部に走る衝撃と共に

私の意識はそこで途切れた

## Veronicaの昏倒

バミューダside

イエーガー君と公園の広場へ来てみれば、そこには白蘭・ディーノ・六道骸・ザンザスという最高戦力が立っていた。

なるほど、彼らはイエーガー君に主力を置いたのか、だがそれは間違っている。

彼らは他の復讐者たちを侮っている。

そう彼らを嘲笑い、イエーガーに殲滅するよう命じる。

そしてイエーガーと彼らの戦闘が始まった。

一対一を望んでいるのか、初めに白蘭がイエーガーと対峙するが、イエーガーにとつて一対一は眼中にない。

敵は白蘭を相手取っているという意識を利用し、隙のある他の者達から片付けようとしたイエーガーが最初にザンザスへと攻撃をした。

だがザンザスは間一髪のところまで避けた上、イエーガーに反撃させました。

ほう、少し彼を侮っていたかもしれない。

今思い出せば彼には不可解な点があった。

確か彼は、他の者と違い沢田綱吉に負けたという事実はない。

ボンゴレリングを賭けた戦いでもリングが欲しかったわけでもなく、沢田綱吉を憎んでいたわけでもなかった。

8年前のゆりかごの冤罪が理由のボンゴレ九代目への復讐が本来の目的だと後に分かったが、ボンゴレ九代目に対して殺意という殺意を持っていたかと言われれば答え辛い。

彼は色々と謎である。

否、表面上では分かりやすく暴君であるが、それはあくまで表面上だ。

本当の姿が分からない、実力が未知数という意味でなら、リボーンという言葉で成長を重ねる沢田綱吉と並ぶのかもしれない。

そんな考え事しているとイエーガー君が白蘭の心臓を貫いていた。

それを見た僕はそろそろ炎が足りなくなっているだろうと思いだす。

そしてイエーガー君が相手側から距離を取ったのを合図に、僕はイエーガー君に近寄ろうとした。

だが、それはザンザスの攻撃で妨げられた。

驚きながらも炎の銃弾を避ける。

ザンザスがイエーガー君へと攻撃を続けるせいで供給を出来ず、イエーガー君が見て分かるほど息を乱し始めた。

僕はそんな中、ザンザスへと思考を巡らせた。

あれが偶然である確率が高いが、それでも僕とイエーガー君を隔離しようとした行動は炎の動力源に気付き始めている可能性もあるのだ。

僕はザンザスに警戒し、漸くザンザスから距離を取ることの出来たイエーガー君の肩に乗り、炎の供給をする。

ザンザスが僕らを目にすると舌打ちをして、目を凝らさないと見えない程僅か数秒だけ他の者の様子を横目で確認していた。

それを見た僕はほぼ確信したのだ。

ザンザスはこの場で誰よりも状況を把握している。

そして、炎の供給についても気付いているのだと。

奴は危険だ。

「イエーガー君、ザンザスから殺せ」

「一・二」

「分かった」

僕はイエーガー君にザンザスを優先的に殺すよう命じた。

そして炎を補給し終えたイエーガー君がザンザスへと向かって行く。

まだ確証がないのか、炎の供給に関して指摘する様子はない今の内に彼を殺しておくなければ。

だがザンザスはイエーガー君の攻撃を間一髪で躲し続ける。

僕は彼が反射で避けているのではなく、ほぼ直感で避けていることに気付いた。

点と点の移動には速度はなく、人間である限りそれを捉えることが

出来ないことを彼はよく理解している。

だから勘で動いているのだ、否、そうするしかない。

そんな中イエーガー君がディーノを戦闘不能にした。

殺そうとしたが雲雀恭弥に妨げられる。

そしてイエーガー君が僕の元に戻ろうとした時だ。

「おい！イエーガーをバミューダに近づけるな!!」

そう言っただけは僕たちの間に数発炎を撃ち込んだ。

彼が確信に至ったのだらうと分かると、僕はイエーガーの肩へと瞬

間移動し、供給を始めた。

ツチ、これで多分最後になるだろうな。

「どういうことですかザンザス」

「やはり君は気付いていたか…君は最初に殺すべきだった」

本当に、心からそう思うよ。

君はこの場にいる誰よりも状況を把握し、理解している。

その実力は君が復讐者でないことが悔やまれるほどだ。

「復讐者の動力源は全てバミューダから供給されている、だがそれは相手に接触しなければ供給出来ない…」

「…なるほど、バミューダがイエーガーの肩に頻繁に乗っているのはその為だったのか！」

「精々全身のワープは2回、部分なら4〜5回つてところか」

「そこまで観察していたか、末恐ろしいな」

「おい…それはルール違反だぞ」

リボーンの言葉で尾道が出てきて、今後の供給は失格とみなす、と警告をしてきた。

僕は最後の供給をイエーガーにして、彼から離れた。

イエーガー君は彼らを直ぐに殺そうとしていたけれど、六道骸と雲雀恭弥の協力もあってザンザスに重い一撃を喰らってしまった。

僕はイエーガー君の時計が壊れていないかを確認し、傷を見る。

これ以上戦うことはおろか、立つことさえ出来ないであろう彼にザンザスが近寄り、ウオッチを破壊しようとしていた。

そんなことをさせるわけもなく、僕は呪解してザンザスの心臓向け

て拳を振りかぶった。

だがザンザスの心臓へと僕の拳が届くことなかった。

僕とザンザスの間にスクアアロが割り込んできて、僕の拳はスクアアロの心臓を貫いたところで威力を失った。

スクアアロは口から血を吐き出し、その血が僕の服へと飛び散る。

僕は彼の心臓から腕を引き抜くと、彼は地面に倒れ込んだ。

口からも心臓からも止めどなく血を流し、薄く開いた目は閉じることはなく、即死だと誰の目にも分かる様子だった。

「ツチ、思わぬ邪魔が入ったようだ……」

そしてスクアアロという障害が消えた今、僕は目の前のザンザスへと視線を上げ、目を見開いた。

なんだ……あれは……

部下の死に何の反応も示さぬザンザスの顔には、無数の血管のようなものが浮かび上がっていた。

それは彼の瞳のように、赤黒く、首元から全身へと広がっていく。指先まで浮き上がるソレを見ると、ザンザスが徐に腕を上げる。

瞬間、炎の濁流が僕を襲った。

「!？」

驚いた僕は両手で顔を覆いながら、距離を取ろうとした。

だが足を動かす前に僕の視界は天地が反転した。

――？

それが殴られたと分かったのは、地面の冷たい感触と、殴られた頬への痛みが脳に伝わった後だった。

直ぐに立ち上がるようにするが、先ほどの攻撃が重かったのか足がふらつく。

馬鹿な……この僕が見えなかっただ、と……

どうにか立ち上がりザンザスの方を見て、今度は絶句する。

何だ……この炎圧は……

ザンザスの周りを覆う炎の炎圧が僕の肌をジリジリと焦がしている。

既にザンザスのウォッチは彼自身の炎圧で壊れているにも関わらず、彼はそれに気付いていない様子で僕へと焦点を合わせていた。ふと、目の前にいたザンザスが消える。

僕は危険を察知し瞬間移動をしようとした矢先に、顔全体を鷲掴みにされ地面に投げつけられる。

「が……はっ……」

脳震盪を起こす頭で必死に考える。

立て直さねばっ……！

そう思った刹那、こちらに近寄って来るザンザスの動きが止まる。それを好機だと思い、僕は瞬間移動で彼の背後へと移動する。

「……」

ボソリ、とザンザスが何かを呟くと同時に僕の拳が彼の腹部を貫いた。

糸が切れたように倒れ伏したザンザスに、僕は漸く息を吐いた。

奥の手を隠していたか……

口と鼻から零れる血を拭い、今度こそ殺しておかねばと彼の心臓へと焦点を合わせる。

そして一気に加速する僕の拳を何かが阻んだ。

視界に入る茶色と橙色の炎でそれが何なのか分かった。

「貴様、か！」

「お前は俺が倒す」

「沢田綱吉!!」

マーモンスイデ

ボスが、雲雀と骸が捨て身で拘束していたイエーガーを倒した。



犠牲者が多く出過ぎた中、漸く相手のボスウォッチを壊せると思っていた時だった。

横たわるイエーガーのウォッチを壊そうとしたボスの背後に呪解をしたバミューダが迫っていた。

危ない、と叫ぶ前にバミューダは動いていて間に合わないと思った。

なのに…

「スクアアロっ……」

僕の目の前では、スクアアロの心臓をバミューダが貫いていたのだ。

そしてバミューダが手を引き、スクアアロが崩れ落ちる。

背後を振り向いたボスにスクアアロの血が飛びついていて、ボスは地面に横たわるスクアアロを見下ろしていた。

スクアアロを見下ろすボスの顔は何も映していなくて、ただ無表情だった。

ただスクアアロが倒れているという事実を確認するかのような眼差しでスクアアロを眺めていた。

ボスが状況を理解出来ずに、又はショックで固まっているとは見えなくて僕は困惑する。

そして次の瞬間ボスに変化が起きた。

「何だ…あれは……」

ボスの首元から血管みたいなのが浮かんでくる。

それは全身に広がり、指先にまで浮き出る。

するとボスがゆっくりと腕を上げてバミューダに向けて憤怒の炎を放った。

「!？」

少し離れている場所にいた僕にまで憤怒の炎の炎圧が襲う。

「うおっ、何だコレ熱い!？」

「ぬお!？」

「な、何よコレ!」

ベル、レヴィ、ルツスーリアもボスの炎圧に困惑している。

今までボスと一緒にいてここまで凄まじい憤怒の炎は見たことなかった。

というよりも僕たちよりもボスに近いディーノや骸、雲雀、白蘭、スクアードは危ないかもしれないと思った。

するとどこからともなくパリンと音がして良く目を凝らしてみると、倒れている者のウオツチがボスの炎圧で壊れ始めたのだ。

それを確認した僕はスクアードの応急処置をしようと近づきたかったけど、ボスの炎が凄すぎて近寄れなかった。

直後、ボスがその場から離れバミューダへと攻撃を繰り返した。

今だと思い、僕はスクアードの元へ行き傷の具合を確認して直ぐにスクアードと共に距離を取る。

心臓が…潰されてる…!!

僕は瞬時にスクアードの心臓を幻術で補完する。

若干肌が火傷を負っているが、恐らくボスの側で先ほどの炎圧を浴びていたからだろう。

心臓を補ったとはいってもまだ油断出来ず、直ぐに救急車で病院へ搬送させるよう手配した。

その後白蘭や、ディーノと内臓系に重症を負った者の応急処置を僕が請け負っていた。

「ボス！」

重症者の応急処置で手一杯だった僕にベルの声が届く。

そしてベルの視線を辿り、僕は目を見開いた。

ボスがバミューダによって腹部を貫かれて倒れたのだ。

そしてバミューダがボスにとどめを刺そうとした瞬間に、沢田綱吉が割って入ってきた。

沢田綱吉バミューダを遠くまで移動させるとルツスーリアがすぐさまボスの元へ駆け寄り、担いで僕の元に走ってくる。

ルツスーリアがその場にボスを降ろし、僕はボスの傷口を確認しようとして服を脱がせようとした。

「あ、待ってマーモン！」

「え、あつつ!!」

ルツスーリアの声と共にボスの傷口付近の肌を触った僕の指に超高温の熱さが襲う。

自身の指を見れば火傷していて、僕は目の前の横たわるボスに唾然としていた。

「何だい…コレ…」

「私もボスを運ぶ時、あまりの熱さに一瞬落としそうになったの」

「と、取り合えずボスの身体を冷やさなきゃ…」

僕は予想外の事態に困惑していて、動転していた。

何をしてもいいかも分からず、有幻覚で氷を作ろうとした時だった。

ボンゴレの救助隊が到着した。

救助隊の中の茶髪をしたアジア顔の一人に、ベルが反応する。

「入江正一じゃね？お前まで今回の代理戦争に参加してたのかよ」

「白蘭さんに強制的に連れてこられたんだ！それよりも負傷者の容態を見せてくれ、応急処置するから」

「そっぴいやお前晴だったな」

誰だい？とベルに軽く問いかければ、未来でミルフィオーレに潜入してたボンゴレ側のスパイ、とだけ返ってくる。

それでユニから貰った記憶にそれらしい人物がいたね、と納得した。

思考が大分飛んだが、我に返った僕は目の前のボスの容態を思い出す。

入江が白蘭の赤く染まった心臓を見て青褪めながら、ザンザスの方に視線を向け目を見開いた。

「これ、は……」

「ボスの容態が分かるのかい？」

「多分…憶測だけど、これ体内で炎を生成しているのに本人に意識がないお陰で外に放出出来ない状態…なんだと思う」

「何だって？」

「雨の炎の鎮静で、どうにか体温を下げなきゃ治療に取り掛かれない」

ボスの肌には浮き上がっているこの血管のようなものは、炎圧の高い憤怒の炎が神経を侵している為か。

短時間で何故直ぐにその状態が分かったのか理解しかねるが、やはり技術者というからには炎に詳しいのだろう。

入江の冷静な見解に、漸く自身も困惑した思考が落ち着いてくる。雨の炎：スクアーロは既にバミューダにやられてしまった。

あとは、ボンゴレの雨の守護者……確か山本……

「マーモン、悪いけど病院まで来てくれ……他の重傷者には君の幻術が頼りなんだ」

入江の言葉で思考を現実に戻し、僕はボンゴレの救急車にボスと共に乗り込む。

途中でアーロに乗ったフランが乗り込もうとしたけど、治療の邪魔だと言って放り出される。

扉が閉まる際のフランの泣き顔が、何故か脳裏に焼き付いた。

車内ではボスの体温が高すぎるために治療は出来ず、サラサラと音を立てて落ちていく命の砂時計を幻視しそうになるほど、僕は焦っていたと思う。

病院内に着くと同時に、入江が駆け付けてきた。

「解決策！見つかったかもしれない!!」

もう、それに縋りつくしかないじゃないか……僕はただ、ボスを助けなきゃって思いで一杯一杯だったんだ。

手術室に運び込まれる前に入江が拳銃を取り出してきて、驚きのあまりボスと彼の間に入り込む。

「落ち着いてくれ……麻醉銃のように改造する時間がなくて悪いけど、これを彼に撃たなきゃいけないんだ」

「君頭おかしいんじゃない?」

「……これは炎を分解する銃弾が込められてる……数時前に完成したばかりで今回の代理戦争に投入するには成功率が低すぎて使えなかったんだけど、これしかもうない」

時間がない、と遠回しに言われるが、はいそうですかとボスを差し出すほど彼を知っているわけでもなく、警戒を解くことが出来なかった。

段々と砂時計が音を立てて落ちていく幻聴がする。

「炎の分解？そんな技術この時代にも、未来の時代にもありはしなかったね」

「説明してる暇はないけど、この技術の出所は未来のヴァリアーだ！後でスクアアロに聞いてみるといい！」

焦った彼の言葉が意外で、僕は固まる。

ヴァリアーの技術：？そんな馬鹿な：そんな技術力を持つ者がヴァリアーにいたのだろうか？

だがスクアアロの名前を出した彼の瞳に嘘は見当たらず、ボスが死んだらお前も殺す、と付け加えて僕はその場を退いた。

入江の手は震えていて、本当に大丈夫だろうかと気が気じゃなかった。

一発の銃声が院内に鳴り響く。

通常の火力を有した銃弾は、ボスの肩に着弾し血しぶきを上げる。

だが数秒後、ボスの首や腕まで広がっていた神経の様な模様が引いていくのが分かった。

「成功したつ……良かった、今すぐ手術室へ！」

僕の安堵を他所に、入江はボスを手術室へと運んでいき、背後では別の救急車が到着する音が聞こえた。

スクアアロも、白蘭も僕の幻術で生きていただけで、油断を許されない状況であることを思い出すと、緩みそうだった僕の緊張はさらに引き締まった。

そんな時だった。

僕の右腕に付けていたウォッチが鳴り響き、戦闘終了合図が流れた。

僕は既に戦線を退いたので、あの後無事沢田綱吉がバミューダを倒せたのが分からず焦る。

そして敗退したチームと生存チームのグラフが表示された。

「!？」

その場に居た僕と、入江が目の前の表示に驚愕し、目を見開いた。

「ど、どういふことだ！」

そこには、生存チームにリボンと僕が入っていた。

「マーモンのチームはザンザスがやられて負けたハズだ」

「ああ、僕も見たよ：ボスのウオッチが壊れているのを」

「この状況じゃ何も分からない、一度皆がいる場所に戻った方がいい」

「そうだね、僕はあの場に戻るけど、君はどうするんだい」

「僕は他の重傷者の容態も気になるし、ここに留まるよ……内臓を補ってる幻術に気を付けて行ってくれ」

「そうかい、じゃあね」

彼にはボスを助けてもらった借りもある為、少しだけ柔らかい口調で話しかけ、僕はその場を去った。

前線に戻れば案の定、誰もが困惑していて、リボーンが僕の姿の気付くと名前呼んでくる。

「おいマーモン、お前のボスウイッチは誰が持ってたんだ？」

「ボスだよ、それよりも何で僕のチームがまだ生存してるんだい」

「いえ：ザンザスがしていたのはマーモンのウオッチではありませんん」

「何だつて？」

僕の疑問に、リボーンの隣にいた風が応える。

「何故なら、私の代理人がザンザスだからです」

「!?」

「二日目の夜、雲雀恭弥とディーノが戦闘していた直前にザンザスから奇襲があり、雲雀のボスウオッチを奪い、雲雀の代わりに代理人にさせると言われたのです」

「何だつて!?何でそんなこと……いや、じゃあボスは風のボスウオッチをしてたつていうのかい!?」

「マーモンチームが生き残っているということは、そういうことでしよう……」

「じゃあ僕のチームは誰がボスウオッチを：待ってくれ、代理戦争の二日目？」

「ええ、彼は雲雀とディーノのいるホテルまで来ていましたよ」

「そんなハズはない！ボスは二日目まで戦闘時間中ずっと眠っていたんだ！」

「「「なっ」」」

僕が混乱している中、沢田綱吉が口を開いた。

「じゃあ、どつちか片方のザンザスは幻術……？」

「私の前に現れたのは本物です」

「なら寝ていたザンザスが？」

「そんな、ボスが幻術なんてありえない……だってフランがずっとボスの隣にいたんだよ……いくらフランでも相手が幻術かどうかだなんて見分けられ……！」

「そのフランの幻術だとしたら！」

僕はすぐさま振り返り、フランのいた場所に視線を移すとフランがこちらの視線に気付く。

「フラン！ウオツチを見せろ」

「………嫌ですー」

「フランっ！」

「ボスと約束したんですよ……誰にも見せるなっつて」  
「………」

フランの言葉で、ボスウオツチはフランが持っていると分かった。

ボスが何故フランに渡していたのかだなんて分からないけれど、保険の為だったのかもしれない。

「フラン……戦いは終わったんだよ……もうウオツチを守る必要ない」  
「でも………」

「フラン」

フランは渋々僕にウオツチを渡す。

渡されたバトラウオツチは良く見ればそれは幻術で、幻術を解くとボスウオツチとなった。

それを地面に投げつけ破壊すると草陰から尾道が現れた。

「おめでとうございまーす!!優勝チームの虹の赤ん坊であるリポーンさんは特別に呪いを解かれますよー!!」

「ウソをつくな尾道」

尾道の言葉に即座に沢田綱吉が怒気を露わにする。

いや、この場にいる者誰もが彼を今にも射殺さんとしていた。

「彼を責めてはいかんよ、尾道は本当に何も知らぬのだ」

そんな中、僕がこの世で最も憎い男の声が聞こえた。

「あららっ、これは…いらっしやっていたのですか？チエツカーフェイス様!!」

全ての元凶、チエツカーフェイスがそこに現れたのだ。



## Veronicaの意識

スクアールside

「う……………」

「スクちゃん！良かった、起きたのね！」  
体がだるい、動けない、てか痛え……………」

何でだ…心臓がやけに重い

「俺は…何で……………」

「覚えてないの？バミューダからボスを庇った時に心臓を貫かれて……………」

バミューダ…？誰だソイツあ……………」

……………あ。

俺は急に起き上がる。

「ぐあっ」

「ちよつと！何いきなり起き上がってるの!?安静にしてなさいよん！」

「う……………」

ルツスーリアにベッドに倒されて俺は痛みのみあまり肩で息をする。

痛みがある……………体が……………」

俺の身体が、漸く……………っ……………」

「いくら幻術で心臓補ってるって言っても重傷には変わりないんだから！」

すると今までのあのへなちよこ野郎の記憶が俺の中に蘇る。

ヴァリアアのクーデター、オツタビオの裏切り、ボンゴレリング、白蘭、シモンファミリーの謀反、代理戦争、バミューダ…そして…ザンザス……………」

「おい…ボス…は……………」

「まだ治療中で意識は戻ってないわよ」

ザンザス…いや、確か……………ヴェロニカ…だったか……………」

ボスの未来の娘……………」

俺は横目でルツスーリアの方を見る。

「あなたも重傷なんだから今はただ寝て回復しなさい」

「るせえオカマ野郎」

「んまあ！スクちゃんまでベルみたいに口悪くなっちゃって！」

ルツスーリアはシヨックを受けたように泣き真似をするが、俺はそれを無視して横になる。

ちくしよう、ボスの容態も確認してえがまず動かせるくらい回復しねえと。

体が欲している睡眠のまま俺は瞼を閉じた。

気付けば俺は真つ白な空間にいた。

「どこだあ、ここは…」

自分の身体を見れば傷一つなくなっていて、首を傾げる。

するといきなり手首を掴まれた俺は驚いて一歩下がる。

「僕だよ、スクアーロ！」

「あ！てめえへなちよこ野郎！」

「へ、へなちよこって言わないでくれよ」

俺の手首を掴んだのは何年も俺の身体を乗っ取ってやがったへなちよこ野郎だった。

「てめえ長い間よくも俺の身体乗っ取ってくれやがったなあ！」

「ひい！ちよ、ちよつと待ってくれ！君には沢山謝らないといけないのは分かってるけど今はそんな余裕ないんだよ！」

「あ？！どういうことだあ？」

「えっと、僕の記憶は全部引き継いだよね？」

「記憶？ああ、あれか」

「その様子だと全部知ってるね」

「…」

「漸く君に主導権を移せたわけなんだけど…それと同時に君と繋がりが切れちゃったから元の世界に飛ばされそうなんだ」

「つーか早く飛ばされちまえ」

「本題はこれからなんだって！ザンザスとヴェロニカちゃんのことだ」

「ボスの…?」

へなちよこ野郎は俺に真剣な面で喋り始める。

「うん、主導権を反転…いわばこの世界との繋がりを切っちゃえば元の世界には戻れるんだけどヴェロニカちゃんはそれをまだ知らないんだ…だからヴェロニカちゃんが目を覚ましたらザンザスとの繋がりを切ったら帰れることを教えて欲しい」

「ん?おう、つかどうやって繋がりが?って奴を切ったんだあ?」

「僕もあまり理解してないんだ、ただ死んだなと思ったたら君との繋がりがプツンって切れて…今に至るってどうか」

「はあ?」

「僕と君の間には確かに何か繋がっていたはずだ…でも今はないだろう、僕らは他人だ」

「確かに…なんか足りねー気がするぜえ」

「その違和感も直ぐに無くなるさ、それよりもその繋がりを彼ら自身で見つけて切るように教えてくれないか?」

「分かった、それだけでいいのか」

「あ、うん…あとその…出来るだけ君の性格を真似して過ごしていたけど、周りからの印象が変わっちゃってたらすまない!」

「はあ!」

「じゃあザンザスとヴェロニカちゃんによろしく、今まで支えてくれてありがとう!」

言いたいことだけ言い切って消えていった目の前のへなちよこ野郎に俺は唾然とした。

「……………つち、調子狂うぜ」

俺は頭を搔く。

「入江…だったか…:…まあ、逃げ腰な奴だったがおめーの剣は確かに見てたぜえ」

元を辿れば俺の剣技だな。

俺はゆつくりと瞼を開いた。

そこは病室の天井だった。

起き上がれば先ほどのけだるさはあったが疲労感はそこまで酷くはなかった。

大方ルツスーリアが治癒したのか。

ベッドから起き上がり、周りを見るが誰もおらず俺は病室を出る。病院の窓から見る外は暗く、夜中だと分かる。

俺はそのまま病室が出て辺りを探っていると、何やら気配が集まっているところがあり、そちらに向かう。

病室の中から感じる気配の懐かしさにドアを思い切り開ける。

「スクちゃん!?!」

「スクアロー!」

ルツスーリアとマーモンが一斉に振り返るが、俺の視線はベッドの上へと固定されていた。

そこには呼吸器を付けているザンザスの姿があった。

「おいボスの容態はどうなってるんだあ」

「もう峠は過ぎた…明日には意識は戻ってると思うよ」

「そうかあ」…」

「スクアロー、心臓の調子はどうだい」

「別に問題ねえ」

「ならもう僕は寝るよ…眠くてしょうがないんだ…」

マーモンはフラフラと病室を出ると、それを心配して追いかけたルツスーリアが出ていく。

ツチ、余計な気なんか利かせてんじゃねえよ。

ザンザスの姿は俺自身の記憶よりも少しだけ大きくなっていった。

顔面には火傷の傷跡があり、それは腕にまで広がっていた。

確かこれはクーデターの…と思いつながら記憶を整理していると、視界の端でザンザスの指が僅かに動く。

そしてうつすらと瞼が開かれ、真っ赤な瞳が見えた。

俺は直ぐにボス、と言おうとして口を噤んだ。

こいつは…ザンザスじゃ、ないんだ……

「……………あ——……………」

なんて言えば!?

呼び方に迷っていると、視線がぶつかる。

「……………お前…スクアール、だな……………」

「!」

俺は直ぐに悟った。

こいつはザンザスじゃないと。

ザンザスほど刺々しさのないその瞳に、どこかむず痒さを覚える。

「ヴェロニカ…だったか…」

「……………ああ」

「入江はもう俺の中にいねえ…おめーも早くボスに主導権返して元の世界に戻れ」

「そうか……………入江は、行ったか……………」

「ああ、あとザンザスとの繋がりがりって奴をおめー自身で探して切って来いだよ」

「それなんだが、スクアール…私とザンザスの間にある縁は切れない」

「はあ!?!?」  
「どうということだ!」

「憑依を解く方法自体は数日前に、六道骸から聞き出していた……………それからザンザスとの間の縁を探していたが…」

声を出すのが辛いのか眉を顰めているそいつの一言一句を聞き逃さずに注意していた。

「見つけた縁があまりにも深く強すぎた……………私とザンザスは同じ血が流れている…それが原因だろうな」

「ツチ、面倒なことになったぜ…」

確かに俺と入江は全くと言っていい程赤の他人だ。

だがこいつとザンザスは並行世界といえど親子だ、切れないほど強い繋がりがあったっておかしくねえ。

「六道骸に…外から切るよう頼んでくれ……………」

「は?…何であいつに…」

「あいつはこの道に詳しい、他人に憑依が出来ればその逆も出来るハ

ズだ……」

「くそ、今からでも探し出して連れてくるぞお！」

「出来るだけ……早く……切って……れ……」

段々と口調が遅くなり、瞼を閉じたザンザスに俺は焦りを覚えた。ツチ、漸く表に出て来られたと思ったら今度はザンザスの方があぶねー状況たあ運がねえぜ……

病室の外で待機していたルツスーリアに声を掛け、六道骸の居場所を知らないか聞いたです。

「何でそんなこと聞いてくるのよ？」

もつともな質問だが、説明は後だと言い、とにかく居場所だけ教えてもらい、まだ万全ではない体で六道骸の病室へと向かう。

奴の病室へと辿り着き、ドアを引こうとすると中から声が掛かる。

「ノックもせず入ってくるつもりですか？」

その言葉に奴が俺の存在に気付いていることを知り、そのまま扉を引く。

病室には、六道骸が一人ベッドの上でこちらを見ていた。

六の数字を宿した瞳が僅かに開き、俺をじろじろと眺めて、納得したかのように頷く。

「どうやら憑依は解けたようですね……しかし何故僕のもとへ？」

「あ？お前俺が憑依されてること知ってたのか？」

「ええ、一つの身体に二つの魂など珍しいですからね……」

そういえばリング争奪戦でそんなこと言われたような……入江の記憶がまだ整理されておらず自身の記憶があやふやだ。

「じゃねえ、そんなことよりザンザスの憑依を解いてくれ」

「彼の……ああ、そういうことか……」

「どういうことだよ……？」

勝手に一人で納得している六道骸にイラつきながら、説明を促す。

「代理戦争中に復讐者の奇襲があった日、彼は僕の下に現れ、憑依の解き方を聞きに来ましてね」

「ああ、あいつお前のところに行ってたのか」

「おや？憑依中の記憶がおありで？」

「まだ整理してないが、一応憑依解ける前に記憶だけ引き継いだ…それで何があつたんだよ?」

「あの日、彼を一目見て…手遅れになる一歩手前であることに気付きましたね…彼自身にもそう伝えましたし、彼もソレに薄々気づいてましたよ」

「手遅れ…?」

「彼の身体に誰が憑依しているか分かりませんが、血縁者ですね?それもかなり近縁だ…憑依すると当事者同士の縁が強ければ強いほど縁はさらに強まり、魂同士が融合するんです」

「はあ!?!」

「うるさいですよ」

眉を顰める六道骸を他所に、俺は先ほどの奴の言葉が思考を支配する。

確かに、ヴェロニカの野郎が縁が強すぎて切れなかったとは言っていたが、融合していくなんて誰が気付くってんだよ!

くそつたれ!

「おい、それは外から切れねーのか!?!」

「ふむ…:切ることは出来ませんが当人たちが切りやすくする補助は出来ませよ…:それも時間の問題ですが」

「時間の問題?」

「ええ、完全に融合してしまえば何をやったところで切れませんから、直ぐにでも切った方がいいのでは?」

「なら早くやれ!」

「おやおや、誰に命令しているんですか?巡らせますよ?」

コイツ、三枚に下ろしてえ…!」

いや、まて堪えろ俺!ザンザスの為だ、堪えろ…:」

怒りを抑え、深呼吸をしていると六道骸はベッドから起き上がる。

「まあ…僕も復讐者から助けてもらった借りがあるので、今回のでチャラにしてあげますよ」

鼻で笑う仕草を見せつけながら病室を出る六道骸の後をついて行き、ザンザスの病室へと向かう。

病室へ入るなり、六道骸の息を呑む音が聞こえ俺は眉を寄せた。

「おい、どうしたんだよ…」

「一体何があったらここまで融合が進行するんです!? ツチ、本当に面倒事を残していく憑依者に苛立ちますね」

「はあ？ つつーかそんなにヤベーのか？ ザンザスの奴…」

「今からでも始めるので、誰も入ってこないよう見張って下さいよ…全く、まだ僕自身完治していないのに…」

不満をぶつぶつ呟く六道骸は、槍をザンザスに向け霧属性の炎が辺りに散らばる。

そしてその炎が一気にザンザス体の中へ入っていく、と思っていたその時だった。

俺は病室の外の気配に気付き、病室に侵入したソレを引き留めようと手を伸ばすが、心臓の部分に鋭い痛みが走り伸ばされた手が空ぶる。

視界の端を横切ったソレは六道骸へと向かい、次に俺が見たのはザンザスへ入り込む炎が宙へと霧散した時だった。

「お、まえ……」

フラン side

「ボス！ボス！」

意識のないお姉さんが運ばれていくのを見てミーはただ継るように声を掛けるしか出来なかった。

邪魔だから、と離されたミーは涙でひりひりする頬と目尻を拭い、鼻水をすすする。

「だ、大丈夫…？」

隣からクロームお姉さんがこっちを気に掛ける声が聞こえたけど、返事をする気力もなくて、ミーはただヴェロニカお姉さんの連れていかれた後を見るだけしか出来なかった。



背後では誰かの喜ぶ声が聞こえる。

何があつたか分からないけど、あの死神達を負かしたみたいだった。

ミーも喜ぶべきなのに、ヴェロニカお姉さんが気になつてずっとぐずつていて、それをクロームお姉さんが抱き上げては背中を摩つてくる。

いつになつても鳴らない時計に段々と周りが困惑し始める。

「なあ、バミューダを倒したのにウオッチが鳴らない…」

「制限時間が来るまで待たなきゃなんねーのか？」

そんな会話を耳にしながら、ミーは自分のウオッチを見る。

幻術で隠された、本当のボスウオッチを。

『お前に頼みがある』

『ふあい…』

『いいか、今から私の身代わりの幻術を作つてそれを誰にも気付かれないようにしろ』

『え？』

『それと、私は少しの間いない上にボスウオッチをお前のウオッチと交換する、いいな？』

『何ですか？』

『保険だ…お前はそのボスウオッチをずっと幻術で隠せ』

『すぐ、帰ってきますか？』

『ああ、ちゃんと帰ってくる』

ミーの頭を撫でる手を思い出して、頭に手を伸ばす。

そんなときウオッチがジリリリって鳴つて、背後から誰かの声がした。

「おい、マーモンのチームが生き残つてんぞー！コラ！」

「何で!?!」

その後直ぐにマーモン先輩が現れて、ミーがボスウオッチを持って

いることがバレル。

ミーが渋々ウオッチをマーモン先輩に渡して、何やら知らない人が現れては何か訳の分からない言い争いをしていた。

何を喋っているのか分からず、全ての話し合いが終わったのかベル先輩がボスの連れていかれた病院へと向かうと言ったから、ミーもそれについていく。

手術が終わったけど危ない状態だからあんま近づくなよ、ってベル先輩が言ってきたけど、その忠告を無視して直ぐにヴェロニカお姉さんの病室に入る。

直ぐに外に連れていかれたけど、チラリと見えた包帯塗れの腕にまた泣き出した。

いつになったらヴェロニカお姉さんは起きるんだろう、ってずっと待ってたら先にカス鯨先輩が起きた。

直ぐに寝たけどまた起きた時にパイナップルの精を探しに行つて、ミーはそれについていく。

パイナップルの精とカス鯨先輩の会話を病室の外で聞いていた。

「ええ、完全に融合してしまえば何をやったところで切れませんから、直ぐにでも切った方がいいのでは？」

「なら早くやれ！」

そんな声が聞こえて、ミーはその場から離れて直ぐに隣の病室に隠れる。

「あれ？君、フラン君だっけ？」

背後からの声にギクリと肩を揺らし、後ろを振り向けば白いマシユマロを食べてる人がいた。

「マシユマロの精ですかー？」

「あれ？君未来の記憶ないのかい？」

「チーズの角に頭ぶつけて覚えてないですー」

「あはは、君やっぱ面白いね、未来ではしてやられちゃったけど」

「なんのことですかー？…じゃない、ミーは今忙しいのもう行きま  
すねー」

「君から来ておいてかい？その様子じゃ誰かから隠れてるみたいだ

ね」

「企業秘密ですー」

「ふうん？」

なんかこのマシユマロの精はあまり好きになれないみたいです、そう思いながらミーはその病室を抜け出して、パイナップルの精とカス鯨先輩を追いかける。

二人がヴェロニカお姉さんの病室に入っていったのを確認して、扉に耳を当てて中の会話に聞き耳を立てる。

「一体何があつたらここまで融合が進行するんです!? ツチ、本当に面倒事を残していく憑依者に苛立ちますね」

「はあ? つつーかそんなにヤベーのか? ザンザスの奴…」

「今からでも始めるので、誰も入ってこないよう見張つて下さいよ…全く、まだ僕自身完治していないというのに…」

その言葉に、ミーは何で分からないけど不安になった。

もう二度と、ヴェロニカお姉さんに会えないかもしれない、とそう思ったからだ。

直ぐに病室のドアを開け、カス鯨先輩の伸ばしてきた手を避けて、パイナップルの精に体当たりした。

「うぐっ」

「ボスに何する気ですかー」

「な、おチビ!? 何故ここに…いやそれよりも離しなさい!」

パイナップルの精の腰にしがみ付き、なんとおかヴェロニカお姉さんから離そうとしたけど、すぐに振りほどかれた。

「おいフラン、お前何でここにいんだ」

「……」

カス鯨先輩の言葉に対して返答に困っていると、パイナップルの精が手を顎に置きミーを覗き込んだ。

「おチビ、あなたザンザスに別人が憑依していること、知っているでしょう」

「はあ!?! おい本当かガキ!」

「フランですーカス鯨先輩……ボスに何するつもりだったんです

かー」

「やはりそうでしたか…いいですか、今から僕はこの身体の本래の魂と憑依者の魂を引きはがさなければなりません、邪魔なのでどっか行ってなさい」

「それってヴェロニカお姉さんは戻ってこないってことですか？」

「おや、憑依者と交流があったので？ふむ、女性が憑依していたのか…」

「っーかお前ヴェロニカのこと知ってたのかよ！あいつ俺に何も言っ  
てなかったぞ」

ミーの言葉に突っ込んでくるカス鮫先輩に、何かいつもと違うと違  
和感を覚える。

「まあなにはともあれ一刻を争います、おチビ邪魔をせず見ていなさ  
い」

「やですー、ミーはヴェロニカお姉さんに残って欲しいですー」

ミーは幻術でパイナップルの精のにパイナップルを投げつける。

片っ端から消していくパイナップルの精が、やめなさい、とイライ  
ラしながらミーの襟元を掴んで病室の外に出そうとする。

それに反抗するミーとの奮闘は少し続き、パイナップルの精とカス  
鮫先輩がキレる一歩手前みたいな顔になり出す。

そんな時、小さな声が病室の奥から聞こえた。

「うるせー…ぞ…お前ら…」

苦しそうに呟く低い声にその場の三人が固まり、病室の奥を凝視す  
る。

「ザンザス…いえ、憑依者ですか」

「ヴェロニカお姉さん！」

ミーは二人から離れ、ヴェロニカお姉さんに駆け付ける。

ヴェロニカお姉さんが眉を顰め、ミーを見てきた。

「フラン、その名前は…人前で喋るなどあれほど…」

「それよりヴェロニカお姉さん！パイナップルの精とカス鮫先輩が  
ヴェロニカお姉さんのこと切り離すって言ってますよー、クーデター  
です裏切りですー」

呆れたような声のヴェロニカお姉さんにパイナップルの精とカス  
鯨先輩が企ててる策略を教えてやった。

状況が理解出来たのか手で顔を覆うヴェロニカお姉さんを見て、だ  
から早く逃げましょーって言おうとしたけどヴェロニカお姉さんが  
それを遮る。

「おい六道骸：スクアール、少しだけ外せ……」

「あまり時間がありません、手短にお願ひしますよ」

「分かっている……」

病室を出た二人に今がチャンス！って思ったミーに、ヴェロニカお  
姉さんがミーの名前を呼んできた。

「フラン……」

「何ですかヴェロニカお姉さん」

「今から言うことをよく聞け、私はもうここには居られない  
！」

「すまない、だが元々この世界にいるべき存在ではなかった」

「でも、」

「フラン……大丈夫だ、お前は私がいなくてもなんとかやっていけ  
る……私が保証する」

頭を撫でる腕には包帯が巻かれてて、薬の匂いが鼻の中に広がっ  
た。

ミーは駄々こねても、この人を困らせるだけだと分かっているから  
何も言えず、我慢しようとした涙が溢れた。

もう、いつちやうんですか？と言っても優しい声で、ああつて応え  
るだけで、もう本当に時間はないって理解する。

「フラン、お前なら大丈夫……お前は必ず優秀な術者になる」

「何で分かるんですか……」

「秘密だ」

小さく笑ったヴェロニカお姉さんが最後に、ミーを抱きしめ、背中  
を人撫でしたら、病室の外で待ってる二人を呼ぶ。

終わりましたか、とパイナップルの精が言えばヴェロニカお姉さん  
がああ、と答えた。

ミーは最後までヴェロニカお姉さんの手を握りしめ、さよならするまで離さないよう強く握りしめた。

それを見たカス鮫先輩が何故か居心地悪そうに目線逸らしてたけど、やっぱりあの違和感がありますー。

「……僕もそれなりに補助はしますがあなたが縁を切りやすくさせるだけであって、切るのはあなただ」

「…ああ」

「では、いきますよ」

パイナップルの精から出る炎がヴェロニカお姉さんの中に入り、お姉さんが瞼を閉じるとその姿がぼやけ出す。

その光景に握っていた手が強張る。

ブレが酷くなっていく中、ヴェロニカお姉さんの口がゆつくりと小さく開いた。

「フラン、小さい私をよろしく頼む」

それを最後に、ヴェロニカお姉さんの面影は消えていき、替わりにあの怖い顔の男の人が現れる。

ミーは思わず手を離し、距離を取る。

あ、もうヴェロニカお姉さんに会えないんだって分かった。

悲しかったけれど、思ってたよりも苦しくなくて、自分でも首を傾げていると、ふとヴェロニカお姉さんの最後の言葉を思い出した。

あれは何だったんですかね…

ミーがその言葉の意味を理解したのはずっとずっと後になってからだった。

## Veronicaの訣別

「ボンゴレの血は流れていない」

誰も気付かず、誰にも聞こえぬその空間に閉じ込められた俺に押し付けられた事実は無情なものだった。

始まりは何の前触れもなく訪れた。

いつものように眠り、起きるといつの間にか珍妙な空間に閉じ込められたのだ。

周りには誰もいない、誰の気配もない、イタリアのヴァリアー本部執務室という奇妙な空間。

目を凝らせば奇妙な空間に薄く透き通った景色が見えた。

目の前には自身の身体が動いている…だが、それは己の意思で動いているのではなかった。

自分ではない誰かが俺の身体に入り込み、自身の精神だけが身体の外に追いやられたような、そんな感覚であり、それはあながち間違いはなかった。

何度も自分の身体に手を伸ばしても、触ることは叶わず苛立ちが募るばかりだった。

炎を出したところで今の自身に物理的な干渉は一切出来ないことを嫌というほど理解し、行き場のない感情を持って余していたところに、スクアアローが現れる。

よく見れば、スクアアローの後ろにもう一人スクアアローが見え俺は目を見開く。

先方も同じであり、俺をその視界に捉えると目を見開き大声で叫んで来やがった。

「おいザンザス！お前もかよ！これどうなってんだ!？」

「うるせえ、俺が知るか」

「ちくしょう！俺の身体でそんな震えてんじやねえよ、このへなちよ

「野郎おおおおお！」

スクアーロに入っている奴は余程の小心者で、先ほどからスクアーロらしかぬ態度で挙動不審になっている。

スクアーロとザンザスの身体が二人きりになると、互いに正体を理解し合い、状況の把握に動しんでいた。

なるほど、あいつらは意図的に入った訳ではなく、元に戻す方法も分からないのか。

「おいー聞こえるように喋れこの野郎！」

さきほどからスクアーロが奴自身…小心者の方に向かって殴りかろうとしているが、奴の拳はすり抜けて宙を空ぶる。

俺は慣れたその光景を見ながら、スクアーロの言葉に疑問を抱く。

「くっそ、コイツらの声も聞こえねえ上に俺らの声も伝わんねえ、見えねえ、最悪だ!!」

その言葉でスクアーロには奴等の声が聞こえていないことが分かった。

だが何故か俺には、自分の声だけが聞こえていた。

イリエ、とスクアーロの外見をした奴をそう呼んでいる様子から、スクアーロに入ったのはイリエという奴らしい。

声だけに耳を傾けていれば、自ずとコイツらがどこのどいつだか分かってくる。

過去の並行世界だの、イリエという奴のせいで飛ばされたこと、己が並行世界では父親になっていること、そして己にボンゴレの血が流れていないこと。

それはまさに、己の根本が足元から崩れ去るような焦燥と、驚愕と、虚無と…：憤怒を滾たぎらせるに十分だった。

老いぼれの裏切りをこのような形で知ってしまった自身に、何ができると言うのだ。

何も出来ない自分が憎く、ここまで屈辱に思うことがあるだろうか。

俺の中に入っている女共々老いぼれも殺してやろうと、何度考えたことだろう。



そんな苛立ちを助長するかのように、あの事件が起こった。

「どうするもこうするも……上手く嵌めやがってくれたな……オツタ  
ビオ」

この時からか。

俺の耳には、己の身体の声以外にも周りの声が聞こえだした。

それはまるで、自身の身体に戻ったかのように、懐かしさを覚える  
憤怒が我が身に蘇ったような気さえする。

この身体に入り込んでいた女の怒りが俺の怒りと重なり合うよう  
な、奇妙な感覚に陥った。

老いぼれの炎が俺に向かって放たれ、傷が増え、血が流れ、滾る憤  
怒が腹底に溜まる。

「ザンザス……私はお前を本当の息子だと思っている……」

その言葉に触発し怒り狂った俺からは憤怒が溢れ出て、咆哮と共に  
目の前が真っ赤に燃え上がる。

その瞬間俺の中に溢れ出た憤怒とは別の何かに意識が逸れる。  
抑制するような……まるで何かを恐れているような感情と共に、俺  
の耳につんざくような悲鳴が聞こえた。

「ああああああああああああ」

まるで、それは悲しみに暮れる慟哭どうこくのようだった。

? ヲエロニカ?

どこからともなく聞こえた低い声と共に、一瞬だけ俺の心臓に冷た  
さが刺し込み、気付けば凍った我が身が目の前にあった。

身体が氷の中に閉じ込められて身動きの取れない俺は、くだらぬ記憶の欠片を見せつけられていた。

顔の見えぬ男と、ガキの会話を…

「あのときね、凄く…パパの手冷たかったの…」

「それが怖くて…寂しくて…悲しかった…」

「当時の私はまだ小さかったから、どうしてこんなに心臓が苦しいのか分かんなかったけどね」

「だからパパの手が冷たいと怖くて…」

「でも…今はちゃんと生きてるんだなって…感じれるから…とても安心するわ」

ああ、くだらない

くだらない記憶を俺は延々と見せられ続けているんだ。

「ねえパパ、今暖かいでしょ」

俺の手が熱をもつような錯覚に、眉を顰める。

くだらない、ともう一度呟けば今度は幻聴があちらこちらから聞こえだす。

寒い 冷たい 苦しい

それは女の声で、静かで小さくその場に木霊す。

怖い 恐い…

暗闇の中、泣きじやくるガキが見えた。

煩わしい声に殺意を抱くなら分かるが、俺の中に湧き上がるのは言葉のない焦燥だけで、困惑する。

視界に映った透き通る涙でその感情がさらに湧き上がる。

一体己は何を考えている？

ありえない、こんなガキ一人に靡くなど、それこそありえない。

ここは寒い 冷たい 苦しい

悲痛な声が、煩わしい。

それでいて言いようのない恐怖のような何かに襲われる。

助けて……………

そのか細い声に、思わず俺は口を開き、胸からせり上がる言葉を吐き出した。

「ヴェロニカ」

途端、世界に光が差し込んだ。

そして己が抱いたこの感情を理解し：否、理解してしまい、疎ましく思った。

ああ、分らなければ良かった…と。

そんな感情を己に向けてくるガキが嫌いだった。

ずっと「パパ」とやらを通して俺を見るあのガキが嫌いではなかった。

遙か昔に捨てた感情が、今の俺を蝕んでいく。

それを振り払った俺は目に映る光を拒み、瞼を閉じた。

ボンゴレリングを巡る争奪戦、という茶番を見せつけられた俺は、休む暇もなく自身の身体に引き摺られ未来に飛ばされた。

そこではボンゴレが壊滅一步手前まで追いつめられている未来で、実質な戦力はヴァリアーのみとなっていた。

敵組織であるミルフィオーレの本拠を叩き潰す為に日本ではボス候補と守護者候補が動いている状況で、女はイタリアでの殲滅を終えて日本へと向かう。

日本で合流したそいつらとの会話に、剣使いのガキの指導…大層なご身分になったもんだと鼻で笑ったところで虚しく部屋に響くだけだった。

いい加減何年も閉じ込められている俺はストレスが溜まりに溜まっていた。

そんな時、日本にいるにも関わらずイタリアの執務室に俺はいた。そして、初めて女がこの閉じ込められた可笑しな空間へと姿を現す。

「パパ」

開口一番で出されたソレに苛立ち、相手を睨む。

「お前か…俺の体に乗っ取ってたのは」  
「え」

黒い髪に特徴的な眉と、赤い瞳……似通い過ぎた顔に舌打ちする。  
「ツチ」

「え、え…見えるの？」

「あ？つかてめえ誰だ」

「え、あ……私は…ヴェロニカ……」

女は挙動不審になりながらも自身の名を名乗った。

何度か、どこからともなく聞こえたその名前がこの女の名前であることは薄々と気付いていた。

一応、といったように女に目的を聞いても事故だったと言われる。

あろうことか奴はザンザスの娘だと宣のたまった。

奴等の会話を聞いていて分かっていたつもりだったが、如何せん俺はそんなものの身に覚えがないのだ。

面倒な存在を認める認めない以前に、この女と俺の仲は血の繋がった他人のようなものだった。

この女が俺に向ける態度も、眼差しも、何もかもが気に食わない。

まるで、そちらの俺が………お前を認めているかのようで

まるで、ザンザスが ■ を知っているかのようで

気に食わなかったんだ。

女は何かを呟けばふらりと消えていき、そこには元から何もなかったかのように何も無い空間があるだけだった。

瞬きをすれば景色は再び日本へと移り変わる。

先ほどのあれは何だったのか、考えても理解することは出来ず俺は再び己の身体を眺める。

一体いつになれば俺はこの奇妙な茶番から解放されるのだろうか。

苛立ちはある、怒りはある、殺意はある

だが未来に来てからだろうか、段々とそういう感情が薄らいでいくのが分かった。

その事実を理解出来ず自身の感情に困惑する。

決して許したとか、絆されているとかではないのだ。

ただ、女へ向けていた感情が段々と霞んでいく感覚だけが俺の頭に残っていた。

女は白蘭が消え去る姿を眺めていた。

ただこの光景に何か思うところがあつたのか、関係のない記憶ばかりが女の脳裏を過ぎり、俺の思考にまで干渉してきた。

僅かな頭痛に眉間に皺を寄せながら、脳内を掻きまわす映像に溜息が零れる。

剣を握り未来の俺に矛先を向け炎を浴びせる場面や、ルツスーリヤやベルとの対峙、小さいガキの声と少し低くなった俺の声。

『いつからだ…』

『え？』

『炎を宿したのは…いつからだ…』

『あ………よ、4歳……くらい』

『何故黙っていた』

『ご、めんなさい』

嫌だ、嫌だ、嫌われるのは嫌だ…

『どうしてっ…私の名前を呼んだのよ!!』

『パパのバカ!』

誰の声かなんて薄々気づいていた。

だがそれを認めるのが癪で、脳裏を暴れる映像を記憶から消そうと試みるがそれは叶わず、ただ無情にも女の記憶を見せつけられた。

「ああ、うぜえ！消えろくそつたれが！」

大声で怒鳴った声と共に記憶の濁流が途切れ、俺は訳も分からず辺りに手あたり次第炎を放つ。

俺の中に侵入してくる何かに、違和感すらも抱かぬ自身に苛立った。

これ以上俺の中に入ってくるなど、形の分からぬ心地いいソレを拒み続ける。

俺は俺だ!!

気付けば既に女は未来から戻り、元の時間軸へと帰っていた。

再び女は閉じ込められたこちら側に姿を現した。

スクアール口に憑依したイリエも共に現れ、奴等はスクアール口と会話し始める。

俺は、怒鳴り散らし、今までの鬱憤をまき散らして、奴等を殺していても可笑しくないほど怒っていたはずだ。

それなのに、今日の前にいる奴等に対してその怒りがどうしても向けられなかった。

手を伸ばして、顔を掴んで、炎を灯すだけなのに……手が指が身体が動かなかった。

まるで、自分自身の感情が消えていくような……

「パ……ザンザス、あなた……8年間の記憶あるの?」

頭上から降って来た声に我に返り、そちらを見れば女がいた。

8年間……俺の身体が凍らされていた間、俺はひたすら我が身を眺

めているだけだった。

指が冷めきり、臓腑が冷えていく感覚の中、訳の分からぬ記憶の欠片と、幻聴と、凍らされた己。

怒りを燻ぶらさせるには十分な年月を、あの氷牢で俺は無慈悲に過ごしていた。

同情してほしいわけではなかったので、女には記憶はなかったと、そう告げた。

女と僅かな会話のみ交わせば、奴等は消えていった。

再び女が現れたのは直ぐだった。

俺の良く座る椅子で堂々と寝ている女に怒鳴りと共に拳をお見舞いする。

少しスッキリしたが、女の腑抜けた顔を見たらイライラが前よりも増していく。

「いつになったら私は戻れるのかなー」

「知るか」

「あなたの体でもあるんだからちやんと考えてよ」

「じゃあてめえが死ぬばいいだろ」

「痛いのはやだ」

ソファで寝そべっている女は、天井を覗き込んでいる。

「ベルもレヴィもルツスーリアもマーモンもスクアーロも好きだよ…」

ああ、まただ。

コイツはまるで■を知ったような口ぶりであちら側の話をする。

あちら側のヴァリアーは腑抜けばかりなのかと思えば、奴の記憶を見る限りこの世界と限りなく近い。

それが酷く腹立たしいが、女が俺の感情に気付いた様子はない。

「ザンザスと話したおかげでもう少し頑張れそうだよ…ありがとね」

女の姿が段々と薄らいでいく。

「ヴェロニカ」

無意識に呼んでしまった女の名は、誰の耳にも届かず宙を彷徨っ

た。

あれから数日経つが、女と現実での感覚を共有することが時々起こることに気付いた。

あの女が食べたものの味、拳銃を触った感触、寝る間際の睡魔：俺の知らないうちに世界の境目が段々と薄らいでいくようだった。少しすれば代理戦争とやらに駆り出された女は日本へと飛び立った。

そこで最近拾ったガキも連れて行き、一日目、二日目と着実に経過していく。

そんな中三日目になる前に女は珍妙な髪をした六道骸を探していた。

『この身体の：憑依の解き方を教えろ』

『おや、あなた自ら望んで憑いているわけではないと？』

『下手な探りはやめろカツ消すぞ、憑依の解き方だけ教えろ』

女は六道骸から憑依を解く方法を聞き出すと、その場を去った。

『あなたとその体の持ち主の精神との繋がり：いわば縁を切れればいいんですよ』

『縁？それは目に見えるものか』

『さて、人それぞれですよ』

六道骸の言葉通りなら俺と女の間には縁とやらがあるはずだが、ハッキリとこれだというものが分からない。

『ただあなたの場合、縁が聊か深いようですね、あまり時間はありませんよ』

『あなたがあなたで：そして彼が彼でなくなってしまうまで：：：そう時間は掛からない』

胸の内側から指先まで通う血液のように、最近になって明確に感じ取れたこの体温が繋がりというならば、切ることが出来るのか。

糸のような細いものではなく、複雑に絡み合った神経のような：そ



れでいて姿形を持たないコレが、あの女との縁なのか。  
女も薄々気づいている。

俺達が、徐々に浸透するように融けて混ざりあっていることを。

俺の感情が表に出たり、女の感情が俺に感じ取れたり、まるで徐々に表側に戻っていくような感覚があった。

俺の刺々しく禍々しい激情が急激になくなっていったのは、この女との同化による弊害だろう。

俺が俺でなくなる、そんな事実があつてたまるかと俺ならば怒り狂うだろう、理解してもなおその憤怒が女に向かないのは、女を自身の一部と認識し始めている証拠だ。

現実世界では、バミューダというアルコバレーノとの最終決戦に挑もうとしていた。

既に復讐者との対峙では、俺は第三者視点で見てはいなかった。

自身の視界は女とリンクしているが、感覚は全てシャットアウトされているような奇妙な感覚だ。

ただ何度も背筋に駆け上がる死を感じる。

漸く女がイエーガーとやらを倒したところで、女の感情が俺の中で手に取るように伝わってきた。

その時だった。

バミューダからの攻撃をスクアアローが身を挺して庇ったことに、女が強い怒りを抱いた。

それが俺の憤怒を触発し、俺までその感情に引き摺られる。

そこからはあまり覚えていない。

ただ怒り狂っていた。

今までのストレスやら不満やら、表面に出していないだけで溜まっていた全ての怒りがここで解放されたような爽快さだった。

それと同時に軋む身体に我に返り、久しく感じなかつた痛みを目を見開いた。

痛みが戻って…待て、何で俺に痛みが…これじゃまるで俺が表に出たような…

ちがう、俺が表に出たんじゃない。

俺達が融けて、混じって、入り乱れ始めてる。

違う…俺とお前は違う

ギリギリで保っていた理性であいつの名前を呼んだ。

ヴェロニカ、と。

「パパ…」

その声と共に俺の意思ごと暗転した。

ふと意識が戻った俺の目の前には天井があり、直ぐ横にスクアアロの顔があった。

口を開こうとすれば、勝手に口が開き声を漏らす。

「…お前…スクアアロ、だな…」

勝手に喋り始める自身の身体に、俺はまだ混じり切っていないことに気付いた。

まるで一つの身体に二つの人格が存在している二重人格のような…現実に近い感覚だった。

女はスクアアロと話すとき再び意識を失い、俺も視界が暗くなる。

ふと瞼を開き目の前を見れば、女が立っていた。

だがそいつは俺の存在に気付いておらず、胸を抑えて泣いていた。

『一つだけ私からお願いがあるの…』

どこからともなく聞こえた声に辺りを見渡すも、存在するのは俺とそいつだけ。

『あたまを……なでて…ほしい』

瞬きをすれば、女がいた場所にはガキが突っ立って泣きじやくつていた。

それはあの女をそのまま小さくしたようなガキで、しゃくりをあげ、息を荒げながら俺の足にしがみつき泣きじやくつていた。

『非情で、冷酷で、暴君で、極悪人だったけど……』

俺とそのガキの間に温度を持った何かが段々と熱を帯びてくる。

『それでも私の…血の繋がった…たった一人の父親なんだ……』

ガキの泣き喚く声が木霊こだます中、穏やかな声が耳に届く。

『生んでくれてありがとう……』

ガキとの間に帯びている熱は　　まるで　　炎のようだった

「小さい私をよろしく頼む」

どこからともなく聞こえたその言葉を皮切りに、ガキとの距離がいきなり引き剥がされたかのように帯びていた熱が冷めていく。

目を見開いた俺は、同様に驚いているガキを見て、間にある不明瞭な何かを漸く理解した。

きつとこれは奴との繋がりだ

「うええええ……パパああ……ひつく……」

ガキが一際大きく泣き始め、手っ取り早くガキとの繋がりとやらを切ろうと思った。

これさえ断ち切れば……

「やだっ……離れちややだあ」

断ち切れば

「パパあああああああつ」

心臓からせり上がるこの激情が、ふと喉から零れ落ちる。

「ヴェロニカ」

無邪気に泣くガキの目線に合わせて膝を折る。

「パパ」とやらがやったように頭を撫でつけられれば、ピタリと泣き止んだガキに、俺は言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「聞け、お前はそのままここで待ってろ」

「やだあ…一緒に行く…」

「直ぐ迎えに来る」

「……………本当…？」

「…ああ」

「もう、ヴェロニカを…置いて逝ったりしない……………？約束だよ？」

涙を零すその瞳に魅入ったのだ

俺と同じ、赤い、朱い、紅い……………

「……………ああ、約束だ」

それはまさに■を垣間見たような……………

再び瞼を開けると、視界の端に六道骸とスクアール口がこちらを覗いていて

俺の頬には濡れた跡だけが残っていた

## Veronicaの帰還

「ボス」

太陽が傾き既に赤く染まりつつある空の下で、資料を読んでいた私の元へ声が掛けられる。

今私がいる場所はヴァリアーイタリア本部の執務室のバルコニーだ。

職人たちによつて彫られた彫刻がそびえ立つ庭が見えるバルコニーの扉が開き、カーテンがひらめく中スーツを着た一人の男性が入ってくる。

「ああ、もう時間か……お前にしては洒落た服装なことだ」

「全く……何で僕まであの式典に参加しなきゃいけないのさ」

「お前が所属を変更したからだろう……ボンゴレ本部は皆慌てだつているぞ」

「所属を変えるつたつて……同じボンゴレじゃないか」

「こちらとあちらは毛色が全く違うだろ」

「まあ、確かに……ああ……憂鬱だ」

茶髪に小皺が目立ってくる歳の男性、入江正一の暗い表情を一蹴した私は、ヴァリアーの隊服とは別の式典用のドレスをひらめかせながら立ち上がった。

今日は、各国に点在するボンゴレの同盟ファミリーが一斉に詰まる重要な式典が行われる。

5年に一度と開催する機会は少ないが、毎度ながら規模が大きいので各ファミリーはどうやってボンゴレとのコネクションをより強固にするかを画策しているだろう。

前回の式典、まだ私がヴァリアーのボスに任命されていなかった頃、父の付き添いで参加したが、他のファミリーから来るお見合いの数々に辟易したのを覚えている。

「情けない面を見せるな、ヴァリアー技術開発分隊長」

「からかわないでくれよ……胃が、胃が痛い」

「後悔してるなら辞退しても一向に構わないが？」

お前の代わりはいくらでもいる、と暗に言った私の言葉に入江は言葉に詰まったように顔を顰める。

「君、こつちに戻ってきて性格悪くなったかい？」

「さあな、マーモンの口調移ったかもな」

「君が素を出せることには心から喜ぶべきなんだけど…複雑だなあ」

溜め息をを吐く目の前に入江を視界に入れながらも、少しからかい過ぎたとこれっぽっちも思わないのは、彼が生きた地獄ともいえるであろう9年間を知っているからだ。

私が彼に生きていく術を教えたのはたったの半年で、それからはがむしゃらに生き残った彼のメンタルがこれしきのことではへこたれるものではないことを知っている。

私と彼はそのまま執務室から出て、高級感を惜しみなく発揮しているであろうリズムジンが待っている玄関へと向かった。

「まあ君は必要ないと思うけど、体面上護衛くらい付けた方がいいと思うよ」

「ふん、お前を護衛として付けると沢田と父には伝えている」

「え？僕？え、ちよつと待って！君ザンザスに伝えちゃったの!?!何で!?!」

「あの場にいたスクアアロの顔といったら…もう…くくく…」

「うわああああ、なんてことを…僕に君の護衛は見合わないだろう！」

「何だ、お前が最近鍛え始めたその体は鈍らだったか」

違うけど！と反論する入江に今度こそ噴き出した私に、彼がジト目で見てくる。

体面上護衛は必須であり、今回の式典の護衛に関してベルやマーモン、スクアアロが息巻いているところに爆弾を投下した私は、固まっている彼らと父を他所にそのまま本部まで来たわけだが、今頃あちらはどうなっているのか。

私達は無事元の世界に戻れることが出来た。

入江はスクアアロとの、私はザンザスとの縁を断ち切り、元ある場

所へと収まったように目を覚ませば元の世界に戻っていた。

あちらで9年間程いたわけで、こちらの状況がずっと不安要素だった私と彼にとつて何よりの救いだったのが、時間の流れがなかったことだろうか。

そう、私達が飛ばされた時間とほぼ同じ時間軸に戻ってくる事が出来たのはある種の奇跡だ。

入江の持っていたパラレルワールド装置は壊れてうんともすんとも言わなかった。

これ以上起動されては困ると今度こそお蔵入りにされたあの装置だが、効果を聞きたがっていたジャンニーニやスパナの質問を躲しつつ、あの奇妙な体験は全て私と入江の心の中に閉じ込めておくことにしたので。

あれを悪用されでもしたらひとたまりもないことくらい彼も理解している。

悪気はないが口の軽いスパナとジャンニーニに教えるのは危険だと判断した上に、不用意に言い触らしていいものではないと二人で出した結論だ。

まあそれからの数日は、お互いこの世界の記憶を完璧に忘却していたわけで、スケジュールなど全部一から覚え直さねばならないという激務に追われたわけだが…私は激務をマーモンと部下に押し付けて父と日本旅行に旅立ち、帰って来た時マーモンに泣かれたのは記憶に新しい。

あの世界で私はザンザスとなり、最後には泣く泣く彼との縁を切り捨てた……と、思われたが、実際そうでもなかった。

というのも、きつちりプツリ切れたわけではなく、普通に私の中にザンザスの残留思念みたいなものが残ってしまったことに気付いてからは、全く感傷に浸ることはなかった。

というか若干残留思念のせいで口調から女らしさが欠如してしまったことに、何も知らない周りが首を傾げていたので少し焦った。

私がこの状況であるということは、恐らくあちらにも私の残留思念が残っていると思うが、もうはるか遠い世界のことなど手に負えない

と早々に思考を切り替える。

まあ結論、私はどの世界へ行ってもファザゴンが治ることはないと思っただ。

むしろ悪化したように思えるのは私だけだろうか…

あの世界での最後なんて私ギャン泣きだったからね、うん。

そういうわけで無事元の世界に戻れた私はまたヴァリアーのボスをやってるわけだが、少し変化があったといえれば、入江がヴァリアーに異動してきたことだ。

具体的に云えば、ヴァリアー技術開発分隊に、だが。

戦闘は一切ないこの分隊だが一応最低限の戦闘技術は必須であり、入江は衰えた軟弱もやし体型を鍛え始めてひいひい言っていた。

技術者として腕は？なんて聞くのは野暮ってものである。

彼の技量と度量を知っている私はそのまま彼を分隊長にしてしまったわけだが、それをボンゴレ10代目に世間話の感覚で伝えれば目を見開いて固まった挙句、飲もうとしていた紅茶をうん十万とするであろう上質なスーツに盛大に零し、滑稽な姿を晒していた。

理由を聞いて来た彼には肩竦めて何も言わなかったが、入江の意思であることを伝えた私は彼を今回の式典の護衛にすることを重ねて伝えれば、今度は白目向いて倒れたのはつい最近の出来事だ。

何故入江正一はヴァリアーに異動してきたのか。

正直私も分かっていない。

ボンゴレ本部の方になれば上司はあの沢田綱吉というホワイトも素足で逃げていくレベルのピュアホワイト組織だっただろうに、何故ブラック組織のヴァリアーに来たのだろうか。

いくら技術開発分隊であっても命の危険がないわけではないし、血生臭い仕事は日常茶飯事の場所だ。

彼があの世界で忌避きひしていたであろう世界へ何故足を突っ込んでくるのか分ならず頭を捻る。

まあ有能な部下が増えるのは嬉しいことだが、父になんて言い訳をしようか。

私はすぐそこまで来ている玄関と、一步後ろを歩く入江の足音に思



考を現実へと戻す。

「ボス、足元の階段気を付けてくれ」

「なあ入江」

「ん？」

「何でお前はヴァリアーに来た？」

ふと零れた言葉に我ながら驚かされる。

目の前にいる入江も私の言葉に目を見開いていた。

少し間が空いた後、入江がクスリと笑みを零す。

「君が僕のボスだからだよ」

それはスクアアロだったお前がまだ私をザンザスとして見ているからなのか、なんて…いくら鈍い私でもそうではないことくらい理解するには十分すぎる言葉だった。

耐えきれず私は遂に笑い出した。

「ちよ、何で笑うんだ！今の感動するところだろう!？」

「そうかそうか、私の右腕は聊か小心者だが…まあいい、お前の活躍を期待しているぞ」

「ああ、期待してくれ…って右腕？」

僕はスクアアロじゃないぞ、と不満な様子が顔に表れている入江を横目で見ては直ぐに視線を逸らし、階段を下りながら私は言い放つ。

「背中を預けるに値すると思ったままで、私の面を汚さないようにしろよ入江」

既に心臓は差し出されたしな、と付け加えた私の言葉に面食らったような入江を他所にリムジンと乗り込めば、後から入江が慌てたように乗り込んできた。

「物理的に差し出されるのはもう勘弁、あれ凄く痛かったんだよ！」

「マーモンの幻術で何とかなるさ…よし、次の任務は肉壁作戦で行くか…隊長はお前で」

「やめて!!」

涙目の彼を他所にリムジンは煙を吐き出した。

「ヴェロニカ」

「ん？」

ざわつく式典会場の中で、ふいに頭上から呼ばれた慣れ親しんだ声に視線を上げれば、パパが立っていた。

パパと呼ぼうとしたが、ここが会場であることを思い出し、父上と堅苦しい呼び方で応える。

こちらへ近寄るパパの姿に、私の隣にいた入江の目が死んだのを視界に入れ私は入江に声を掛けた。

「入江、少し外せ」

「了解」

それが別に入江の胃を心配しての言葉では決してないことをここに明記しておこう。

入江が会話の間こえないギリギリの距離まで離れたのを確認した私はパパへと視線を移す。

まだまだ現役ですとばかりに威圧感をビシバシ発しているパパは、テラスに立っていた私の隣まで近寄りフェンスに背を預けると腕を交差した。

「何故あいつの入隊を許した？」

聞かれるであろうと思っていた言葉に私は少しだけ間を空け、右手のワイングラスを揺らす。

「私が背中を預けられると思ったから…それ以下でもそれ以上でもありません」

「ふん、お前の目が腐ってねえといいがな」

「でも、今も彼が生きてるってことは反対ではないんでしよう?」

気に食わなかったら直ぐに殺しちゃうパパのことだ、入江がただの軟弱者であると断定した瞬間引き金を引いているハズ…と暗にそういえば、パパは面白くないとでもいうように鼻を鳴らす。

いきなり纏う雰囲気が変わった入江と私にきつとパパは気付いているが何も聞いてこないのは、単に彼が模索する性格じゃない故だ。今回のことは内容が内容だけに聞いてこない彼の接し方は助かったとしか言えない。

隠し事をしてしていると、少し後ろめたい気持ちになるが、パパの過去を本人視点で体験してきましたなんて言った日には八つ当たりでスクアア口が次の日灰となって見つかることだろう。

私は隣に佇むパパの横顔を覗き見れば、真っ赤な眼と視線が合った。

お互い覗き見る形で視線が交差した状況にクスリと笑みを零した私は、眉を顰めるパパに誰にも聞かれぬよう声を抑えながら喋りかける。

「ねえ、心配してくれるのは嬉しいけど入江とはそういう関係じゃないよ?」

「誰もんなこと聞いてねえよ」

まるで娘に恋人が出来てしまったどうしよう、と困惑とまではいかずとも真偽を探ってくるような眼差しに内心嬉しさを覚えた。

「パパよりカッコいい人なら考えてあげなくもないけど…ま、高望みすぎて見つからないだろうね」

いつだって私の一番はパパなのだ。

ただ、ちよつとだけ…私の心の中に茶髪の及び腰な彼が小さく場所を取ってしまったけれど。

それでも私のパパへの愛は

炎のように温かく

今日も揺るぎなく縁を結んでいる

f i n .